令和元年度

近畿ESDコンソーシアム活動実施報告書

2020年3月

近畿ＥＳＤコンソーシアム
国立大学法人　奈良教育大学

は　じ　め　に

令和になりました。平成よりもいい時代にしていきたいと思います。そしてこの報告書ができあがる頃は 2020 年です。2020 年と言えば、ＳＤＧｓの達成まであと 10 年しかない、ということです。いや、ターゲットの中には、例えば 6.6「2020 年までに山地、森林、 湿地、 河川、帯水層、湖沼などの水に関連する生態系の保護・回復を行う。」のように、2020 年までに達成するというものもあるのです。残り 10 年なんて、あっという間です。チコちゃんに「ボーっと生きてんじゃねーよ！」と叱られないよう、さまざまな地球的課題を自分の問題としてとらえ、自分に何ができるかを考え、行動していきましょう。今年は、うれしいこともありました。奈良教育大学の学生のみなさんが、昨年の西日本豪雨災害で大きな被害を受けた岡山県に被災地復興支援ボランティアとして、本気で取り組んでくれました。その本気度が認められ、ガールスカウト日本連盟が主催するコミュニティー・アクションアワード 100 のチャレンジ賞を受賞しました。また、財団法人学生サポートセンター主催の第 17 回学生ボランティア団体表彰式においても表彰されました。倉敷市真備町を訪問し、写真洗浄等のボランティア活動に参加した学生からは「災害復興支援と言えば物資などの支援のイメージが先行してしまいがちだが、そのような形の支援だけでなく思い出の写真などを洗浄することで、被災された方々の一生の大切な思い出を取り戻すことができることが分かった」という声を聞きました。このような活動に積極的に取り組む学生が増えることはうれしいことです。

被災した写真の洗浄ボランティア

奈良教育大学は大学の３つの柱のひとつに持続可能な社会づくりに貢献できる教員の養成を掲げています。本気でＥＳＤを指導できる教員の養成、現職教員の研修に取り組んでいます。近畿ＥＳＤコンソーシアムは、近畿地方を中心にＥＳＤの普及・推進に取り組んでおり、今年度の活動も充実していたと思います。令和２年度も期待しています。

奈良教育大学　学長

近畿ＥＳＤコンソーシアム会長　　加藤　久雄

目　　次

はじめに ····· 01

令和元年度 近畿 ESD コンソーシアム事業報告概要 ····· 03

令和元年度 近畿 ESD コンソーシアム総会開催要項 ····· 06

令和元年度 近畿 ESD コンソーシアム成果発表会・実践交流会概要報告 ····· 07

令和元年年度 奈良 ESD 連続セミナー概要報告 ····· 17

令和元年度 春日山原始林授業づくりセミナー ····· 58

令和元年度 森と水の源流館授業づくりセミナー概要報告 ····· 69

令和元年度 奈良県立万葉文化館授業づくりセミナー概要報告 ····· 86

概要報告令和元年度 学ぶ喜び・ESD 連続公開講座概要報告 ····· 95

【学生による ESD 活動支援報告書】

学生による ESD 活動支援一覧 ····· 115

岡山県災害復興支援ボランティア実施報告書 ····· 152

第３回「集まれ！ESD 子ども広場」実施報告書 ····· 117

第２回『岡山倉敷スタディツアー』実施報告書 ····· 123

令和元年度木頭ゆず収穫ボランティア実施報告概要 ····· 131

世界遺産を体感　東大寺に泊まろう　支援報告書 ····· 134

第２回英語パフォーマンス甲子園支援報告書 ····· 138

奈良市富雄第三小中学校ユネスコ委員会支援報告書 ····· 139

親子燈花会支援報告書 ····· 141

カヌー体験教室支援報告書 ····· 143

附属幼稚園ユネスコ・世界遺産学習支援報告書 ····· 144

奈良市内小学校における野外活動支援実施報告書 ····· 145

第８次陸前高田市文化遺産調査団実施報告書 ····· 168

【資料編】

近畿 ESD コンソーシアム規約 ····· 194

令和元年度 近畿 ESD コンソーシアム事業の実施概要

１．ESD について

持続可能な開発のための教育

年	世界の潮流	日本の動き	奈良教育大学の取組
1972 年	ストックホルム会議 環境教育の重要性を指摘		
1987 年	ブルントラント委員会 持続可能な開発（SD）の定義		
1992 年	リオデジャネイロ会議 アジェンダ 21　ESD の重要性		
2002 年	ヨハネスブルグサミット	ESD の 10 年を提案	
2005 年	ESD の 10 年開始	ESD 活動実施計画 学習指導要領に反映	
2007 年			ユネスコスクールに加盟
2008 年	ASPUnivNet の設立		ASPUnivNet に加盟
2011 年			持続発展文化遺産教育センターの設置 ASPUnivNet 運営委員長
2014 年	ESD に関するユネスコ世界会議 GAP（グローバル・アクション・プラン）の採択	世界会議の開催 （名古屋・岡山）	奈良 ESD コンソーシアムを受託 ASPUnivNet 運営委員長
2015 年	SDGs（サステイナブル・ディベロップメント・ゴールズ）の採択		次世代教員養成センターの設置 ESD 研修プログラムの研究開発を受託
2017 年		次期学習指導要領の前文に明記	近畿 ESD コンソーシアムの設立 ESD ティーチャープログラム開始

２．奈良教育大学の目標・特色と ESD

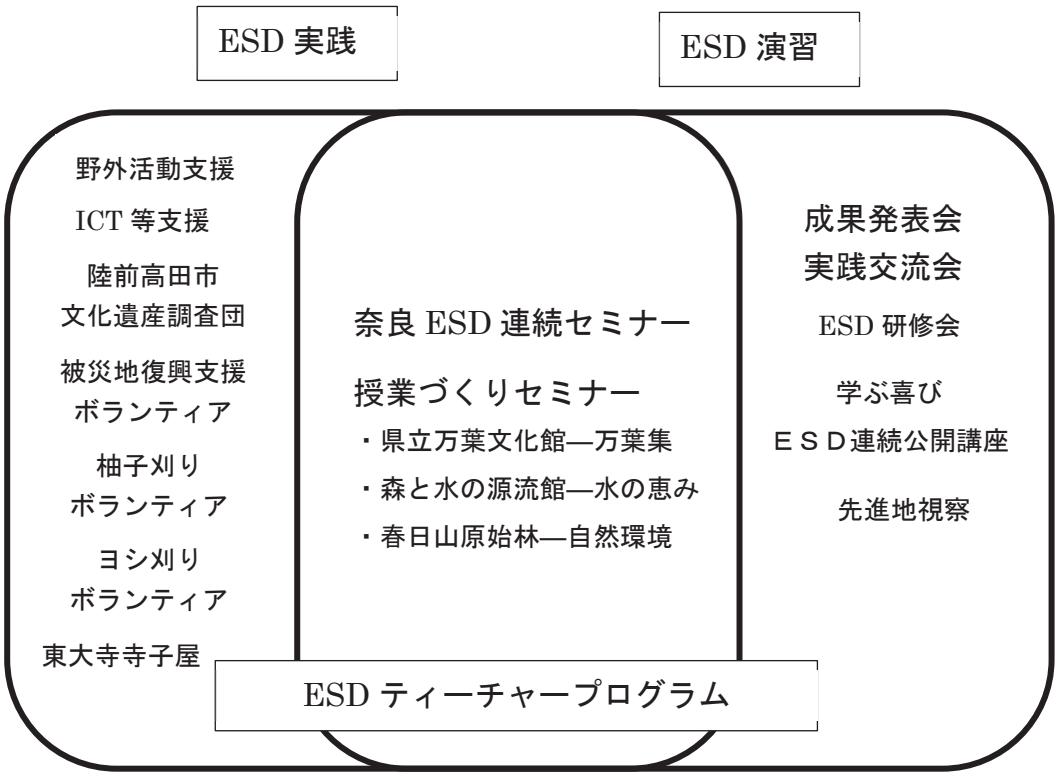
奈良教育大学は基本的な目標の１つに「「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成を志向するユネスコスクールとしての実績を発展させ、持続可能な開発のための教育の推進拠点としてその理念に立った研究と実践を進めることにより地域の教育の発展・向上に寄与する。」と、ESD の推進を位置づけています。さらに、特色ある教育として３つの柱を明記しました。

①人・環境・文化遺産との対話を通した教育の追究
②持続可能な社会づくりに貢献する教員の養成
③教員養成と教員研修の融合

奈良の鹿で有名な奈良公園や 841 年から狩猟や樹木の伐採を禁じられてきたために原始性がよく保たれた春日山原始林など、奈良教育大学の周囲には特色ある自然環境が広がっています。また、古都奈良の文化財として世界遺産に登録されている、春日大社・元興寺・興福寺・東大寺のほか、新薬師寺や頭塔、奈良町といった文化遺産が徒歩圏内に存在しています。これらは、鹿に代表される自然環境と人間活動が、1300 前より共生・共存してきたもので、人と自然の関わり方や人間活動のあり方を学ぶ ESD 教材です。2015 年に国連で採択された SDG s の達成に貢献しようとする人を育てる教育活動を研究し、実践する学生や教員を育てる環境が整っています。

奈良教育大学は、2007 年に日本の大学として最初にユネスコスクールへの加盟が認められた大学として、先進的に ESD を指導できる教員の養成や現職教員の研修に取り組んでおり、そこで生まれたのが教員養成と教員研修を融合させるテトラモデルです。ESD は答えのない問いを探究し続ける学びで、誰もが協働研究者となれます。「学生＋現職教員＋○○」がテトラモデルの基本形で、○○に入るのは、大学教員であったり専門家であったり、地域人材であったり、ESD の切り口や探究途中の情報を提供してくれる人です。

このテトラモデルを基本として、近畿 ESD では ESD の普及と推進に取り組んでいます。



2．令和元年度 ESD ティーチャーの認定

・学生の ESD ティーチャー認定者数：5 名
・現職教員の ESD ティーチャー認定者数：22 名
・現職教員の ESD マスター認定者数：1 人
・現職教員の ESD スペシャリスト認定者数：4 人

ESD ティーチャープログラムについて

ESD ティーチャープログラムには学生対象と現職教員対象の２つがあります。学生対象のプログラムは、所定の科目履修、ESD 演習２回以上、ESD 実践２回以上、ESD 連続セミナーへの５回以上の参加と、ESD 学習指導案の提出が求められます。一方、現職教員向けは、５回の連続し

た研修（SDG s の理解促進、ESD の理論研修、優良実践事例の分析、ESD 学習指導案の作成、作成した学習指導案の相互検討）への参加とミニレポートの作成、学習指導案の提出が求められます。現職教員向けには、ESD マスター、スペシャリストといった上級コースも設定されています。

3．近畿 ESD コンソーシアムの組織について

（1）連携教育委員会：奈良市・橿原市・滋賀県彦根市・和歌山県橋本市

（2）学校：ユネスコスクール等　53 校・園

（3）ユネスコ協会・NPO・協議会（13）

（4）社会教育施設（4）

（5）企業等（20）

4．令和元年度の近畿 ESD コンソーシアム事業概要

（1）近畿 ESD コンソーシアム

①総会（7 月 13 日）、②成果発表会・ESD 実践交流会（12 月 26・27 日）

（2）ESD 演習

①奈良 ESD 連続セミナー（12 回／年）

②ESD 授業づくりセミナー（各 5 回／年）

・森と水の源流館　（主に ESD 環境教育・流域環境・森林環境）

・県立万葉文化館（明日香村の歴史文化、万葉集、古事記等の教材化））

・春日山原始林を未来へつなぐ会（春日山原始林の教材化）

③学ぶ喜び・ESD 連続公開講座（5 回／年）

（3）ESD 実践

①第 8 次陸前高田市文化遺産調査団の派遣（9 月 13～16 日）

②市立小学校等での野外活動支援（11 校）

③東大寺寺子屋支援活動（8 月 20～22 日、10 月 25 日～27 日）

④ICT 支援（2 回）

⑤附属幼稚園世界遺産学習支援（3 回）

⑥附属中学校地域フィールドワーク活動支援（11 月 6 日）

⑦富雄第三小中学校ユネスコ委員会支援（2 回）

⑧各種ボランティア活動

・被災地復興支援ボランティア（12 月 7・8 日）、柚子刈りボランティア（11 月 9・10 日）
ヨシ刈りボランティア（8 月 17 日・1 月 26 日）、子どもおんまつり活動支援（11 月 25 日）
東大寺万灯供養会ボランティア（8 月 15 日）、カヌー体験教室支援ボランティア（8 月 3 日）
親子燈花会支援ボランティア（8 月 2 日・5 日）

（4）ESD ティーチャープログラム

①那覇市、②福岡市、③長浜市立高時小学校

（5）ユネスコ協会連盟との連携事業・活動支援

・大阪ユネスコ協会との合同研修会（7 月 6 日）、近畿ブロック研修会への支援（10 月 6 日・7 日）

（6）教育委員会・学校の ESD・SDG s に関する研修支援

・橋本市学校長・指導主事対象 ESD・新学習指導要領研修会（6 月 11 日）

・熊本市立北部中学校 ESD 研修会（国立政策研究所指定校）

・名張市立蔵持小学校校内授業研修会

令和元年度 近畿 ESD コンソーシアム総会 開催要項

１．目的

近畿 ESD コンソーシアムでは、近畿圏を中心にユネスコスクール等への支援、及び ESD の推進を図っている。本コンソーシアム活動の一環として、構成団体間の情報交換と目的意識の共有、ESD に関する研修を目的として、下記の通り、総会を開催する。

２．開催日時　　令和元年 7 月 13 日（土）10 時 00 分~12 時 00 分

３．会場　　奈良教育大学　大会議室　（管理棟２F）

４．内容

10 時 00 分～10 時 10 分　開会行事

10 時 10 分～10 時 30 分　出席者の自己紹介

10 時 30 分～10 時 50 分　平成 30 年度奈良教育大学 ESD コンソーシアムの事業報告

10 時 50 分～11 時 10 分　平成 31 年度奈良教育大学 ESD コンソーシアムの事業計画

11 時 10 分～11 時 50 分　情報交換・その他

11 時 50 分～12 時 00 分　閉会行事

５．経費

奈良市以外からの参加者については、交通費を支給する。

問い合わせ
研究支援課 ESD 担当事務：中城・池田
E メール　k-soumu@nara-edu.ac.jp
Tel 0742-27-9367　Fax 0742-27-9147

２０１９年度　近畿 ESD コンソーシアム成果発表会・実践交流会　概要報告

１．目的

小学校においては 2020 年度、中学校では 2021 年度から新学習指導要領が完全実施となる。新学習指導要領の前文に「持続可能な社会の創り手」を育成することが明記されたことより、全国の小中学校で ESD の理念に基づく教育活動が展開されると考えられる。また、持続可能な開発目標（SDG s ）への関心が企業や NPO などの生涯教育において高まってきており、学校教育・生涯教育および企業等においても、質の高い教育活動が求められることから、構成団体メンバーの意欲向上と活動の質的向上、また ESD の普及を目的に開催する。

２．主催：近畿 ESD コンソーシアム、奈良教育大学

３．後援：

ESD 活動支援センター、近畿 ESD 活動支援センター、ASPUnivNet

４．参加者数　　209 名

５．日程

【12 月 26 日（木）】

（１）開会行事

あいさつ　奈良教育大学 学長 加藤 久雄 氏

文部科学省文部科学戦略官（国際）日本ユネスコ国内委員会副事務総長　平下　文康　氏

（２）ＥＳＤ成果発表会・ESD 子どもフォーラム

①奈良の自然・歴史さんぽ講座「子どもによる環境スピーチー美しい地球をいつまでもー」

②橿原市立白橿北小学校「つながった!!　歴史・人・わたしのまち」

③彦根市立西中学校「身近な人権について考える『私たちにできることって何だろう？』」

（３）ESD 実践交流会Ｉ

第１分科会（司会：橿原市指導主事 鶴田 剛史 氏、圓山 裕史 氏）

①奈良市立飛鳥小学校 教諭 圓山 裕史 氏

②やかげ小中高こども連合 共同代表 室 貴由輝 氏

③橿原市立畝傍中学校 教諭 東前 光二 氏

④エリーニユネスコ協会 藤井 伸二 氏

⑤株式会社ファーストリテイリング サステナビリティ部 ビジネス・社会課題解決連動チーム 中野 友華 氏

第２分科会（司会：橋本市指導主事 森 和子 氏、島 俊彦 氏）

①大和郡山市立郡山西小学校 教諭 島 俊彦 氏

②福岡市立田隅小学校 校長　遠入 哲司　氏

③草津市立渋川小学校 教諭 中村 大輔 氏

④橋本市立あやの台小学校 教諭 中谷 栄作 氏

⑤森と水の源流館 事務局長 尾上 忠太 氏

第３分科会（司会：彦根市指導主事 廣川 雄一郎 氏、奈良市指導主事 大塚 厚 氏）

①平群町立平群北小学校 教諭 小谷 文佳 氏

②彦根市立城北小学校 教諭 中村 裕幸 氏
③北谷町立北谷中学校 教諭　石井 貴徳　氏
④円山の自然と文化を守る会　事務局長 鳥飼 和夫 氏、会員 中村　聡一 氏

（４）ESD 研修会（講演会）「海洋プラスチック　何が問題、どう防ぐ」
講師：東京大学 主幹研究員 及川 幸彦 氏

（５）閉会行事・挨拶　奈良教育大学副学長 高橋 豪仁 氏

【12 月 27 日】
（１）　ESD 研修会Ⅱ（講演会）ESD for 2030・これからの ESD の方向性
講師：東京大学 主幹研究員 及川 幸彦 氏
（２）ESD 実践交流会Ⅱ
第４分科会（司会：奈良教育大学 中澤 静男 氏、大西 浩明 氏）
①奈良市立飛鳥小学校 教諭 大西 浩明 氏
②奈良教育大学附属幼稚園 教諭 鎌田 大雅 氏
③浦添市立前田小学校 教諭 仲村 出 氏
④川上村立川上小学校 教諭 川崎 貴寛 氏
第５分科会（司会：奈良教育大学 河本 大地 氏、吉田 寛 氏）
①春日山原始林を未来へつなぐ会 事務局長 杉山 拓次 氏
②奈良市立都跡小学校 教諭 三木 恵介 氏
③東京都立立川国際中等教育学校 教諭 町田 恵里子 氏
④奈良教育大学附属中学校 教諭 市橋 由彬 氏・吉田 寛 氏
第６分科会（司会：奈良市指導主事 大塚 厚 氏、河野 晋也 氏）：モデル教室
①奈良教育大学附属小学校 教諭　河野 晋也 氏
②長浜市立高時小学校 教諭 足立 康輔 氏
③奈良市立平城小学校 教諭 新宮 済 氏
④奈良教育大学ユネスコクラブ 仲村 幸奈 氏・谷垣 徹 氏

（３）閉会行事　あいさつ　奈良教育大学特任准教授　北村 恭康　氏

子どもフォーラムの様子

ESD 研修会の様子

2019年度近畿ESDコンソーシアム成果発表会・実践交流会
ESD研修会Ⅰ概要報告

奈良教育大学　　中澤　静男

◇開催日時　　2019年12月26日（木）15時40時～17時10分
◇会場　　奈良教育大学　大会議室
◇参加者数　　88名
◇内容　　海洋プラスチック　何が問題、どう防ぐ
　　講師：東京大学主幹研究員　及川　幸彦　氏

海は全世界、人類全てで関わっていかなければならないテーマだ。海洋プラスチック問題をESDやSDGｓの観点、教育や我々の生活といった観点で考えあいたい。

１．海をめぐるさまざまな問題

・海洋プラスチック問題、サンゴの白化・死滅（酸性化により骨格が作れなくなる）、海水面の上昇による島国の沈下、海の影響による台風・豪雨災害、氷河・氷山の融解、酸性化等の問題がある。
・海はつながっているので、我々の生活が、遠い地方の生活に影響を与えている。
・.我々の生活だけが豊かで、便利であってそれでいいのかを問い直さなければならない。
・地球上で起きている問題の多くは海が関係している。海は恵みにもなるし恐れにもなる（生命・安全、生活を脅かす）。どこで生活しようが、海の影響をうける。
・さまざまな問題がつながっており、影響を与えている。その根源に何があるかを考えないといけない。

２．海洋プラスチック問題

・プラスチックは分解されない。自然の循環から疎外された存在。
　→丈夫で長持ち、安い、生活のあらゆるところにプラスチックが行きわたっている。
・紫外線などの影響で細かくなり、マイクロプラスチック→ナノプラスチックへ。
・その数がどんどん増えており、2050年には、海の魚の量よりもプラスチックの量の方が多くなるとも言われている。
・2000年までに作られたプラスチックより、それ以降に作られたプラスチックの量が圧倒的に多い。
・リサイクルが進んでいない。（特に途上国で）
・川から海に流れ込んだプラスチックの99パーセントが消えている（ミッシングプラスチック）。
　魚類に食べられる（生物濃縮）。・多くは海底に沈んでいる（消えているわけではない）。
・日本のプラスチック排出量は世界で30位だが、包装資材に限ると世界第2位。
・細かくなるなかで、有害物質を付着させる。それが動物や人間の健康に悪影響を及ぼす。

３．海洋プラスチックの生物への影響

①ゴーストフィッシング（絡まり）　体に傷がつく・動きが制限される（エサがとれない）。
②誤飲・誤食　（深海においても）安心して魚介類を食べることができない時代が来るかもしれない。
③物理的影響　消化管の損傷、節食障害、繁殖率の低下、脳への影響。
④化学的影響　ガン、生殖能力の低下。

→　人間の健康・安全への影響が懸念される。

４．日本のプラスチック

・日本のプラごみ（903 万トン・2017 年）の 86 パーセントは有効利用されていると言われているが、その 58 パーセントは燃やされている（熱を利用している）。これはリサイクルではない。15 パーセントは海外に輸出している。本当にリサイクルされているのは全体の 13 パーセントだけ。海外の国々がプラごみの輸入を禁止しだした。

５．海洋プラスチック問題の解決に向けた学び

・海の近くの学校のほとんどが、海岸清掃に取り組んでいる。しかし、活動・行動と学び・探求がつながっていない。活動して終わり、では徒労感しか残らない。

→活動と学びの融合が必要

海ゴミの量の変化（環境省「海洋ごみ学習用教材」）を調べる。

海洋ゴミの種類:地域ごとに種類の違いが見えてくる:分別して他地域の学校と連携して比較する。

どこから（起源）　北海道あたりでは日本からのゴミ、奄美大島では中国からのゴミが多い。

→風向きや海流の影響がある

漂流ゴミの移動（どこから来たのかが分かる）（漂流漂着ごみに係るシミュレーション）

ゴミは流動するもの。そこだけで清掃しても解決できない。他地域との連携が必要。

・国際的アクション

４Ｒ（リユース、リサイクル、リデュース、リフィーズ（断る））捨てるならもらわない。

その人ができることをすることが大切。

世界の問題と自分とのつながりに気づき、行動化することが重要。

６．海の学びを通じた持続可能な社会の実現

・水のつながり、食のつながり、生き物のつながり、文化のつながり、産業、交通などが、海との循環の中で成り立っている。

・海の学びの理念　　公共財としての海　海に対する恵みと怖れ　畏敬の念　ハンドリングできない

◇海洋教育のコンセプト

海と人との共生のために　①海に親しむ、②海を知る、③海を守る、④海を利用する。

海の学びの３つの柱　生命・環境・安全

生命と安全においても、人間活動によって、生物多様性の減少や海洋汚染、気候変動などの問題が起こっている。（海が環境の平衡をもたらしている）

◇「海の学び」のつながりと広がり

・森と海のつながり

・地域の海から世界の海へという感覚をもつ（地球的視野での海の学び）。

・ＳＤＧｓと海洋

目標４　：教育の質を高める実現可能な手法を提供するアプローチとしての海洋教育。

目標１４：海洋と海洋資源の持続可能な開発に向けた保全と利用に貢献する海洋教育。

・世界の海洋は、その水温、化学的性質、海流および生物を通じて、地球を人類が住める場所にするシステムを構築している。

・海洋をめぐる問題

気候変動、漁業資源の減少、海洋酸性化、海洋汚染・海ゴミ

・海洋教育からの広がり（ＳＤＧｓへの多角的アプローチ）

目標１：貧困、目標２：飢餓、目標７：エネルギー、目標１５：森の豊かさ、目標１３：気候変動
目標１２：生産と消費、目標８：はたらきがい、目標１１：人間居住

◇持続可能な開発のための国連・海洋科学の 10 年（海の学びを通じた国際的な連携と協働）

〇汚染から海を守る。
〇海の生態系の保全。
〇海のさまざまな現象を予測できるようにする。
〇安全な海（海洋災害から守る）。
〇持続的な漁業資源を守る。
〇海洋科学の透明性のある情報による教育。

◇海洋リテラシーの７つの原則

①地球は多くの機能を備えた大きな海を持っている。
②海と海の生命は、地球の特徴を作る。
③海は、天候や気候に大きな影響を与える。
④海は地球を人間や生命が居住可能な環境にする。
⑤海は豊かな生命の多様性や生態系を支える。
⑥海と人間は密接につながっている。
⑦海は大部分がいまだに探検・調査されていない。

◇ＳＤＧｓ目標１４の学習目標

（１）認知的な学習目標
・関係、つながりを理解する、海洋の役割を理解する

（２）社会・情緒的な学習目標
・心情的な　　持続可能な漁業実践を主張する　　海洋の価値を示す
　　影響を与える　疑問を投げかける　共感する

（３）行動的な学習目標
・調べる、議論する、購入する、コンタクトする、キャンペーンを行う

→　海洋プラスチックごみの問題も、
　　つながりを知り、主張し、キャンペーンを行う。

2019年度近畿ESDコンソーシアム成果発表会・実践交流会
ESD研修会Ⅱ概要報告

奈良教育大学　　中澤　静男

◇開催日時　　2019年12月27日（金）9時～10時
◇会場　　次世代教員養成センター2号館多目的ホール
◇参加者数　　72名
◇内容　　ESD for 2030・これからのESDの方向性
　　講師：東京大学主幹研究員　及川　幸彦　氏

「ESDの新たな潮流　～ESD for 2030～　「誰も置き去りにしない」世界をめざして」

現在、GAPのレビューを行っているところで、来年度からESD for 2030をふまえて、国内実施計画が策定されるというタイミングにある。今日は、国際と国内、教育現場、地域の４つの軸でお話しする。

【これからのESDの方向性】

来年からESDの国際的枠組みが変わるのだが、その理由は、社会の変化が激しく、先行きが不透明であり、持続不可能性が顕在化しているためである。学校にいるとなかなかわからないが、例えば地方に行くと、地方・地域の衰退がひしひしと感じられる。消滅自治体には教育で地域を何とかしなければならないと、必死で取り組んでいると感じられる。そういうところから生まれたESDには強さがある。今までの日本のESDにはぬるさが感じられる。このことを、８年前の東日本大震災に遭遇したときに痛感した。被災時はまさに持続不可能な状況だった。戦争と災害時にはすべての問題が噴き出す。持続不可能な状況とはどういったものなのかを意識しながらESDを推進していかないと、ESDはホンモノにならない。

2015年ニューヨークで、「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択され、そのアジェンダの中にSDGｓが掲げられた。17の目標があるが、今日の共通の話題は４番目の「すべての人に包摂的かつ公正で質の高い教育を保障する」だ。そのゴールの下にターゲットがあり、その4.7に「すべての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする」とある。しかしESDは目標４の中だけですればよいのではない。ESDはEducation for Sustainable Developmentであり、SDを17の目標に整理したのがSDGｓだ。2030年までの重点的・優先的な目標を示したのがSDGｓだ。目標４は、全ての目標を達成するための人材を育成するという捉え方だ。人材育成を通じて17全ての目標に貢献するのがESDだ。日本ユネスコ国内委員会教育小委員会からのメッセージにも、SDGｓを取り入れたESDの推進が示されている。ポストGAP:ESD for 2030にも、ESDの全体的な目的として、17のSDGｓの達成を通じて、より公正で持続可能な世界を構築することと示されている。文部科学省は、教育はSDGｓ達成のカギだと言っている。私は、人材育成が基盤となって17全ての目標の達成を目指す、基礎の基礎だと思っている。ESDはSDGｓの中核・心臓にあたる。2030のESDは、すべてのSDGｓへのESDの貢献を強化する。

2030をつくる際のポジションペーパーが出された。指針、あるいはアブストラクトのようなものだ。

そこに重視されるべきポイントが３つ書かれている。

①行動の変革

学習者に持続性のための行動の変革をもたらすのが ESD の主な優先事項。そのためには、公教育だけでは不十分で、フォーマル、ノンフォーマル、インフォーマルの３つが ESD には重要である。

②構造的変更

価値観の向上を促すことも重要だ。特に消費者社会が持続可能な社会づくりに大きいというところからきている。大量生産・大量消費という価値観を変えていかなければならない。ESD は最近の経済構造の生産パターンに、より直接的に影響を及ぼさなければならない。

③科学技術の進歩した未来

持続可能な社会の実現には、科学技術の進歩は欠かせない。しかし、AI などが重視されることとそこでの人間の役割はまだ結論が出されていない。GAP の５つの優先行動分野や草の根レベルの支援等の主要構造は維持するが、５つを包括的に進めていくことが重要だ。５つのパートナーがネットワークを組んで取り組んでいくことが求められている。これまでの実施状況からの教訓をふまえて取り組む。

GAP の中で特に重要視されているのは、

・政策においては、国際及び国内政策の中に ESD が統合されるべきだということ。
・機関包摂型アプローチの重要性。フォーマルとノンフォーマルとインフォーマルの相互作用及び協力の強化。連携してマルチステークホルダーでやっていく。（日本の ESD の強みは多様な主体の参画と協働だ。）
・教員は学習のファシリテーターであるべき。子どもが主体になって学ぶこと。「伝統的な」持続可能性の価値の継続的関連性に関して、批判的思考力を備えることが必要。
・若者はカギとなるアクターであるということ。
・コミュニティの問題を解決することが要となる。（多様なセクターと多様な課題がある）
・３種類のモニタリングおよび多面的・総合的評価の重要性

【ESD for 2030 の捉え方・考え方】

１．SDG s によって ESD の中身が明確にされた。これまで取り組んできた ESD を SDG s のレンズを通して新たな意義や価値がわかるようになった。自分たちの ESD が SDG s の各目標にどのように貢献しているのか考える。SDG s に向かって自分の ESD を可視化する、捉え直す機会が生まれた。

２．ESD にとって共通の目標がつくられた。ESD の目標が明確化された。地域に根差した活動が地域ごとに行われてきた。地域の課題解決への特化や地域人材の育成など、閉じている傾向があった。しかし SDG s が出てきたことで、ローカルな取組がグローバルにつながることができた。SDG s を意識して取り組むことは、地域に根差した身近な活動が世界につながることであり、地球規模の課題解決に貢献することだ。各地で取り組まれている ESD が結果的に世界の課題解決に結びついてくる。これからの教育は地域に根差した教育と俯瞰的に見る教育の両方が必要だ。いわゆるグローカルな学習だ。それがないと単なるふるさと学習になってしまう。故郷を愛する気持ちや誇りに思う気持ちの育成は大事だが、それを国際的な課題解決につなげていくという、地域と世界の接点を考えておくことが重要だ。

３．SDG s という俯瞰するものを見据えながら、足元の課題解決が重要だ。それがないと、地に足が付かない学習になってしまう。これは発達段階に関連すると思う。発達段階を考慮して、取り組む

必要がある。

・SDG s は ESD を推進していくことへの道標だ。

【外務省 SDG s 副教材の紹介】

・世界の現状や問題の把握

・国内に同じような問題はないのか、見つめ直す（日本の貧困率の高さ、ジェンダーなど）

・国際・国内・地域を関連付ける。地域の課題に則して認識させる。その課題解決にむけて地域から世界への行動を促す。

→　Education of SDGs から Education for SDGs（2030）へが重要だ。SDG s について学ぶのが目標ではない。

・発達段階に応じて生涯にわたって探究する意欲を喚起する（継続的発展的な学習が求められる）。ESD 自身が持続的な学びのプロセスができていることが大事だ。

縦：すべての校種、横：ノンフォーマル、企業、自治体

・縦と横の連携で、持続可能な社会の創り手を育成するという意識。ESD に取り組む人には、仕組みをつくったり、カリキュラムマネジメントしたりする力が必要だ。システムをつくっていくことが、教育によって社会をかえていくアプローチだ。

【ユネスコ活動の活性化についての建議】

①日本は ESD の牽引役だった。Education for 2030 においても、主導的役割を維持すること。

②新学習指導要領に即した ESD をやっていくこと。

③ノンフォーマルな多様なステークホルダーの連携で ESD を推進していくこと。

④国内と国際の連環、国内外のネットワークづくりの推進。

◇持続可能な社会の構築のプロセス（三層構造）

めざす世界像	持続可能な社会	ユネスコ憲章の実現（心の中に平和の砦を築く）
そのための取組	社会問題の解決＝SDG s	SDG s の達成なしに持続可能な社会はありえない。そのために必要な人材育成。それが ESD だ。

新学習指導要領の前文に持続可能な社会の創り手が明記された。それを実現するのが教育課程であり、その理念を社会と共有して社会に開かれた教育課程を実現していく。新学習指導要領の３つの資質能力で大事なのは、これまでの学力観を３つのステップに位置づけたということだ。知識・技能から思考力・判断力・表現力へ、そして最終的には学びに向かう力、人間性の育成へとつながっていく。つながりができたというところが大きい。

・生活や社会に生かす知識・技能　←生かせなければだめだ

・未知なる状況にも対応できる思考力・判断力・表現力←対応できなければだめだ

・社会や人生に生かす、貢献できる学びに向かう力や人間性を涵養する

これがこれからもとめられる資質能力であり、ESD との関連が明確になる。

ESD で育む資質・能力・態度と学習指導要領の３つの資質能力は、連関している。ESD で育む能力態度というと、国研のものがすでにあるが、足りない部分がある。実際の社会や生活の中で生きて働く「知識及び技能」が足りない。持続可能な開発を促進するために必要な知識が必要だ。その必要性はタ

ーゲット 4.7 にも書かれている。その知識・技能を身につけるのは教科学習だ。教科には、それがちりばめられている。

・批判的思考力、未来像の予測、システムズシンキング、コミュニケーション力の育成は探究
・他者と協力する態度、つながりを尊重する態度、進んで参加する態度は行動
・それを持続可能な開発を促進するために必要な知識・技能

これらをスパイラルに連携させながらやっていく必要があると考えている。それを支えるのが体験や交流、発信である。こう考えると ESD と学習指導要領がつながっていく。だからふつうの学校でも ESD はやれる。そして実際に取り組んでいく上でカリキュラムデザインを考えてマネージメントしていく。その際重要なのが教科と探究の連携だ。

◇まとめ

・ESD の教育的意義をとらえ直すこと。E と SD（地域創生）の融合。
・学習指導要領の基盤となる理念としての ESD。
・学習スタイルが変革され、資質能力の育成にリンクしていく。
・社会に開かれた教育課程というのは、地域連携・協働、開かれた教育課程を実現する ESD。
・社会の創り手を育てる教育　SDG s を念頭に置いた学習 SDG s と地域づくりへの貢献。
・めざす教育の方向性は、「自己実現」から「協働」、そして「共生・共創」へという理念にシフトしていく。

令和元年度　ESD 子どもフォーラム

平成 31 年度　奈良 ESD 連続セミナー開催要項

１．目的

学習指導要領が改訂され、前文や総則に「持続可能な社会の創り手」の育成が明記された新学習指導要領が、幼稚園では 2018 年度より、小学校は 2020 年度、中学校は 2021 年度から全面実施、高等学校では 2022 年度より年次進行で実施される。新学習指導要領が求める教育を実施するためには、教育内容の捉え方の見直しや教育方法の改善が必須であり、ＥＳＤを適切に指導する資質能力の育成が、教員養成及び現職教員研修にとって喫緊の課題であることは間違いない。そこでＥＳＤの指導者として求められる資質能力を育成することを目的に、本連続セミナーを開催する。

２．開催日時　時間はいずれも 19 時～21 時

①4 月 25 日（木）、　②5 月 16 日（木）、　③6 月 13 日（木）、　④7 月 11 日（木）
⑤8 月 08 日（木）、　⑥9 月 12 日（木）、　⑦10 月 03 日（木）、　⑧11 月 07 日（木）
⑨12 月 05 日（木）、　⑩1 月 09 日（木）、　⑪1 月 23 日（木）、　⑫2 月 13 日（木）

３．会場　　次世代教員養成センター２号館　多目的ホール

４．研修内容

（１）持続可能な開発目標（SDGs）の内容理解
（２）ESD の学習理論
（３）優良実践事例の分析
（４）ESD 学習指導案の作成と相互検討
（５）ESD 授業実践の作成と相互検討

５．ESD ティーチャープログラム（現職教員向け）

（１）ESD ティーチャーコース
①ESD 連続セミナーへの 5 回以上の参加と毎回のミニレポートの作成
②ESD 教材開発と ESD 学習指導案の作成、1 月末日までに提出

（２）ESD マスターコース
①ESD 連続セミナーへの 7 回以上の参加と毎回のミニレポートの作成
②ESD 教材開発と ESD 学習指導案の作成、そして授業実践をふまえた実践事例を作成（６Ｐ程度）し、1 月末までに提出（考察をしっかり記載すること）。
③ESD ティーチャー研修中の現職教員および学生の指導案作成指導

（４）ESD スペシャリストコース
①ESD 連続セミナーへの 7 回以上の参加と毎回のミニレポートの作成
②ESD 教材開発と ESD 学習指導案の作成、そして授業実践をふまえた実践事例を作成（６Ｐ程度）し、1 月末までに提出（考察をしっかり記載すること）。
③ESD ティーチャー研修中の現職教員および学生の指導案作成指導
④学会や研究大会での実践事例の発表か、ESD 研修会の開催と報告書の提出

※3 月末に学長より ESD ティーチャー、ESD マスター、ESD スペシャリストの認定証が授与されます。
※作成された学習指導案や実践事例は近畿 ESD コンソーシアムの HP に掲載します。

令和元年度　第１回奈良ＥＳＤ連続セミナー概要報告

奈良教育大学　中澤　静男

◇開催日時　平成 31 年 4 月 25 日（木）19 時～21 時 30 分

◇会場　次世代教員養成センター多目的ホール

◇参加者　蔵前（真美ケ丘第一小）、河野（附属小）、中澤哲・小谷（平郡北小）、吉田・長友・市橋・中村（附属中）、島・近藤（郡山西小）、西口（東登美ケ丘小）、石田（左京小）、大西・圓山・阿彌（飛鳥小）、吉田（済美小）、村岡（西大和学園高）、高良（筒井小）、樋口（平城西小）、三木（都跡小）、
藤田（滋賀県社会福祉会）、樫原（日本ＥＳＤ学会）、中澤敦（近畿ＥＳＤ活動支援センター）、
森口・北村・中澤（奈良教育大学）
仲村、櫓、岩城、坂元、谷垣、中西、畑下、東尾、奥平（奈良教育大学学生）
計 35 人

◇内容　スペシャリストの考察に学ぶ

（１）日本の食料生産　河野晋也

・クリティカルシンキングに特化して取り組み
自分の目に見えるもの（社会）を批判的にとらえることはよく取り組まれている。しかし、自分自身の行いや価値観について批判的にとらえることも重要なのではないか。
「地産地消は大事だ」で終わるのではなく、「自分は地産地消をやっていけるのか」に踏み込む。

・結論は明確でないが、自分の行動を見つめ直す態度を育てる。

・学習の終わりは難しさに気づくことと位置付けていた。一応（図５）参照。

・漁業におけるマグロの枯渇。でも食べないといことはできないだろう。江戸時代にはマグロは人気がなかった。このあと日本人の嗜好はサーモンになっていくだろう。マグロがおいしいというのは、思い込みかもしれない。

・クリティカルシンキングしたものをさらにクリティカルにとらえるところが素晴らしいと思った。

・発問の設定が優れていると思った。

・すぐに答えが出ない、もやもや感で終わるのもありかと思った。実生活に学んだことが出てきた場合、授業の意義がある。授業の中で必ずしも答えが出なくてもよいと思った。授業での完結を求めない。

・低学年のクリティカルシンキングとは。

（２）信貴山縁起絵巻をよむ　中澤哲也

・本物を見るのは大事。

・ゲストティーチャーなど、多様な人に出会ったこと、専門家に学んだことが発表意欲につながったのでは。

・ゲストの活用の仕方のコツ。
子どもは質問しづらい。ガイドが 7 人来てくれたので、少人数になり質問しやすかった。ガイドも事前に研修されていた。事前打ち合わせで授業の習いなどを丁寧に伝えておくことが重要ではないか。

・人材の見つけた方
今回は、近畿地方活動支援センターが人材を見つけてくれた。役場に出向いて見つけたりした。
・発表を聞いた地域の方の感想にはどういうものがあったか。アンケートや感想などを書いてもらえるようにすれば、当日参加できなかった児童にも伝わるし、考察するときの客観的なデータとなる。
・役場の方にとっても初めてのことだった。ＥＳＤの視点に気づかれたことも多かったのではないか。
・小中で系統的に取り組んでもいい教材なのではないか。
・地域教材を扱うと、子どもの食いつきがよい。子どもにとって記憶にも残る

（３）わたしたちの生活をよりよくする政治（地方自治）　島俊彦

・川上村の人口減少に対する政策を知り、地元である郡山市の政策への関心を高めた。
・クリティカルシンキングの育成が中心になると想定していたが、システムズシンキングの育成により効果があった。
・児童の発言で方向性がかわるように思うが、どれぐらい想定していたのか。子どもも教員もともに学ぶ姿勢で取り組んだ。
・目の前の子どもの反応を予想するが、子どもはそれ以上の反応をする。ある程度の大きなゴールは持っておく。子どもの姿を想定しておくのは大切。ゴールに導こうというのは違う。
・中学校の実践につなぐことができる。
・６年生の政治の単元は自分事にしにくいが、本実践ではそれができていた。その秘訣は何か。
地方政治の影響は感じにくい。そこでまず川上村を事例として取り上げた。しかし、身近に感じることができたかどうか。市の担当者からの「意見を聞きたい」という投げかけが、子どもの意欲を引き出した。
・電話インタビューの練習、取材の練習は必要。

（４）昔の暮らし　蔵前拓也
・昔の暮らしの道具はいろいろなことができる、多様な役割を果たしていたと、見直すことができた。
・昔の暮らしは不便というステレオタイプな見方を変えることができた。
・行動化には至らなかったのが反省ポイントである。
この単元での行動化とは何だろうか。
・発達段階に応じたクリティカルシンキングがあるだろう。
・家電製品が普及することを多面的にとらえる必要があるだろう。
・昔とはいつなのか、授業者として捉えておく。
・子どものアポ取り、質問をどのように支援したのか。
見学の受け入れ先からも、子どもからのアポ取りは好評だった。教師が作らない方がいい。
質問に反映された学習テーマについては、教員から提示した。３年生だから無理だろうという先入観は不要であった。

・今回は考察の仕方をスペシャリストの方々から学びました。
ＥＳＤで育てたい価値観、見方・考え方、資質・能力、ＳＤＧｓとの関連を意識した指導計画を立てるとともに、そのポイントについて考察を加える。
客観的な考察を行うために、学習前の子どもへのアンケート、学習後のアンケート、その他、客観的資料を蓄積しておくことが重要。

・次回は５月１６日（木）です。現職教員と学生のマッチングを行います。よろしくお願いします。

第２回奈良ＥＳＤ連続セミナー　概要報告

奈良教育大学　中澤　静男

１．開催日時　　2019 年 5 月 16 日（木）19 時～21 時 30 分

２．会場　　次世代教員養成センター2 号館　多目的ホール

３．参加者

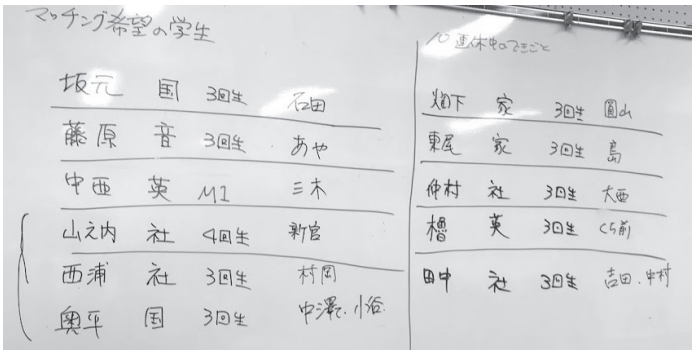
三木（都跡小）、樋口（平城西小）、新宮（平城小）、中澤哲・小谷（平群北小）、吉田（附属中）、村岡（西大和学園高）、河野（附属小）、圓山・阿彌・大西（飛鳥小）、高良（筒井小）、島（郡山西小）、藤田（滋賀県社会福祉会）、樫原（日本ＥＳＤ学会）、中澤敦（きんき環境館）

中西・坂元・藤原・中西・畑下・東尾・仲村・櫓・田中（奈良教育大学生）

森口・北村・中澤静（奈良教育大）　　計　28 名

４．学生と現職教員のマッチング

坂元－石田、藤原－阿彌、中西－三木、畑下－圓山、東尾－島、仲村－大西、櫓－蔵前、田中－吉田・中村、山之内－新宮、西浦－村岡、奥平－中澤哲・小平



５．論文講読

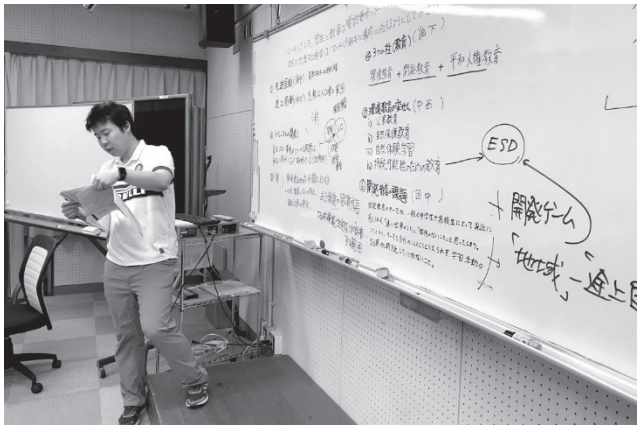
「持続可能な開発のための教育」とは何か　田中治彦

（１）地球環境を破壊する２大要因

先進国側：過剰な資源・エネルギーの消費

途上国側：急激な人口増加と貧困

（２）地球社会の問題と２大要因のかかわりを説明する



先進国側：過剰な資源・エネルギーの消費

→　資源の枯渇・二酸化炭素の大量発生→温暖化→環境破壊→食料生産への影響

→　食料価格の上昇→飢餓・途上国の貧困

途上国側：急激な人口増加と貧困

→　無理な耕地化・森林破壊・短期間の焼き畑→環境悪化→貧困・飢餓

○いずれにしろ、被害が大きいのは強靭さが乏しい途上国の貧困層→ＳＤＧｓのキーワード「誰一人取り残さない」

（３）人口増加にブレーキをかけるために必要なこと

ある程度の経済開発によって貧困を解消する必要がある。

ある程度とは、地球の生態系が許容する範囲内

（４）ＥＳＤの内容を構成する３つの柱

環境教育＋開発教育＋平和・人権教育

（５）環境教育の変遷

①公害教育：激甚型公害の終始と共に下火に

②自然保護教育：日常生活との乖離・教訓的

③自然体験学習：野外活動・それ自体が自己目的化

④ＥＳＤ

・批判的環境教育：批判的思考と問題解決技能の育成が重要

環境をホリスティックに捉える

環境を時間軸で捉える

知識と感受性による環境倫理の育成

・「つなぐ」がキーワード（阿部治）

（６）開発教育の課題

遠い世界のこと」「関係ないこと」と捉えられ、当事者意識が育たない

ワークショップやゲーム取り入れた学習が自己目的化してしまった

持続可能な開発のための教育の最終的な目標

「共生と公正を基本とした持続可能な地球社会づくり」

開発教育がめざす「共に生きることができる公正な地球社会づくり」は、まず足元から始める必要がある。・開発教育の地域展開が必要（山西）

→　環境教育と開発教育の目指す方向性がＥＳＤで一致する

（７）持続可能な社会づくりのキーワード

「つながり」「参加・参画」「意思決定」

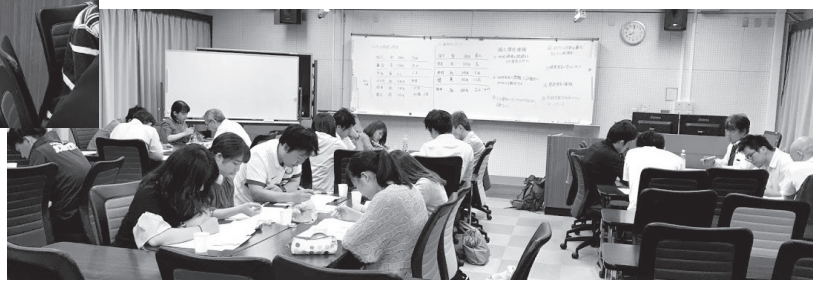
（８）まとめ

①持続可能な開発のための教育：環境教育＋開発教育＋人権・平和教育

②持続可能な開発のための教育は「共生と公正を基本とした循環型の社会づくり」を目的とした教育学習活動

③持続可能な開発のための教育の目標は、「公正」「共生」「循環性」を実現する社会づくりに「参加」することができるような能力や態度を養うことである

次回は６月 13 日（木）19 時です。



第３回奈良ＥＳＤ連続セミナー概要報告

奈良教育大学　中澤　静男

◇実施日時　　2019 年 6 月 13 日（木）19 時～21 時 30 分

◇会場　　次世代教員養成センター2 号館多目的ホール

◇参加者　高良（筒井小）、島（郡山西小）、圓山・大西（飛鳥小）、梶原・樋口（平城西小）、新宮（平城小）、河野（附属小）、後藤田（大阪成蹊大）、今江（ソーシャル・サイエンスラボ）
藤原・奥平・坂元・東尾・上田・山之内・長谷川・畑下・櫓（学生）
森下・北村・中澤（奈良教育大学）

◇内容

１．前回の振り返り

（１）ＥＳＤを構成する３つの教育

ＥＳＤ＝開発教育＋環境教育＋人権・平和教育

（２）ＥＳＤの目標

持続可能性に関する価値観と行動の変革を通して、結果として持続可能な社会の実現を目指す

キーワードは「変革」

２．ＳＤＧｓを読み解く

（１）直面する課題と関連する目標

貧困（１）、国内的・国際的不平等（10）、ジェンダー平等（５）、失業（８）、地球規模の健康の脅威（３）、自然災害（11）、紛争・暴力的過激主義（16）、難民（16・11）、天然資源の減少（15）、砂漠化　（15）、干ばつ（15）、土壌悪化（15）、淡水の欠乏（６）、生物多様性の喪失（15）、気候変動（７）、

（２）目指すべき世界像と関連する目標

貧困（１）、飢餓（２）、病気及び欠乏・保健医療（３）、恐怖と暴力（16）、質の高い教育（４）、社会的福祉（３）、飲料水と衛生（６）、安全な住居（11）、持続可能なエネルギー（７）、女性・女児のジェンダー平等（５）、包摂的で持続可能な経済成長（８）、生物多様性（15）持続可能な生産と消費（12）、海洋・陸域の天然資源の持続可能な利用（14・15）、

３．ＥＳＤとＳＤＧｓの関連

人々の意識を変えていくのがＥＳＤ

意識を変えた人々が世界を改善する項目がＳＤＧｓの各目標

ＥＳＤを学んだ後、教材に関連するＳＤＧｓの目標について、意識や行動の変容が見られたかどうかがポイントとなる。なぜなら、ＥＳＤは変容を促す教育であるため。

総合的な学習の時間においては、上の文言がズバリと当てはまる。

教科においては、学習指導要領に即して教科の学習として成立していることが重要。その上で、

①教科の学習内容が、ＥＳＤの価値観、資質・能力、視点（見方・考え方）の育成にとって価値あるものであることやＳＤＧｓと関連することを、まず教員が認識し、子どもに伝え、学習を意義づける。

②総合的な学習の時間や日常生活、地域での活動、ボランティア等他の機会に活用することができ

る「ＥＳＤの資質・能力」を育成する。

４．ＥＳＤの実践に関して

（１）人々の意識を変えていく　：　ESD の役割

次のような価値観を育てる

（評価できる・課題を見いだす・ライフスタイルを変えていく）

①世代間の公正を意識できる

②世代内の公正を意識できる

③生態系・自然環境の保全を優先する

④人権・文化を尊重する。

（２）評価のしかた

①学習前にアンケート調査等を行い、学習後のアンケート調査と比較する。

子どもは自己の変容を知ることで、達成感を得る。

教師にとっては、指導方法を改善する手立て。

②評価の観点

・単元や教材によって、中核となる価値観（①～④）は異なるので、どれか１つか２つを選択。

・①の事前・事後の自己評価を用いて、総合的な変容を評価する。

・ＥＳＤで育てたい資質・能力を評価する。

クリティカル・シンキング　　当たり前を問い直し、よさや課題を見いだす

システムズ・シンキング　　個々の事象をつなげて、総合的に理解する・説明する

知識の構造化・概念的知識の獲得（Why への説明ができる）

長期的思考力　　長期予測データに基づいた考察

（人口・気候・格差・地震・食料・水産資源・技術革新など）

コミュニケーション力

協働的問題解決力　　課題の発見－仮説の作成－調査活動－話し合い－考察・表現（レポート・プレゼン・行動化など）

※クリティカル・シンキング、システムズ・シンキング、長期的思考力で使えるのがＥＳＤの視点（見方・考え方）だと考えています。

ＥＳＤの視点

多様性（いろいろあるか）、相互性（つなぐ・つながっているか・循環しているか）、有限性（もったいなくないか）、公平性（世代内・世代間）、連携性（協力しているか）、責任性

※私は、自発的に行動を変容することが重要だと考えているので、ＥＳＤの評価については相互評価を通した自己評価が有効であると考えています。どなたか、共同研究しませんか？

（事前・事後評価シートの作成、評価計画の作成、相互評価カードの作成、相互評価の実施（複数回）、相互評価の蓄積、相互評価カードを材料にした「学びの作文」の実施、シート・カード・作文の分析）

５．授業改善・授業づくり

①教科の学習や既存の総合的な学習のＥＳＤ的改善

②新しく教材開発して総合的な学習をつくる（ＥＳＤ総合）

（１）授業構想

・単元名

・単元の目標　　知・技、思・判・表、主学

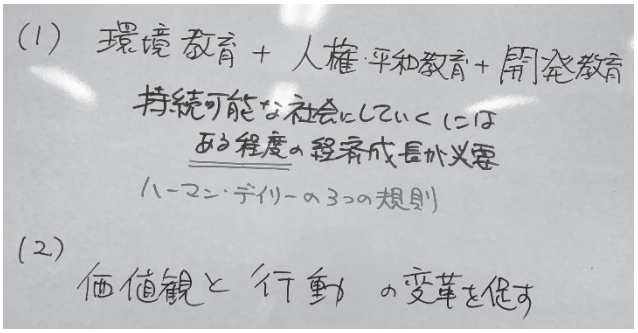
・単元の評価規準　　知・技、思・判・表、主学

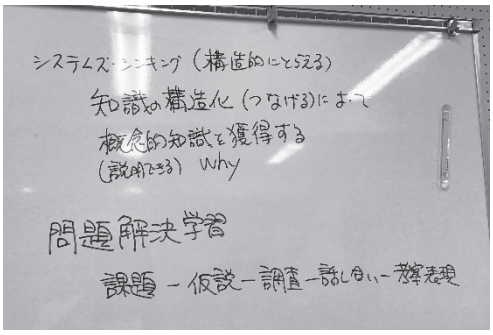
・主に関連するＥＳＤの価値観

・主に関連するＳＤＧｓの目標

全 10 時間

主な学習活動	学習への支援	◇評価・備考	ＥＳＤの視点	ＥＳＤの資質能力
１．導入と課題の作成② なぜ、○○？　どのように○○？		◇当たり前を見つめ直し課題を見いだす	教材による	クリティカル・シンキング
２．調べる④ 仮説を立て、調べる	調べる内容でグループ編成	◇協力して調査する		コミュニケーション力
３．話し合う③ グループ発表をもとにした仮説の検証		◇調査結果をわかりやすく表現する ◇事実やデータに即した話し合いをする。		クリティカル・シンキング長期的思考力 コミュニケーション力
４．まとめる①	自分の言葉でまとめる			システムズ・シンキング





次回は７月１１日（木）です。授業構想案を検討します。作成してきてください。

第４回奈良ＥＳＤ連続セミナー概要報告

奈良教育大学　中澤　静男

◇開催日時　　2019 年 7 月 11 日（木）19 時～21 時 30 分

◇会場　　次世代教員養成センター2 号館

◇参加者　　樋口（平城西）、大西・圓山（飛鳥）、小谷・中澤哲（平郡北）、島（郡山西）、
高良（筒井）、河野（附属小）、新宮（平城）、今井（ソーシャルサイエンスラボ）、
後藤田（大阪成蹊大）西口（東登美ヶ丘）
長谷川（教職大学院）、山之内・上田・東尾・畑下・坂元・仲村・西浦・藤原（学部生）
北村・中澤（奈良教育大）　　計２３名

１．優良実践事例の検討

「先人の学びをつなぐ-杉原紙の取組-」多可町立杉原谷小学校　篠原　隆浩　氏

（１）本実践で養うことができるＥＳＤの価値観

世代間の公正	文化を受け継ぐ、次の世代につないでいこうとしている 一度途絶えた杉原紙を復活させて後の世代に伝えようとしている 昔の人に学んだことをつないでいく
自然環境・生態系の保全	清流が守られている
人権・文化の尊重	地域の文化（多様性の尊重）、昔の異文化、

（２）本実践で身に付けることができるＥＳＤの視点

相互性	異学年の交流 外国人となどとの交流をしている
連携性	杉原紙のセンター、地域人材との連携
責任性	自分たちで継承していく・伝統文化の継承者の一人としての自覚（当事者意識） 地域の人や世界への発信を自分事として捉えている 学んだことを下の学年へ

（３）本実践で育てることができるＥＳＤの資質・能力

長期的思考力	木を育てるところからの取組
協働的問題解決力	異学年・グループでの活動
システムズシンキング	多様な教科の学びをつないでいる 発信内容を３つに絞っているところ
コミュニケーション力	学級内、異学年、外部の方との交流 発信の重視

（４）ＳＤＧｓとの関連

１１（まちづくり）、１５（森林環境）、９（産業インフラ）、１２（生産と消費）６（水と衛生）
４（生涯学習）、

２．日本ＥＳＤ学会第３回近畿地方研究会での発表

「学習指導要領（平成 29 年告示）におけるＥＳＤの理念の検討」：中澤静男

問題意識：前文に「持続可能な社会の創り手の育成」が述べられているが、学習指導要領全体で、ＥＳＤの理念はどの程度、明示されているか。

調査方法と結果

①小学校学習指導要領の全教科の「学びに向かう力、人間性等」の目標に、ＥＳＤで育てる価値観の基礎は反映されているか→社会・外国語・外国語活動・特活には「人権・文化の尊重」に関わる内容が記載されている。理科には「生態系の保全」に関する内容が記載されている。他の教科には記述はない。

②特に記述の多い社会の全学年の目標を調査

→全ての学年の目標に持続可能な社会づくりに関する記述がある。

③「内容の取扱い」を調査

→「内容の取扱い」は２分されるが「子どもの学び方として「自分事として捉えること」が明記されているのは意外と少ない（４年生に多い）。

まとめ

社会の場合、目標に持続可能な社会づくりに関するものが示されているので、「内容の取扱い」に記述されていない場合は、授業者がＥＳＤの理念を反映した「内容の取扱い」を考案する必要がある。

第５学年食料生産単元を事例に「内容の取扱い」を提案する

この単元での学習内容は、生産者の工夫や努力、農業生産システムの理解が中心であるため、将来生産者になる子ども以外は、自分が何かをするという行動化には至りにくい。

消費活動を通して、農家を支援するという発想によって、自分で考え、行動を変容させることができる。

３．授業構想案の検討

（１）第３学年：郡山の金魚　島先生

導入：マンホールカード　　子どももなんとなく目にしたことがあるだろう

調査：金魚に関する情報収集

副読本・金魚研究家・金魚マイスター

体験：金魚すくい体験

地域振興課：なぜ金魚すくい大会をはじめたのか

行動化　　：金魚すくい大会への参加・参画

地域外から来た人へのインタビューで、地域の価値を発見する。

（２）第５学年：筒井の秘密・筒井順慶　高良先生

導入：順慶祭り（平成 12 年～）

子どもは筒井順慶に関心をもっているのだろうか？

筒井の人たちにとって、「順慶」はどういう存在なのか？

筒井城のフィールドワーク・地名に着目　　現在とのつながり

筒井順慶顕彰会へのインタビュー調査

（3）第５学年：秋篠川千本桜　樋口先生

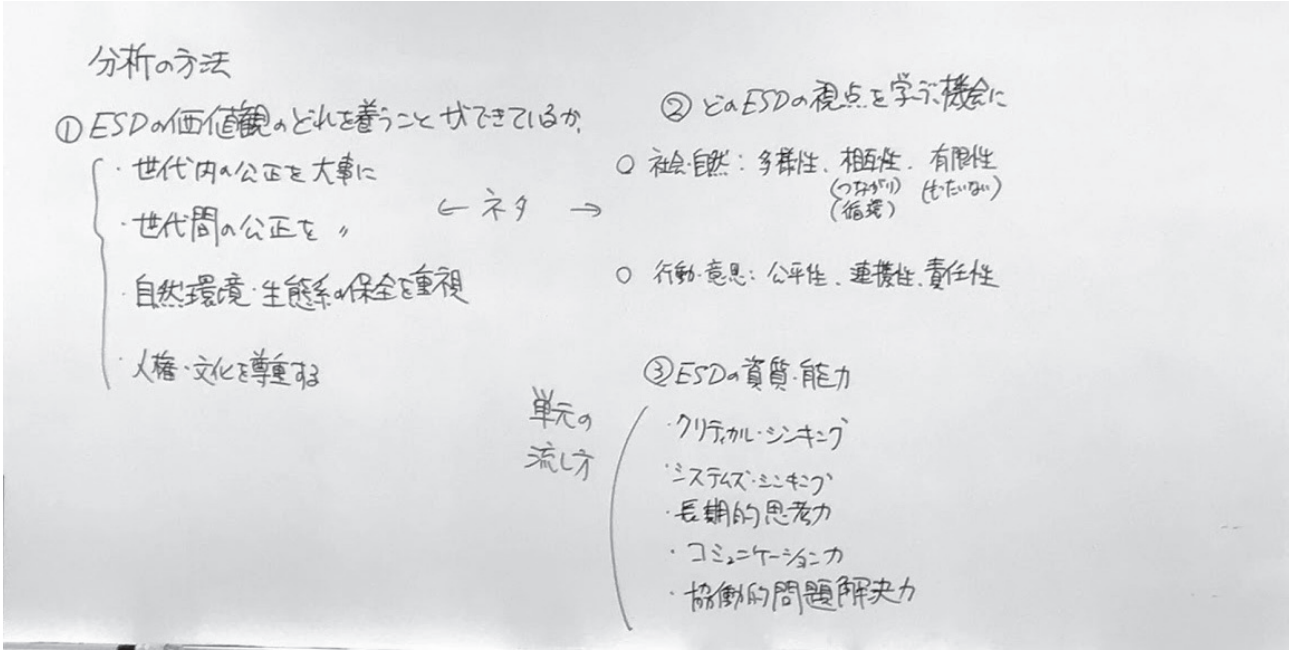
桜を植えた目的・地域のほこりを作りたい
育てる会の人たちの営み。
一生懸命続けているが本当はしんどい・高齢化　後継者が必要
桜祭り・川遊び・掃除をしているのは誰か？
夏休みの宿題　子どもが秋篠川に行ってみようと思うような宿題　何本あるかな
コミュニティづくりの一環としてやっているのか？
文化財とつながなくてもいいのでは。
奈良町の人にとっての東大寺・興福寺　私たちにとっての秋篠川
高齢化で先細りになっていくという現実について考えさせる　　持続不可能な現状
当事者意識を養うのがいいのでは。　この先続けていけるのだろうか？という課題で

（4）第４学年　秋篠川はどのような川なのか調べよう・新宮先生
生物調査はしたが、自分事化できていなかった
平城小の児童は秋篠川に対する関心は少ない。「汚い川」という認識もある
河川課との生物指標調査・秋篠川の水質
奈良大学博物館：水質は改善している　　川にたくさん草がある・生物多様性が増している
川上村へ行こう　「水の恵み」に着目させるには、秋篠川の水を用いた農家の方にインタビューした方がいいのでは。
生物多様性に焦点化してはどうか。　川上村でも生き物同士のつながりを考える学習が有効
地域の方と未来の秋篠川について、総合計画から考えよう。サワガニがいた頃の川にもどそう
生き物のエサや住処など、構造的にとらえる必要があるだろう

（5）第６学年　町名・地域に働きかけられる人を目指して・大西先生
６年間の成果として地域に貢献する活動をしたい

辻子：十字状の小路
突抜：行き止まりだったところに突き抜けて新しい道ができた
新屋：新たな家が立ち並んだ
御門：寺の門があった
堂・院：元興寺や興福寺の建物の跡
難読地名　　いわれや歴史がある
なぜ、この地域は「飛鳥」なのか？　　枕詞

次回は８月８日（木）17 時　～


分析の方法
①ESDの価値観のどれを養うことができているか
・世代内の公正を大事に
・世代間の公正を 〃
・自然環境・生態系の保全を重視
・人権・文化を尊重する
← ネタ →
②どのESDの視点を学ぶ機会に
○ 社会・自然：多様性、相互性（つながり）（循環）、有限性（もったいない）
○ 行動・意思：公平性、連携性、責任性
単元の流し方
③ESDの資質・能力
・クリティカル・シンキング
・システムズ・シンキング
・長期的思考力
・コミュニケーション力
・協働的問題解決力

第５回奈良ＥＳＤ連続セミナー　概要報告

奈良教育大学　中澤　静男

◇開催日時　　2019 年 8 月 8 日（木）18 時～21 時

◇会場　　次世代教員養成センター2 号館

◇参加者　　近藤（大阪府立環境農林水産研究所）、小谷・中澤哲（平郡北小）、樋口（平城西小）、新宮（平城小）、高良（筒井小）、中澤敦（近畿地方ＥＳＤ活動支援センター）、圓山（飛鳥小）、島（郡山西小）、吉田（附属中）、北村・中澤（奈良教育大学）長谷川（教職大学院）、谷垣（大学院）山之内・坂本（学部生）　計 16 名

◇内容

１．ＥＳＤと新学習指導要領

（１）新学習指導要領の目標：先行き不透明な時代を生きる児童生徒に、どのような状況下でも自己実現できる資質・能力を育成する。
社会に適応できる力の育成というよりは、社会を創る力の育成

（２）生きる力の構成要素

①教科等で養う資質・能力

②全ての教科の基盤となる資質・能力

例えばどのような資質能力でしょうか。

言語運用能力、情報収集・活用能力、問題解決力、コミュニケーション力、論理的思考力等

③現代的諸課題に対応できる力

現代的課題にはどのようなものがあるでしょうか？

温暖化、生物多様性の劣化、海洋プラスチック、核兵器、難民、人口爆発、食料問題 資源の枯渇、貧困、多発する自然災害等

（３）見方・考え方の育成

①知識を構造化する（因果関係で結び付ける）過程で養われる教科特有の見方・考え方

②教科横断的な学習による、見方・考え方の融合・洗練化

③実社会を教材にした学習による社会で役立つ見方・考え方への洗練化

（４）ESD で育てたい見方・考え方（ESD の視点）

地域に内在する課題を見いだしたり、地域のよさを再発見したりするときの目の付け所。

見方・考え方	身の回りでよさの見つけ方	課題の見つけ方
①多様性	色々なものがある方がいい	多様性に乏しいのは問題だ
②相互性	つながっている方がいい	孤立している・循環していないのは問題だ
③有限性	ものには限りがある	もったいないのは問題だ
④公平性	世代内と世代間が考えられている	不公平なのは問題だ
⑤連携性	なかまはずれをつくっていない	何かを排除しているのは問題だ
⑥責任性	協力がある・やりとげている	責任転嫁、やりっ放し、言いっ放しは問題だ

（５）ESD で育てたい価値観

①世代間の公正
②世代内の公正
③自然環境・生態系の保全の重視
④人権・文化・平和の尊重

○価値観にこだわる理由　　ソマティック・マーカー仮説

・人は日常生活で直面する多くの出来事を「直感的」に判断している。あるいは、「直感的」に多くの選択肢から限られた数の選択肢を選び出している。つまり、マーク（そのポイントで立ち止まって）して、瞬時に判断を下す。

・直感を育てるものには２つある。
生存に関わるもの（人類が１００万年間という長い年月の中で少しずつ身に付けたもの）
よりよいものを選択するときにたくさんある選択肢をしぼる（その人が経験に基づいて身に付けたもの）

・ＥＳＤで育てたい「価値観」は日常生活で判断したり、選択したり、行動したりするときに、持続可能性に関わるソマティック・マーカーのような働きをするもの

２．授業構想案の検討

（１）小学２年・生活科・生物多様性：中澤哲
２年生なりの生物多様性への関心・理解
天王寺動物園の獣医さんとの連携
遠足前に事前学習
導入：動物のフンの実物　種によって数、大きさ、形が違う
なぜ、種によって違うのだろう

仮説：食べているものによって違うのかもしれない
模型の歯を比べる
動物とエサを調べる
食物連鎖の先端を位置する肉食動物と底辺を支える植物

・生態系のバランスについての学習
・どの種も増えすぎても減りすぎてもよくない
→　動物を大切にする工夫見つけ

○自分の位置をしっかりとおさえておくといいのではないか。人間も自然の一部であるということ。
人間も含めた食物連鎖。
○糞を導入にするのは効果的だ。
○2 年生が 1 年生を教えることをテーマとすることで、モチベーションが向上する。
○子どもの動物に対する思い込みを壊し、よく観察するような指導の工夫が必要。

○「獣医さんの働き」（国語）につなげる
○増えすぎたり・減りすぎたり　から　すごしやすくなるための工夫　のつなぎ方。
　食物連鎖をふまえたゾーニングや自然環境に近い環境のつくりかた　等の工夫を見つける
○生き物を大切にする気持ちを育てる

（２）小学４年・総合・秋篠川：新宮

・秋篠川で生物調査（1 学期）
・「大和川水系の水生生物」（奈良大博物館見学）
・きれいな水が流れる吉野川源流にふれよう（生物調査）
・森と水の源流館で川の役割を見つけよう　　多様な役割があることに気づかせる
・吉野川の役割にジャンプ
・秋篠川の役割を考える（転移）
　昔は憩いの場であったが、今はゴミが散乱している　　海洋プラスチックの問題にも発展する・
　自分たちで河原をきれいにしたい　・　地域会議で提案する
○人間にとってのきれいな川と生き物にとってのきれいな川は差がある。
　秋篠川の目指す姿は、どちらにとっていい川なのか？
　河原を掃除することで、気持ちのいい場所にし、秋篠川への関心を高める。その後、水質改善の取組につなげていく。
○吉野川との比較はよい。
○森と水の源流館では目的意識を持たせることが重要。「水」をしっかり意識させること。
○こういう取り組みをすれば、生き物がもどってくる、ということはあるのか。そういう生物多様性を豊かにする行動化は可能か？
○現在の秋篠川の役割はなんだろうか？　　水と生き物をつなぐのはよい

（３）第１学年・生活科・道徳「セネガルの果てまでイッテＱ！」：小谷

目標：日本とセネガルとの相違点・共通点、いいところを見つける活動を通して、世界の国々に関心をもつ。
・アフリカ系の国々の単元がある。
・世界の遊びを知ろうの学習がある。
・ＡＬＴの先生がウガンダの方
・クラスにナイジェリアの子がいる
・友人がセネガルにいる　写真をみると思っていたのと違うことがいろ

いろある。友人か友人の婚約者（セネガル人）に教室に来てもらう
・セネガルの遊び
→　ビデオレターで日本の遊びをセネガルの子どもたちに伝える：なわとび・大なわとび
〇セネガル・ウガンダからアフリカをテーマにした方がいいのではないか
〇視点・資質能力等、ＥＳＤの学びになる。ＳＤＧｓとの関連として、４教育につながる。
〇事前・事後のアンケートをとり、意識の変化を子どもたちに伝えてあげることで、学びを実感させる。

（４）第２学年生活科「こうえんはかせになろう！」：圓山

・タイヤ公園：２～３年前にタイヤの遊具が撤去された
・３つの公園を比較する
・ゲストティーチャーとして奈良市公園緑地課
・自治体からの要望でタイヤは撤去されている。
・公園は公園緑地課の人が整備したり、地域の人が花を植えたりしているよ
・ただ公園を使うだけでなく、自分たちも何かできないかな？　公園の使い方を考え、行動化する。
〇公園によって遊びが違う　多様性
〇公園のすてき探し　　写真、
すべての看板に使い方と奈良市公園緑地課と記されている。子どもの気づきからつないでいくようにした
〇学校のブランコと違いがある　　安全のためかもしれない
学校の遊具との比較
〇公園の様々な性格・多様性にも気づくことができた。

（５）第３学年・総合「金魚すくい選手権」：島

・大和郡山市の伝統・文化としての金魚
・地域の一員として市を活性化するための行動化
・導入：金魚すくい大会
　　25 年前から。今年から世界大会になった。
　　（留学生、外国人労働者）
・外からの人の声から、大和郡山市の再発見を促す。
・金魚研究家の根来さんの子ども金魚教室、金魚マイスターによる金魚すくい体験
・課題は最近子どもの参加者が減少傾向にあること。
・よりよい大会にするために、自分たちにできることを考え行動しよう。

〇イベントを盛り上げるだけでなく、金魚の命という方面から考えさせては。
〇すくった金魚のことを考える。

○金魚の歴史と大和郡山市の歴史を重ね合わせてはどうか。金魚大会とは切り離して、金魚文化に親しむ子に。

○金魚すくいに対するバッシング（動物愛護）の事実について考える。

次回、第６回奈良ＥＳＤ連続セミナーは、９月 12 日（木）１９時～です。
学生の授業構想案の検討を行います。

第６回奈良ＥＳＤ連続セミナー　概要報告

奈良教育大学　中澤静男

◇実施日時　　2019 年 9 月 12 日（木）19 時～21 時
◇会場　　次世代教員養成センター
◇参加者　　圓山・大西・阿彌（飛鳥小学校）、樋口（平城西）、西口（東登美ヶ丘）
蔵前（真美ケ丘第一）、三木（都跡）、島（郡山西）、小谷・中澤哲（平郡北）
近藤（大阪府立環境農林水産研究所）、河野（附属小）
長谷川（教職大学院）、山之内（学部生）
森口・中澤（奈良教育大学）　　計 15 名

◇内容

１．あらためてＥＳＤ

①ＥＳＤを指導する教員は自らが持続可能な社会づくりの担い手として行動化してほしい

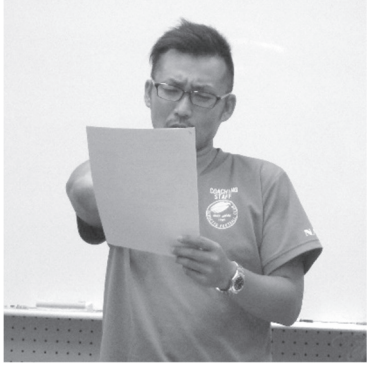
②ＥＳＤ教材開発の方法

・ピンときたものを調査（7 割うまくいけばいい）
・本当に教員が面白いと思ったものだけが子どもを揺さぶる「いい授業」になる。
・単元をデザインする（連携できる教育機関、ゲストティーチャーの選択）
・導入の工夫
・事前・事後のアンケートの実施により、子どもの変容を把握する（授業改善に）

③教科学習におけるＥＳＤ

・例えば教科書をもちいた学習をＥＳＤ的に改善するには
主な学習活動ごとに資質・能力、見方・考え方の表を作成して分析する
単元を通して育つ価値観やＳＤＧｓとの関連も考える
・やりやすい教科からチャレンジする

２．ユネスコスクール・ＥＳＤ全国実践交流会 in 大牟田参加報告（圓山）



地域ぐるみのＥＳＤ推進：地域の根差した多様な人材育成
九州地方ＥＳＤ活動支援センターが核となったＥＳＤネットワーク
企業（再春館）、ＥＳＤ大学有識者会議、島嶼地域ＥＳＤ交流会
学校との連携は少ない（参加したい子だけが参加する形態）
・わざわざネットワーク化する意義
問い合わせ先、紹介してもらえる、
・ネットワーク化した効果（実際の）
ネットワークとしての活動・協力については不明
ＩＣＴの活用が利用できるかも。
・ネットワークを形成する方法
参加者に共通の目標が必要
核になる施設：大学・行政・企業などが必要
ネットワーク化するメリットを明らかにすることが必要

３．授業構想の検討

（１）小学６年生：平和学習　奈良に帰ってきた三角定規（蔵前）

夏休みの子どもの宿題のノートから教材になるものを発見した

毎日新聞に電話・塩路さん（記者）　協力要請

塩路さん自身もこの記事は取材継続中　子どもの前で話をしてもよい、山口さんも可かも。

南埜さんは、なぜ、遺品を集めているのかも気になる。

平和学習は修学旅行先である広島が中心になりがち。身近な地域（奈良）においても戦争被害があったことを子どもに考えてもらいたい。

広陵町の隣にはどんづるぼう（地下基地）が残されている。

広島の平和資料館の展示も遺品と遺族（エピソード）にスポットをあてたものになっている。

◇エピソードとは一人ひとり、核家族の記憶だ。（一般的な記録ではなく）

◇記憶に着目することは「思い」に焦点化し、感情にうったえるものだえろう。

◇知識と感情　　これまでの平和学習は知識（なぜ、戦争が始まったのか等）に偏重。知識も大事だが、「感情」に焦点化することも。平和な社会の構築には重要だろう。

◇ねらいをしぼる - 広島への修学旅行との関連

資料館の展示から遺品に目を向けさせ、三角定規につないでいけばいいのでは。

修学旅行・資料館→三角定規→奈良

◇三角定規から「記憶」に目を向けさせ、広島・資料館で共通点を見出し　まとめは未定

広島大仏を教材化し、奈良にもどる

（２）小学６年生：たこ焼きと環境（山之内）

・大阪人は弥生時代からタコを食べていたようだ

・明石焼きからタコ焼きなった？　　明石のタコが使われていたのか？

・大阪のタコ焼きは戦後から　手っ取り早くはじめられる

・身近なたこ焼きと環境

タコの漁獲量が減少　タコは環境に左右されやすい生き物

・大阪のタコ焼きのタコはモーリタニア、モロッコからの輸入

・外国産のタコにものを「大阪名物」と言ってよいのか

・自分たちのライフスタイルがタコ・環境問題につながっていることに気づかせたい

・自分たちにできることをどのように考えていけばいいのだろう。

◇切実感をもたせるのにいいネタ（タコ焼きパーティーが授業をスタート）

◇世界的なタコの漁獲減少は、日本が原因

◇５年生の社会科で

◇セネガルでは自国で食べないのに日本のために採っている

◇函館のいかめしのイカもニュージーランド産、マス寿司のマスもフィンランド産、自分たちの食べているものをクリティカルに見直すきっかけになる。・日本の漁業の常識をひっくり返す。

◇食文化の多様性に発展できる。タコを食べる日本文化。

◇タコ焼きから見た生物多様性（大阪府立大・石井先生）　→　生物から環境学習へ

（3）3 年生社会「奈良筆」（三木）

つくる責任つかう責任に着目、そして「のこす責任」へ

・つくる側とつかう側の視点から考えることで、多面的に考える力を養うことができる

・すべて手作業　複数の動物の毛を混ぜ合わせる技法

・大量生産・大量消費：販売者側の利益と使用者側のコスト削減のみ　環境の非持続可能性

・地元産のものを使うことが、環境・経済・文化の全側面の持続可能性につながっている

・ねだんの違いはなぜ？　→　ねだんを決めるものは？

使う動物の毛の違い　職人の手間のかけかたの違い

・生産者と消費者のつながり　相互関係

・良い筆を使うのはなぜ？　薬師寺で使う筆　使う人の筆への思い

・筆で書いたものは何百年も残る　思いを残していく　－　東塔の復元

・大量生産品を使うとどういうことが起こるのか⇔良いものを適正な価格で購入する意味

◇良いものを長く使うことの意味

◇職人さんの思いに気づかせる

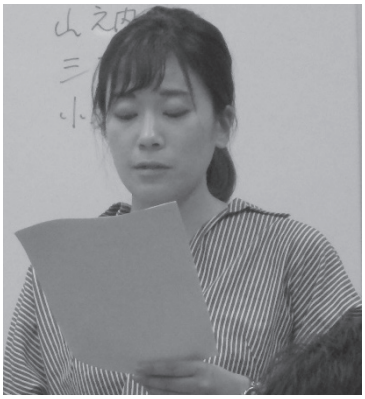
◇奈良筆の生産量の変遷からこの先のことを考えさせる

◇いい筆を使うことに意味（自分だけでなく、みんながいい筆を使う意味）

文化・環境・地元経済へのいい影響

◇システムとして考えさせる、それによって考えをひっくり返すことは重要

（4）小学 1 年生：アフリカまでイッテＱ！（小谷）



・ナイジェリアにルーツのある児童

・ＡＬＴの先生がウガンダ出身

・セネガルで小学校教師をしているしている方をゲストティーチャーに

・自分と途上国の人を良く知らずに比べると、「かわいそうな人・貧しい人」と捉えてしまう子がいるかもしれない。言葉や文化が違っても自分たちを同じ「思い」「心」をもった人たちであることを理解させたい。

◇1 年生に理解させるまでは難しいのでは　気づかせる

◇国際問題に出会ったときに～　は課題としては大きすぎるのでは

◇家の人に「こんな遊びをしたよ」でもいいのでは

◇日本の遊びを伝えようが唐突なのでは。ＡＬＴの先生が 9 月に帰られる。その後、交流

次回、第７回奈良ＥＳＤ連続セミナーは、１０月３日（木）１９時～開催します。

現在、先進地視察希望者は次の通りです。

１０．１９　江東区立八名川小学校　　島先生

１１．３０　ユネスコスクール全国大会（福山市立大学）

　　大西先生、三木先生、中澤哲先生、河野先生

１２．２０-２１　ＥＳＤ全国フォーラム（東京オリセン）　圓山先生、河野先生

また、１２月２６日・２７日のコンソーシアム実践交流会での実践発表者を募集しています。
奈良市教員の発表枠は４枠あります（大西先生・河野先生以外に）。

第７回　奈良ＥＳＤ連続セミナー　概要報告

奈良教育大学　中澤　静男

◇開催日時　　2019 年 10 月 3 日（木）19 時～22 時

◇会場　　次世代教員養成センター2 号館多目的ホール

◇参加者　　樋口（平城西小）、圓山・阿彌・大西（飛鳥小）、三木（都跡）、石田（左京小）
吉田・長友（附属中）、島（郡山西小）、今井（ソーシャルサイエンスラボ）
藤原・仲村・坂元・東尾（学生）、北村・中澤（奈良教育大学）　計 16 名

◇内容

１．レジリエンスとは

テキスト「子も親も共に育つ　家庭・地域・幼稚園」レジリエント・シティ京都市統括監　藤田裕之

・「子育ての四訓」:「乳児はしっかり肌を離すな。幼児は肌を離せ、手を離すな。少年は手を離せ、目を離すな。青年は目を離せ、心を離すな。」

・「子どもが育つ魔法の言葉」:「和気あいあいとした家庭で育つ子供は、この世がよいところだと思うようになる。」

・大人も子どもにとっての周囲の環境の一部

・子育て世代が孤立感、徒労感、不安感にさいなまれている。

・お母さんひとりが子どもを育てているという現状。

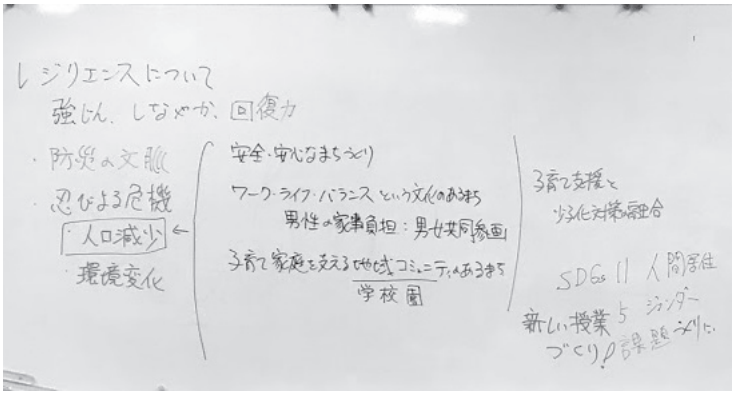
・「豊かな自然、そして適度な欠乏、そして親の愛、この３つがあれば、子どもは育つ」

・「子どもを不幸にする最も確実な方法、それは子どもが欲しがるものを何でも与えてやることだ。」

・「私たち大人が見えていない世界を、子どもたちは見ながら育っている」

・周囲の大人と一緒に楽しい思い出をつくっていく

・物質的な豊かさ、利便性が優先される社会から、新たな価値観や幸福感、心温まる感性、幸福感や慈しむ心とかを共有できる社会



・レジリエンス：しなやかに回復する性質

・危機①突発的な事件・災害・事故等への緊急対応
危機②じわじわと忍び寄る内的なストレス（人口減少、少子化、地球環境の変化）

・人口減少という危機
東京のブラックボックス化　若い人が首都圏に流れ込むが、その東京は出生率が最も低い

・人口が減少しても人々が、いきいきと安全に心豊かに健やかに育っていくような社会を作るためにどうすればよいのか。

・男性の家事負担率が高い国は出生率が改善傾向にある。
子育て支援：（男女共同参画）（企業文化としてのワーク・ライフ・バランス）と少子化対策の融合

○人口減少を解消するために：子育て支援と少子化対策の融合（保育園を増やすだけでなく）
安全安心なまちづくり
ワーク・ライフ・バランスという文化のあるまち

→　男性の家事負担　男女共同参画
子育て家庭を支える地域コミュニティのあるまち（核としての学校園）
ＳＤＧｓ１１や５に関わって、課題づくり・新しい授業づくり

２．附属中学校のＥＳＤに関して
11 月 6 日：奈良めぐり　試行錯誤しての授業づくりの実体験
生徒たちはどのようなＥＳＤの視点を獲得することができるのか

３．学生の授業構想案の検討

（1）「天皇中心の国づくり」小学 6 年社会科・仲村
・自分がやりたいことから授業づくりに取り組んだ
・既存の奈良に関する学習とは違う奈良の取り上げ方
　グループ活動、お坊さんへの聞き取り調査
　ガイドブックを作り、下学年に自分の言葉で伝える。
◇総合にした方がいい（5 年生の総合）
　1 学期に視点を持って世界遺産学習で現地見学
　2 学期に 1 年生が遠足で行って絵を描くのでそれにアドバイス（らほつの意味など）
◇当たり前を崩すためには他との比較がいる　　クリティカルシンキングの育成
◇子どもガイド：学校内でガイド検定を設定している学校もある。本当に観光客にガイド体験する
・他の学校とのガイドの交流（学校間交流で）、修学旅行に来る学校にアンケート
◇既存の学習とは違う、奈良へのアプローチのアイデア
・東大寺にこだわらず　地名、奈良公園
・つかわれている石材に着目
・面白い仏像をさがす
・建築様式に着目
・使われている色に着目
・鹿の食べる植物・食べない植物
・鹿のフンの多いところ（しかせんべいを売っていないところなのに）
・ボランティアガイドやしかせんべいやさんなどいろんな人にインタビューして、多面的理解を図る
・外国人向けのガイドブックに掲載されているおすすめのポイントを調べる
・奈良のおみやげの形、素材、値段など、生産者の意図をインタビューする

（2）「赤とんぼ」小学 5 年生音楽・藤原
・曲に込められた情景、感動を伝えたい

・この曲のよさを伝えるためには、赤とんぼが生きていける環境の保全が大切

◇赤とんぼを見に行く前と後での子どものもつイメージの変化に関心がある

◇この曲がつくられた大正時代の意味が子どもに本当に理解できるのだろうか。（この曲は、兵庫県たつの市で作られたと思うので、たつの市の環境の変化を知る手がかりにはなる。一方、日本人が共通して感じる郷愁を知る手がかりにもなる。）

◇赤とんぼの生態より赤とんぼのいる景観

◇環境が変化してしまい、子どものイメージ化はもう難しくなっている

◇さまざまな曲（秋の曲シリーズ）から環境の大切さを学ばせたい。

◇様々な曲には、それがつくられた基盤としての自然環境（夕焼けの赤とんぼの群舞）や社会環境（15 歳での嫁入り）がある。歌詞からそれらを読み取り、今と比較し、その原因を考えたり、調べたりすることは、ＥＳＤになる。この取り組み方は、「赤とんぼ」だけでなく、他の曲にも有効なアプローチだと思う。

（３）「みそしるを作ろう」小学 5 年生家庭科・東尾

・みそしる―出汁の役割

・だしの取り方の比較　出汁の形が様々あることに気づく

・煮干しの出汁　粒状出汁　出汁なし　など　　体感する

・味の違い、手軽さ、

◇だし汁だけで比較させた方がいい

◇ＥＳＤとして考えるなら、出汁とったあとの出しがらの使い道の考える

野菜くずをなるべく減らすにはを考えさせる

◇家庭による味噌汁の違いを出身地とつなげて考える

◇みそも家庭、時代によって違う。地域性がある。クリティアカル・シンキングにつなげたい

地域のみそを残していくことのメリット　地域のアイデンティティのために

◇他の国にはない出汁文化が日本にはあるということから、海に囲まれた国という食文化と自然環境の関連性に気づかせる。さらに海に囲まれた国、海洋に面している国は他にもあるので、出汁文化に類似した食文化を調べると文化の多様性を理解させる学習になる。

次回は 11 月 7 日（木）19 時～です。

第８回奈良ＥＳＤ連続セミナー　概要報告

奈良教育大学　中澤　静男

◇開催日時　2019 年 11 月 7 日（木）19 時～22 時

◇会場　　奈良教育大学次世代教員養成センター２号館多目的ホール

◇参加者　　新宮（平城小）、中澤哲・小谷（平郡北小）、阿彌・圓山（飛鳥小）、高良（筒井小）、島（郡山西小）、樋口（平城西小）今井（ソーシャル・サイエンスラボ）、三木（都跡小）、藤田（社会福祉協議会）

奥平・藤原・田中・畑下・櫓（学部生）、長谷川（教職大学院）

北村・中澤（奈良教育大学）　　計 19 名

◇内容　ＥＳＤ学習指導案の検討

（１）「地域を流れる秋篠川の役割とこれからの私たちの生き方を考える」平城小４年・総合　新宮先生

吉野川の役割の学習・森と水の源流館との連携を下敷き（モデル）に、秋篠川の役割の学習に接続する。

秋篠川の恵みを多面的に探究する。聞き取り調査を行い、時間軸による人と川の関係の変化をつかむ。

・生き物同士の役割

　生物多様性　生き物の種類や数の変化

・「思いをつなぐ川」　遊び・景観・農業・漁業

　水の恵み・大阪湾の魚、おいしいお米・野菜

・水の役割　　防災につなぎたい

　→　マイクロプラスチックの学習

　ビニール袋やペットボトルのゴミに気づかせる

　川の恩恵を守る行動化を提案しよう

○多様な視点があったのに、ゴミだけに集約するのはもったいないのでは←地域課題

○プラスチックごみ以外のごみについてはどうなるのか

　ゴミ拾いでおわりではさみしい。多様な行動化があってほしい。

　昔のプラスチックごみのない時代の生活と自分たちの生活の比較から、ライフスタイルの変革

　吉野川との比較を通して、川上村の人たちの行動化に学び、ライフスタイルの変革に

○模造紙の活用法

○川と子どもの距離を縮めるための調べ学習→地域課題→行動化

（２）「奈良公園のつながり」第４学年・総合　阿彌先生

・様々な問題を取り上げることで多面的な思考を導く

・奈良に関するアンケートからシカへの関心を高めていく

・インターネットや本で調べ、発表する。

・調べたことをカテゴライズする

・現地調査　奈良のシカに関わる人々のインタビューをする

・シカに関わる課題や思いを明らかにする

・なぜ、今も奈良公園のシカと人びとは共生できているのだろうか？
〇疑問を持たせたうえでインタビューを行う（意図をもって）
〇すでにやり終えてる学習が本時にある。
〇グループごとにインタビューで聞き取ったことを前時にまとめさせ、本時はそれを報告し合い、思いにみられる共通点・課題を明らかにしては
〇10 年後のことを考えさせる際に、宮島の人達の選択について考えることで空中戦を防ぐ。
〇インパクトのある導入が必要（鹿せんべい飛ばし大会など）

（３）「奈良の筆」第３学年社会科　三木先生

・作っている人（松谷さん）の視点から「奈良筆」をとらえさせる
・つかう側の思い　自分たちはどう思っているか（否定的）
　　お坊さん（薬師寺）から話を聞く
　　墨で書いたものは何百年も遺っていく：
　　人の思いを遺していくことができる
・奈良筆を使うことと安い筆を使うことの違いを考える
　使う側：いい字が書ける、思いを遺すことができる
　作る側：
　世の中：環境的側面　　いいものを長く使う文化のよさ
　奈良筆をつかうことの意義をＳＤＧｓから意味づけたい
〇安い方を選んだ子へのフォローがいるのでは
〇使ってみるといいかも、でも小３にわかるか
〇いいものを長く使う文化のよさを理解させたい
　高いから大事につかう、安いとすぐにゴミになりやすい
〇安い筆に関する情報が少ない
〇安い筆には書道を広げる上ではよい役割を果たしているとも言える
　両方のメリット・デメリットに気づかせたい
　安い筆は数が増えることでゴミも増えてしまう

（４）飛鳥にも『たからもの』が？　第５学年総合　阿彌先生
・地域にも宝物があることに気づかせることで、地域への愛着を育てたい。
・散策・本物との出会い。気になったものでグループを作る。現地でのインタビュー
・なぜ、遺してきたのかという人の思いにふれさせる
・「飛鳥遺産」に認定しよう　認定基準を考える
・本時：認定できるかどうか、認定する理由を考える
・認定したものの共通点を見出したい
〇認定基準は本当に必要なのか？
　世界遺産になっていなくてもいいものはある。
〇自分たちの宝物をみんなに紹介しよう
　それが他の人にはどのように思われるか
　色々な人が認定するかどうかを話し合いを続けることで、基準も明らかになっていくだろう

○どんなものを認定したいかをまず話し合う。
○これまでの町探検との違いがよくわからない
　個別具体的なものを「みんなの幸せ」の観点
　昔の人－私たち－将来の人

（５）「こん虫のかんさつ」小学校３年生理科　島先生

・既有の知識・経験の活用、見方（多様性）・考え方（相互性）、
　愛着を育てる、を中心に
・校内にこん虫を探す　どこにどんなこん虫がいるのかな　　多いところ・少ないところ
・草の多いところ　　草を食べるから　体の色と同じなので敵に見つかりにくいから
・「昆虫すごいぜ」の視聴
・教材研究：自然史博物館の見学・昆虫展
・ものすごい図鑑
・森と水の源流館の古山さんとのテレビ電話（子どもには単語が難しかったかもしれない）
・昆虫カルタつくり
・発展：アカバネオンブバッタ（外来生物）とオンブバッタの判別
　生物多様性を高めるＥＳＤ
○どのような子どもの姿を目指しているのか
○外来種との付き合い方
　外来種には人間活動が関わっている　人のせいで来たんだ
　生きものを大切にする行動化とはどういうものか

（６）「飛鳥スマイルキッズ」第６学年総合　阿彌先生
・地域ボランティが当たり前の存在になっている。一緒に活動することで、ボランティアの方への感謝の気持ちや、自分もみんなのために何かしたいという思いを育てる
・奈良町の町名調べ（いわれ、歴史）　→　歴史のある町に気づかせる　魅力に気づかせる
・観光コース（観光客の案内）、環境コース（ゴミ拾い）、スマイルコース（絵本の読み聞かせ）
・本時　ボランティの方の思いを聞き取る
・自分自身が「よさ」を知っていることが大事
○ゲストティーチャーの話は、活動前にして、振り返りを本時に持ってきて共有しては
　大変だったという思いを持てるだろうか（楽しかったで終わらないか）
○第２次と第４次の違いを明確に
○ボランティアの方々が気づいているボランティアする価値に気づくことができれば、子どもの価値観も変化し、行動も変わるのではないか。
・実際にボランティアの方と出会わせて、思いを聞くところが今年のポイント
・活動した経験がゲストティーチャーの話に共感できるのではと考えた。

第９回奈良ＥＳＤ連続セミナー　概要報告

奈良教育大学　　中澤　静男

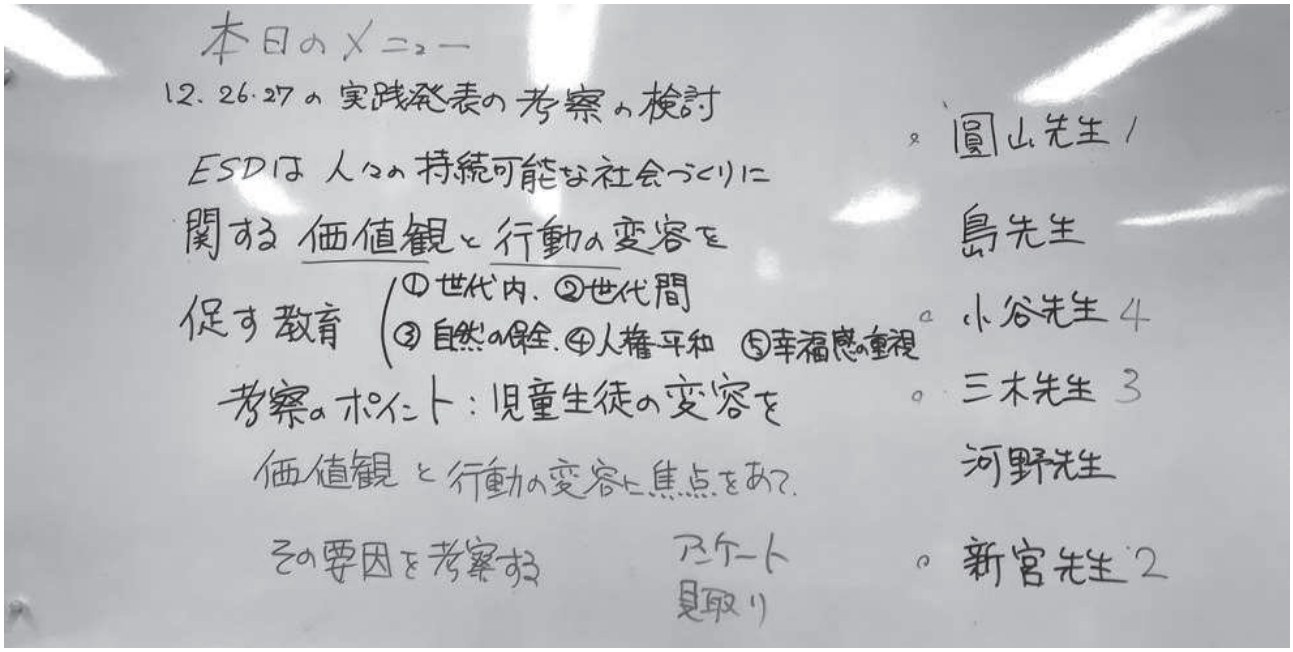
◇開催日時　　2019 年 12 月 5 日（木）19 時～22 時

◇会場　　次世代教員養成センター多目的ホール

◇参加者　　三木（都跡小）、圓山（飛鳥小）、小谷・中澤哲（平群北小）、新宮（平城小）
近藤（生物多様性センター）、中澤敦（近畿地方ＥＳＤ活動支援センター）
河野（附属小）、樋口（平城西小）
山之内・奥平・東尾・仲村・坂本（学生）
北村・中澤（奈良教育大学）　　計 16 名

◇内容

近畿ＥＳＤコンソーシアム実践交流会での発表実践の考察を検討する。



１．「こうえんはかせになろう！」小学２年生生活科：圓山先生の実践

（１）行政と地域の連携

・タイヤ公園のタイヤから自治会→公園緑地課→タイヤの撤去→自分たち→自治会→公園緑地課→新しいタイヤのつながりに気づいた。システムズシンキングの基礎が養われた。

・調べることで多様な公園に気づくことができた。

（２）対話的で深い学び

・「調べる→共有する」の繰り返しによる対話の場面の重視

・理由をつけて話す児童が増えた

（３）児童の変容

自分たちにできることを考える場面では、ゴミ拾いや草刈りなど、書いていた　→　ＳＤＧｓ11

世代内の公正

（４）見方・考え方の育成

・「木が多いからステキ」に対して「なぜ、木がおおかったらステキなのか？」と問い返すことで見方が育っていった。それを交流し

たことで、共有できた。

（５）教材化について

・身近であっても実は見えていないものを可視化した価値。

２．「秋篠川のめぐみを未来へ」小学４年生総合的な学習：新宮先生の実践

（１）秋篠川への興味の喚起

秋篠川観を比較して表す

秋篠川の水質調査と吉野川の比較

秋篠川の役割への気づき　←　源流館の展示物より吉野川の役割を知り、それを転移できた。

地域の人々、農家へのインタビュー調査を通して

ゴミの問題から切実感へ

（２）責任性の育成

ビデオ映像の活用から川ゴミへの切実感の育成

責任感のある大人との関わりから責任感を育成した

ゴミの分別など、科学的視点を記す。

（３）行動化

自分たちにできることを真剣に考え発言していた　←　大人の営みへのあこがれ

私が行動して、誰かに訴える、という声が多かった。消費者としての行動の変容を引き出すといい。

（４）コーディネーターとしての教員

多くの関係者の授業への参加　日ごろの関係性の構築

ＧＴに丸投げせず、ＧＴを編んで授業を作っていくのは教員の役割

３．「奈良筆」小学３年生社会科：三木先生の実践

「つくる側・職人さん」「売る側・地元の店」「使う側・薬師寺の方」のつながりに着目させて学習を展開した。

よいものを作りたい・使りたい　　「思い」を残していきたい

作っている人と使っている人の思いは一致している

文化を伝えるために、作る側・売る側・使う側が貢献できる

奈良筆を使うことは、経済・環境にも良い影響がある。

文化・経済・環境の持続可能性を考えさせる

行動化

奈良筆は①長く使うことができるもの、②大事につかっているもの

都跡小学校に長くあるものを教室に持ち込んで、長く使うことの価値を考えさせる

ポスターで見える可する。

消費行動を見直させる。プレゼンをさせる。

４．「せかいのはてまで」小学校１年生道徳：小谷先生の実践

セネガルの暮らしと日本の暮らしの共通点を見出すことができた。

折り紙を贈った。

地図でセネガルを見つけたり、セネガルの国旗を見つけたりするようになった。

ナイジェリアの友達への声掛けが１ランク上がった。壁を取り除くことから、多文化を尊重するよう

になった。（という行動があればいい）。

子どもの視野が広がった。世界への関心が高まったのではないか。

経済的な豊かさではなく、人間的な豊かさへの気づきがあった。（人権・文化の尊重）

言葉がなくても通じ合えることがわかる体験だった。

ＳＤＧｓの目標１０、１６に関係している。

５．「外来生物」小学３年生理科：島先生の実践

（１）批判的な考え方　　外来生物の問題はヒトによって引き起こされた

（２）多面的・総合的な考え方　外来生物の問題をグローバル化ととらえる

（３）つながりを尊重する　　生物多様性の保全を重要視する

（４）見方・考え方

多様性：外来生物に関する知識が増えた

相互性：人間によって移動させられた

責任性：自分たちにもできることがあるんじゃないか

・子どもの変容がわかりやすい（前後の比較）

・保護したいという意見はいいが、行動化は難しいのでは。

・生物多様性の保全　マイ行動宣言を参照して

６．「明治の国づくりをすすめた人々」小学校６年生社会科：河野先生の実践

明治時代の捉え直し

江戸時代の画一的な考え方が多様になった　　多様性

西洋化の推進　　日本文化の衰退

文化について考えさせる授業にしたい

・ペリーの見方：悪い印象

・15年後には海外文化を受け入れるように　　その変容の原因は何か

・日本らしくなくなってしまったなあ。日本文化に対する自信を失っていた？

・日本文化について考える機会に

いわゆる日本文化、日本らしさは江戸時代のもの

日本文化の中の時間的多様性

それでも残った日本文化　　食文化　でもそれが失われつつある

海外文化を受け入れたことでよりよい文化への展開は？

日本文化に対する子どものイメージの変化

西洋化しているが日本文化も

第10回奈良ESD連続セミナー　概要報告

奈良教育大学　北村　恭康

◇開催日時　2020年1月9日（木）19時～22時

◇会場　　奈良教育大学次世代教員養成センター多目的ホール

◇参加者　　三木（都跡小）、新宮（平城小）、高良（筒井小）、大西・阿彌（飛鳥小）、樋口（平城西小）
小谷・中澤（平群北小）、河野（付属小）、今井（ソーシャル・サイエンス・ラボ）
蔵前（河合第一小）、奥平・藤原（学生）
中澤・北村（奈良教育大）　　計15名

◇内容

1、第11回ユネスコスクール全国大会参加報告

大西（飛鳥小）、三木（都跡小）、河野（附属小）、より

2、学習指導案の相互検討

（1）植物マップを作ろう（3年理科・今井晴菜・ソーシャル・サイエンス・ラボ）

・植物の育つ環境を調べる

・班ごとに校地内の植物を調べる

・調べる内容は　⇒　根、茎、葉、花の形・それぞれの特徴・多くあった植物・少ない植物

・調べた植物を班ごとにまとめ、植物マップを作り上げる

〇アドバイス

・植物のスケッチは難しい。

・写真や図鑑を利用して進めた方が良い。

・植物を含めて生き物としてくくり、虫と植物のつながりを考えさせてはどうか。

・マップを完成させた後の方が大事である。マップを作り上げることが目的ではない。それを利用して何を考えさせるかが大切では。

・3年生の実践であるが、生活科で考えてもよいのでは。

（2）秋篠川千本桜を愛し、受け継ぎチャレンジ隊（5年総合・樋口先生・平城西小）

・秋篠川といえば、児童・保護者とも「桜」と答える。

・桜の世話をしていることは知っているが、誰かは分からない（児童・保護者とも）。

・地域のつながりが希薄である。

・桜祭りの時「秋篠川源流を愛し育てる会」の人たちが　作っているコーナーに地域の人たちはほとんど立ち寄らない。

・来春の地域の絵を描くと人の姿を描いていない子供もいる。

・学んだことの発信方法が分からない。

〇アドバイス

・「秋篠川源流を愛し育てる会」の人たちの桜を植えた思いをしっかり押さえるべきでは。

・桜を守っているボランティアの人たちと一緒に活動をする時間を取ってみては。

・子どもたちは「桜」を宝物として本当に思っているのだろうか。　⇒　自分たちの宝物としての

当事者意識を持つようにしなければいけない。

・宝物には人の思いがあることに気付いているが、それだけでよいのだろうか。

子どもの意識　⇒　自分が桜を守る活動に関わり、受け継いでいくという行動につなげなければだめだ

・学んだことを発信する相手　⇒　「秋篠川源流を愛し育てる会」のメンバーや保護者。

「秋篠川源流を愛し育てる会」　子どもたちに　高齢化のこともあり「～してほしい」という言葉が出てくると行動化の一歩になる。

保護者　子どもたちの学びから、地域のつながりの希薄に気づくかもしれない。

(3) どうぶつはかせになろう（2 年生活科・中澤先生・平群北小）

・天王寺動物園の獣医（市川氏）とのつながりがあった。

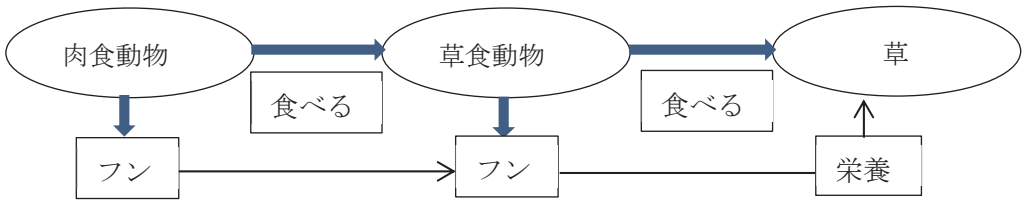
・天王寺動物園のディスカバープロクラム・貸出キットの「ウンチ標本」を利用した。

・草食動物のフンには草が混じっていること、大きさ等、動物の種類によって違うことに気付く。

・遠足で天王寺動物園に行く前、2 匹の動物を調べさせる。

良かった点は、よく似た動物を調べた子どもは違うところを見つけられた。

・フン　⇒　関心から知的な興味へと高まる教材である。



食物連鎖　生物同士のつながり

バランスの大切さ

・タニシを飼育する（子どもが一の発案、教師は亀を想定していた）　⇒　観察池の水や草を取ってきて入れる。

○アドバイス

・2 年で ESD はできるのかとあったが、指導要領には持続可能な社会の担い手の育成が記されている。

・食物連鎖は高学年での内容なので、そこまでする必要はない。

・草食動物と肉食動物の関係が分かるだけでも良いのでは。

・子どもの意見からタニシの飼育をすることは、興味がわき良かった。

・生きものに興味がわいたのではないか。

・生物の多様性に気付かせるのには良い教材であった。

(4) 筒井の秘密を伝え合おう　（5 年総合・高良先生・筒井小）

・発掘調査を行った人（山川氏）と一緒に筒井城跡のフィールドワークを行う。

・筒井順慶顕彰会の人をゲストとして招き、順慶祭りができた経緯や祭りの概要を話してもらう。

・順慶祭りに小さいときは行ったが、今は行ってない。

・出土物に触れさせてもらう。

・活動の中で、子どもたちは出土品に興味を持った。

〇アドバイス

・子どもたちに筒井城のイメージがわいたのだろうか。

・順慶祭りの概要だけではなく、祭りを立ち上げた顕彰会の人の思いをもっと探れば、子どもたちも興味を持つのでは。

・筒井順慶を調べることもよいが、少し難しいのではないだろうか。

・山崎の合戦の時、順慶の取ったといわれている態度から「洞が峠を決め込む」という逸話があるが、そのようなところから入った方が、子どもにとって調べやすいのではないか。

・「日和見」といわれているが、なぜ引き返したのかを子どもなりに考えさせると、面白いのでは。

・城跡の歴史的価値を見つけさせるのは難しいと思う（宅地、水田のため城の全体像が見えない）。

※ 次回は1月22日（水）になります。学生の指導案検討となりますので、担当の先生方は学生に持ってくるように伝えてください。

第 11 回奈良 ESD 連続セミナー　概要報告

奈良教育大学　中澤　静男

◇開催日時　　2020 年 1 月 22 日（水）19 時～21 時 30 分
◇会場　　次世代教員養成センター2 号館　多目的ホール
◇参加者　　大西・圓山（飛鳥小）、三木（都跡小）、島（郡山西小）、高良（筒井小）、
樋口（平城西小）、小谷・中澤哲（平群北小）・蔵前（真美ケ丘第 1 小）
河野（附属小）、北村・中澤（奈良教育大学）
仲村・藤原・坂元・山之内・畑下（学部生）
◇内容　　学生等の作成した ESD 学習指導案の相互検討会

1．「奈良公園観光パンフレットをつくろう」５年生総合　仲村さん
・テーマがかぶってしまった時　　発信の手段を変える
・テーマを絞った方が深まる
・奈良公園の魅力について教員側ねらいと児童が魅力に感じるところのすりあわせ
・手段が目的化していなかったのはよかった
・活動がカオスにならないか。フィールドワークをいれたり、常識を揺さぶったりするような教材があればいいのでは。
・ゲストティーチャーではなく、自分から聞きに行くのはよい。しかし、一人ひとりのねらいをはっきりさせる必要がある。
・各グループで調べたことを学級で合わせて、奈良公園を全体的に捉える
・必ず人と関わらせるといった「しかけ」があったほうがよい。
・パンフレットを配布した後、配布してもらった学年が遠足に行ってから、フィードバックをもらう。
・せっかく作ったパンフレットを実際に配布する行動がある方がいい。
・「こんなに奈良公園は面白いんだ」を共通テーマにし、それを多面的に調べて深めるという学習がいいのでは。
・表面的に知っていることを出し合っていくうちに、必要になる深い情報が見えてくるのでは。
・持続可能な観光地の在り方（SDG s の⑪）につながる
・奈良公園の魅力について話し合う場面が必要。

2．「赤とんぼ」第５学年音楽科　藤原さん
・音楽から生物多様性へ進むのは斬新だ
・赤とんぼを歌ったあと、インタビューに行く前に何かが必要。
・地域、年代によってイメージできる、できないがある。
・アナリーゼ（楽曲理解）が大切。それを知ることで歌い方が変わるという学習展開が素晴らしい。
歌い方で前後の変容が把握できるのも優れている。
・５～８の内容が重要になる。
・アンケート調査は対象に工夫する
・専門家に聞くというのもある。
・高齢者施設にいって、聞いてもらおうを目標に位置づける。

・情景が浮かぶことが大事。絵に表す。歌詞の内容から当時の暮らしを想像させる。
・絵に描いてみることで情景をイメージできているかを把握する。
・どの年代、どの場所という視点でアンケートをすればよいのでは。
・赤とんぼの思い出を聞くのもいい。
・4 番だけ現在形

3．いにしえの心に触れる「月に思う」　中学校 1 年国語科　　坂元さん

・月のイメージ　　日本－美、　海外－不吉
・季節と暦のズレを調べる
・「さやけさ」に着目：日常生活に使わない言葉（昔は使われていた）
・美しい月は満月だけではない　　月に対するイメージをひろげる
・万葉集に奈良市の月の歌が 9 首ある。グループで話し合って和歌の意味を考える
・最後の活動：100 年後まで残る歌をつくるの部分
　言葉遊びや暦とのズレなど、それまでが面白いので、オリジナル観が薄れるかもしれない。書きたい内容を深めたりする時間がある方がいい。
・責任性　和歌文化の継承

4．平和学習　奈良に帰ってきた三角定規　小学校 6 年総合的な学習の時間　蔵前先生

・子どもが持ってきた新聞記事をもとに、新聞社に電話をかけ、遺族の方も紹介してもらった。
・平和学習－原爆－爆弾被害のイメージが定着している。それだけではないはずだ。
・修学旅行前には視聴覚教材を用いた学習
・奈良にまつわる戦争被害はないかな？　　新聞記事の子ひとり
・奈良から戦争に行った人もいる　新聞記事の提示
・ゲストティーチャーに記者と遺族の方が来ていただく。三角定規の実物を持ってきてくださる。
・南埜さん　沖縄で遺品を収集している方
・三角定規は私にとって父親のようなもの
　命の大切さを伝えていただく
・遺品を通して、戦争被害について考えさせることができた　身近であったのもよかった。
・資料館の展示方法が変わった：遺品にかかわるストーリーになっている
　広島の資料館の展示物を見る見方を事前に育てることができた
・保護者の感想　広陵町内の神社にも戦争で亡くなった方の碑がある。
　広島大仏、どんづるぼうの紹介
・平和のために自分たちにできること　行動化を促すために「子ども平和宣言」
・全校に呼びかけて、平和の木をつくる。全校への発表とフィードバック　児童から記者から
・ゲストティーチャーにゴールの部分もみてもらう

・平和学習の成果を評価する方法はどのようなものがあるのか
道徳の評価と同じように「自分で考える・判断する」という態度の成長を評価するのか
文章化されたものをプロ教師の目で見て、価値づけする。
新聞の切り抜くところがかわっていく。見る目がついてきた？

5．どのような買い物がより良い消費行動か　５年生家庭科　　山之内くん

・子どもにもとめる子どもの変容
消費行動　モノと個人のやりとりだけでなく、モノを通した影響を考えることができる子ども
・ゆずりっ子　　放棄されたゆず畑を守る活動になっている
農家のコミュニティの維持につながっている
ザンビアでの医療活動支援になっている。
・これまでの消費行動とゆずりっ子に関わる消費行動の共通点・相違点を考える
・自分事の問題にするために「質問づくり」に挑戦する
質問の洗練化　　ねらいに到達できる問い
・エシカル商品について調べる活動があった方がいいのでは。
・子どもがすぐにできる SDG s への貢献は消費行動であろう。
・でも、安いのを買ってしまう　　販売者・消費者の相互関係
・大企業の営業の方の話も聞いてみたい

6．よりよい食生活を目指して　中学校２年生　家庭科　畑下さん

・今と昔の食生活の変化をみる
・昔の食生活のよさ　　地産地消　　手づくり　　生ごみは肥料に
・現代の食生活と環境問題の関連を考える　フードマイレージ、ゴミの排出量、水資源の無駄遣い
・環境に優しい調理実習
買い物段階から　　旬の食材　　地産地消
レシピは教員側が用意してくじ引きで決める
排出されたゴミの量を調べる
・環境に配慮した行動を発表する。
・よりよい食生活がテーマだが、環境面に終始しているのは大丈夫か（教科として成り立っているか？）
中学２年は基本は被服である。中２は栄養面ではなく、自給率やフードマイレージ、郷土料理について学ぶことになっている。食生活が健康面だけでなく環境面にも影響を与えていることを考えるという意識を持ってもらいたい。
・今の食生活のよい面も学ばせたい

※1 月末日までに作成した学習指導案を中澤までメール送付してください。
次回は 2 月 13 日（木）19 時スタートです。

第12回奈良ESD連続セミナー　概要報告

奈良教育大学　　中澤　静男

◇開催日時　　2020年2月13日（木）19時～21時

◇会場　　次世代教員養成センター2号館多目的ホール

◇参加者　　中澤哲（平群北小）、大西・阿彌・圓山（飛鳥小）、樋口（平城西小）、三木（都跡小）、島（郡山西小）、高良（筒井小）、岩井（鳥見小）、河野（附属小）、吉田（附属中）、後藤田（大阪成蹊大）
藤原・奥平・東尾（学生）
中村・北村・中澤（奈良教育大学）

◇内容

１．ESD学習指導案・実践報告の相互検討

（１）夏草ー「おくのほそ道」から　　中学３年生国語科：奥平さん

・今の自分の旅のイメージと当時の旅のイメージ

・内容理解　平泉場面

・おくのほそ道のエピソード

・未来へのつなぎ方

過去から現在にいたるまで変わらないものを学ぶことで、自分との未来へのつながりを意識させたい。

芭蕉の句からだけでは「感じる」までで終わる。　それをアウトプットにつなげてはどうか。

・旅に対するイメージにおける自己の変容をアウトプットする。

・自然と人の営みから無常観について学習する。

芭蕉の前に自然は残っているが人々の営みは残っていない。はかなさ。

・感じ方の比較、共有、互いに捉え方を交流するのがいい学習になる。

・世代間の公正を大事にしたい

・古典を学ぶ意義　　国語学習として、歴史学習として、時代を超えた人間の共有する思い（人を思う気持ち）→　人間理解

（２）飛鳥スマイルキッズ　小学６年生総合的な学習の時間：阿彌先生

・今までお世話になった方を笑顔にする

・国語科「町の幸福論」住民たちが主体的に町づくりに取組むこと、未来のイメージをもつコミュニティデザインが必要。

・「奈良」や「飛鳥」のために自分たちは何ができるだろうか。

観光コース　　よさを伝えよう

環境コース　　ただの道にゴミが多いことに気づいた　ポイ捨て禁止のポスターの作成

スマイルコース　幼稚園児を笑顔にする活動

・活動を通じて感じたことを交流する。喜んでもらえると達成感がある。
・よりよい飛鳥のために大事なことは何だろう
　こんな町になったらいいなあ（他人事）　→
「飛鳥」の一員として何ができるか（自分事）
・自分事になっていったところがいい
・ボランティアを自分の幸せにしている人との出会いは、子どもを変えるきっかけになる。

・地域や地域の人とつながりをもつことが大切だと言い出した。つながっていなかったことを自覚したことの裏返し。教員が想定していなかった子どもの変容だった。
・町の幸福論の２つが学習の終末にもあらわれているのが、よい。
・価値観の変革は行動から、でもよいのでは。

２．ＳＤＧｓを踏まえたＥＳＤの展開：中澤静男

奈良教育大学　中澤　静男

１．ＥＳＤとＳＤＧｓの関係

・ＥＳＤは人々の社会づくりに関する価値観と行動の変容を促す教育
・ＥＳＤはＳＤＧｓの達成に貢献する教育（日本ユネスコ国内委員会）
　→　ＥＳＤを学んだ人は、ＳＤＧｓの達成に貢献する行動をする。
　→　何を学んだのかをＳＤＧｓの観点から振り返り意義づけを行う
・ＳＤＧｓの達成された社会≒持続可能な社会
　→　持続可能な社会は、そういう人々が創っていく社会（誰かから与えられるものではなく）

問い１．あなたがされている持続可能な社会づくりに関係する行動は何ですか？

→　その行動はＳＤＧｓのどの目標と関係がありますか？

２．ＥＳＤで育てたい価値観について

（１）ユネスコのＥＳＤ国際実施計画案（2005 年）

①世代間の公正を尊重する
②世代内の公正を尊重する
③自然環境や生態系の保全を尊重する
④人権・文化を尊重する

【この価値観を育てる手立て】
Ａ：利他的行動の経験
Ｂ：自然との交歓の経験
Ｃ：人との交歓の経験

感動
実感

行動化

【ライフスタイルの基本】
すべてのヒト・コト・モノに対して
ＣＡＲＥ（気にかける・配慮する）
する暮らし
CARE for Things(CfT)

人々の幸福度が増す

持続可能な社会

（2）ソマティック・マーカーを育てる

人は日常生活で直面する多くの出来事を「直感的」に判断して行動している。あるいは、多くの選択肢から直感的に選び出している。

ソマティック・マーカーとは、スルーすることなく立ち止まらせる（気づかせる）脳内信号。

◇ソマティック・マーカーによって喚起される感情が行動化を誘発する。（無意識に）

◆ソマティック・マーカーの大半は、学習と経験により、脳内でつくられたものである。

みなさんは、持続可能な社会づくりに関わるソマティック・マーカーを身につけてください。

３．学校教育等でのＳＤＧｓを踏まえたＥＳＤの展開

（1）目標：ＥＳＤのソマティック・マーカー、価値観、視点、資質能力を育てる

（2）ＥＳＤの視点

対象となるモノ・コト・ヒトを注意深く見るときの視点がＥＳＤの視点です。

見方・考え方	身の回りでよさの見つけ方	課題の見つけ方
①多様性	色々なものがある	多様性に乏しい、画一的
②相互性	つながっている、循環している	孤立している・循環していない
③有限性	もったいないの文化がある 物を大切に長く使う文化がある	使い捨てがあたりまえになっている 大量生産・大量消費の文化がある
④公平性	世代内と世代間を考えている	不公平、今さえ、自分さえよければいい
⑤連携性	分け隔てなく、なかまづくり	なかまはずれをしている、排除している
⑥責任性	協力がある・やりとげている	責任転嫁、やりっ放し、言いっ放し

◇「多様性」「相互性」「有限性」は社会環境や自然環境を評価する視点です

「公平性」「連携性」「責任性」は人や集団の行動や意思決定を評価する視点です。

（3）ＥＳＤの資質能力

・クリティカル・シンキング（物事を問い直し、新たな方法を見いだす力）

・システムズ・シンキング（物事を総合的にとらえる力）

・長期的思考力（先のことを見通す力）

・コミュニケーション力（人の意見を聞いたり、自分の意見を発信したりする力）

・協働的問題解決力（他の人と協力して最後まで取り組む力）

（4）展開

◇指導者のやるべきこと

①ソマティック・マーカーでピンと来たものを調べる

・文献調査（インターネットだけでなく）

・現地調査（五感を使って）

・インタビュー調査（現地の人に聞いて発見）

教材研究

指導者は ESD のソマティック・マーカーに加えて、授業のネタに関するソマティック・マーカーも鍛える必要あり

※指導者が「面白い」と思ったものだけが、子どもを揺さぶる「いい授業のネタ」になる。

②子どもの関心を高める導入を工夫する。

③ゲストティーチャー・施設見学などを依頼する。

④学習者の学びを支援する（個別の評価と応答的なアドバイス）

授業（単元）に入る前にアンケートを行い、実態を把握すること

⑤事後のアンケート実施し、事前と事後の子どもの変容を把握し、授業改善につなげる。

◇問題解決型の学習と子どもの思考の流れ

①ソマティック・マーカーで「？」や「！」　気づく

②その「こと・もの・ひと」をＥＳＤの視点で検討するクリティカル・シンキング）　課題づくり

③仮説の作成と仮説にもとづく調査活動・調査結果のまとめ（システムズ・シンキング）

④調査結果を踏まえた話し合い（コミュニケーション力・長期的思考力）

⑤解決策の策定と発信・行動化（協働的問題解決力）

①～⑤の繰り返しで育つＥＳＤの価値観とそれに基づくソマティック・マーカー

４．社会教育等（単発研修）でのＳＤＧｓを踏まえたＥＳＤの展開

Ａ：利他的行動の経験、Ｂ：自然との交歓の経験、Ｃ：人との交歓の経験

ができる楽しい体験的な活動を通して、ソマティック・マーカーや価値観を育てる

→　ＥＳＤ-ＳＤＧｓ関心層を増やす　→　ＥＳＤ-ＳＤＧｓが社会のデフォルトに

→　社会の変革（持続可能な社会は誰かに作ってもらうものではなく，自分たちで創る）

５．まとめ：ＥＳＤの基本

①人を動かす力は知識よりもむしろ情動・感情にあることから、感動や実感をともなう体験的な学習活動が大切。

②地域社会の教材化は、学習の切実感を増す、体験的な学習による実感を得やすい。

③よりよい社会づくりに努力する人と出会うことで、あこがれ、当事者意識を喚起する。

④地域社会の教材化には、学校外の協力が必要となるので、日常的に信頼関係を築く。

・自分からＥＳＤに関わるイベントや活動に飛び込み、知り合いを増やす。

⑤1 時間の授業で子どもを育てる→単元で育てる→1 年間で育てる→〇年間で育てる

という発想で、カリキュラムを作成し、年度末には修正する。

⑥学ぶ仲間をつくって、刺激し合う。

・他の地域に発信する、交流する。なかまを増やすと楽しくなる。

１年間、お疲れ様でした。

3 月 25 日（水）15 時から学長室において、ＥＳＤティーチャー認定証授与式が行われます。

奈良ＥＳＤ連続セミナーにご参加いただきました皆様、ご出席くださいますよう、お願いいたします。

令和元年度
近畿 ESD コンソーシアム 春日山原始林授業づくりセミナー 開催要項

１．目的

2015 年に持続可能な開発サミットにおいて「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」が採択され、持続可能な開発目標（SDGs）が掲げられ、世界中でその達成に向けた取組が行われている。SDGs の達成に貢献する教育である ESD を推進するにあたり、教員の ESD 実践力向上は喫緊の課題である。近畿 ESD コンソーシアムでは、身近な世界遺産である春日山原始林をテーマに授業づくりセミナーを開催することで、学生及び教員の ESD 実践力を養成することを目的として、本セミナーを実施する。

２．協力　　春日山原始林を未来へつなぐ会

３．実施日時及び内容

6 月 09 日（日）10：00～16：00　春日山原始林フィールドワーク
7 月 03 日（水）18：30～20：30　SDGs の理解・ESD の学習理論
7 月 29 日（火）15：00～17：00　ESD 授業構想の検討検討
8 月 23 日（金）17：00～19：00　ESD 学習指導案の相互検討
12 月 02 日（月）18：30～20：30　実践事例の報告会

４．参加対象

奈良教育大学学生・大学院生・教職大学院生
近畿 ESD コンソーシアムの教員等
ESD ティーチャープログラム参加者

５．ESD ティーチャープログラムとの関連

・本セミナーへの学生の参加は、ポートフォリオ作成をもって ESD 演習としてカウントする。
・本セミナーへの教員等の参加は、ミニレポート作成をもってセミナー参加にカウントする。
・本セミナーで作成した ESD 学習指導案は、ESD ティーチャープログラムの認定要件である ESD 学習指導案にあてることができる。

2019 年度　第 1 回春日山原始林授業づくりセミナー　概要報告

奈良教育大学　　中澤　静男

◇開催日時　　2019 年 6 月 9 日（日）9 時～17 時

◇場所　　春日大社駐車場→春日山原始林～鶯の滝～若草山山頂

◇参加者　　吉田（附属中）、河野（附属小）、杉山（春日山原始林を未来へつなぐ会）
成瀬・久保・荊木・上田・淺木・長滝谷・山本・山本・西條（学部生）
北村・中澤（奈良教育大学）

◇内容　　春日山原始林フィールドワーク
講師：春日山原始林を未来へつなぐ会　事務局長　杉山　拓次　氏

第２回春日山原始林授業づくりセミナー　概要報告

奈良教育大学　中澤　静男

◇開催日時　　2019 年 7 月 3 日（水）18 時 30 分～20 時 30 分

◇会場　　次世代教員養成センター１号館

◇参加者　　吉田（附属中学校）、杉山（春日山原始林を未来へつなぐ会）
中澤敦（近畿地方ＥＳＤ活動支援センター）
上田・西條（学生）、北村・中澤（奈良教育大学）

◇内容

春日山原始林の教材開発

（１）ＥＳＤの学びのパターン（アクティブ・ラーニング）

課題（よさ）の発見
↓
仮説・調査
↓
調査結果にもとづく話し合い
↓
まとめ・行動化

（２）課題やよさを見出すＥＳＤの視点（見方・考え方）

自然環境・社会環境を対象　　多様性・相互性・有限性
人の営み・政策を対象　　公平性・連携性・責任性

（３）「春日山原始林の価値と保全の営み」（杉山氏）

（４）春日山原始林のよさあるいは課題を見つける

・巨樹・古木　の倒木　－　最近の巨大化した台風の影響　－　温暖化

－　ナラ枯れ

－　カシノナガキクイムシの大量発生
大木化したクヌギ・コナラに発生
（かつての薪炭林）燃料革命により伐採されなくなり、大木化）
－　キクイムシの大量発生減に（近くでは若草山山頂あたりのクヌギ・コナラでの大量発生が最初（今は、ナンキンハゼに置き換わっている）

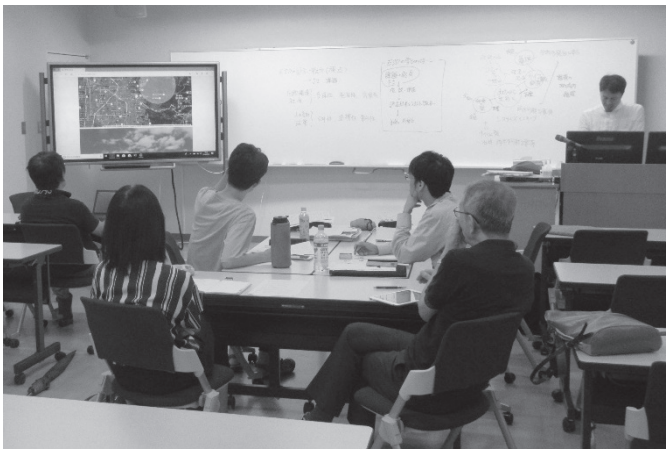
再生可能エネルギーから再生不可能エネルギーへ

・自然更新できていない　－　増えすぎたシカ　－　樹皮の食害による枯死
幼木の食害（シカの食べない樹種だけの山）
下草の食害（土が表面に－土壌流出）

○シカと森と人の共生は可能か？

人間活動の影響が及んでいない自然環境はどこにもない
春日山原始林も大きなビオトープと考えることができる←人の手が入ることで豊かになる自然
頭数制限には難色を示す委員会
柵の設置はＯＫ
シカのことだけを話し合う委員会と原始林のことだけを話し合う委員会

連携性の課題



柵を春日山原始林の数カ所に設置し、樹木の生長にあわせて移動させることで、管理地をパッチワーク状に配置する（かつての焼き畑のように）

環境と経済の課題

事業の継続には資金が必要（助成金だのみではなく）

よさ：環境と文化の接合

江戸時代に春日山周辺に築かれた鹿垣に学ぶ

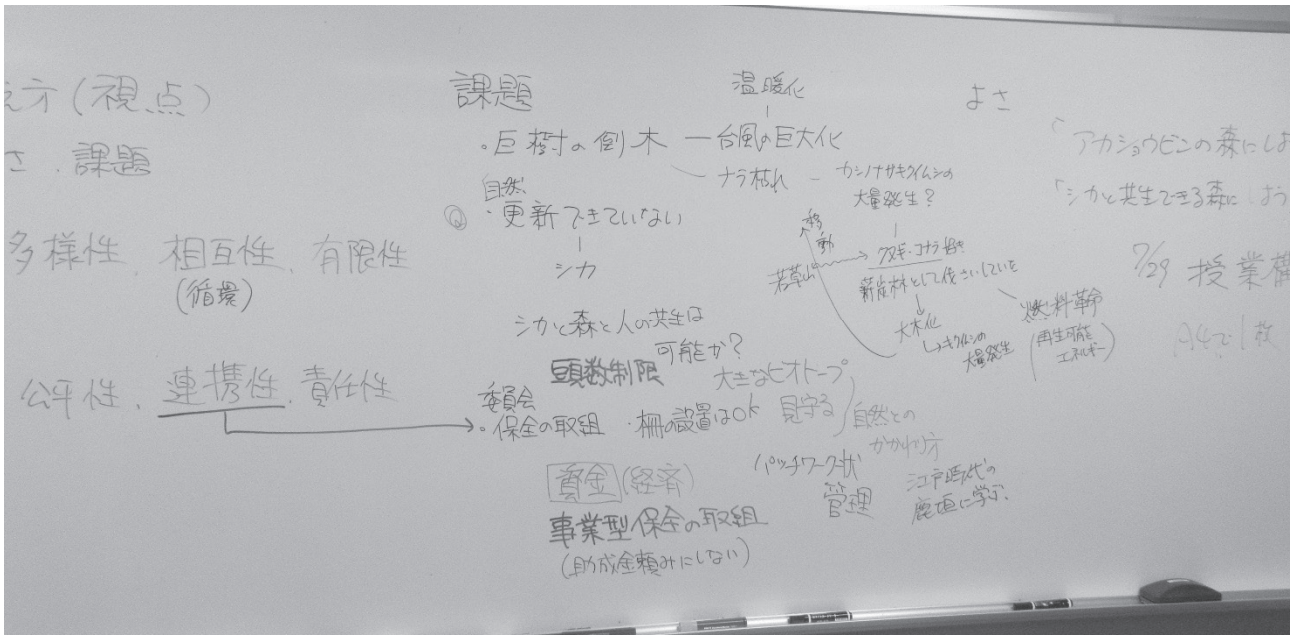
春日山原始林内の土を用いた土塀

○シンボルとなる生き物を用いた目的を明確とした取組・意欲化

小学生でも取り組める

「アカショウビンが住める森にしよう」

「シカと共生できる森にしよう」



次回、7 月 29 日は授業構想の検討会です。

Ａ４で１枚もの（目標と簡単な単元展開を記載）を作ってくる。

第三回春日山原始林授業づくりセミナー概要報告

奈良教育大学　北村　恭康

日　時　令和元年 7 月 29 日（月）15 時 00 分　～　17 時 30 分
場　所　奈良貴養育大学　次世代教員養成センター1 号館教室兼会議室
参加者　杉山拓次（春日山原始林を未来につなぐ会）、吉田寛、長友紀子（附属中学校）、
　　西城秀哉、足立繁郁（学生）、北村恭康（奈良教育大学）
内容
○　奈良教育大学附属中学校が冬の奈良めぐりの中で、奈良町、奈良公園、国際理解などのコースを設定している一つに「春日山原始林」コースがある。話し合いの中から、内容を充実、作り上げていきたい。

ねらい

・春日山原始林を形成してきた自然と、春日山原始林を内包した景観を形成してきた人間の歴史について知る。
・春日山原始林から自然の仕組み、価値を学ぶ。
・上記 2 点から、人間が自然と共に生きるとはどういうことかを考え、実行する力を育成する。

・子どもたちは、自然と人間を分離してみているので、自然の中には人間も入っているという見方を持ってもらいたい。
・まとめ方としては、時間との関係もあるが、一つは、曼荼羅的な視覚化できるものにできたらよい。もう一つは、この学びが他に応用（他地域の環境等）できるようになればよい。
・2 年生がまとめていく。
・つながりを意識することが大事。つながりで人も自然も成り立っている。を分かってもう。
・関係性についてどういうつながりがあるのかを、生物多様性という考え方では人の活動と自然のつながりでわからない所もある。絶滅危惧種をなぜ守らなければならないかということも、実は何の役に立っているかわからない。しかし、この種が減ると何らかの影響があるかもしれないから守っているという考え方もある。
・生き物が好きであれば、生き物のつながりで理解していくのが良いのでは。つながりが感じられる見方で春日山を見ていくのが良いのではないか。
・つながりを意識できるものを事前学習しておけば。
・春日山原始林がなぜ文化遺産かわからない。生徒に「なぜ」を出させて、現地に行って発見できれば良い。と同時にさらに疑問が持ち答えが出てこなくてもよいのでは。

・自然環境と鹿の関係も過去から何百年も続いてきているので、生徒たちがすぐ答えを出すことはできない。
・春日山文化的背景をしることね気付くことも大切である。
・春日山の課題はね鹿、道かな。道は、県が作った。観光に利用したり、キャンプ場を作ったりしていた。
・専門家が話をする内容も難しい。原因、結果を行ってしまうので、生徒からの質問を受けた方がよいのではないか。
・調べて答えを抱かすよりも、考えるプロセスが大切と思う。

なんでだろう ⟶ こうだ
↑
この部分が大切

・2年生が学ぶ立場であると共に1年生に伝える立場でもあり、何を伝えたいかをしっかり持つことも大切であるので難しい。
・卒業生が見ることも大切だが、考えてほしいことも述べている。
・つながりの中でバランスが崩れたり、関係性が少しづつ変化して問題が起きているいるということに気付いてくれたらよいのではないか。
・考え続ける大切さに気付いてくれたらよいのかな。
・春日山は昔から守ってるので問題がないと思っているのが問題であることに気付いてほしい。
・春日山原始林は、人が手をかけることで守ってきたものである。
・山の中に史跡が存在している。春日山は生産が目的ではなく、森があることが大切。
・想像だけど、昔は春日山は　水源地　⇒　木の伐採　⇒　水が枯れる　⇒　神の地の伐採はしない　⇒　水源地を守る　ではなかったのか。
・人が自然と関わっていくとき神という題材があり、距離感を保てたということが分かればよいのかな。
・単に森の木を伐採することはダメではなく、そこに暮らしている人の何が壊されるのか。自然を壊しているのではなく、人の文化を壊している。
・生徒たちが持っている春日原始林のイメージと違っても、どこが違うのかを考えていくことも大切なことである。

第四回春日山原始林授業づくりセミナー概要報告

奈良教育大学　北村　恭康

日　時　令和元年 8 月 23 日（金）17 時 00 分　～　19 時 15 分
場　所　奈良貴養育大学　次世代教員養成センター1 号館教室兼会議室
参加者　杉山拓次（春日山原始林を未来につなぐ会）、吉田寛（附属中学校）、
　　上田薫（学生）、北村恭康（奈良教育大学）
内容
○　奈良教育大学附属中学校が冬の奈良めぐりの中の、「春日山原始林」コースを 8 月 7 日に 2 年代表が下見を行い「感想や問い、疑問」を出し合った。それらを参考に本番に向けて、より内容を充実させていく。

ねらい

・春日山原始林を形成してきた自然と、春日山原始林を内包した景観を形成してきた人間の歴史について知る。
・春日山原始林から自然の仕組み、価値を学ぶ。
・上記 2 点から、人間が自然と共に生きるとはどういうことかを考え、実行する力を育成する。

○生徒の感想から（抜粋）

・自然の面白さ。（目でも耳でも体でも感じられるところ）　・五感を使って様々な自然を感じることができる。　・無患子を水の中に行けて振ると、泡がたったことが印象的であった。　・岩に「月・日」と書いた意味はなぜか。　・なぜ、あそこに仏様（仏頭石）がいたのか。　・鹿と植物の生存の両立はどのような取組をしているのか。　等

・今回は、なるべく生徒たちが自ら「なぜ、どうして」と疑問を持てるようにして、専門家の解説にならないようにした。
・本番では、　場所によらず（春日山全体）→ 伝えたいこと
　　場所によって（遺跡、環境）→ 伝えたいこと
　しっかり見極めて伝えていく。
・歴史と自然がどのようにつながっているのか。
　現地に行き、調べることが大切である。
・春日山原始林と神・仏のつながりに気付かない。
・生徒には、まだ資料も配っていないので、本当に素直な感想が出てきたと思う。
・春日山の歴史（興福寺、春日大社との関係）を押さえる必要があるのではないか。
・資料では、

奈良県の「春日山原始林保全計画検討委員会」の資料などが良いのでは。

・前にも言っていたが、子どもたちは、自然と人間を分離してみているので、自然の中には人間も入っているという見方を持ってもらいたい。

・まとめ方としては、見てきたもの、感じたことを色で表したり、曼荼羅的なものにできたりしたらよい。また、この学びが他に学習に応用できるようになればよい。

・つながりを意識できるものを事前学習しておけば。

第５回春日山原始林授業づくりセミナー　概要報告

奈良教育大学　　中澤　静男

◇開催日時　　2019 年 12 月 2 日（月）19 時～21 時

◇会場　　次世代教員養成センター1 号館　教室兼大会議室

◇参加者　　杉山（春日山原始林を未来へつなぐ会）、吉田・長友（附属中学校）
　　北村・中澤（奈良教育大学）

◇内容

「ひとに出会う」を通して学ぶＥＳＤの価値実現の教育実践の構想Ⅱ」（奈良教育大学附属中学校　吉田寛・市橋由彬）の検討

次世代教員養成センター紀要に提出された原稿をもとに、今年度実践された「奈良めぐり」をＥＳＤの観点から考察した。ＥＳＤは生徒の持続可能な社会づくりに関する価値観と行動の変容を促す教育であることから、生徒の変容を把握し、価値観や行動の変容をもたらした要因や、変容が見られなかった時のその原因を明らかにすることで、授業実践の洗練化を図ることをねらいとして相互に検討した。

本稿は２つの部分から構成されている。１つは「「ひととの出会い」を通した教師の変容」の中の「ミツバチから生き方を考える」として市橋教諭が記述した部分であり、もう一つは吉田教諭による「春日山原始林」である。

（１）「ミツバチから生き方を考える」に関する考察

当初、ＳＤＧｓに関する理解のために、ミツバチと人間の関係を通して、奈良の自然や生態系について学び、そこでの学びから日常生活を見直すことが目的であった。ＳＤＧｓの理解促進が学びの主目的であり、ミツバチはその材料（教材）という位置づけであった。ところが、吉川氏という自然農法や養蜂の実践家と出会ったことで、吉川氏の生き方から学ぶという「こと・もの」からの学びから「人」からの学びに大きく方向転換をした。ＥＳＤでは価値観や行動の変容を重視しているため、「こと・もの」から「～という状況なので○○しよう」ではなく、人の生き方から学ぶ方が、目的にかなっていると言えよう。

また、市橋教諭は吉川氏との出会いにより、「教師自身の変容」があり「「ひとに出会う」価値を教師自身が見出だした」と述べ、「生徒の変容を促すには、まず教師の変容が必要であることが再確認された」と記している。ここから、価値観や行動の変容を促すには、合理的・科学的な「知識」だけではなく、「感性」「感動」が必要であるという提案を読み取ることができるだろう。

（２）「春日山原始林」に関する考察

吉田氏の春日山原始林の実践から明らかになったことは、自然環境を教材とした場合、課題については生徒に伝えやすいことである。春日山原始林においても、ナラ枯れやナンキンハゼ、増えすぎたシカによる食害などの課題は伝えやすかった。一方、自然環境の「よさ」「価値」を伝えることの難しさが改めて浮き彫りにされた。自然環境のよさに気づかせるために、杉山氏はネイチャーゲームをしたり、目を閉じて森の声を聞かせたり、風を体感させたりすることで、自然環境に着目させ、意識さ

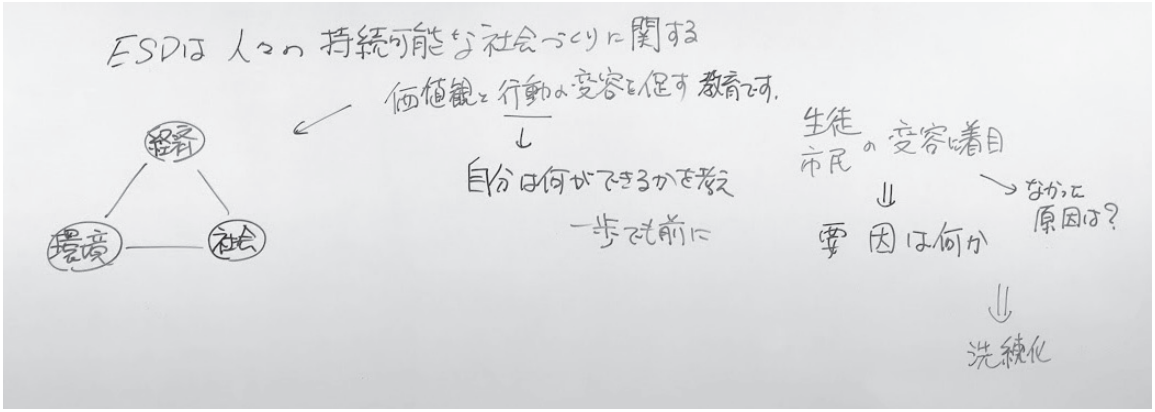
せる活動を取り入れている。その活動を通して自然環境に関する気づきを得る生徒もいれば、そうでない生徒もいる。「自分は春日山原始林が好きでこの仕事をしているのだが、この「好き」という感覚をすべての生徒と共有するのは難しい」とおっしゃっている。

課題はテキスト化されている。またナンキンハゼやシカの食害などは具体的に見ることができる。しかし、「よさ」や「価値」は、感覚的なものであるため、伝えることが難しい。感覚的な「よさ」や「価値」を子どもに伝えるには２つあるのではないか。杉山氏は春日山原始林でガイドをされる際に、思いもかけなかったものを見つけると、その都度ツアー参加者に紹介しているが、杉山氏の生き物を見つけた「喜び」「驚き」が、ツアー参加者に伝染し共感すると言われる。これは、市橋教諭の考察の「生徒の変容を促すには、まず教師の変容」と関連する。指導者が感動したことが子どもに伝わるということである。もう一つは、フィールドワークしながら色々と話したり見せたりすることで、子どもの「あこがれ」が喚起され、「よさ」や「価値」への共感を生むのではないだろうか。見過ごしがちな生き物をめざとく見つけて喜んだり、自然環境に関わる話題を色々と提供するためには、下見をしたり文献を調査したりといった事前研修が必要である。春日山原始林について「知っている」ことが想定を持たせ、想定通りの生き物を発見できたり、想定以上の生き物が発見できたりという「感動」が子どもに伝わり、あこがれを生むことで、子どもの春日山原始林に対する関心が高まるのである。

（３）まとめ

今回のセミナーでは、ＥＳＤの目的である「持続可能な社会づくりに関する価値観と行動の変容」を促すために必要なものについて、参加者のこれまでの経験も踏まえた話し合いがもたれた。知識だけでは人の行動は変わらない。知識と感動（感性の揺さぶり）があって、人は自らの行動を変えていく。あるいはＥＳＤが目指す変容を促すためには、ＥＳＤが模範となるような生き方をされている方と子どもを出会わせるのが効果的ではないかという意見にまとまってきた。

一方、行動の変容をみる時期については、教育の成果はすぐにでるものと、ずっと先になって出るものがあるという共通認識のもと、すぐに結果を求めようとする昨今の教育情勢に流されることなく、長期的視野で子どもの変容を促す教育をする必要があるだろうと話し合った。



令和元年度 近畿ＥＳＤコンソーシアム・森と水の源流館
「水の恵み」に着目した授業づくりセミナー　開催要項

１．目的

ＥＳＤを指導できる教員の資質・能力の向上には、継続的な研修を実施する必要がある。近畿ＥＳＤコンソーシアム活動の一環として、川上村森と水の源流館と「水の恵み」に着目した授業づくりセミナーに協働的に取り組む。森と水源流館スタッフによる、自然環境保全の取組や水生生物などに関する情報提供、大学教員等による単元デザイン作成に関する助言のもと、現職教員が指導案を作成し、授業実践を行うことで、教員としての資質・能力の向上を目的とする。

２．主催

近畿ＥＳＤコンソーシアム、森と水の源流館

３．会場　　森と水の源流館・奈良教育大学等

４．開催日時と研修内容

第１回　令和元年７月 07 日（日）　ESD・SDG s について・川上村からの情報提供
第２回　令和元年７月 29 日（月）　授業構想案の共有
第３回　令和元年８月 06 日（火）　昆虫採集に関する研修・ESD 学習指導案の検討
第４回　令和元年８月 31 日（土）　ＥＳＤ学習指導案の相互検討
第５回　令和２年１月 05 日（日）　授業実践の交流
※　開催時間はいずれの回も 13 時～16 時

５．参加者

近畿ＥＳＤコンソーシアム構成団体に所属する教員等
紀ノ川流域の学校教員等
奈良教育大学の大学生・大学院生・教職大学院生
森と水の源流館　事務局長　尾上忠大氏及びスタッフ
奈良教育大学　准教授　中澤静男・北村恭康

６．ESD ティーチャープログラムとの関連

・本セミナーへの学生の参加は、ポートフォリオ作成をもって ESD 演習としてカウントする。
・本セミナーへの教員等の参加は、ミニレポート作成をもってセミナー参加にカウントする。
・本セミナーで作成した ESD 学習指導案は、ESD ティーチャープログラムの認定要件である ESD 学習指導案にあてることができる。

2019 年 7 月 7 日（日）

第１回　近畿ＥＳＤコンソーシアム・森と水の源流館授業づくりセミナー概要報告

奈良教育大学　中澤　静男

◇開催日時　　2019 年 7 月 7 日（日）13 時～15 時
◇会場　　森と水の源流館
◇参加者　　赤松、島、河野、新宮、中澤敦、尾上、北村、中澤　　８名
◇内容

本授業づくりセミナーの概要

第 1 回：7 月 07 日　　ESD・SDG s の理解促進に関する講義
第 2 回：7 月 29 日　　ESD の学習理論と川上村宣言等、具体的な情報の提供（尾上氏）
第 3 回：8 月 06 日　　授業構想の検討（授業構想を持参すること）
第 4 回：8 月 31 日　　ESD 学習指導案の検討（学習指導案を持参すること）
第 5 回：1 月 05 日　　ESD 授業実践報告会

テーマ「ＥＳＤ・ＳＤＧｓの理解促進」

１．ＥＳＤについて

Education for Sustainable Development

目的：持続可能な社会づくりに参加・参画できる人材の育成

１９９２年　リオデジャネイロサミット
ESD の重要性指摘

２００２年　ヨハネスブルグサミット　　国連 ESD の 10 年提案
２００５年～２０１４年　　国連 ESD の 10 年

（1）Education の部分について

ESD は現代、先進国で行われている教育の変革を目指している。

①　現代の日本の学校教育

※学校には２つの役割がある。　個人的見地　・　社会的見地

「たんに事実や真理を吸収するということなら、これはもっぱら個人的なことがらであるから、きわめて自然に利己主義に陥る傾向がある。たんなる知識の習得にはなんら明白な社会的動機もないし、それが成功したところでなんら明瞭な社会的利得もない。」「学校の課業がたんに学科を学ぶことにある場合には、互いに助け合うということは、協力と結合の最も自然な形態であるどころか、隣席の者をその当然の義務から免れさせる内密の努力となるのである。」（『学校と社会』デューイ著、宮原誠一訳、1957 年、岩波書店、26 頁）

近代明治以降の立身出世主義・子どもの選別装置としての学校

※学校教育の目的：教育基本法第 1 条　　よき　　国民　　を育てる

②　現代の先進国の学校教育

「現在教えられているような基礎教育では、より持続可能な社会は構築されないであろう。自分

たちのライフスタイルを支えるために大量の資源とエネルギーを消費し、最大のエコロジカル・フットプリントを残しているのは、教育が提供されている国々である」（「ＤＥＳＤ国際実施計画（ＤＥＳＤ－ⅡＳ）」、ユネスコ、2005 年）

③　今、変わらなければならない教育

現在、多くの地球的諸課題があり、それが解決できないと人類社会の存続が危うい。

「われわれは、今からでも軌道修正は可能だと考えている。そうすることで、地球のすべての人たちが望ましく、十分に足りている持続可能な未来を生きられると信じている。しかし同時に、根本的な修正をすぐに行わなければ、私たちが生きている間に、何らかの崩壊が起こるだろうとも思っている」（『成長の限界　人類の選択』ドネラ・Ｈ・メドウズ、デニス・Ｌ・メドウズ、ヨルゲン・ランダース、枝廣淳子訳、ダイヤモンド社（2005）、p.5）

地球的諸課題は、一国だけでは解決できない問題である。

→　　よき　　市民　　を育てる教育

→　　社会的背景の異なる多様な人々と協働的に問題解決に取り組むことができる人材の育成

④　次期学習指導要領と ESD

前文「持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」

（２）Sustainable Development　の部分

ESD は社会変革を目指しています。

※　ＥＳＤ＝（　開発　）教育＋（　環境　）教育＋（　人権・平和　　）教育

※　ESD はこのままだと人類社会が持続できそうにないという認識から出発しています。

人類社会の持続を阻む問題を列挙してください。（10 個以上に挑戦）

気候変動、ジェンダー、格差社会、自然災害、生物多様性の劣化、貧困、飢餓、少子高齢化、エネルギー等資源の枯渇、核兵器、水不足、健康、テロ・紛争、砂漠化、海洋プラスチック、ゴミ、など

２．SDG s について

２０１５年　持続可能な開発サミット

「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための２０３０アジェンダ」

Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）

２０３０年までに達成する１７の目標と１６９のターゲット

（１）ＭＤＧｓ

２０００年　ミレニアム開発目標

２０１５年までに達成する８つの目標（資料参照）

途上国の生活改善が大きな目標（人間開発・社会開発）

（２）ＭＤＧｓの成果

①極度の貧困と飢餓の撲滅
　1990 年の貧困人口約 17 億人　→2015 年・8 億人
②普遍的初等教育の達成
　2000 年の就学率・83%　→　2015 年・91%
③ジェンダーの平等の推進と女性の地位向上
　1990 年の女子の就学率は男子の 74%
　→2015 年女子の方が男子を上回る
④乳幼児の死亡率の削減
　5 歳未満の子どもの死亡率は１／３に
⑤妊産婦の健康の改善
　妊産婦の死亡率を１／４にが目標　→　１／２
⑥ＨＩＶ／エイズ、マラリア、その他疾病の蔓延の防止
　ほぼ目標を達成
⑦環境の持続可能性の確保　　成果が上がっていない

（３）残された課題
・約 8 億人が極度の貧困状態
・経済格差の拡大
・男女間の不平等（特に意思決定に関して）
・地球温暖化、生物多様性の保全
・戦争・紛争により毎日 42000 人が難民に

（４）ＳＤＧｓの各目標に関して
①ＳＤＧｓの 17 のゴールでＭＤＧｓを引き継いだゴール（６つ）
　１・２・３・４・５・６
②環境問題に特化したゴール（４つ）
　７・１３・１４・１５
③経済開発に関するゴール（３つ）
　８・９・１２
④社会づくりに関するゴール（４つ）
　１０・１１・１６・１７

（５）ＳＤＧｓとＥＳＤの関係性
持続可能な社会の創り方
　①持続可能なシステムの構築（政策・しくみ）
　②持続可能性に寄与する技術開発
　③人々の意識改革とライフスタイルの変革

①・②で目指す目標を示しているのが SDG s
③は教育が果たす役割なので ESD が担う部分
　文部科学省：ESD は SDG s の達成に貢献する教育

５．持続可能な地域とは

①地域資源(自然資源・物的資源・人的資源)の潜在的価値を見いだし、再生能力を損なわない範囲で活用し続けていること【残して活かす】

※自立している自治体(資源・エネルギーを自給している自治体)が持続可能な自治体である

②モノ、サービス、人材が自前で調達され、循環し、有機的に結合しており、それが地域の新たな価値を生み出しつづけていること【つないで生み出す】

※地域内循環によって経済の持続可能性に寄与する

③地域資源の価値やそれを活かしてつなぐことの重要性を認識し、地域内外の人との信頼関係や交流、ネットワークを維持し続けていること【学んで助け合う】

※人のつながりや信頼感（ソーシャルキャピタル＝社会関係資本）が充実している地域は持続する

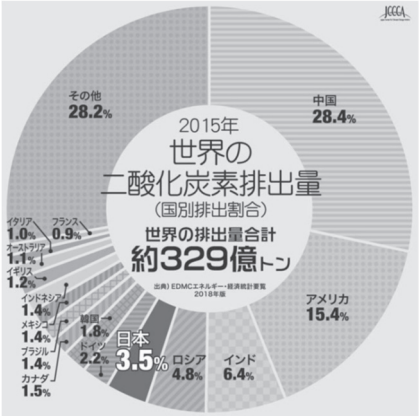
※つながりや信頼感を維持するためには住民の地域への愛着や社会的活動への参加が不可欠であり、そのためには、学びの場や機会が存在することが重要である

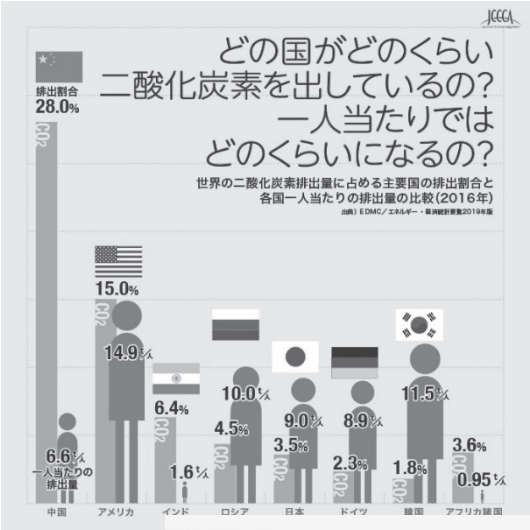
６．持続不可能な世界の状況

（１）温暖化

熱塩循環について

（２）ＣＯ２排出量の推移





第２回森と水の源流館授業づくりセミナー概要報告

奈良教育大学　中澤　静男

◇開催日時　　2019 年 7 月 29 日（月）13 時～16 時

◇会場　　森と水の源流館

◇参加者　　尾上・木村・小橋・上西・成瀬（源流館）、奥田（地域起こし協力隊）、
中澤敦（近畿地方ＥＳＤ活動支援センター）、島（郡山西小）、川崎（川上小）
中澤（奈良教育大学）　計 10 名

◇内容

１.「ＳＤＧｓ　ＥＳＤの推進における博物館等の活用例」尾上氏（龍谷大学における免許状更新講習）

（１）ユニバーサルデザイン

海洋公園（大泉緑地）での手すりの設置に関して　110 センチの手すり
車いす利用者には公園に行くことにおいてはユニバーサルデザインだが、景色が見れない。
車いすの目の高さを空間にする（手すりを高く）。
高さのある花壇
アメリカの軍事用車いすなら、水辺まで近寄ることができる
久宝寺緑地：健康遊具にボランティアの配置・ボランティアの養成
浜寺公園でボランティアの養成に取り組む
公園のデザイン　→　人材の育成へ
・現場の人（当事者）の声を聞くことの大切さに気付く
・自分がやってきたことをどのような額縁に入れて意義づけるか

（２）水源地の村づくり×森と水の源流館の存在意義×ＥＳＤの視点で語る　→　地域資源の教材化

「持続可能な社会をつくる」それを担う人材の育成というテーマに、森と水の源流館ではどうかかわるか？

1996 年　川上宣言
2000 年　水源地の森・原生林 380ｈａの買収　その後 3 年間にわたって 740ｈａ
2012 年　森を公有化　水源守る（中国による水源地の買収という傾向が背景に）
かわかみらいふ　　移動販売車、ガソリンスタンドの経営、
吉野かわかみ社中　林業の六次産業化　500 年後の社会を見据えて
やまいき市　　産品の販売
ユネスコエコパーク、日本遺産、林業遺産
平成 26 年度から 24 世帯が移住

源流館のテーマの一つ、「流域連携」（吉野川・紀の川）「紀の川じるし」・おかげ米運動
「源流学」（源流の人や自然に学ぶ）
森林環境教育の支援活動（木を伐ることはいいこと？悪いこと？）

産業と技術の紹介等
吉野川分水の役割の発信（いい水がつくるおいしいお米）
「水質」で語れば「悪者さがし」「恵み」で語れば「感謝の交流」（村民と下流の人々の出会いの場の創設）
紀の川じるしでの奈良と和歌山の先生の合同研修会の開催
森と水の源流館授業づくりセミナー

川上村の取組・地域資源にＥＳＤの額縁をつけることで、教員との距離感が縮まった。
地域の資源（自然・人）と先生をつなぐ
地域への愛着・地域を大切にする心が子どもにも巻き込まれた大人にも育つ。
（持続可能な自治体の定義）
地域資源を用いたＥＳＤをつくることで資質能力を育成する（ここでの資質能力はＯＥＣＤのキーコンピテンシーにもつながる、つまり世界標準の学力の育成）。

２．授業構想案の検討
（１）小学３年生・理科「こん虫のかんさつ」：島先生（郡山西小）

①校庭でのこん虫の観察・古山さんによる観察カード作成指導
②こん虫のすみかへの着目・校庭の地図上の観察カードを貼る
③こん虫の食べ物への着目　→　生き物どうしのつながりへ
「生き物の関係を図にあらわす」
○最近の子ども達には昆虫が苦手な子が多くなっている。苦手なのは、親の影響ではないか。
○子どものこん虫への関心が低くなってきている。夏休みの宿題でもこん虫標本つくりに取り組む子が少ない。

○こん虫に対するハードルを下げる必要があるだろう。
・先生自身が、教室で楽しそうにこん虫を育てる。
・テレビ映像などを使って、こん虫への関心を高める。
・標本の活用
（２）小学５年生・総合：川崎先生（川上小）
①今年は伊勢湾台風から60年目にあたる。当時の被災について、語ることが出来る人が少なくなってきている。

②被災状況について、当時の写真資料を活用する。

③大滝ダム・学べる防災ステーションを活用する。豪雨体験コーナーでは、伊勢湾台風クラスの大雨を体験できる。その際、児童は雨合羽を着用するが、教員は傘で大雨を防いでみる。きっと傘はこわれる。そのことで、大雨の威力を実感できる。

④かみせタイムにおいて、防災・減災について村民に伝えたい。

３．海洋プラスチックに関して：中澤敦子（近畿地方ＥＳＤ活動支援センター）

・海に生きる魚よりも海洋プラスチックごみの量の方が多くなるかもしれない。
・プラスチックは、安定的であるため、いつまでもなくならない。
・海洋プラスチックが、紫外線や波によって破壊され、細かくなる。マイクロプラスチック化
・1960 年～1970 年に、「夢の油」として開発されたＰＣＢ。
安定的でなくならない。燃やすとダイオキシンを発生する。
カネミ油症事件：ダイオキシン類による大規模な健康被害が発生。
ＰＣＢの製造が世界的に禁止されるが、すでに 120 万トンが製造されていた。
・ＰＣＢは、親油性があり、マイクロプラスチックに吸着される傾向がある。
・ＰＣＢを含んだマイクロプラスチックを海洋生物が摂取する。生物濃縮によって、人間がＰＣＢを摂取する可能性もある。
・マイクロプラスチックの発生源は、我々の生活である。プラスチックの使用方法のほとんどは、包装であり、我々が求めているものではないが、使用してしまっている。
・プラスチック製品の使用量を減らすこと（リデュース）。
・きちんと分別し、リユース、リサイクルを徹底すること。
・現在は、海外に輸出している。輸出されたプラスチックにごみが混入しており、現地ではそれを分別せずに廃棄している。それが河川を通じて、海に流れ込んでいる。
・国内で発生したごみは、国内で処理するのが当たり前であろう。

第３回森と水の源流館授業づくりセミナー　概要報告

奈良教育大学　中澤　静男

◇開催日時　　2019 年 8 月 6 日（火）　10 時 30 分～12 時　昆虫採集研修
　　13 時～15 時　授業づくりセミナー

◇会場　　昆虫採集研修：蜻蛉の滝周辺
　　授業づくりセミナー：楽屋室

◇参加者　　新宮・乾・恒岡（平城小学校）、高垣（愛媛大学）、中谷（あやの台小）、川崎（川上小）
　　尾上・古山・成瀬・上西・木村（森と水の源流館）、奥田（地域おこし協力隊）
　　北村・中澤（奈良教育大学）、雲雀（奈良教育大学学生）　計 15 人

◇内容

１．昆虫採集の体験

（１）昆虫採集の基本

①昆虫のクセをつかむ

昆虫の種は、それぞれ決まった行動をとる。採集する種のクセにあわせて採集方法を選択する。

②網の振り方

捕虫網は、横に振る。縦方向よりも横方向の方が網の可動範囲が大きくなる。

③昆虫の見つけ方

昆虫は、捕食されないように工夫している。基本的には、見つかりにくい場所に静止する習性がある。植物の葉や樹皮に似せた体色や模様をしている種がほとんど。自然の風景の中から、違和感を見つけ出すことが採集のポイントとなる。

（２）採集方法

①ルッキング：目視・見つけ獲り　　いそうな場所で違和感を見つける

②スイーピング：掃き掃除するように、網で植物をなでる
　　なんでも捕れるが、危険な生き物が網に入る場合もある。

③ビーティング：木をたたいたり、蹴ったりして、振動を与え驚かして捕る

④トラップ：わなをしかける

落とし穴トラップ、エサ穴トラップ（よっちゃんイカ・カルピス・糞など）、粘着絆トラップ、誘因トラップ、ライトトラップ　など

２．授業案・授業構想の検討

（１）地域を流れる秋篠川の役割をこれからの私たちの生き方を考える：平城小学校

・秋篠川の役割に気づき、自分にできることを考え行動する

・秋篠川の現状を客観的に把握する（生き物調査を通して）

奈良大学博物館「大和川水系の水生生物」を見学

・きれいな川にいる生きものってどんな生き物

森と水の源流館を見に行こう（遠足）

・秋篠川の役割：稲作、遊び場、暑さを抑える。

・現状はあまり整備されていない。

・割れた窓理論　汚れているとますます汚れてしまう⇔美しく保たれていると愛着がわく

雑草を手入れするだけでいいのでは。（成果が見える）

ゴミを捨てられない場所に。

川に降りることができる場所が雑草で降りることができない

・ゴミを拾う　弁当ガラが捨てられている。拾うことが、海ゴミを減らすことになるという、地球的課題への貢献という意味付けができる。

・活動することで、川への関心が高まる。活動して関心を高めたうえで、行政への提案につながる。

・三面貼り　→　親水性がさがる・関心が低くなる

ただし、川に改変を加えることはできない。多自然的護岸づくり

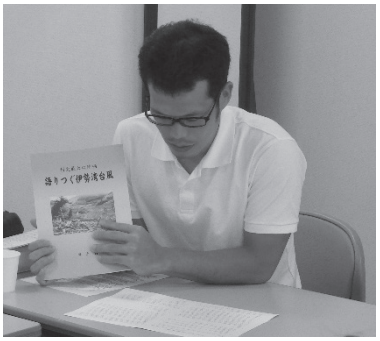
・アドプト制度で管理

・川上村でも年に１回のクリーンキャンペーンで掃除をしている。しかし、それだけできれいな状態が維持できるわけではなく、村の方々が自主的に草刈りなどをしている。その行動に学ばせる。

・川は親しめるところだという感覚。自分たちが楽しむところは自分たちできれいに保つ。

・平城校区で景観や環境保全に取り組んでいる方と出会わせて、一緒に活動する。

（２）自分たちの川上村は自分たちで守る：川崎（川上小）



・自分たちの地域は自分たちで守るという意識を持たせたい

・伊勢湾台風から 60 周年　村史最大の惨禍

・川上村の被災状況を語ることができる人も少なくなっているという現状。

・昨年度：水のつながりが人のつながりをつくることを学んだ

・今年度：川上村の歴史的な出来事についての学習意欲が高い

・伊勢湾台風の被害についての聞き取り調査

導入は伊勢湾台風被害の写真

（「語りつぐ伊勢湾台風」川上村）

・復興への取組についても
・南海トラフ地震や温暖化による異常気象、豪雨災害への備え→村民の防災への意識を高める
・現状として、村民の防災への意識はどうなのか。
・学べる防災ステーションでの豪雨体験の位置づけは6時間目でいいか。
伊勢湾台風の豪雨を体験できる。アーカイブがあり、語っている場面もある。子どもの知っている人もあるだろうから、実際に聞き取りにいく。（導入として位置付ける）
・自分ができること　－　すぐに避難できる・避難場所・経路の確認
・各家庭での防災の備えの状況を調査。
・避難後の行動について考える。避難所での自分たちの役割を考えさせる。（自分にできること）
・消防団、役場の方への聞き取り調査
・災害文化・災害対策についての地元の教訓　についての聞き取りをしてもよいのでは。

（3）われら紀の川じるしの応援団：中谷（あやの台小）

子ども像
・大きな心で、自他を尊重し、思いやる子ども
・すすんで挑戦し、それを応援し合う子ども
・支えの中で生きていることに気づき、感謝の念を行動化する子ども
学校の柱
「人権・福祉・環境」
メインテーマ「生きるってどういうこと？」
・当たり前に使っている水について　努力と思いに気づく
・水について調べ、森を守る。「木を使ってくれてありがとう」　水新聞の作成
・森の保全の重要性　高野山で間伐体験。樹木医さんからの話。
・水も森も人の思いでつながっている
・ＥＳＤとしての価値　「当たり前」を問い直すことの習慣化：全体から考え直す
・子どもの変容　人のために何かできている・参加する態度が積極的に　←　人との出会い
人の生き方として仕事がある、という伝え方をした。
・歌で伝えるという表現方法
・応援すること　仕事について知り伝えること　キャリア教育（正しい勤労観）の育成
・どういう人物との出会いが前向きに学習に取り組む態度や正しい勤労観を育成するのか、について考察すると良いのでは。

次回（第4回）は8月31日（土）13時開催
内容は、学習指導案の検討です。よろしくお願いします。

第４回森と水の源流館授業づくりセミナー　概要報告

奈良教育大学　中澤　静男

◇開催日時　　2019 年 8 月 31 日（土）13 時～17 時

◇会場　　森と水の源流館

◇参加者　　川崎（川上小）、辻本・中谷（あやの台小）、新宮（平城小）、島（郡山西小）
　　尾上・木村・上西（源流館）、中澤（きんき環境館）、北村・中澤（奈良教育大学）

◇内容

ＥＳＤ学習指導案の検討

（１）4 年生総合：地域を流れ秋篠川の役割とこれからの私たちの生き方を考える：平城小・新宮

〇既習の秋篠川と比較する形で吉野川を見て、聞いて、ふれて、感じる

　吉野川を見る視点：「役割」で見学する。

〇レクリエーション的役割にも気づかせる

〇吉野川の役割・展示物から学ぶことができるか。

　子どもが見つけてきた個別の役割を

「運ぶ」：川上村劇場ムービー

「農業」：写真展示

「海の恵み」：シアター

「生き物のすみか」：シアター

「遊び・レクリエーション」：午前中の探検・弁当開き

「人のつながり」：特別展示

「伝統文化」：千本づき、ポスター、遺跡展示

「飲み水」：おいしい水を飲む体験　　などで整理する。

・時間制限があるので、「テーマ」を与えてグループごとに館内を探索させる方がいいかもしれない。

・グループにテーマを複数あたえる　あとで関連付けを考える事前学習にもなる。

・川の多様な役割に気づく子どもを育てる。秋篠川に対する関心を高め、かつての秋篠川の様子について聞き取り調査をする。

・水をきれいにすると生物多様性は違う（汚い川に住む生き物も存在意義がある）。

・遊べる川にしようという行動化を目的に位置付ける

・往路のバスの車内での事前学習をビデオで行う（吉野川分水ビデオなど）

・時間を区切って、グループごとにスタッフにインタビューする時間を設定する。

・午前中の観察時間にも同じテーマを持たせておく

（２）ＥＳＤで育った力を深める特別活動でのｐ４ｃ実践：あやの台小４年、中谷・辻本

・philosophy for children：子どもの哲学
・「大きな木」を使って「幸せって何だろう」
・対話的な学習で思考を深める
・振り返りシートに１時間の感想を書く
・「生きるってなんだろう」について最終的に話し合わせたい。
・学習前と後のアンケートを比較して変容を把握する。
・マイク機能を使って記録することで、
　①友達が話したことを目で確認しながら話し合うことができる。
　②後日、子どもの個人的な変容を記録をたどって検証することが可能となる。
　　ただ、マイクがあることで、子どもの発言に影響があるかもしれない。

（３）５年生総合「自分たちの川上村は自分たちで守る」：川上小・川崎

①学べる防災ステーション・豪雨体験を導入に位置付けた
　・豪雨体験は伊勢湾台風の状況を再現したもの
②現状把握
　台風上陸数、最近の豪雨の時間あたり降水量・土砂災害の被害
　行政等の防災・減災の取組
　村民の防災への備え
③自分にできることを考え発信する、行政・村民に提案する（かみせタイム）
◇学習課題の設定のしかた
・単元の柱としての１つだけ、それとも時間ごとに複数書くべきか
・伝えるという目標をもたせるために、単元の課題を明示した方がいいのでは
・「３．聞き取り」の後半で、単元の学習課題を設定してはどうか。
◇土砂ダム・深層崩壊の危険性　深層崩壊のメカニズムをどこかで学ぶ
・温暖化による危険性
◇雨が多い・水はけがよいという川上村の自然特性の中で栄えた林業
　自然現象を両面からとらえる視点
◇提案することは、まず自分たちで行動させる。
◇防災・減災パンフレットでどこまで関連付けて伝えるかを考えておく。
　率先避難者・誘い合って避難（声掛けできる子）

（４）３年生理科　こん虫のかんさつ：郡山西小・島

◇教師がとってきた昆虫から、関心を高める
◇西小には、どんな昆虫がいるか？
　予想して探す
　昆虫カード

昆虫カードを校内地図に貼ってまとめる

・虫は循環の中で生きている（糞・死骸）「虫ってすごい」

・コンポストにゴミを入れて観察する　　プラスチックごみは分解されない

・生態系に自分も位置づいていることに気づかせたい

・ルーペをつかうと関心が高まる　観察カップ

・虫の習性や体のつくりは、理由がある。

・発信の仕方　　昆虫カルタ、ネイチャーゲーム「私はだれでしょう」

次回第５回目は、２０２０年１月５日（土）１３時～

内容は、先生方の実践報告会です。

授業実践を見学に行かせていただける場合は、ご連絡下さい。よろしくお願いします。

第５回森と水の源流館授業づくりセミナー概要報告

奈良教育大学　中澤　静男

◇開催日時　　2020 年 1 月 5 日（日）13 時～17 時

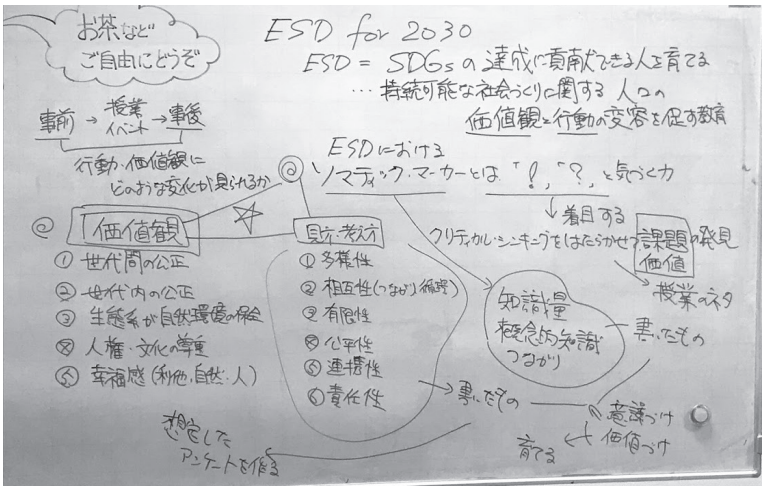
◇会場　　森と水の源流館

◇参加者　　川崎（川上小）、新宮（平城小）、島（郡山西小）、中澤敦（近畿地方ＥＳＤ活動支援センター）、尾上・木村・上西・古山（森と水の源流館）、奥田（川上村地域起こし協力隊）北村・中澤（奈良教育大学）　　計 11 名

◇内容

１．ＥＳＤの概念整理

ＥＳＤは人々の持続可能性に関する価値観と行動の変容を促す教育である。実践の前後で学習者の変容を評価するためには、何を対象とすればよいのか。



①行動の変容について

学んだことをどのように生かそうとしているのかを評価する。

・活動への参加・参画

・ライフスタイルの変容

②価値観の変容について

価値観の変容を評価するには、長期的な評価が必要となる。その前にまず持続可能な社会づくりに関するソマティック・マーカーを評価する（気づく力）。

ソマティック・マーカーには知識の網の目を細かくできていることが求められる。ここでいう知識は、個別の知識量ではなく、つながりあった知識（概念的知識）である。概念的知識については、学習者の記述したものから評価することが可能である。(因果関係等、説明できているか)

・実践前と後で、概念的知識を問うアンケートを実施して､変容を評価する。

③見方・考え方と資質能力の変容について

見方・考え方及び資質能力の育ちについては、学習過程での学習者の記述や発言より評価できる。

・クリティカル・シンキング　　課題づくりにおける記述や発言（６つの視点から批判的に捉える）

・システムズ・シンキング　　調査結果を総合的にまとめる（６つの視点を用いて）

・長期的思考力・システムズ・シンキング　話し合いでの発言（６つの視点に依拠して）

・コミュニケーション力　　調査活動時、話し合いでの発言

・協働的問題解決力　　行動化におけるリーダーシップや協調性を活動より評価できる

④評価方法

ＥＳＤでは主体性を育てることが重要であることから、自己評価できる力を育てることが重要である。一方、行動や発言を捉え、指導者がＳＤＧｓやＥＳＤの価値観・視点を用いて、意義づけを行うことも重要である（理解を深め、意欲を高める)。

２．実践報告

（１）「こん虫のかんさつ」大和郡山市立郡山西小学校　島　俊彦先生

①どのようにして、生き物への愛着を育てるか。

自然環境や生態系の保全の重要性を学ぶ以前に、半数以上の児童が昆虫を苦手としていた。

母親の昆虫嫌いが影響しているのではないか。

今の児童は昆虫との距離がある。知らないから苦手という面もあるだろう。どうやって縮めるか。

木村さんのヘビ嫌いの克服より：仲間からの影響で、興味を持たせるのが効果があるのでは

児童が生き物嫌いでなくなれば、保護者へも影響していくのではないだろうか。

デフォルトの変更

身近に昆虫がいるというのが当たり前の状況にしていく。昆虫に関心のある児童が多数派であるという状況を作っていくことで、仲間から影響を受け、児童が変わっていく。

（２）「自分たちの川上村は自分たちで守る」川上村の防災教育～60 年前の伊勢湾台風の記憶から～

川上村立川上小学校　川崎　貴寛先生

②地域の方とのつながりを深める意義

地域との関わり、地域への貢献をテーマとした授業づくりを行う。

優秀なテスト結果による応答でも、自尊感情が高まり学習意欲は向上するが、それはあくまでも、自分の能力を高めるという教育の個人的側面にすぎない。ＥＳＤにおいては、それが持続可能な社会づくりに参加・参画しようという教育の社会的側面に影響する。地域への貢献に対する地域人材からの応答が、児童の自己有用感、自尊感情を高めるとともに、学習活動やよりよい社会づくりへの意欲を向上させる。

マズローの欲求の５段階説においても、承認の欲求が満たされると、自己実現の欲求（人のために何かしたい）へと進むと言われている。

学校の教育活動に地域が協力するという段階から、地域と学校がつながっていることをデフォルトにする。学習課程を作成するときに、地域との協働があることを前提としたカリキュラムを作る。

（３）「秋篠川のめぐみを未来へ」奈良市立平城小学校　新宮　済先生

③子どもから大人社会を摘発する

学級や学年全体で取り組むことで、児童のデフォルト、地域のデフォルトが変更可能となる。

海ゴミの 80 パーセントは川ゴミ由来であり、川ゴミは町ゴミが風などで川に至ったもの。海ゴミや川ゴミと自分の生活との関連に気づいた児童が、ゴミを拾って学校に持ってくるようになった。町や通りにゴミが落ちているのが当たり前（デフォルト）であったのが、ゴミがないのが当たり前とデフォルトを変更する。ゴミを分別したり内容を調

べたりすることで、ゴミを捨てている（落ちても知らないふりをしている）のが大人であると気づくだろう。発表の場があるのであれば、スウェーデンのグレタさんのように、子どもから大人に摘発してはどうか。

（4）まとめ

④ソマティック・マーカーと見方・考え方の関連

社会環境や自然環境を①多様性、②相互性、③有限性の視点で検討することで、「人権・文化を尊重する」「生態系・自然環境の保全を重視する」という価値観を育てることができると共に、その繰り返しによって、①・②・③の視点もしっかりと身につき、ソマティック・マーカーに反映される。

人や集団の行動や意思決定を④公平性、⑤連携性、⑥責任性の視点で検討することで、「世代間の公正」「世代内の公正」「幸福感の重視」という価値観を育てることができると共に、その繰り返しによって、④・⑤・⑥の視点もしっかりと身につき、ソマティック・マーカーに反映される。

では、最初に①～⑥の大切さを理解させるには、どうすればよいのか。言葉の上での理解だけでなく、実感をともなった理解が重要である。体験や活動を通した学びとその場面での指導者からの声かけ（テキスト化）が効果的である。

近畿ＥＳＤコンソーシアム・奈良県立万葉文化館
「万葉集・明日香村」を中心とした授業づくりセミナー　開催要項

１．目的

ＥＳＤを指導できる教員の資質・能力の向上には、継続的な研修を実施する必要がある。近畿ＥＳＤコンソーシアム活動の一環として、奈良県立万葉文化館と連携し、「万葉集・明日香村」を中心とした国語科・社会科や総合的な学習の時間等での授業づくりを中心とした連続セミナーを開催する。学芸員による万葉集の内容や時代背景等に関する情報提供、大学教員等による単元デザイン作成に関する助言のもと、現職教員が指導案を作成し、授業実践を行うことで、教員としての資質・能力の向上を目的とする。

２．主催

奈良教育大学・近畿ＥＳＤコンソーシアム

３．協力　奈良県立万葉文化館

４．会場　　奈良県立万葉文化館内

５．実施日

令和元年 5 月 19 日(日)　　館内見学及び明日香村フィールドワーク
令和元年 7 月 27 日(土)　　実践事例の分析
令和元年 8 月 24 日(土)　　学習指導案の検討①
令和元年 9 月 21 日(土)　　学習指導案の検討②
令和元年 11 月 16 日(土)　　井上さやか氏の講演
令和 2 年 1 月 25 日(土)　　実践事例の報告会

※　いずれも１０時３０分より開催

６．参加者

近畿 ESD コンソーシアム構成団体に所属する教員等
奈良教育大学の学部生・大学院生・教職大学院生
奈良万葉文化館　指導研究員　井上さやか氏及び学芸員
奈良教育大学　准教授　中澤静男
奈良教育大学　特任准教授　北村恭康

７．ESD ティーチャープログラムとの関連

・本セミナーへの学生の参加は、ポートフォリオ作成をもって ESD 演習としてカウントする。
・本セミナーへの教員等の参加は、ミニレポート作成をもってセミナー参加にカウントする。
・本セミナーで作成した ESD 学習指導案は、ESD ティーチャープログラムの認定要件である ESD 学習指導案にあてることができる。

第１回「万葉集・明日香村」を中心とした授業づくりセミナー概要報告

奈良教育大学　北村　恭康

日　時　令和元年５月 19 日(日)　10 時 30 分　～13 時 30 分
場　所　奈良県立万葉文化館・明日香村
参加者　石田通大（左京小)、中澤哲也（平群北)、中澤かな（六条小)、河野晋也（奈良教育大附属小）
　　吉原　啓（万葉文化館)、北村恭康（奈良教育大）山之内健人・坂元亜衣（奈良教育大学部生）

内容

(1) 第一回目となることから、初めに万葉文化館研究員の吉原　啓氏より、万葉文化館の展示内容について説明をしていただく。

○　歌垣

・市（市場）やお祭り等、人が多く集まるところで行われた。

・老若男女が歌を掛け合う祭りで、時には、歌で恋人や結婚相手を探すこともあった。

紫は　灰指すものそ　海石榴市（つばいち）の　八十の衢（ちまた）に　逢える児や誰

○　市

・衢といわれる道が交差した場所や大きな植物が目印に開かれたと思われる。

・多くは、物々交換で取引が行われた。貨幣も使用されていた。

○古代の文房具

・紙もあったが貴重品なので、木簡も重要であった。上手に削り、内容がはっきりわかるものもあれば、細かく削り取ったものもある。「天皇」と書かれた最古の木簡も見つかっている。

○　飛鳥池工房遺跡

・富本銭　最古の鋳造銭　　(和同開珎が発見された地層より古い地層から発見された。)

　　館内より、炉跡などを見ることができる。

・宝玉　　ガラス玉には、つなげられるように穴をあけるために鉄の細い棒がさしてある。

○　令和について

「万葉集」の巻５・梅花歌３２首序文から引用されている。

　　大宰府で大伴旅人(大宰府の長官)の宅に集まって宴会を開いた。・・・

初春令月、気淑風和。梅披鏡前之粉　蘭薫珮後之香。

大伴家持は旅人長男である。

(2) 明日香村フィールドワーク

斉明天皇(皇極天皇)と関わりある遺跡を中心に回る。

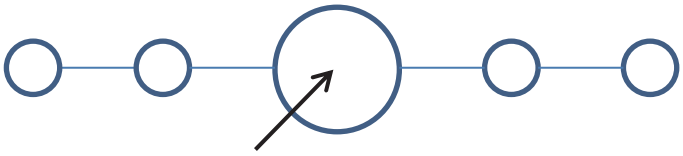
亀形石造物　⇒　酒舟石遺跡　⇒　飛鳥宮跡　⇒　飛鳥寺　⇒　石舞台古墳　⇒　島の宮跡　⇒　(学生　キトラ古墳)

第２回「万葉集・明日香村」を中心とした授業づくりセミナー概要報告

奈良教育大学　北村　恭康

日　時　令和元年７月27日(土)　10時30分　～13時00分
場　所　奈良県立万葉文化館
参加者　中澤哲也（平群北小）、梶原末来（平城西小）大谷　歩（万葉文化館）、
　　中澤静男、北村恭康（奈良教育大）

内容
（1）単元構想の検討
　①「古事記のボードゲームを作って遊ぼう」２年生
　　奈良市立平城西小学校　　梶原　末来
ボードゲーム=すごろく　お話を読む活動をしたい。
○「日本書紀」よりも「古事記」のほうがお話が多い
○昨年　「伝え合おう」ということで物に触った感想、物の色などをしっかり発表する活動を行う中で、「・・は、‥を」などの接続詞の適切な使い方を指導していくために、物語を「すごろく」の形にしていこうと考えた。
・



マスに入る言葉を考えさせる中で、接続詞の使い方を学ばせたい。
○物語　「イザナキとイザナミ」・「アマテラスとスサノオ」・「オオクニヌシ」・「ヤマトタケル」
　　すごろくでスタートからゴールまですると一つの物語が分かる。
○道具カードを作ろう　　鏡・剣・勾玉・籠・鉾・弓　　等
・モノよりも動作のほうが良い。　　餅つき。機織り
・低学年は動作を入れると楽しくできる。
・「イザナキとイザナミ」で一つを作るより、ここに止まれば「イザナキとイザナミ」の物語が聞ける（紙芝居なども）というほうが良いように思う。
・鉾をかき回すと淡路島ができた。　マスに止まれば動作をする。

・「イザナキとイザナミ」ボードにするよりも、日本神話ボードのほうが広がりがあるのではないか。
・アマノイワトの場面かな。太陽神なので隠れると世界が真っ暗になり出てくると明るくなるという話のほうが分かりやすいのではないか。
・「スサノオ」のヤマタノオロチは出雲のことなので、「アマテラス」と分けた方がよい。
・「ヤマトタケル」は女装をして敵を倒す話もあるので面白いのではないか。
・天孫降臨で神の世から人間の世になるストーリーでもよいのでは。
・「浦島太郎」は古事記とは違う。
・物語に固執しなければ「万葉集」の歌をマスにおいてもよいかも。

・日本神話で場所を特定するのは難しい。神武天皇以降ならばある程度場所を言うことはできる。
・万葉集のほうが地域がひろがる。
・ゴールを子どもと一緒に考える。
・神話の世界を楽しむ、ボードを作る楽しみ、遊ぶ楽しみ
・マスの内容を自分で説明、物語の内容を話する
・くにゆずりとヤマトタケルの間が開いている。
・単元名を「日本神話でボードゲームを楽しもう」としてはどうか。

②「秋篠川を短歌で紹介しよう」　6年生

〇学校の前を流れている。
〇秋篠川は人口の川なので、万葉集の中では歌われていない。が、万葉集の中で歌われている川の歌を紹介しながら、秋篠川への思いを言葉にしていくことができたらよい。
〇普段目にしている秋篠川、探険して発見した秋篠川、写真で見た秋篠川等から改めて発見した思いや家の人に聞いたり、地域の人に聞いたりしながら言葉に表せたら良い。

〇自分で歌を作ってみて、他の人「どこが同じか」「違うところはどこか」を比較してみる。
〇「違うところ、同じところ」を模造紙にまとめ、再度自分で工夫したらよいと思うところを踏まえて歌を作り、地域の人に発表する。
・子どもにモデリングが大事なので、佐保川は万葉集にはあるので、その歌を提示したらよいのではないか。
・佐保川と千鳥を伴っているが、秋篠川には鳥がいてないのか。アオサギ、サギ、カワセミ等
・社会で平城京の勉強はしてる。
・松柏美術館に万葉歌碑ある。子どもは万葉歌碑を見ていないと思う。
・文化館の情報資料室で歌碑は検索できます。
・検索は、館内でしかできない。まだ、外部から検索のシステムを構築していない。
・複数回して、その中から良いのを選ぶ方がよいのでは。
・秋篠川の探索を特別支援学級全体で行ってもよいのでは。
・秋篠川と比較しやすい川はないだろうか。　たくさんあり、これといいにくい。
・同じ動物を詠んでいる歌をモデリングしたらどうだろうか。
・佐保川で動植物を詠っているものは多くある。

(2) 飛鳥座神社、飛鳥城へのフィールドワーク
豪雨のため中止

第３回「万葉集・明日香村」を中心とした授業づくりセミナー概要報告

奈良教育大学　北村　恭康

日　時　令和元年８月24日日(土)　10時30分　～13時00分
場　所　奈良県立万葉文化館
参加者　井上さやか（万葉文化館）、中矢和美（済美小）、坂元亜衣（学生）、北村恭康（奈良教育大）
内容
（1）単元構想の検討
　○単元名「月に思う」　　奈良教育大学国語教育専修３回生　坂元亜衣
中学１年生の国語教材である。この教材を通して、日本特有の文化である和歌に触れることで、いにしえの心に触れ、言語文化に親しむことができると共に、古典の文章に出会い、現代とのつながりを考えることができる。

・月に関する歌をテーマにしたいが、広がりすぎるのではないか。
・テーマの範囲を決めた方が良い。
・テーマの範囲を奈良か万葉集・古今和歌集に限定をしたらよいのではないか。最初に持ってくる歌は古今和歌集なので。
「天の原ふりさけ見れば　春日なる三笠の山に　出でし月かも」
・空に浮かぶ　月　月日の月　両方かけている歌もある。
・中秋の名月　というが、今の季節とは違う。暦や季節の違いを扱う題材とも思う。
・歌全てを扱っている中からではなく、マンガなどからでもよいのではないか。
・教科書にある「秋風にたなびく雲の絶え間より　もれ出づる月の影のさやけき」から入った方が生徒には分かりやすいのでは。　そして奈良に関わる奈良時代の歌を探してみよう。（地域限定）
・万葉集で奈良に関わる歌を探してもよいのでは。⇒　指導者も歌が分かる
・館内のパソコンで探せば出てくるよ。
・古文特有のリズム
　歌による。大雑把に言うと七五調と五七調の違いはある。五七調が万葉集には多い。平安時代以降は、そのリズムが崩れてくる。切れ目が変わってくる。
「天の原ふりさけ見れば／春日なる三笠の山に出でし月かも」　　奈良朝のリズム　五七調
「秋風にたなびく雲の絶え間より／もれ出づる月の影のさやけき」　　平安朝のリズム　七五調
・現代人は七五調に慣れている。
・阿倍仲麻呂は奈良時代の人で、その人の歌が載っているのが古今集で平安時代の歌集というところもリズムに関係が出てきたのでは。
・歌会始は冷泉家に伝わったリズムと理解している。
・旧・新暦で季節感が違うというのをどこかで押さえた方がよいのではないか。
　七夕を詠っている歌も、今は夏だが七夕は秋の歌となっている。
　春　　１月　～３月　　夏　４月～６月　　秋　　７月～９月　　冬　10月～12月
・秋の月を扱ったのが多いのでは。

・采女祭り　⇒　なぜ観月祭なのか。
・現在とのつながり　⇒　情景は同じようなものではないか。
　意味を現代語訳したら、今の自分の思う情景に共感できるのではないか。
・この歌には月の形が書かれていないので想像しなければならないが、満月と決まっていない。
・中秋の名月の積み重ねが　月⇒満月と固定観念が出来上がっているのでは。
・海外では月は不吉と思われている。　日本では月を愛でる　文化の違いでは。
・「良さ」　過去からのつながり　時間の流れの中で
　良し悪しではなく、独自の文化を味わう。未来に残す。ということではないのか。
・万葉集を歴史書ではなく歌集として扱えばよい。
・従来あまり取り上げられなかった万葉集を教材として取り上げるにはどうしたらよいのか、教材研究を深めていってほしい。
・いろいろな歌に触れてみたいということで鑑賞会を開く。
○　図書室で奈良県内で歌われた万葉集歌を探す。
○　飛鳥座神社は、9 時 30 分から見学する。飛鳥城は藪のため中止

第４回「万葉集・明日香村」を中心とした授業づくりセミナー概要報告

奈良教育大学　北村　恭康

日　時　令和元年 11 月 16 日(土)　10 時 30 分　～13 時 00 分
場　所　奈良県立万葉文化館
参加者　新宮　済(平城小学校)、坂本亜衣、東尾彩夏、田中隆寛(奈良教育大生)
　　井上さやか（万葉文化館）、北村恭康（奈良教育大）
内容
1、万葉集の楽しさ
・歌の読み手と記録者が別人の場合もある。
・万葉仮名は、外国語の漢字の音を借りているが、一字一音と複数音を使用している場合がある。
　　梅　⇒　烏梅　宇米　　青柳　⇒　阿乎夜奈義
・同じ言葉でも異なる感じの音を当てている場合もある。⇒春日　滓鹿(ともにカスガと読む)
○**寒**過　**暖**来良思　朝**烏**指　滓鹿能山尓　霞軽引
　ハル　ナツ　　烏は太陽神の使いという思想からこの字を当てて「ヒ」と読ましている。
　「波流」も春と読む・
　四季を表すようになるのは、持統天皇以降である。
○若草乃　新手枕乎　巻始而　夜哉将間　二八十一不在国　　憎く
○・・・毎見　恋者雖益　色二山上復有山　人可知美・・・　　出
・長歌は平安時代以降急速に少なくなる。
・漢字の音を借りて日本人の感情を表しているので、文化史、歴史の一コマとして取り上げてみるのも楽しい。

2、令和と梅花の宴
　梅⇒7 世紀後半ごろ、中国から伝わった植物で、当時は珍しい花であった。
　A 梅花の歌三十二首
　　天平二年正月十三日、萃于帥老之宅、申宴會也、于時、初春**令**月、気淑風**和**、梅披鏡前之粉、蘭薫珮後之香。
　B 蘭亭序
　　永和九年、歳在○丑、暮春之初、會于會稽山陰之蘭亭、修禊事也。・・・・是日也、**天朗氣清、惠風和○**
　C 文選　　帰田賦
　　於是仲春**令**月、時**和**氣清
・「令和」は A の大友旅人が梅花の歌三十二首　并序の―の部分からとられている。
　　令　⇒　本来は　良い、好　という意味　　和　⇒　やわらか　　穏やかな風景の意
・大友旅人は漢書にも通じていた知識人であり、書き出しを B の蘭亭序の形をとったものである。C の文選には「令、和」はある。しかし、先にあった B・C の中国文献を参考にしながらも、文意の趣旨は違う。
　元号（年号）は皇帝が時をも支配するという思想である。その時代のビジョンを表している。漢の武帝の建元元年（紀元前 140 年）に始まり、瑞祥災禍ごとに改元されてきた。

第５回　万葉文化館授業づくりセミナー　概要報告

奈良教育大学　　中澤　静男

◇開催日時　　2020 年 1 月 25 日（土）10 時 30 分～12 時
◇会場　　奈良県立万葉文化館
◇参加者　　梶原（平城西小）、石原（平城小）、石田（左京小）、東尾（学部生）
　　大谷・井上（万葉文化館）、米田・北村・中澤（奈良教育大学）
◇内容　　ESD 指導案・実践報告の相互検討会

１．みそしるを作ろう・小学 6 年生家庭科・東尾さん
・一番手間のかかるだしの取り方を体験する。
　出汁入りみそ（手軽、わざわざだしを取る必要がないのではないか）
　出汁のないみそしる・出汁入りみそ汁・煮だしを煮出した出汁でつくったみそ汁
・どの方法を自分は意図的に選択するのか
・だしがらを捨てるのではなく、もう一品つくる：食品ロス←　さまざまな野菜くずのレシピ
・比較できるので教材として優れている。
　食べ方の比較もある。
　発展として地域のみそ、出汁、世代間の違いを調べると文化的多様性に気づかせることができる。
・出汁は日本の伝統食　　海外と比較することで日本文化を
・万葉集に「ひしお」が出てくる。みそという言葉は平城京の木簡がある　ただし「未醤」
・みそも出汁も、多様性に富んだ食材である。
※台所から世界が見える　　家庭科学習はスキルだけではない、文化についての学びができる

２．未来に伝えたい「いま」小学校 6 年生国語・石原先生
　第 1 次：夏休みの思い出を「気持ちを表す言葉」を使わずに短歌にする
　第 2 次：万葉集を参考に、五七長で作詞する
　第 3 次：冬休みの思い出を短歌にする
　第 4 次：卒業を前に作詞する
・卒業までのカウントダウンに、万葉集のスキルを用いる。序詞（じょことば）
　序詞：よむひとが独自に考え出す 1 回限りのもの
　枕詞：共通のもの
・心象風景の広がりを豊かにするもの・序詞
・まんだらチャート
　まんなか　：一番伝えたい気持ち
　周囲　　：真ん中に関連する自然
　外周　　：自然の様子を表す短文　　→　詩に　　マインドマップからの発想
・万葉集　　五七調（意味の切れ目）　　運動会のあとにやってみた
〇言葉のチョイスが磨かれたと感じる。
〇万葉集は五七長　五七・五七・五七でつなげていくと長歌になる
　　五七五七七で終わらせたのが短歌
　　いつもの作文を五七長に直して「マイ万葉集」づくりワークショップ

○まず五七で長歌づくりで五七に慣れさせた上で、五七七をつなげることで短歌ができる

３．古事記のすごろくを作って遊ぼう　特別支援学級２年生・自立学習：梶原先生

・助詞を使うことができるようにさせたい

・ストーリーの順序を理解させる。

・昔の道具への理解を進める

「お話すごろくをつくろう」

①誰と遊ぶ？

②どの話でつくる？

③場面１の場所は？

・助詞を絵文字にしたり、色を変えて意識させる

　文字と話し言葉は成り立ちがそもそも違う

　いったん文字を離れて、「この場合はこの色のカード、この絵文字」を使うということから入っていく。

４．郷土の「言語文化」に関する教材開発と実践的展開　中学校国語：米田先生

・二上山の頂上にある大津皇子のお墓

・教室に万葉集を

①大津皇子から紐づく万葉集歌を選択して教材化する

②大津皇子と大伯皇女のやりとりからストーリー性に気づかせる

③関連する新聞記事など集めておいたものも教材として加える

④教科書によく掲載されている万葉集歌を解釈する形で作詞に挑戦させる

５．大谷さん・井上さんから

　万葉集をもとにした作文・絵のコンクール→参加数が少ない

　学校の先生方が万葉集を知らない。先生方への研修の重要性に気づかされた。

　先生方への万葉集に親しみやすいテキストづくりに取り組もうと思っている。

→　奈良市で以前つくったもののコピーはある（米田）

　　地域のものを掘り起こして教材化することが重要になっている

　　副教材を作成するだけでは効果がない。研修とセットにする必要がある。

　見開きで完結させることを心掛けた

２０１９年度 近畿ＥＳＤコンソーシアム
学ぶ喜び・ＥＳＤ連続公開講座　開催要項

１．目的

新学習指導要領の前文および総則に「持続可能な社会の創り手」の育成が示されたことから、今後、全国の学校・園でＥＳＤの理念に即した学校教育が展開されていくと想定される。本公開講座は、学校教育の中核である学級経営や生徒指導、子ども理解や授業づくり、防災・減災教育などについて、現職教員や教員経験者等、学校現場に詳しい方を講師に招へいすることで、学校教育の実際について学ぶ機会として開催する。

２．主催　　近畿ＥＳＤコンソーシアム

３．会場　　奈良教育大学次世代教員養成センター　２号館　多目的ホール

４．開催時間　　１９時～２０時３０分

５．開催計画

第１回　令和元年６月２０日（木）　学校現場における防災教育の実際
講師：本学特任講師　中村　武弘　氏

第２回　令和元年８月１６日（金）　探求・教材開発の楽しさ
講師：本学名誉教授　田渕　五十生　氏

第３回　令和元年１０月２１日（月）　小学校における学級経営と ESD
講師：奈良市立六条小学校　教諭　大田清美　氏

第４回　令和元年１１月２５日（月）　中学校における生徒指導・部活指導
講師：本学キャリアアドバイザー　奥村　浩一　氏

第５回　令和元年１２月１２日（木）　子どもの学びに火を付ける
講師：前八名川小学校長　手島　利夫　氏

６．参加者

近畿ＥＳＤコンソーシアム構成団体に所属する教員等
奈良教育大学の大学生・大学院生・教職大学院生

７．その他

・参加料は無料
・ＥＳＤティーチャープログラムのＥＳＤ演習にカウントできる

第１回学ぶ喜び・ＥＳＤ連続公開講座　概要報告

奈良教育大学　中澤　静男

◇開催日時　　2019 年 6 月 20 日（木）19 時～20 時 30 分
◇会場　　奈良教育大学次世代教員養成センター2 号館多目的ホール
◇参加者数　　19 名
◇内容　　「笑って災害に備えよう」
　　講師：奈良教育大学　特任講師　中村　武弘氏

三重県大紀町・南伊勢町にある錦小学校・南島小学校・南勢小学校に校長として赴任した。これら 3 つの学校の共通点は、南海トラフに面しており、5 分で津波が到達する学校という点である。

○錦小学校

海抜２メートルの位置にある。

学校の裏には、海抜 50 メートルの裏山があり、「命があったら、ここで会おうね」と子どもに言っていた。校舎は耐震施設だが、海の砂を使っているので倒壊する恐れがあると言われていた。

郷土料理：手捏ね寿司　を地域の協力で給食に出すなど、学校に協力的な地域である。

○南島東小学校

海抜 10 メートルの位置にある。

学校から投げ釣りができる、入り江にある学校だった。こわごわ教育していてもしかたがないと考え、地域の協力を得て、海での「ふるさと南伊勢を愛する教育（ふるさと教育）」活動を教育に取り入れた。

○南勢小学校

海抜 13 メートルの位置ある。

目の前は太平洋という学校。学校の前の浜は遠浅で、アサリ取などを〈ふるさと教育〉として行った。

１．防災教育の重点内容

（１）防災教育の課題

①保護者や地域との連携　・・・地域と連携した防災管理

②活動を継続すること　・・・　年間計画とカリキュラムマネジメント

③児童が主体的に取り組む姿勢を育てること　・・・取り組む姿勢を育むための学習活動

（２）死なない、生きのびるための防災教育

①児童が主体的に活動できるよう通学団単位による話し合い活動を設定した。

②様々な状況下での避難訓練を行うことで、児童・教職員の対応力を養う。

③地域との連携を重視し、児童の成長過程に応じて役割を変化させていく。

（３）今までの学校防災教育との変更点

①第 1 時避難場所の撤廃

これまで、一次避難として運動場に集まり、人数確認を行ってから、2 次避難場所に避難していたが、5 分で津波が到達することが予想されるため、運動場への集合をやめた。

②裏山への避難に関して

早い者から学校の裏山に逃げるよう指示した。遅い人が先だと、坂道でつまってしまうため。

③受け渡し訓練の撤廃

保護者に子どもを引き渡す「受け渡し訓練」をしていたが、やめた。災害発生直後に児童を引き渡すことは、児童・保護者双方を危険にさらすことになりかねない。災害発生から 48 時間は学校で児童を預かり、保護者には保護者自身の安全を図るよう依頼した。

④避難の仕方

低学年児は「静かに」避難するのではなく、避難を呼びかけながら逃げる。

高学年児や中学生は、避難のできにくい人を大人と協力してできる範囲で支援する。

⑤様々な状況の設定

これまでは 2 時間目の授業の終了時など、授業時間中に避難訓練を行っていた。年間 4 回であった避難訓練を 8 回に増やし、授業時間中だけでなく、休憩時間、清掃活動中、登下校時など、いろいろなパターンで実施するようにした。

バス通学の児童生徒もいるため、バスを運営する会社と連携し、児童・生徒の動きを想定した運転手の役割などについて連絡調整を図った。

⑥年間カリキュラムの作成と全校防災学習

実践的な対応力を養うためには、年間カリキュラムに基づく継続的な防災教育が必要である。しかし、授業時間を削ることや負担感が増すことに対しては、全教職員の理解を得ることができない。年 3 回の保護者懇談会の時間に全校児童を体育館に集め、校長自らが全校防災学習を行うことで、教職員の理解を少しずつ広げていった。

⑦訓練を通した児童自らの自覚を促す

教員による指示ではなく、自分の判断で避難する力を養うために、避難訓練中の活動を写真で記録し、全校防災学習時に映像で示すことで、考えさせるようにした。

通学団ごとに、リーダーを中心に、場面に合わせた自らの動きを想定し、実行できるように、簡単な手順とルールを作らせた。

2．各学校での具体的取り組み

（1）錦小学校での取り組み

・昭和 19 年の南海地震で生き延びた人に話を聞く学習を行う。

「山に逃げろ！」と言われ、逃げて助かった。

まずは避難訓練。いろんなパターンで自分で判断して行動するように。

昼休み　運動場の真ん中に集まって、その後、山に走っていった。

①自分たちで予測して行動する。

②「ここまできたらだいじょうぶやろ」で、安心しない。

③最終的には一人で判断できる、が命を救う。

④避難訓練でしていないことは、実際の場面で行動できない。だから何パターンもする。

フィールドワーク教員研修

防災マップづくり　どこが危険で気を付けるのかを共有

・下校時の実際の訓練

津波避難タワーにむかって走る。

（2）南島東小学校

・いったん運動場に集まってから、海側の山に逃げることになっていたのを①運動場に集まらず、各自で②海とは反対側の山に逃げることにした。

・親子で土曜授業に体験学習をした。

親子で防災マップづくり。

・津波避難訓練　裏山に逃げる

・登下校時避難訓練　この場所ならここに逃げると各自で判断して逃げる

3．すべての学校現場で実施してほしい防災教育の実際

・学校の認識は海抜が高くなると薄れる傾向がある。

・町・教委・議員と連携し 72 時間生きのびるために、学校に備蓄品を置く。

うちわ、シート、備蓄用パン、水、替えの服を持ってこさせておく

・備蓄品は何か所に分散する。

・色々なパターンを想定し、集合場所も再考する。

・子どもたちに考えさせる取組をさせたいが、年間計画に空きがない。

家庭訪問期間・個別懇談期間の裏側などを使って 9 時間を生み出す。カリキュラムの作成をした。

（1）自分の命を守るために

「一人ひとりで考えておくこと」防災シート

	生き残る	生きのびる	元に戻して次につなげる
自分が	安全な場所	持ち出し品 備品	生活再建
家族が	家の対策 てんでんこ	１７１電話 集合する場所	生活再建 避難生活
地域で	助け合い・避難訓練	避難所生活運営	復興まちづくり・災害の記録
学校のみんな	緊急対応	被災者支援	復興計画策定

（2）学校からの帰り道で大地震が起こったら

場所	予想される危険	身の守り方
家の近く		
交差点		
自動販売機		

（3）三重県作成の防災ノートも活用した防災教育を行う。全校防災学習

・下校時に津波を想定した避難訓練

防災ノートで学習したのち、実際の避難訓練で体験することで実感できる。

「下校途中で地震が発生したら」シート

自分で考えてまとめさせることが大切。危険予知力を育てる。

（3）発達段階にあわせた指導

・低学年は自分の身を守る

・高学年は他に人のことも考える

〇同じことを毎年繰り返すことで、体にしみこませる

（4）教職員の意識を変える

・裏番組（保護者面談の時間）に校長が防災学習を指導し、指導しているところを見せることで変わっていった。

・時間をかけて説得して、共通理解した。

次回は 8 月 16 日（金）18 時～19 時 30 分　会場は次世代教員養成センター2 号館多目的ホール

「探求・教材開発の楽しさ」　講師：本学名誉教授　田渕　五十生　氏

第２回学ぶ喜び・ＥＳＤ連続公開講座　概要報告

奈良教育大学　中澤　静男

◇開催日時　　2019 年 8 月 16 日（金）19 時～20 時 30 分
◇会場　　次世代教員養成センター１号館
◇参加者数　　18 名
◇内容

「探究・教材開発の楽しさ」　講師　奈良教育大学名誉教授　田渕五十生氏

（１）教材開発する意義

・教育の文脈において学問をとらえ直すことが重要だ。教科書に書かれている内容を「いかにうまく教えるか」ではない。教員が探求して得た知識を、子どもに伝える。教員が本当におもしろいと思って探求したものは、子どもを夢中にする。子どもに探求することの楽しさが伝染していく。
・しっかりと専門的な知識を獲得することが大切だが、教育学部で他の学部より強いのは、「子どもをよく知っている」・「青年期の発達・心理的傾向、物事の考え方を知っている」ことだろう。
・重要なことは、子どもの思考と学問内容をどうクロスさせていくかだと思う。

（２）探求・教材開発を行うときの留意点

①新動向に着目し、積極的に調べてみる
②地域を結びつける接点を見出す
③自らの地域と他地域を比較して、特徴を見出す
④特殊な事例として放置するのではなく、歴史的考察により一般化を試みる。

（３）神社の教材開発

・昔の神社とお寺は一体だった。150 年前に神仏判然令で無理やり分けた。それを知らずに我々は、別のもの、違って当然のものとして考えてしまっている。調べれば調べるほど「こんなにおもしろい」と思う。先生自身が楽しいと思うことが重要。

①新動向への着目：百舌鳥・古市古墳群が世界遺産になった。
　世界遺産の登録のためには、発掘調査が必要だ。問題点：公開性・どれだけ公開されるのか。
　百舌鳥・古市古墳群から大和大権を考える。

②神を基に地域を結びつける
　３つの世界遺産をつなぐ（宗像・厳島・古墳群）

・厳島神社の神様と宗像の神様は同じ（宗像三女神：タゴリヒメ、タギツヒメ、イチキシマヒメ）
・宗像－厳島－大和王権（古墳）をつなぐもの：「鉄」
・宗像の海洋系豪族と連携し、大和王権が権力基盤を築いていった。
　朝鮮半島の鉄を独占的に確保した。大和王権は「鉄の王国」「鉄器のプロバイダー」だった。
　鉄の延べ棒を手に入れた大和王権は権力を掌握し、武力を獲得していく。権力の非対称を見せつけ

ることで、戦うことなく談合による統一が進む。
大阪湾・大和川沿岸に造られた古墳　白い石でおおう　→　権力（兵力・動員力）の誇示
・対外進出の航海の神―住吉大社
・５世紀までは鉄器の自給は不十分だった
６世紀以降　中国山地でたたら製鉄が普及（ちくさ鉄）　たまはがね　日本刀（備前）
江戸時代まで　砂鉄を取った後の砂を流す　　広島・岡山の平野部の形成に

（４）神社の発生
①自然崇拝から始まった：山容それ自体が信仰の対象：速玉神社、那智大社
②稲作の普及により農作の神　水利・灌漑　龍神思想
③有力豪族の神
④大和王権による③の序列化
⑤神仏融合（色々な神との融合・代表的な神：天皇家の神（神宮））・勧請
厳島　海上に清盛がつくった理由　厳島を汚したくなかった
藤原氏の春日大社を越えたかった

（５）神社の整理
◇天津神　天皇家とつながった神
◇国津神　地方豪族の神
◇宗像三女神（アマテラス、スサノオの誓約によってうまれた神）
宗像　高宮にひむろぎ（神の依り代）　春日大社の御蓋山にも同じものがある。
・弁財天（宮島・竹生島・江の島）航海の神：元のインドではガンジス川の神　技芸の神・戦闘の神
・伊勢神宮
千木と鰹木、高床式　の形はどこから来たのか　　吉野ヶ里の高床式　稲作と関係があるだろう
・八幡の大蛇退治　　氾濫していたところに土木技術で灌漑を行い、水田化
らんらんとした目：たたらの火、尾：鉄の脈

・住吉の神　底筒之男命　中筒之男命　上筒之男命　　干潮・満潮にあわせた航海の神
・宇佐の神（神功皇后・応神天皇）　渡来系の豪族
・春日大社の神　（全国の神社数では１１位　１位は八幡神）
　タケミカヅチノカミ（鹿島神宮）武闘神　（鹿島明神）が鹿に乗ってやってきた（神仏習合）
　フツノカミ（香取神宮）　　武闘神　　大和朝廷の権力の最前線に位置する
　天児屋根命・媛神（枚岡神社）
　若宮　新しい神　　おんまつりは神をもてなすエンターテイメント
　細男（せいのう）　住吉の神ではないか
　舞楽：夜、能：昼
　みあれ祭　　厳島の管弦祭・春日大社のおんまつり　と同じだ。
・八幡様は武闘神　そのあたりを守る神（全国で一番多い）
　石清水八幡宮　八幡太郎慶宗　　源氏の氏神となる
　　家を徐々に追い詰めていく途中で地頭を置き掌握していく作戦
　鶴岡八幡宮　鳩
・伏見稲荷　正一位　稲成り
・一宮　平安時代には、派遣された国司は各地の産土の神にあいさつにいった
　　律令制による階層の発生　一宮、二宮、三宮
　　各地の産土の神を集めたものが総社

（６）教材化のヒント
〇地名（律令制の旧国名）に歴史が刻まれている
　淡路島：南海道の紀伊半島、阿波に行く途中の島
　吉備（備前・備中・備後）、筑紫（筑前・筑後）、越の国（越前・越中・越後）等
　　〇それぞれに府中がおかれる　地名に残る〇〇府：駿府、大宰府、防府、別府　等
　　〇名産物の名前
　　おもしろさのきっかけになる　調べるとおもしろくなっていく　教材研究になる
　　河内音頭、泉州刃物、美濃半紙、等

第３回学ぶ喜び・ＥＳＤ連続公開講座　概要報告

奈良教育大学　中澤　静男

◇開催日時　２０１９年１０月２１日（月）１９時～２０時３０分
◇会場　　奈良教育大学次世代教員養成センター２号館多目的ホール
◇参加者数　６５名

「２１世紀人間」とは
　①「２１世紀人間」誕生まで
　②わたしのビジョン
・授業実践から（社会科「参院の微小
・日々の取組
　個を育てる、集団を育てる、保護者と仲良く

１．２１世紀人間とは
（１）「２１世紀人間」の誕生
　10 年前　学習指導要領の改訂に伴い小学校外国語活動が導入された
　決して英語が得意なわけではなかったが、誰もが不安に思っている英語を得意になろうと思った
　英会話教室へ通う、英語を教える資格をとろうと挑戦する
　短期（夏休みの 4 週間）の語学留学（カナダへ）
　　・一切授業についていけないという現実
　　・イタリア人やスペイン人は積極的に発言する
　　・討論に参加できない（言うことを考えているうちに話題が変わってしまう）。
　→　単に英語が話せるだけではだめだ。こういう人たち対等に交流できる強さが必要だ。
　海外派遣研修（アメリカ：ウイスコンシン州：３か月）
　　・カリキュラムや授業方法（アクティブ・ラーニング）を学ぶ
　　・日本文化も紹介する
　　・４年生の教室で：掛け算が間違っている子に間違っていることを指摘すると、反論された
　　※世界の人たちは、自己主張が強い。英語が話せるだけでは、世界に通用しない。
　　世界の人たちと渡り合える人（２１世紀人間）を育てる
　☆２１世紀人間：クリエイティブで世界的視野で、世界の人たちと論議できる人と定義づける。
　　そういう人を育てることができる教師になりたいと思う。
・今は、教室開きの日より、自分の経験を伝え、テクニックだけでなく、私たちが身に付けるべき力は何かを子どもたちに話し合わせている。
　「すごいなあと思う人は、テクニックだけではなく、それ以上にすごい力を持っているからすごいと思えるに違いない。その力ってどんな力と思いますか？」
・藤原和博氏が唱える 10 年後、20 年後に必要な力に共感する。
　①コミュニケーション力、②プレゼンテーション力、③ロジックする力（筋道を立てて論理的に考える力）、④シミュレーションする力、⑤ロールプレイングする力
・今までの授業じゃダメだ。ラーニングピラミッド（受動から能動へ）を意識した授業づくりを心掛ける。（能動的であるほど学習したことの定着率が高まっていく）よりアクティブで能動的な授業をみんなでつくっていく、ことを子どもたちに伝えている。

２．私のビジョン

（１）なぜ、２１世紀人間を育てたいのか

・２１世紀人間がたくさん育っていけば世界平和にたどりつくと思う。
（教育基本法にも記載されている）

・世界平和を求めていくような子にしたい。そのため、当事者意識を高めていく。社会の様々な事象が、自分とも関わっていると思える子になってほしい。

【このような子どもを育てたい】

・物事を俯瞰して見ることができる
・当事者意識を高い人
・多様な価値観を認める人
・討論できる人
・事実に依拠した自分の意見の形成ができる人
・合意形成できる人
・学びの出口が見える（見通しがもてる）人

（２）授業実践から：６年生社会科「三人の武将と天下統一」

①ゴールを考える（つけたい力を明確にする）：

※クライマックスの場面で、子どもたちがどのような姿で取り組んでいればいいのかをイメージする。

・戦国時代の基本的な知識を身に付けている
・資料をもとに根拠をもとに自分の意見が言える
・２つ以上の資料をつなげて活用できる
・１つの事象を様々な角度から見ることができる
・友達の考えを聞き合い、自分の意見を強くすることができる
・自分事として考え、自分の生き方と結び付けることができる
・探求することを楽しんでいる

②学習の流れ

「みつめる」長篠合戦図屏風から戦国時代の概観をつかませる
江戸図屏風との比較から学習問題をつくる（劇的に変わっている）
※学習課題：「なぜ、天下統一を成し遂げることができたのだろう」

「しらべる」三人の武将を調べる

お気に入りを１人選んで「すごろく」を作る
その人への思い入れ、こだわりを持たせる　その人の立場から他の人を見させるため
すごろくでの遊びを通して、３人の武将の業績の知識を得る
「ふかめる」３人の業績をカテゴライズした
武力だけではないことに気づかせるため（政治・経済・軍事など）
業績同士の関連に気づかせるため、３人のかかわりに着目させるため
※新たな学習課題「徳川家康はなぜ天下統一できたのだろうか」
「ひろげる」中学生とすごろく　ほめてもらうことが意欲につながる
中学生は世界情勢に位置付けて戦国時代を学んでいるので、学びが広がる

③授業実践の振り返り
子どもの変容を把握する（ねり合い前と後のノートの記述の変化を比較）
社会科の授業づくりって「潮干狩り」みたいだな
漁協の人が貝をまいている（子どもにつかませたい事象をあらかじめまいている）
それによって子どもの意欲が高まる
たまに、教員がまいた貝じゃないものが見つかるときが、教員として一番うれしい
④日々の取り組みから：力をつけるための日々の積み重ね
【個を育てる】
（１）社会科で毎時間振り返りをかかせる
・今日の授業でわかったこと、考えたこと、自分とのかかわりを書かせる
・よくかけているものは、みんなの前で読んだりする。
・社会科の見方・考え方を身に付けさせる
（２）全教科で
・話し方（話型、身振りの大切さ、資料の提示のしかた）
・討論の機会をもつ（自分の考えを持つ、合意形成のしかた）
（３）宿題で
・学習日記（毎日１授業）
自分が学んだこと、考えたこと、どのように活かしていくのかを書かせる
→　話の聞き方が変わっていく（鵜呑みにするのではなく）
自分の生き方、考え方をつくっていく
【集団を育てる】
①子どもが生き生きと主体的に活動できる取り組みをたくさん持つ
イベントの企画をさせる
楽しい、企画力（発想、アイデア）、交渉術、見通す力（段取り力・危険予測）
役割分担・協力する力　・・　２１世紀人間に求められる力
誰かに楽しませてもらうのではなく、「自分から楽しみにいく楽しみを創る」
子どもたちの「やりたい」をつぶさないようにしたい、後押ししたい
お誕生日会、水鉄砲大会、ハロウィンパーティー、校内かくれんぼ、お化け屋敷、
クリスマスバトル、トミカーリング、最後の参観は「１年間の思い出劇」
学びに変えていく

努力家で学業優秀、協同的な学習は苦手　→他の子（男子）のよさを認め始める
仲間の中での自分の役割を考え始める
他の人の意見を受け入れることができるようになる
ちがいをもちあじとしてとらえる
最後までやりきること、表現することの
自分はどうありたいのか、社会にどうかかわれるのかを考える
自分の言動が周り（社会）を動かす（変える）力を持っている
ガンジーの言葉　BE the change you want to see in the world.

（４）保護者とのかかわり

・子どもの後ろにはかならず保護者がいる
・子どもを良く育てたいという思いは教員と同じ
・でも、学校のことは見えないので不安
・情報をしっかり提供することがポイント
学級通信で伝える
直接会ったとき、電話したとき、その子が頑張っていることを伝える
うれしいことこそ電話で伝える
家庭とつながるツールとしての連絡帳　たまに子どもに手紙を書く
お休みのときはクラス全員で一人１枚のお手紙を書く・クラスに居場所があることが保護者の安心
「花には水を、人には声を」
後輩に送るメッセージ（連凧作り）
２９文字の後輩に伝えるメッセージを考えて空に

「まじめにふざけ、ゼロから創るおもしろさ　それこそが２１世紀人間」

◇これから教員をめざすみなさんへ

・ビジョンをもつこと　学び続ける教員に
・やりたいこと、困っていることはみんなの前の大声で言ってみる
・思い立ったらやってみる
BE the change you want to see in the world.
・自分の得意で勝負
・人の縁を大切に
・あなたが学びのお手本です

第４回学ぶ喜び・ESD 連続公開講座　概要報告

奈良教育大学　中澤　静男

◇開催日時　　令和元年 11 月 25 日（月）19 時～20 時 30 分
◇会場　　次世代教員養成センター2 号館多目的ホール
◇参加者数　　93 名
◇内容　　「教員生活は出会いの宝庫」　　講師：奥村浩一氏

１．自己紹介

昭和 56 年 3 月奈良教育大学を卒業後　富雄中学校（12 年）、
都南中学校（13 年）
奈良市教育委員会・奈良県教育委員会
都南中学校・富雄中学校で校長

ほとんごがしんどいことだが、この職業でよかったと本気で思っている。「教員生活は出会いの宝庫」だった。出会いは気が付かないと通り過ぎてしまう。自分以外のひとと毎年毎年出合う。どうしたら、この人が幸せになるだろうかと思いながら過ごしてきた。

子どもも保護者も色々な個性がある。保護者を通してあらゆる職業との出会いがあり、このような人たちで社会ができていることを痛感した。自分が知る社会の狭さに打ちひしがれるとともに、出会いに対して謙虚になる。教員は、人として成長せざるを得ない職業である。新しい出会いは期待と不安が共存している。

２．教員生活は出会いの宝庫

（１）自分をポジティブにした経験

中学生の時に出会った大阪地下鉄のつりさげ広告：
「あいうえおか」次が気になる！好奇心をくすぐる 1 冊
なるほど、うまいこと考えたな！　好奇心という日本語に初めて出会った。
出会いをポジティブにするのが「好奇心」だ。大切なものは「誰に出会ったかではなく、何に出会ったか」それを振り返って考えることが大切だ。出会った時に小さい覚悟が自分の中に芽生えている。それを積み重ねることで成長がある。

（２）「教員を目指した出会い」

「先生と言われるほどの馬鹿でなし」（父の言葉）：先生と呼ばれるひとに、ロクな奴はいない。
教員に導いた「ソフトテニス」と「水俣病」

小学生の時は運動が苦手だった。中学校でソフトテニスを通じて、先生・先輩・友達と出会った。それが今も自分にとっての宝物だ。職業選択の時、教員なら、働きながらソフトテニスができると思った。高校まで本をほとんど読まなかった。高校で初めて買った本が「水俣病」だった。その影響で、環境保安官のような仕事がしたいと思い、理系に進んだ。第２志望で奈良教育大学に進んだが、そのときには教員になろうと決めていた。公害病の事実を知ることを通じて、自然との付き合い方って大事だと思い、理科の勉強をしようと思った。子ども達に伝えることの大事さを考え、教員になる気持ちを強くした。

（３）初めての学級担任としての出会い

最初に赴任した富雄中学校は、1学年12学級のマンモス校だった。教員数も多く、なかなか担任を持たせてもらえない。3年目で初めて担任を持つことができた。自分と同じ干支の1年9組の生徒たちと出会った。知識もないし、経験もない。やっと担任になったというエネルギーだけはいっぱいだった。これから出会う人たちの人生に責任を持たなければならないことを教えられた貴重な出会いだった。

（4）教職員組合との出会い

教員になって、教職員組合に入りましょうと誘われて入った。教職員組合では、教員の労働条件に関わる交渉なども行われていたが、それだけでなく、学校で何を子ども達に伝えるのかについても、いっぱい話しあう機会があった。その一つに部落差別の問題があった。部落差別をなくそうということに異論のある教員はいない。でも、部落差別に対する学校教育での取り扱い方では意見が分かれる。しかし、目の前に子ども達がいる。自分はどうしたらいいのだろうかと思い、地域で社会の問題として取り組んでいる人たちとの付き合い方を考えさせられた。例えば、在日韓国朝鮮人の人たちが本名を名乗ろうという運動があった（差別を受けないために日本名を名乗っていた）。本名を名乗るよう勧めるか、家庭の事情もあるので、学校が介入すべきではないのか、意見が分かれた。しかし、目の前には当事者である子どもがいる。障がいのある児童生徒の修学場所をどこにするかの問題もそうだった。地域の学校と特別支援学校のどちらが、子どものためになるのか。どっちでもいいというような、無責任なことは言えない。人権について自分事として考えていかなければいけないという覚悟ができた。

（5）学校の荒れとの出会い

放課後に教室に行くと、机の上に寝そべってテレビを見ている女子生徒達がいた。何を話したかは忘れたが、言われたことは今も覚えている。「おまえも来年はいないんだろ」。毎年２０人ずつぐらい先生が入れかわる。３年間続けて子ども達を見ている教員の方が少ないという現実。子どもらが、大人を信用していないということだ。転勤を自分から希望することは止めようと決めた。目の前でガラス200枚を割りまくる生徒を前にした無力感。教師を辞めようと思った。それでも「先生、頑張って」という人がいっぱいいる。その人たちのためにも頑張ろうと思った。大人を信用していない子どもには、本気で関わらないといけない。子どもに本気やなあと思わせるまで、やらないといけないと思わせてくれた。本気で向き合わないといけないという覚悟ができた。

（6）全国優勝したい生徒との出会い

この子たちに出会わなければ、避けて通りたい道だった。自分の時間、家族と過ごす時間がなくなってしまう。全国優勝を目指す指導者の覚悟（家族には申し訳ない）だ。自分には一つの夢があり、

チームを作るのであれば、ソフトテニスを全国で一番すきな生徒にしたいと思っていた。それがエネルギーだった。もう一つは、レギュラー以外の子どもたちをどれぐらい大事にできるか、どの部員も自分を大事にしてほしいという願いがあった。「勝ちたい、勝ちたい負けのもと」が合い言葉だった。勝負がかかったときに平常心を保つことがこんなに難しいのかと、直面した。指導者である私は、自分の思ったとおりにならないときに感情的にならないように、子どもを育てると言うことに徹することを学んだ。この子らとで会って、本気で臨んだら実現できることがあると教えてもらった。

（７）教育行政との出会い

初めて経験する縦の組織だった。ぜひ行きなさいと勧めはしないが、経験できる機会があれば経験しておいた方がいい。学校はみんなが同僚だ。でも、行政は違う。組織で動くため、なかなか進まない。学校は法律に決められたことをしている組織であることに気が付いた。役場には色々な役割の人がいる。いろんな人と出会ううちに、何処に何を言えば話が前に進むかがわかってくる。
いつか学校現場に戻ったら、先生方の役に立つ人になろうという覚悟ができた。

（８）校長として地域の人たちとの出会い

損得抜きで地域を愛する人たちに出会えた。子どものために、エネルギッシュに活動している人、子どものために、学校のために、本気で活動する人たちと出会った。このエネルギーの源は何だろう。子どもは地域の宝だと本気で思われている。生きがいを教えてもらった。一生、誰かのために生きていこうという覚悟をもらった。

（９）一般社会から見た教員という職業

「先生のおかげ」と「先生のくせに」

教員は、成長過程で出会う数少ない大人。子どもへの影響力が大きい。子どもの手本となる社会常識のスタンダードだと思われている。だから「先生のくせに」とも言われる。「学校の常識は世間の非常識」ということもある。そう言われないようにしようと言い合っていた。
先生という仕事とはと聞いても、「きつい」「尊い」「難しい」、といったアバウトな言葉しか返ってこない。完成形のない仕事だ。「いい先生」とか「悪い先生」とか言うけれど、「いい先生」ってどんな先生だろう。画一的な答えはなく、人それぞれ幅がある。　一方、こんな先生は嫌だは、共通している。インターネットの情報だが、

第５位：自分の考えを一方的に押し付けてくる
第４位：生徒を馬鹿にしたいい方
第３位：生徒に厳しいが自分に甘い
第２位：その日の機嫌で態度が違う
第１位：えこひいきする先生　　だ。

これにあてはまらないと、だいたいいい先生だということ。当てはまる先生も、実は自分をスタンダードだと思い込んでいる。自分の価値観を客観的に見つめ直し、追究することを求められる仕事。個性は大事だが、このベースの上に個性があることを認識してほしい。自分をどれくらい客観的に見

ることができているかを、いつも点検しておく。

（10）参考に

教員という仕事は、4月1日になったら研修期間なしに「プロ」（専門家）デビューという怖さがある。子どもからは先生と呼ばれ、保護者からはよろしくお願いしますと言われる。以前、奈良県には教師塾というものがあった。そこで、採用1・2年目の先生方「新任教員」たちがつくった「はじめの一歩」がある。（「奈良県先生応援サイト：http://www.nps.ed.jp/ouen/data.html」）

新規採用教員のための常識ノート

とくに「はじめに」がいい。「教師としての第一歩は、同時に社会人としての第一歩でもあります。保護者や地域、同僚といい関係を築いていくには、ちょっとした気配りや心配りが必要です。」「皆さんは、決して一人ではありません。」　一度、見ておいてほしい。

（11）皆さんが出会う子ども達が生きる社会について

愛する子どもが生きる社会（小学生で約7～10年後）、中学生で（4～7年度）

どんな力をつけておいたらいいのかを予想する：時代の変化が厳しい！

10年前はスマホが普及

20年前　カメラ付き携帯、インターネットに接続

30年前　携帯電話が普及し始めた

子どもが生きる社会はどんな時代か。その社会を予想して、力を付けておいてあげないといけない。3年前に、科学技術基本計画が策定された。ソサエテイ5.0。国家戦略だから実現していく。そこでは、自動運転やAI家電が当たり前に。

遠隔診療、ドローン宅配、スマート農業、会計クラウド、無人走行バス、

今、無いから便利だと思える。でも、未来の子どもたちは「この便利」が当たり前になっている。この「便利」から失われるものを知っておく必要があるだろう。

「スマート社会への対応は、スマートでない学校生活」

何が変わるかを明確にしておかないと、その時代になると、皆さんが教えていた子どもは大人になってしまっている。皆さんが出会った時に、必要とされるであろう色々な力を付けておいてあげないと行けない。ソサエテイ5.0のメインになってくるのは、ビッグデータと人工知能だ。これは最適解を考えてくれる。それと相反するのが試行錯誤だ。自分と違う人やモノと関わることで試行錯誤ができる。試行錯誤するには人との関わりが必要であり、それをする場所が「学校」だ。学校にも様々な問題がある。でも、ここでしか成長できないものもある。

人工知能にできること：事実のみを見る、共通点をさがす　疲れない

人間にしかできないこと：事実以外を見る（夢や希望、生きている認識）、生きがい

個別性を見つけて、個性を尊重し、協働できること。

人間にしかできないことができる力をつけといてあげないといけない。

人間は、疲れる。でも、疲れるから工夫したり発明したりする。

機会に対して受動的になってしまってはいけない。

ひらめき・創造・協調・共生ができる力をつけておく必要がある。

（12）日本の教育の方向性

文部科学省も、子どもを動かし、保護者を動かし、地域を動かす、コミュニティスクールを勧めている。コンピュータや情報機器に使われない人を育てる、受動的にならない、何でもうのみにしないためにプログラミング教育が導入された。少子高齢化でグローバルが教室の中にやってくる。だから、

話す・聞くを大事にした英語教育が必要になる。外国人労働者がいないと成り立たない社会になっていく。日本語が話せない子どもが教室にいる時代がすぐそこにきている。

そういう社会で対応できる子どもたちを育てるのがみなさんの役割だ。

（13）みなさんに期待すること

プロの役割　その子が自分の力で育っていく力をつけていく仕掛けをする側になる

賢く仕掛けて、勇気をもって待つ。

どんなタイミングでどんな言葉かけをするといいのかという方程式はないけれども待つ勇気は必要。先生は主役ではない。主役は子どもであることをいつも心に留めておいてほしい。

試行錯誤の中で心が育っていく学校にしていってほしい。教員になると、たくさんの個性に出会うことになる。丁寧な出会いを繰り返してほしい（どうでもいい子は一人もない）。「出会い」を拾える感性を育てていってほしい（意識することで育つ）。気が付かなければ何事もなく通り過ぎていく。それはいい先生になるためでもあり、子どもたちを幸せにするための「判断材料」を集めること。判断材料が多いほど、的確なアドバイスができるはず。

丁寧な出会いに必要なのが「好奇心」だ。出会いには喜怒哀楽が付いてくる。しんどい出会いもある。けれども、教員生活に決して無駄な出会いはない。その後に出会う子ども達に返すことができる材料になっていく。

今持っている価値観に閉じこもらないで、いろいろな出会いをしてほしい。好奇心をもってポジティブな出会いの中で成長していきましょう。　わくわく感をもって学校現場に出て行ってほしい。

第５回学ぶ喜び・ESD 連続公開講座　概要報告

奈良教育大学　　中澤　静男

◇開催日時　　令和元年 12 月 12 日（木）19 時～20 時 30 分
◇会場　　次世代教員養成センター多目的ホール
◇参加者数　　６３名
◇内容　　「子どもの学びと先生のやる気に火をつける」
　　講師：江東区立八名川小学校　前校長　手島　利夫　氏

〇講演前のアクティビティ

教員にとっては、思考力・判断力・表現力を見極める力が大切である。

・壁新聞のコンクールを例に

壁新聞を比較する視点

思考力・判断力・表現力　　学習指導要領でこれから大事にしていこうとするところでもある

思考力に関して：それを自分なりに消化して、自分の学びの旅があるか

判断力に関して：判断のデータを自分で集めて、役立てているか

表現力に関して：伝えたい内容を的確に表現しているか

全体の印象：伝えたい内容を限られたスペースの中で工夫しているか

１．これから必要とされる教育について

保護者の願いは、健康で賢く、思いやりのある子になってほしい、しっかりした知識・学力も身につけてほしい、いい大学にも入れたいというものがある。このような一部の保護者の願いを受け、「徹底指導をします」、「わかるまで帰しません」といった、読み・書き・ソロバンのような基礎基本の徹底など、とにかく学力向上に走った学校もあった。

一方、ESD に取り組んだ学校では、学力学習状況調査の結果が大きく改善しているという事実がある。学力観の変化に、日本の学校が対応できていないのではないか。

尾木直樹氏：日本の教育は世界でどのようにみられているか。

・アジア大学ランキングでの位置が下がった。それは海外の国々があがったから。
・アジアの各国は知識ベースの教育からコンピテンスベースの教育（21 世紀型）に切り替えた。
・日本は切り替えることができなかった。
・労働生産性でも上位国の半分程度になってしまっている（生産性の低い人たちの会社）。
・大学ランキングの低下は国際競争力の低下につながっている。
・過去型の学力から抜け出せないことが原因　国内に広がる貧困もその結果であろう。

社会そのものが変わってきた

・気候が変わってきた。東京で高潮発生時に海面より低いところに 290 万人が住んでいる
・温暖化が進んでいる。逃げ場はない。

→　世界中が SDG s を達成してなんとかしようとなっている

世界の条件がかわればものごとの正解もどんどん変わる。求められる人間像も大きく変わってきて

いる。　→　日本の教育も変えなくてはならない。令和の時代は創造化・共生の時代である。

かつて、ゆとりの中で生きる力を育むと、国をあげて教育改革に取り組もうとした。そのシンボルとして総合的な学習の時間が開始された。しかし、学力低下批判・ゆとりをつぶせという逆風があり、総合的な学習の時間の授業間数が減少されつつある。令和となり、新学習指導要領の全面実施、大学入試改革として国語・数学の入試における論文の導入などが図られつつあるが、また同じ動きが見られる。マークシート方式の方が公平だというものだ。マークシートで出せるような答えしか書けない大学生にどんな価値があるのか。「世界のゴミ」と言われるかもしれない。昭和の学力がいつまで通用すると思っているのか。

２．カリキュラム・マネジメントについて

教育には、個人的側面と社会的側面の２つの役割がある。個人的側面とは、個人の成長を目的とし、自分のよさや可能性を認識できるようにすることである。一方、社会的側面とは、社会人としての役割を担う力を育てるものであり、持続可能な社会の創り手を育成することである。

新学習指導要領においても、「生きる力」を育むことは変わらない。文部科学省では次の３つを「生きる力」と定めている。

１．課題解決に必要な思考力・判断力・表現力
２．豊かな心や創造性
３．健康

総則には、教育課程の編成において気をつけることとして、教育課程の実施において、総合との関連を図り、教科横断的に学ぶためのカリキュラム・マネジメントの重要性が指摘されている。また、授業改善の方向性として、主体的対話的で深い学び、探究的・問題解決的な学びが指摘されている。カリキュラム・マネジメントとは各教科を総合で横ぐしをいれて、つなぐことだ。将来どうやって生きようか（12 年後の私）という、キャリア教育との接続も視野に、カリキュラムをつないで楽しい学びにすることがカリキュラム・マネジメント（チームでやる）である。特に中学校では教科の壁を切り崩す必要があるだろう。

また、視点を持ってつなぐことも重要だ。八名川小学校では、環境、国際的な教育システム、多文化理解、人権・命の教育　の４つの視点でつないでいる。ESD カレンダーは作成することが目的化してはいけない。ESD カレンダーと具体的な指導計画をセットにすることが重要だ。実際に授業実践をしながら作っていく。１年にいくつもの単元開発できるはずがない。無理を強いたらよその ESD カレンダーをコピペして、内容のともないものを作るだけだ。毎年少しずつ作っていくという姿勢で進めていく。

３．教育の方向性について

到達型・達成型の目標から方向目標へシフトすべきだ。変化の激しい社会おいては、目標を固定的に定めた、到達型・達成型の評価はなじまない。そこまでしか達成できていないけれども、目指す方向が間違っていなければ、それでいい。幅を持たせた方向目標を大事にしたい。

学習指導要領の総合的な学習の時間編に、基礎・基本の知識・技能の習得と活用を軸とした学びのサ

イクルが示されているが、ひとつ抜けていると思う。学びを子ども自身が、自分事としてとらえることで、学びのサイクルがはっきりしてくる。

学習規律を守らせ、ベーシックドリルだけやっていればいいというのは時代遅れだ。子どもの学びに火をつけることが大切（出会う・気づく・問題意識をもつ）だ。子どもを本気にできる教員になってほしい。課題の設定をきちんとやれば、子どもの学びは向上していく（しないとはい回るだけで終わる）。

・具体的な支援を指導案に書き込める先生が「できる教員」

・子どものつぶやきをうまく拾うことができる先生

・五感を働かすことができる場面を設定する。

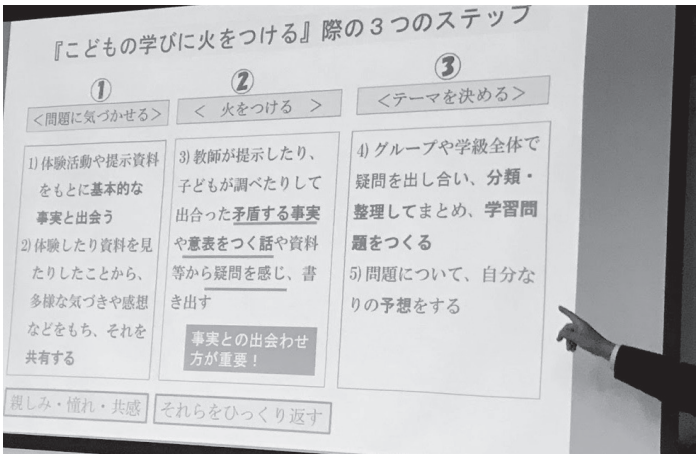
指導書に書いてあることは、一般的なことばかりで、子どもを本気にできない。切実感のある課題、五感を働かせることができる体験的な学習によって、学びが他人事じゃなくなる。子どもの学びに火をつけるために

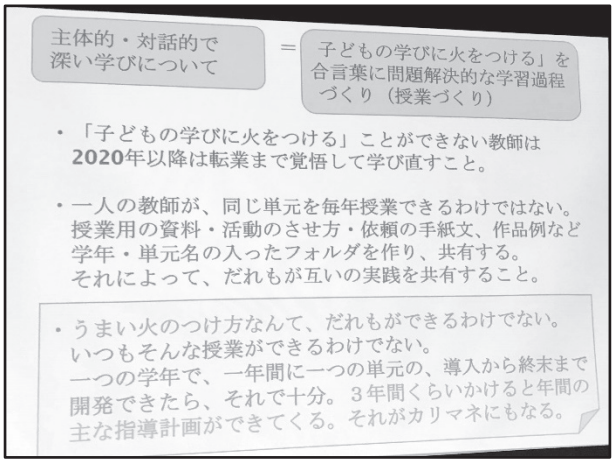
・どのような事実とどのように出会わせるのか。

・そこに驚きはあるのか。えーっという驚きが必要

・疑問をカードに書いてクラスでまとめて学習課題にする。

うまい火の付け方なんて、だれもができるわけではない。いつもそんな授業ができるわけではない。３年間くらいかけると年間の主な指導計画ができてくる。発表の場を作ってあげると子どもは頑張る。学校全体で取り組み、発表の場を見合うことで、上学年の学習に対する「あこがれ」、下学年から見られることによる「高学年としての自覚」により、毎年、発表のレベルがあがっていく。





令和元年度　近畿ＥＳＤコンソーシアム

学生によるＥＳＤ活動支援（ＥＳＤ実践）

英語教育専修　修士２回生　谷垣　徹

近畿 ESD コンソーシアムでは学生を対象に「ESD プログラム（ESD ティーチャー認証制度）」を展開しており、ESD を実践できる教員の養成に取り組んでいる。本プログラムは、①所定の科目の履修、②ESD 演習（ESD・学ぶ喜び連続公開講座、ESD セミナー等）への参加、③ESD 実践への参加、④ESD 学習指導案の作成から構成されている。令和元年度は ESD 実践（学生による ESD 活動支援）として、以下の計 52 の活動を実施し、のべ 277 人の学生が参加した（令和元年２月現在）。

◆コンソーシアム主催活動

活動名	実施日	参加学生数
第３回集まれ！ESD 子ども広場	11 月 17 日（日）	47 人
岡山県災害復興支援ボランティア（昨年度より継続）	第 12 隊	４人
	岡山倉敷スタディーツアー	18 人
木頭ゆず収穫ボランティア	11 月９日（土）～10 日（日）	４人
陸前高田市文化遺産調査団	９月 13 日（金）～16 日（月）	６人

◆ユネスコスクール支援

活動名	実施日	学校名	参加学生数
野外活動支援	計 13 件	奈良市内小学校 11 校 奈良市スポーツ少年団 奈良市東部５館交流キャンプ	計 96 人 ※事前指導を含む
ユネスコ委員会	計２回	奈良市立富雄第三小中学校	計４人
親子燈花会	８月２日（金）	奈良市立済美南小学校	６人
	８月５日（月）	奈良市立飛鳥小学校	６人
カヌー体験教室	８月３日（土）	奈良市立飛鳥小学校	10 人
放課後子ども教室（ICT 支援）	計２回	奈良市立平城西小学校	計５人
ユネスコ・世界遺産学習支援	計３回	奈良教育大学附属幼稚園	計 12 人
冬の奈良めぐり（ESD フィールドワーク）	11 月６日（水）	奈良教育大学附属中学校	８人

◆構成団体との連携

活動名	実施日	主催	参加学生数
東大寺寺子屋	８月 20 日（火）～22 日（木）	東大寺	10 人

東大寺万灯供養会	８月 15 日（水）	東大寺	14 人
世界遺産を体感　東大寺に泊まろう	10 月 25 日（金）～27 日（日）	NPO 法人奈良地域の学び推進機構	８人
子どもおん祭り	11 月 25 日（日）	NPO 法人宙塾	２人
平和の鐘を鳴らそう	８月６日（火）	奈良ユネスコ協会	４人
	８月９日（金）		
絵画展「絵で伝えよう！わたしの町のたからもの展」	11 月 17 日（日）	奈良ユネスコ協会	１人
ヨシ刈り体験ツアー	１月 26 日（土）		１人

◆その他

活動名	実施日		主催	参加学生数
奈良市子ども会議	第１回	７月 23 日（火）	奈良市子ども政策課	１人
	第２回	７月 25 日（木）		３人
	第３回	７月 30 日（火）		１人
	第４回	８月１日（木）		１人
	第５回	８月６日（火）		
	第６回	８月 19 日（月）		１人
英語パフォーマンス甲子園	９月８日（日）		公益社団法人ソーシャル・サイエンス・ラボ	４人

近畿 ESD コンソーシアム　第３回「集まれ！ESD 子ども広場」実施報告書

社会科教育専修３回生　仲村　幸奈

１．目的

奈良教育大学では、『地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト』の一環として、奈良市内のユネスコスクールに通う小中学生を対象とした、ESD を体験的に学ぶ１泊２日の宿泊活動として、「ESD 子どもキャンプ」をこれまでに６回実施してきた。平成 30 年度からは、近畿 ESD コンソーシアム事業として、日帰りで ESD を体験的に学ぶ「集まれ！ESD 子ども広場」を実施している。

また、本事業の目的は次の二つである。

(1) ESD（持続可能な開発のための教育）を楽しく体験的に学び合う。

(2) 子どもと関わる活動を通して、教員を目指す上で必要な資質・能力を身につける。

２．開催日　　令和元年 11 月 17 日（日）

３．開催場所　奈良教育大学キャンパス内及び奈良公園周辺

４．参加者　　奈良市内や京都府の小学校に通う児童（３年生～６年生）11 名
　　奈良市内や京都府の幼稚園等に通う幼児　　７名
　　大学生、大学院生　　47 名
　　教職員　　３人

５．テーマ　「みのり～思いをみのらせ、君の理想を～」

６・日程

【小学生】

時間	活動
8：30	参加者受付開始
9：00～10：00	オリエンテーション ・アイスブレーキング・班活動の時間・テーマソング練習
10：15～12：15	フィールドワーク
12：15～12：50	昼食
12：50～14：00	昔の生活体験（洗濯）
14：00～15：00	幼児と遊ぼう
15：10～16：05	ESD 勉強会
16：15～16：45	さよならの集い
16：45	解散

【幼児】

時間	活動
13：00	参加者受付開始
13：15〜13：30	オリエンテーション（ペープサート） ・アイスブレーキング
13：30〜13：45	ポシェット作り
14：00〜15：00	小学生と遊ぼう
15：15〜15：30	さよならの集い
15：30	解散

7．参加学生の役割分担

（企画班）　　◎：代表

実行委員会	◎西條	○山本	谷垣	仲村	後藤	久保
オリエンテーション	◎下垣内	坂本	岡本(英)	市川	柳川	
フィールドワーク	◎狗飼	奥田	長滝谷	氏家	チャ スンフン	
昔の生活体験	◎桑田	伊藤	種瀬	稲原	南方	
幼稚園児交流	◎畑下	櫓	林	井原	山口(春)	

（当日）　　◎：代表

運営班		◎西條	山本(健)	仲村	後藤	久保	下原
		櫓	奥田	種瀬	畑下	狗飼	岡本(英)
		桑田	林	稲原	井原	氏家	岡本(真)
		加藤	木村	熊野	小林	阪中	住釜
		辻	長滝谷	根本	南方	山口(竜)	山口(春)
		山本(幸)	チャ スンフン				
活動班	１班	◎坂本	野村	橋本			
	２班	◎下垣内	稲富	佐藤			
	３班	◎伊藤	市川	内山			
	幼児班	桑垣	福井	福永	横大路	松村	

8．活動の概要

【小学生】

(1) オリエンテーション

オリエンテーションでは、今日初めて出会った友達と親睦を深め、そして緊張をほぐす目的の元、いくつかのアイスブレーキングを行った。アイスブレーキングでは、後のプログラムで行われる洗濯体験に繋がるような展開構成になっており、子どもたちに楽しく簡単に昔の暮ら

しを伝えることができた。アイスブレーキングの後には、班活動の時間を設け、班のコールや子どもリーダーなどを決めた。これには、活動班の仲を深め、士気を高める役割があった。個性溢れる班のコールがたくさんあり、非常に面白かった。また、声を出す班コールを決め、発表したことにより子どもたちの大きな声を聞くこともできた。最後には、テーマソング練習を行った。去年の本イベントにも来てくれていた子どもが一人おり、「知っている」と言って先頭を切って歌ってくれていた。非常に嬉しかった。

時代を超えた洗濯の仕方を知る

(2) フィールドワーク

奈良公園にある自然を実際に自分の目で見て肌で感じることで、自然に興味を持ってもらおうという目的でネイチャーゲームを行った。導入でも学生が YouTuber になりきり、フィールドワークを進めていくなどと子どもたちの身近を意識した構成になっていた。ゲームの内容としては「？ボックス」に入った植物を手で触り、その植物が何の植物なのかを実際に探すというものである。子どもたちは、班内で絵を描くなどして触った植物が何なのか予想を立て探しに出ていた。見つけたときは嬉しそうなに他の人にアピールしたり、たくさん拾ったりなどと自然の中で楽しむ子どもの様子を見ることができた。また、次の企画「昔の生活体験」に繋げるために、最後ムクロジに焦点を当てゲームを行った。この後、そのムクロジがどうなるのか子どもたちは不思議な様子だった。次の企画に上手く繋げることができた。

植物についての説明を聞きメモを取る子どもたち

(3) 昔の生活体験

フィールドワークで学んで持って帰ってきた「ムクロジ」を使って、洗濯体験を行った。ムクロジは昔洗剤として使われており、自分たちで作ったムクロジの洗剤で「洗濯板と洗濯桶」を使って、汚いタオルを洗濯した。日ごろ、家では洗濯機を使って一瞬で終わっていた工程が、その道具がなければいかに大変なものかを体験した。最初は、「楽しい」と一生懸命綺麗にしようと洗っていた子どもたちも、「疲れてきた」などと大変さを感じていた。

一生懸命洗濯板を使って洗濯する様子

また、ただ洗うのではなく、「昔の良いところ」や「今の問題点」などについても考えながら体験してもらうことで、次のESD勉強会に繋がるように取り組んだ。

(4) 幼児と遊ぼう

今まで別行動を行っていた幼児とここで交流を行った。幼児が多目的ホール内に入ってくると、小学生は自分の班のお友達の名前を大きな声で呼び優しく迎え入れていた。初めに、アイスブレーキングを行い、幼児との交流を図った。そして、幼児から小学生のお兄さんお姉さんに、自分たちが作ってきた「ポシェット」を自慢し、作り方を幼児が教えながら一緒に制作した。最後に、全員でムクロジを使ったシャボン玉を行った。小学生が幼児の手をひく姿や、なかなかシャボン玉が上手くいかない幼児に吹き方などを教えている小学生の姿を見ることができた。お互いに今日学んできたことを、伝え合える非常に良い時間となった。

みんなで仲良くシャボン玉

(5) ESD勉強会

ESD勉強会では、昔の暮らしの良いところ・悪いところや今の暮らしの良いところ・悪いところを考え、昔の暮らしの良いところなどをヒントに今の暮らしの「弱点」を「強み」にするために自分たちができることは何かを考え、発表した。まず、昔の暮らしについて１日を通して知ったものや体験したもの以外にも知ってもらうために、昔の道具などを伝えた。そのうえで、今日の体験を通して感じたことなどをワークシートに書いてもらい、班で変えていけることはないか話し合った。この勉強会は、子どもたちにとっては少し難しいかもしれないという懸念があった。しかし、私たち学生が考えていた以上に一生懸命考え、「自分事」として捉え、今すぐにでもできることを子どもたちは考えてくれた。そして子どもたちは、昔の人たちが今の私たちに伝えてくれた良さを今度は私たちが未来へと伝えていくこと、これからの社会がもっともっと良くなるように自分が行動していかなければならないと学んだ。

話し合いの様子

(6) さよならの集い

本企画では、一日の活動を総まとめし、全員で別れを惜しみながらテーマソングを歌った。オリエンテーションの時に比べると、子どもたちは歌詞にもメロディーにも慣れ、大きな声と笑顔で歌えるようになっていた。一日を通して何度も歌った成果をしっかりと感じることができたように思う。そして、私たちユネスコクラブの学生からのプレゼントとして、「See you

again」という歌と「ムービー」を送った。活動班の中では、メッセージ交換を行い、一日ともに過ごした仲間への感謝などを真剣に書いていた。また、司会をしていた学生が迎えに来てくださった保護者への挨拶を行った。子どもたちの命を信頼して預けていただいたことへの感謝を改めて感じた。最後は子どもたち一人ひとりを出口まで見送った。学生は、大きな怪我をさせることなく子どもたち全員を無事に帰すことができた安心感と達成感を噛み締めていた。

学生からのプレゼント「ムービー」

【幼児】

(1) オリエンテーション

幼児の本イベントは、一日を通して「ペープサート」を用いて進んでいった。オリエンテーションでは、うさぎさんとくまさんが登場し、自己紹介や今日初めて出会った友達と親睦を深め、そして緊張をほぐす目的の元、アイスブレーキングを１つ行った。後の小学生との交流の時間で、シャボン玉で遊ぶことを踏まえて、幼児にもムクロジを使ったシャボン玉について、うさぎさんとくまさんから伝えた。シャボン玉の歌を歌う場面などでは、大きな声で一生懸命歌っている姿が非常に嬉しかった。

うさぎさんとくまさんを呼んでいる

(2) ポシェット作り

小学生のお兄さんとお姉さんにこの後教えることになるポシェットをみんなで作った。活動班で「うさぎさん、くまさん、ふくろうさん」という３匹の動物に分かれており、自分の班の動物をポシェットに貼っていくという作業を行った。どんな目玉を付けようかな、位置はどこにしようなどと自由に考え、制作したことでオリジナルのポシェットを作ることができた。

どんな目玉にしようか選んでいる幼児

(3) 小学生と遊ぼう

今まで別行動を行っていた小学生とここで交流を行った。行った概要は、小学生のところに記載した内容と同じである。初めて会うお兄さんお姉さんに緊張している子や怖くなってしま

いお母さんのところへ行ってしまう子もいれば、新しいお友達が増えたと嬉しそうに話しかけに行く子もいた。アイスブレーキングやシャボン玉遊びと楽しいことを行っていくうちに、打ち解け小学生よりも積極的に楽しんでいる様子も見られ良かった。最後は、小学生に歌のプレゼントをいただき、花道を通って帰っていった。

じゃんけん列車準決勝

(4) さよならの集い

一日を通してのプログラムでの最後となる本企画では、学生からムクロジを使ったシャボン玉液の作り方をプレゼントした。また、床に敷かれた大きな模造紙に、「楽しかったこと」「面白かったこと」「印象に残っている思い出」などを絵にして表すという活動を行った。幼児たちは、今日あったことや思ったことを自由に絵で表していた。学生が「これは何？」などと聞くと嬉しそうにその思い出などを語る幼児に、私たちまで嬉しくなった。

思い出を絵に表そう

9．成果と課題

【成果】

- 子どもたちがこれから自分たちにできることについて、しっかりと考えることができていた。
  ⇒子どもたちに学んでほしいことをしっかりと企画にすることができていた。
- タイムマネジメントをしっかりと行い、予定通りの時間に本企画を終えることができた。
  ⇒活動時間にずれが生じることがなかったことから、所要時間の想定が上手くいっていた。
- 学生同士の雰囲気がよかった。
  ⇒３回に及ぶ事前研修をしっかりと行い、企画に対してだけでなく学生だけでアイスブレーキングに取り組むなどと工夫をしていた。

【課題】

- 学生の人数が多く、手持無沙汰になってしまっている学生がいた。
  ⇒実際やることがなく、割り振るのも難しかった。学生の人数の規模も来年度は考える必要があるだろう。
- 企画を作ることに必死になりすぎてしまい、事務的な仕事（物品・開催要項等）を直前になって慌てて行ってしまった。
  ⇒余裕を持った計画が必要である。
- 子どもの人数が第一次募集締め切りまででは、十分に集まらなかった。
  ⇒もっと子どもが興味をひくチラシを作成する。申し込み方法を考え直すなどと、来年度先生方とも話し合って改善したい。

令和元年度　近畿 ESD コンソーシアム・学生企画活動支援事業
第２回 ESD 実践勉強会『岡山倉敷スタディーツアー』実施報告書

英語教育専修　修士２回生　谷垣徹

1.　目的

「ESD 実践勉強会～古都奈良からみらいへ～」は、本学学生への ESD 及び SDGs の更なる普及を目指し、平成 27 年度より実施しており、今年度で５年目を迎える。今年度は「防災」をテーマに設定し、本学学生の防災意識の向上及び有事に助け合うことのできるネットワークの構築を目的として企画・運営を行っている。本スタディーツアーは、昨年度本学ユネスコクラブ部員を中心に取り組んだ「西日本豪雨災害復興支援ボランティア」の実績を基盤としており、本事業の第２回にあたる。

本スタディーツアーの目的は次の２つである。

（１）西日本豪雨災害復興支援ボランティアで築いた関わりを、防災ネットワークとして今後も持続可能なものにする。

（２）災害から一年以上が建つ町の視察を通して、災害の被害が一時的なものでないことを知る。

2.　主催　　近畿 ESD コンソーシアム、第２回 ESD 実践勉強会実行委員会

3.　協力　　真備町写真洗浄＠あらいぐま岡山

4.　講師　　川辺復興プロジェクトあるく　代表　槙原聡美氏、副代表　松田美津枝氏
倉敷市真備町川辺地区　現地住民の方

5.　開催日　　令和元年 12 月７日（土）～８日（日）

6.　活動場所　真備町写真洗浄＠あらいぐま岡山　元田集会所（倉敷市真備町箭田 1139-3）
まび復興ボランティア団体・NPO シェアオフィス「まびシェア」
（倉敷市真備町有井 94 番地 A-205）
国立吉備青少年自然の家（加賀郡吉備中央町吉川 4393-82）ほか

7.　参加者　　奈良教育大学に在籍する学生・大学院生　18 名

8.　行程表

【１日目】令和元年 12 月７日（土）

時間	活動内容	場所
5:50	参加者集合・受付 バス移動（休憩２回）	近鉄奈良駅行基像前 西宮名塩 SA、吉備 SA
9:50	真備町到着	
10:00～12:00	写真洗浄ボランティア①	真備町写真洗浄＠あらいぐま岡山 元田集会所
12:00～13:00	昼食	
13:00～15:30	写真洗浄ボランティア②	
17:00～17:30	施設到着 入所式、入室	国立吉備青少年自然の家
17:30～18:30	夕食	レストラン
18:30～19:30	入浴	大浴場
19:30～21:30	活動の振り返り	宿泊室ふゆ
21:30～22:00	交流会	
22:00	就寝	

【２日目】令和元年 12 月８日（日）

時間	活動内容	場所
6:45～7:45	起床、荷物整理 清掃（宿泊室・洗面所）	宿泊室ふゆ
7:45～8:00	朝の集い	
8:00～8:45	朝食	レストラン
9:20	施設退所 バス移動	
10:30～11:45	講演 　川辺復興プロジェクトあるく 　代表　槙原聡美氏	まび復興ボランティア団体･NPO シェアオフィス「まびシェア」
11:55～12:50	対談 　地域住民の方々、奈良教育大学学生	
12:50～13:40	昼食	
13:45～14:40	ワークショップ 　奈良教育大学１回生	
15:00～17:30	倉敷美観地区見学	倉敷美観地区
17:50	出発 バス移動（休憩２回）	吉備 SA、西宮名塩 SA
22:00	近鉄奈良駅帰着、解散	

9.　活動の概要

①写真洗浄ボランティア

今回のスタディーツアーでは、ボランティア活動として写真洗浄を行った。写真洗浄にはいくつかの手順があるが、私たちが主に担当したのはアルバムの台紙からの写真の切り出しである。カッターを使って表面のフィルムだけを切り取り、写真を剥がして裏面の泥やカビを落とす作業であったが、写真を傷つけないように扱うことは難しく責任を感じた。作業を行いながらスタッフの方の話を聞いて、写真を綺麗にする事で楽しい思い出を蘇らせるだけではなく、災害の記憶を残すことにもなるというのが印象的だった。写真の中には状態が悪く、復元は難しいものもあったが、作業を続けるうちに少しでも写真を綺麗にして返したいという気持ちが大きくなった。災害からしばらく経過して、人々は精神的な支えを求めているように感じた。建物などの復興が進んでも、被災された方々の生活や気持ちは簡単には回復しない。現状として写真洗浄の活動が続いているように、内容は変化しても継続的な支援はこれからも求められると考えた。

写真洗浄ボランティアの様子

（家庭科教育専修１回生　氏家小巻）

②活動の振り返り（１日目）

１日目の振り返り交流会では、（１）写真洗浄ボランティアに参加した中で感じたこと、考えたこと、（２）マスメディアから得ていた現地に関する情報と、実際に現地で目にしたものを関連付けて考えたことについて全体で共有した。

１日目の振り返りの様子

（１）の写真洗浄ボランティアの振り返りについては、自分が災害復興支援ボランティアに関わることに対して、初めは怖いイメージがあったが、小さな力でも自分にできることがあって、皆でやれば大きな力になると感じたという意見があった。また、災害復興支援と言えば物資などの支援のイメージが先行してしまいがちだが、そのような形の支援だけでなく思い出の写真などを洗浄することで、被災された方々の一生の大切な思い出を取り戻すことができることが分かったという意見も出た。

（２）のメディアと現地で見たものの違いについては、メディアで報道される情報だけでは分からないこと、現地に自分の足で行き、自分の目で見て肌で感じることで初めて分かることがあるという意見が多く出た。実際に岡山に来たことで参加者の災害に対する認識が大きく変わったと感じた。また、これらの学びや感じたことを自分の中で終わらせるだけでなく、周りに伝えることの重要性を感じたというような意見も多く出た。

（音楽教育専修２回生　狗飼菜々子）

③講演

２日目は会場をまび復興ボランティア団体・NPO シェアオフィス「まびシェア」に移し、川辺復興プロジェクトあるくの代表・槙原氏よりご講演をいただいた。内容は下記「10. 講演の記録」を参照。

④対談

講演に続いて、真備町で被災された地域住民の方をお招きし、参加学生との対談を行った。この住民の方は、昨年度本学ユネスコクラブを中心に行っていた「西日本豪雨災害復興支援ボランティア」で何度も訪れ、お世話になった方である。発災時の様子やその後の避難行動、被災後の復興の過程やボランティアとのかかわりなど、詳細にお話しいただいた。参加者全体での対談の後、小グループに分かれ、地域住民の方に入っていただき、当時の状況や経験について、より具体的にお話しいただいた。報道などで耳にする被害の情報だけでなく、よりリアルな話を住民の生の声で聴くことができ、またボランティアの意義やありがたさ、その反面実際に経験された辛い経験などもお話しいただき、参加した学生たちにとって日所に有意義な時間となった。

グループで体験談を聞く様子

（英語教育専修　修士２回生　谷垣徹）

⑤ワークショップ

１回生が企画したワークショップの様子

今回のワークショップは１回生が主体となって、様々な災害の状況下で自分以外の人たちの気持ちを考え、災害時の協力に繋げることを目的として行われた。まず、災害発生時の状況を「学校・街中・在宅」に設定した。そこで、例えば学校では生徒児童、街中では修学旅行生、在宅では単身高齢者がどのような行動をとるのかを想像した。さらに、時間軸を設定してそのような人たちが「災害前・災害直後・災害発生から１週間・１ヶ月」にどのようなことで困り、どのような行動をとるのかを想定し「持続する災害」という観点からも考えを深めた。このワークショップを通して、このスタディーツアーに参加してくれた人たちが視野を広げて、自分だけでなく周囲の人たちのことにも気を配ることで一つでも多くの命が助かってほしいと思う。

（英語教育専修１回生　稲富麻莉）

⑥倉敷美観地区見学

倉敷美観地区の見学の様子

２日間の最後のプログラムとして、倉敷美観地区を見学した。私は倉敷美観地区の見学を通して２つのことを感じた。１つ目は、観光地としてかなり整備されていたことに驚いたことだ。似たような観光資源である奈良町と比較すると、道が整備されていたり、区画が整備されていたり、建物が整備されているなど、観光資源としての機能を備えた地域として完成されている。また観光資源としての機能だけでなく、昔ながらの景観も大切にした整備がされている。様々な飲食店やお土産屋さんなど、美観地区の景観や雰囲気、倉敷市の特産物を存分に活かしたものが目白押しなので、観光客を楽しませるギミックが満載であることも美観地区ならではだと思う。

その一方、２つ目は、景観が維持されていることやそれを観光資源として活かしていることが必ずしもESD的に正しいとは言えないのではないかと感じたことだ。美観地区は、上記のように観光地としての機能は十分にあるが、日常生活との共存があってこそ本来の景観や雰囲気を作ることができるのではないかと思う。日常生活との共存があることで、つくりものではなく、本当の人々との暮らしぶりの雰囲気を作ることができる。それは後に住み続けられるまちづくりにつながると考える。なぜなら、長年続く街並みを、人々との生活とともに引き継いでいくということは、住み続けられる原点のようなものを引き継ぐことになるということだと思うからだ。そのように考えると、逆に奈良町の良いところが見えてきて、また見直すべきこともわかり、似たような資源同士での互いの良いところや改善すべきところを見つけていくべきだと感じた。

（特別支援教育専修２回生　下垣内渉平）

10. 講演の記録

講師：川辺復興プロジェクトあるく　代表　槙原聡美氏

【１.『あるく』ができるまで】

〇被災直後の川辺の状況

・川辺地区の 99%が床上浸水
・真備町内の災害者数 51 名（関連死を除く）そのうち６名が川辺地区住民
・川辺地区には水害時の避難所がない
・小学校や真備公民館川辺分館も被災、物資や支援・情報が届きにくい
・ほぼすべての住民が、川辺地区から離れることになる

〇LINE グループ「川辺地区みんなの会」の立ち上げ

・物資や避難所、道路の開通状況等の情報共有
・現在では 550 人が加入
・オンラインアンケートの実施（５回）

第１回　川辺に戻りたい
　→90.4%が「川辺に戻りたい」⇒人との繋がりが必要！
第２回　食事について
　→自炊できない理由のトップは「気力」と「時間」
　　被災による喪失感、生活の立て直し&片付けに追われる日々
　⇒炊き出しが大切な交流の場に！
第３回　台風 25 号の避難勧告時の対応について
　→65%の人が町内の自宅にとどまった。
第４回　今までの支援の振り返りや今必要なこと　困りごとや課題など
　→川辺に戻る意向 90.4%→91.6%　戻らないと決めた人も
　　安全・安心・環境についての不安が大きい
　　「してほしい」→「自分たちにできること」に
　　自首防災組織の形成、逃げ遅れゼロに、子どもの見守り、高齢者・災害弱者の見守り

〇交流スペース・居場所づくり　川辺復興プロジェクト「あるく」活動開始

・スタッフ 19 名（女性 15 名、男性４名）
・みなし仮設住宅から通いながら活動

【２．今までの活動紹介】

・地域交流スペースと０円フリーマーケットを毎日９時から 12 時までオープン
・情報収集や情報の共有（グループ LINE やあるく掲示板など）
・住民が集い、つながりを持つことができるような仕掛け（イベント）の企画・運営
・川辺住民の現状把握（聞き取り・web アンケートを活用）
・住民の困りごとや課題を関係各所へつなげる
・川辺地区や真備の現状をたくさんの方に知ってもらう

〇住民の心と行動の変化

①負の連鎖　　何もかも失った。「過去を消された」空虚感、漠然とした不安。

②生活の立て直し　必要最低限の環境を整える。物、食べ物を手に入れる、住まいを確保する。
③自分と周りの人　楽しめることに目が向くように。人とのつながりが大切だと感じる。
→マズローの欲求５段階説と同じだ！

〇運営上の課題

・住民のイライラをぶつけられることも
・支援者との思いのズレ　目標は同じ、過程が違う
・家庭環境の変化によるスタッフの入れ替わり
・スタッフミーティングができない、揃わない
・被災者でもあり、支援者でもある立場
・今日明日のことしかできず、計画性がない

【３.『あるく』が目指すもの】

・３つの愛があふれる川辺地区　「ふれ愛」「つながり愛」「ささえ愛」
・住民が主体となって、まちを再建していくための活動
・帰ってきて良かったと思える、魅力ある街づくり

〇あるくのこれからの活動は

・来る人が変わってきている「始めて来られた！やっと来られた！」という人も
・家庭状況、被災状況、家の復興状況、心の回復は個々に様々
・引き続き課題解決に向けた活動が必要

・災害の経験を無駄にせず、逃げ遅れのない、災害に強いまちに！
・顔の見える関係をつくり、深めていく
・任意団体である強みを生かした地域づくり

講演の様子

川辺復興プロジェクトあるく代表の槙原氏

11. 参加者の感想

私はこの２日間でボランティアの見方が変わった。まず、ボランティアの活動といえば物資の運搬、土砂をかき分けるなどといったことが思い浮かんでいたが、今回経験した写真洗浄もまた、必

要なボランティアなのだと実感した。「このボランティアは福島から伝わったもので、今は長野とかにも広まっている」とお世話になったスタッフの方がおっしゃっていた。災害から一年以上が経った今、現地で求められていることは思い出の復興ではないかと思った。２日目に「あるく」の方と現地住民の方のお話を聞いた。その中で私が一番印象に残ったことは、「あるく」の活動についてのお話の中にあった「あくまで不平等で自己満足でしかない。でもそれを割り切らないといけない。」ということだ。今回の２日間から私は本当に今、必要とされているボランティアは何なのか、ボランティアとはそもそも何かと考えたが答えは出なかった。これからもこのことについて考えていきたいと思う。

（社会科教育専修１回生　加藤真由）

今回のスタディーツアーで、人とのつながりの大切さ心のケアの必要性について学ぶことができた。人とつながることで支援物資やボランティア情報がわかったり、お互いに声をかけあって被害の片付けが出来たりするが、「あるく」の方と地域住民の方のお話から、人とつながることで、精神面での助け合いの輪が広がると思った。環境が変わらなくても、誰か人と話すことで心が楽になったり、お互いに安心させ合ったりすることができると思った。また、写真洗浄のボランティアを行って、思い出を形で残すことの大切さについて学んだ。形に残すことによって復元ができる。それを復元することで被災者の心のケアにつながると思った。マスメディアでは報道されなくなっているが、実際に現地を訪れて、外からは見えない課題が多く残っているように感じた。ボランティア情報や復興の進捗状況などを、マスメディアで発信することがより多くの復興への手助けとなるのではないかと考えた。今回の勉強会は、私にとって改めて防災について見直す良い機会となった。そして、防災について真剣に取り組もうと思った。

（音楽教育専修１回生　佐藤こころ）

この１泊２日の岡山スタディーツアーでは、見えない部分の支援、人との繋がりの大切さを改めて感じた。１日目の写真洗浄のボランティアでは、水に浸水し、傷んでしまったアルバムから、写真を１枚１枚切り出すという作業の中で、写真洗浄を依頼した被災者の方々の「思い出を綺麗な形に復元したい」というような思いをとても感じた。それと同時に、災害で多くのものを失ったからこそ、こうした楽しい思い出が少しでも残っていることで、次への活力になる。テレビで報道されるような大きな活動ではないが、このような見えない部分の支援が被災者の心の支えになっていると感じた。２日目の『あるく』の方の講演、地域住民の方との対談では、人との繋がりの大切さを感じた。今現在、炊き出しや復興に向けての情報を共有する川辺地区の住民の LINE グループは、参加人数 500 人を超えているそうだ。これほどまでに大きな繋がりになったのは、小学校を中心としたコミュニティが出来ており、情報の信頼性が高かったからだそうだ。普段から密接な関わりがあった訳ではないが、年配層から若者まで、幅広い層の人たちと関係が少しでも作られていたからこそだと感じた。この２日間、自分の目で実際に見て、耳で聞いて、感じたことはすごく心に残っているし、いい経験になった。このことを、私たちがもっとたくさんの人に伝えていかなければいけないと感じた。

（幼年教育専修１回生　井原奈佑）

２日間のボランティアを通して私は、心の復興の大切さと先々を読んだ防災対策が必要であるこ

とを改めて考えた。写真洗浄のボランティアをしている間、その１枚１枚の楽しそうな表情や晴れ着姿で嬉しそうな表情を見て、この人たちは今どのような暮らしをしているのだろうかと興味を持つようになった。そしてこの写真を早く返してあげたいと思うと同時に、写真の持ち主が写真を手に取った姿を想像して少しずつでも笑顔を取り戻してほしいと考えるようになった。また写真洗浄のボランティアの需要が増えているということから、被災された方々は自分の過去を取り戻したいと考えているのではないかと思った。このことから私は、心の復興の大切さを考えるようになった。「あるく」の方のお話にもあったように、今回の災害で家財が浸水してしまった人は自分の住んでいた家や思い出の物、これまでの平和な暮らしなどの自分の過去を奪われた喪失感・不安感でたくさんだという。物資を送ったり、泥をかき出したり、インフラやライフラインを整えたりするような物理的・実用的な復興支援は確かに災害直後に特に必要となる。しかし、冷たい考え方ではあるが、それらは少し技術が発達すれば AI を搭載したロボットや機械・ドローンでもできる支援である。むしろ安全面への配慮から私は心のケアやつながりをつくるような支援を人は行っていくべきだと考えるようになった。例えば、「あるく」の活動にあった地域内で人々のつながり・居場所をつくることは、言い換えれば自分の未来を再構築している営みであり、過去を奪われた喪失感を取り戻す希望につながると考える。その他にもワークショップで出た意見として、日頃からご近所付き合いを深めることや周りの様子を見ることは確かに必要であり、災害が起きて気が動転しているときでもその関係性を保つことができる信頼関係を築いておくべきだと考えるようになった。

先々を読んだ防災対策については写真洗浄のボランティアの方がおっしゃっていたことが印象に残っている。豪雨に遭ったとき、貴重品などを真っ先に高いところへ持っていき、避難所か、在宅か、という判断を下す際も素早くロープを屋根にかけ、迷う時間を少なくしていたという。このことから先々を読んだ防災対策が必要であるというだけでなく、それを突き詰めた形である減災についても考える必要があることを改めて感じた。避難用のリュックを用意したり避難所の経路を確認したりするだけでなく、例えばワークショップで活動したように様々なシチュエーションでどのように行動・支援していくべきか、屋根にかけるロープのような非常用の避難道具を整理して置いておくなど、広い視野・想像力を働かせた減災対策が必要であると考えるようになった。

（社会科教育専修４回生　藤本七彩）

令和元年度　木頭ゆず収穫ボランティア　実施報告概要

奈良教育大学　中澤　静男

１．目的

株式会社柚りっ子は、徳島県山間部で、農業従事者の高齢化のために放置されていた柚畑の再生を目的に、地域人材を雇用しながら無農薬の柚栽培に取り組んでいる。これはＳＤＧｓの目標２「持続可能な農業」、目標１１「持続可能な人間居住」、目標８「ディーセントワーク」などと関連付けることができる。今回、木頭ゆずの収穫にボランティア参加することで、経営者や地域の方々とふれあい、ＳＤＧｓの達成に貢献する企業活動について、見聞を広めることを目的とする。

２．実施日　　２０１９年１１月０９日（土）～１０日（日）
（木頭ゆずの収穫ボランティアは１０日）

３．参加者　　学生：４名（山之内、奥平、藤原、北吉）
引率教員：北村恭康・中澤静男

４．日程

１１月９日（土）

（１）鳴門市ドイツ館・板東俘虜収容所跡地見学

ドイツ橋

大麻比古神社境内裏山にのこるドイツ橋

第 1 次世界大戦時に青島で日本軍の捕虜となったドイツ兵が収容されていた。板東俘虜収容所では所長であった松江豊寿の方針により、捕虜は祖国のために命をかけて戦った者として、その人権を尊重し、自主的な生活をすすめていた。

2 年 9 ヶ月という限られた期間であったが、ドイツ兵は元々優れていた技術ドイツ橋の架橋、兵舎設計建設、活版印刷による印刷など、様々な活動に取り組んでいた。

その中でも特に音楽活動には熱心に取り組み、現在日本でも親しまれている、ベートーヴェン交響曲第 9 番を、アジアで初めてコンサートとして全楽章演奏したことを、「第九シアター」にて映像とロボットで紹介している。

ドイツ兵達は、地域住民とも交流を深め、釈放後も日本に残った者も多かった。ドイツに帰った兵士にとっても、戦後の混乱とナチスの台頭など、厳しい時代であった。

板東俘虜収容所は模範収容所と評価されており、日本とドイツの友好の象徴として、現在ユネスコ「世界の記憶」遺産への登録が目指されている。

（２）鳴門市賀川豊彦記念館

賀川豊彦は、神戸に生まれるが、4 歳の時に両親を失い、徳島県の賀川家に引き取られ、この地で成長する。地元の教会に通い、アメリカ人牧師の薫陶を受け、キリスト教に傾倒する。神戸のスラムに居を移し、貧困者の救済につくすが、救貧より防貧の重要性から、労働運動や消費組合運動を主導するようになる。第二次世界大戦中も日米両国間の平和をうったえる活動を続けたため、反戦思想・社会主義思想家として活動を制限される。

戦後は世界平和の実現に奔走し、1951 年には広島において、世界連邦アジア会議を開催し、人類同胞愛の精神の強化をうったえる。

これらの活動が世界的に認められ、３度にわたってノーベル平和賞候補となった。

（３）四国霊場第１番札所 霊山寺

四国八十八ヵ所霊場を巡拝する遍路において、霊山寺は「発願の寺」と位置づけられている。一番札所として長い遍路旅の旅支度を調える場所でもある。

多宝塔

11 月 10 日（日）

8 時にホテルを出発し、美馬市穴吹町より、492 号線で木屋平中学校跡に赴き、他のボランティアの方々と合流し、木頭柚子の畑に向かう。今年は、気候の影響で柚子が不作のため、実を探しながらの活動となる。

高松や大阪からもボランティアの方々が参加しておられ、一緒に交流しながら活動できたことが、学校教員以外の方々とふれあう機会になり、学生にとっても価値があったと思われる。

活動後には、カレーやぜんざいのふるまいがあった。そこに、この活動を続けてこられた吉田氏も参加され、1990年代にはザンビアでは5人に1人の子どもが5歳までに亡くなるという状況であったため、ＪＩＣＡの助成金とこの柚子狩りの収入でザンビアに赴き、医療活動を行うと共に、現地人による医療行為ができるよう、ザンビア人医師の養成に携わってこられた話を聞き、本ボランティアの意義を確認した。

2019 年度　世界遺産を体感　東大寺に泊まろう　支援報告書

英語教育専修　修士２回生　谷垣　徹

1.　目的

(1) 世界遺産での貴重な宿泊体験を通し、歴史文化に学ぶ態度を涵養する。

(2) 仲間と協力し、やり遂げる達成感を味わう。

(3) 大仏造立の歴史に触れ、現代の私たちの暮らしと照らし生き方を考える

2.　開催日　　2019 年 10 月 25 日（金）～27 日（日）

3.　開催場所　東大寺二月堂および東大寺境内周辺

4.　参加者　　小学生（奈良県、大阪府、京都府、東京都より）　42 人

学生スタッフ（奈良教育大学、東京学芸大学、奈良ユネスコ協会青年部）　12 人

NPO 法人奈良地域の学び推進機構スタッフ　４人

5.　テーマ　「東大寺のはじまり」

6.　日程

【１日目】平成 30 年 10 月 25 日（金）

時間	活動
19：00	参加者受付開始＠東大寺南大門
19：15～20：15	ナイトウォーク（二月堂へ移動）
20：30～20：40	アイスブレーキング
20：40～21：00	夜食
21：00～21：20	東京組合流・開会式、北河原副院主の講話
21：30～22：00	班活動の時間
22：00～22：15	就寝準備
22：15	就寝

【２日目】平成 30 年 10 月 26 日（土）

時間	活動
6：00	起床
6：20～7：30	朝の集い・清掃
7：30～9：00	朝食・片付け
9：00～10：00	朝のお勤め・読経
10：00～13：00	東大寺探索
13：00～14：30	昼食・片付け・夕食準備
14：30～15：30	探索振り返り①
15：30～17：00	写仏

17：00〜18：30	入浴＠東之阪公衆浴場
18：30〜19：30	夕食・片付け
19：30〜20：30	探索振り返り②、読経、班活動の時間
20：45〜21：00	就寝準備
21：00	就寝

【３日目】平成 30 年 10 月 27 日（日）

時間	活動
6：00	起床
6：20〜7：00	朝の集い・清掃
7：00〜8：30	朝食・片付け
8：30〜9：00	日本文化体験（川柳）
9：00〜10：00	朝のお勤め・読経
10：00〜11：15	探索の振り返り③
11：30〜12：30	振り返り発表会
12：30	解散

7. 参加学生の役割分担

活動班	１班 山本	２班 長滝谷	３班 西田	４班 渡辺	５班 石崎	６班 狗飼	７班 菊池	８班 坂本	９班 奥田
運営班	PD・チーフリーダー 仲村			リーダー補佐 井関			総務・MD 谷垣		

8. 成果と課題

【成果】

<u>運営面</u>

■ 学生が主体となって運営する体制が安定したと同時に、裏方の役割においてセンターのスタッフさんとの連携がより深まり、進行がスムーズにできた。組織的な運営体制が確立できた。

■ 今年は東京組から職員さんだけでなく、東京学芸大学の学生さんも来てくださり、東京の子どもたちをより深く見守れたとの同時に、異なる背景を持つ学生同時での学びあいが起こった。これからもこの連携を深めていきたい。

<u>プログラム面</u>

■ 昨年より生活プログラムとしての色が薄くなった半面、テーマに沿った「学び」をより意識することができた。北河原副院主との関わりも短時間ではあったが非常に濃い時間を創っていただけた。

■ 健康チェックシートの導入。子ども・学生両方の健康状態をしっかり把握し、事前の対応ができた。２日目活動中に班付きの学生を休ませる時間を作れた。体調不良の学生の穴埋めも何とかできた。

【課題】

運営面

■　子どもの参加者人数に対する学生リーダーの不足。

■　裏方運営体制の持続不可能性、引き継ぎの難しさ。

■　事前段階でのセンターと学生の連携不足。定期的に顔を合わせて企画を進める必要がある。

プログラム面

■　タイムスケジュールの抜本的見直し。特に２日目夕方～夜と３日目。例年踏襲でなく、規模に合わせた見直しを。

■　振り返りの手法の見直し。ポスター作りが目的化している。作成物を簡素化して、学びや気づきの言語化に時間をかけたい。発表しっぱなしではなく、そのあとの振り返り、感想交流を充実させたい。

■　開催時期を３連休にして、開始段階から東京組が入れるようにしたい。開始時間を４時間ほど早めて、３日目に余裕を持たせたい。メインの東大寺探索→学びの発表〈→振り返り〉に時間をもっとさけるように。

■　子どもの学び、変容を読み取る記録をとる！参加前・活動中・活動後の子どもの学び・気づきを記録し、分析して、この企画の意義の再確認、プログラムの改善材料に。来年度は必ずこれをやりたい！子どもは本当に学び、感じたのか？

9.　活動の様子

【１日目】平成 30 年 10 月 25 日（金）

【２日目】平成 30 年 10 月 26 日（土）

【３日目】平成 30 年 10 月 27 日（日）

【学生によるＥＳＤ活動支援】野外活動支援　実施報告書

英語教育専修　修士２回生　谷垣　徹

近畿 ESD コンソーシアムでは、学生による ESD 活動支援の一環として、奈良市内小学校等において野外活動の活動支援を行っている。令和元年度は計 13 件の小学校と団体を対象に支援を行い、事前指導も含め、のべ 96 人の学生が支援に関わった。支援実績は以下の通りである。

	実施日	小学校	場所	参加学生
1	5月 29 日(水)	奈良市立済美小学校	奈良市青少年野外活動センター	稲原、久保、谷垣、仲村、櫓、山本(幸)
2	6月 12 日(水)	奈良市立左京小学校	奈良市青少年野外活動センター	岩城、西條、谷垣、辻、櫓、山本(健)
		事前指導２回実施：５月 23 日（木)、6月 6 日（木）		
3	6月 15 日(水)	奈良市東部５館交流キャンプ	奈良市青少年野外活動センター	岩城、大畑、谷垣、堀本、南方、宮澤
4	6月 19 日(水)	奈良市立平城小学校	奈良市青少年野外活動センター	太田、後藤、栗山、小林、松村、南
5	6月 26 日(水)	奈良市立佐保台小学校	奈良市青少年野外活動センター	稲富、市川、井原、假屋、熊野、谷垣、柳川
6	7月４日（木）	奈良市富雄第三小学校	奈良市青少年野外活動センター	足立、岡本(真)、谷垣、中西、仲村、林、山口(竜)、吉田
		事前指導３回実施：６月 10 日（月)、17 日（月)、6月 24 日（月）		
7	8月 22 日(木)	奈良市スポーツ少年団	奈良市青少年野外活動センター	市川、井原、稲原、坂本、谷垣、柳川
8	9月 18 日(水)	奈良市立飛鳥小学校	奈良市青少年野外活動センター	稲富、奥田、木村、谷垣、仲村、橋本、南方、山口(春)
		事前指導１回実施：９月６日（金）		
9	9月 19 日(木)	奈良市立東市小学校	奈良市青少年野外活動センター	岩城、谷垣、仲村、柳川
		事前指導２回実施：９月９日（月)、12 日（木）		
10	9月 26 日(木)	奈良市立都跡小学校	奈良市青少年野外活動センター	市川、假屋、谷垣、柳川
11	10 月２日（水）	奈良市立六条小学校	生駒山麓公園野外活動センター	市川、井原、假屋、谷垣、柳川
		事前指導１回実施：９月 17 日（火）		
12	10 月２日（水）	奈良市立西大寺北小学校	奈良市青少年野外活動センター	稲原、後藤、西條、坂本(和)、中田、仲村、柳川
		事前指導２回実施：８月 30 日（金)、９月 20 日（金）		
13	10月 17 日(木)	奈良市立佐保川小学校	奈良市青少年野外活動センター	井原、谷垣

※支援内容の詳細は、各支援の報告書をご参照ください。

【学生によるESD学習支援】
奈良市立富雄第三小中学校　第２回ユネスコ委員会　支援報告書

心理学専修１回生　　坂本　晃徳

１．実施日　令和元年５月29日（水）

２．場所　奈良市立富雄第三小中学校

３．参加者　山本健太（学部２回生）、吉田柚季、山口竜輝（学部１回生）
富雄第三小中学校　教員、中学生　約20名

４．活動支援内容

令和元年５月29日、富雄第三小中学校にて第２回ユネスコ委員会が行われた。今回は、初めに今年度の活動目標を設定し、昨年度に引き続き、「富三からつながる世界平和～みんなの力で笑顔への第一歩～」に設定された。その後、国際交流班とビオトープ班の２班に分かれ、それぞれが活動を行った。今回の活動内容は、両班ともに今年度に行うおおまかな活動の決定、および活動の計画について話し合いを行った。

今回の活動支援より、以下の２点について考えた。第１に過去の経験を生かすことについて、第２に生徒の視点についてだ。

まず、第１に過去の経験や体験を生かすことについてである。私が担当した国際交流班では、これから何をするかを考える際に、過去の活動の記録を用いて計画をたてている生徒たちの姿が見受けられた。ハロウィンやクリスマスなどといった例年の行事に加え、ハリソンスクールに対し去年は手紙を出していたが、今年はテレビ電話で直接話し合おうという意見もあり、今までの取り組みを踏襲しつつも新たな試みがみられた。この新たな試みは、ユネスコ委員会が今まで積み上げてきたものがあるからこそ生まれるものであり、今回初参加だった私自身、こうした挑戦こそが新たな礎となっていくのではないかと考えさせられた。

第２に生徒の視点についてである。国際交流班での今回の活動は、今年度の見通しを立てることが主であったためか、新年度となり新たに入ってきた生徒たちに、昨年度に在籍していた生徒たちが今まで行った行事の概要を伝えながら意見をだしあっていた。そのような中で、七夕を新たな行事としてやってみようという案がだされた。外国に向けて日本の伝統行事や文化をアピールしつつ、逆に外国の文化を知る機会であることが国際交流班の行事に必要な要素であり、これを満たす案として七夕を挙げる生徒の柔軟でかつ新鮮な視点に驚かされた。こうした視点こそが、ESDを実現するその原動力となるのではないだろうかと考えた。

今回の支援を通して学び、考えたことはこの２点である。この活動支援に初めて参加したが、ESDについて考える生徒の姿勢を知る貴重な機会であった。この富雄第三小中学校のユネスコ委員会の支援では、生徒たちとかかわることで、生徒たちの新鮮な視点や気づきを通して、生徒の成長を見られるだけでなく、私たち学生にとっても良い学びの場となる。非常に有意義な活動支援になるため、今後も引き続き支援に参加していきたい。

話し合う生徒たち

【学生によるESD学習支援】
奈良市富雄第三小中学校　第10回ユネスコ委員会　支援報告書

国語教育専修　２回生　西條秀哉

１．実施日　令和２年１月８日（水）

２．場所　奈良市富雄第三小中学校

３．参加者　西條秀哉（学部生）

奈良市富雄第三小中学校児童・生徒　約30名、教員　２名

４．活動支援内容

令和２年１月８日、富雄第三小中学校にて第10回ユネスコ委員会が行われた。今回はビオトープ班の活動に参加させて頂き、小中学生と一緒にビオトープに設置するバードハウスの作成を行った。

今回の活動で学んだことは２点ある。１点目は校内のビオトープを利用した活動について、２点目は小学生と中学生の共同作業についてである。

１点目の校内のビオトープを利用した活動については、本活動全体を通して感じた。学校の中に池や木々、植物が広がる自然の空間があり、それをその学校の児童生徒がより良い空間にするために活動しているということはとても意義のあることだと思う。近年子どもの自然離れが問題視されている中で、このような実践例は他の学校でも見習うべき内容だろう。しかし実際にビオトープを見学する中で、まだまだ花が少なかったり、何もないのっぺりとした場所が多く残っていたりと改善していけそうな要素は沢山あった。「自然あふれる空間」というだけではなく、「学内の児童生徒が休み時間に来たくなるような居心地のいい場所」にこれからどんどん変わっていくことを大変期待している。

２点目の小学生と中学生の共同作業については、ユネスコ委員会のビオトープ班の活動に参加させて頂いた際に感じた。今回気づいた点として、小学生と中学生が同じ空間で一緒にコミュニケーションをとったり活動したりといった様子が見受けられた。最初は学年ごとに分かれて製作物を作っていたが、中盤、終盤につれて中学生が小学生にアドバイスしたり、作業を手伝ったりする様子が見られた。小学生の縦のつながり、中学生の先輩後輩の関係はどの学校でも見られるものであるが、小学生と中学生の交流という光景はなかなか見られないものであったので非常に新鮮であった。中学生は自分より心身ともに幼い子どもと関わることで、物事を教えたり面倒を見たりするいい機会になり、小学生は自分より少し上のお兄さんお姉さんの姿を間近で見ることで自分の今後の姿や理想の自分というものが想像しやすくなるのではないかと思う。

小学生にやすりの使い方を教える中学生

私は今回の支援で「持続可能な開発」を如何にして子どもたちに伝えるかについても考えさせられた。担当の先生が来るまでの少しの時間で私が児童生徒に「ESDとは何か」を教える機会を与えられた。理屈上ではESDについて理解していても、子どもたちに分かるように説明するということは非常に難儀なものであった。何とか小学生でもわかるような単語を紡ぎだして説明したが、実際に子どもたちに伝わったか、理解させることができたかとなると、やはりまだまだ説明下手であり知識不足だったということが身をもって思い知らされた。ESDは「SD（持続可能な開発）の教育」なので、最終的に子どもたちが理解できるような説明、工夫が必要不可欠である。これからも持続可能な開発に関わるあらゆる方面の知識や理解を深めるとともに、分かりやすく伝える方法や工夫を考えて実践し、試行錯誤していきたい。

【学生によるESD学習支援活動】
奈良市立済美南小学校　親子燈花会　支援報告書

社会科教育専修　学部１回生　長滝谷幸子

１．実施日　令和元年８月２日（金）18：00〜20：30

２．場所　奈良市立済美南小学校

３．参加者　坂本亜衣、新留美都、久保かのん、熊野里沙、桑垣夏輝、長滝谷幸子（学部生）
奈良市立済美南小学校児童・卒業生　約30名、保護者　約10名、教職員　５名
民生委員、協議会、おやじの会スタッフ　約20名

４．活動内容

令和元年８月２日（金）、奈良市立済美南小学校において、親子燈花会が行われ、本学学生６人がスタッフとして活動に参加した。当日は、かき氷販売の手伝い、燈花会の火をつけるなどの補助、紙飛行機大会の補助、片付けを行った。

子どもたちと作った「令和」の文字

今回の活動について以下の２点で振り返る。第１に事前準備の程度について、第２に子どもたちとの協力についてである。

第１の事前準備の程度について、一通りの説明を受け、３人ずつに分かれて交代で活動を行うことも決めていたが、かき氷を売る際に人が足りなくなる場面があった。事前にかき氷がよく売れる時間や、火をつける作業が忙しい時間などを聞いておいて、その際の動きについても考えておいた方が活動をスムーズに行えたと感じる。また、今回はかき氷のシロップが無料で頂けたということで、１杯100円のかき氷を 50 円で販売したためおつりが足りなくなる場面があった。おつりを払うために先生が職員室で両替している間子どもたちを待たせてしまい、先にかき氷を渡すと子どもたちが運動場などに行ってしまっておつりを渡すのが困難になるという場面があった。事前に予想していなかった事態が起きても、あわてずに対処することの必要性を感じた。

第２に、子どもたちとの協力について、今回かき氷の販売は済美南小学校の卒業生である中学生たちと共同で行ったため、連携をとることが必要となった。お互いに自己紹介などをする時間もなく、その場で初めて一緒に作業を行ったにもかかわらず、今回はうまく連携を取ることができた。しかし、毎回うまく連携が取れるとは限らないので、子どもたちに学生側から積極的にコミュニケーションを図ることが必要だと感じた。また、燈花会のろうそくで火を灯す作業を率先して手伝ってくれたり、片付けを積極的にやってくれたりする子どもが多かった。そのため、彼らの主体性の邪魔をしないよう、かつ安全面に配慮した活動が求められた。その他、かき氷の味や個数を聞く声掛けや、火の灯ったろうそくの周りを走り回る子どもたちへの声掛けなど、子どもたちとの対話の重要性も改めて感じた。

以上２点が、今回の活動を通して感じたことである。実際に活動してみることでわかる問題や、学びがたくさんあった。これらを活かし、以降の様々な活動に役立てていきたい。また、例年より児童数が少なかったが、たくさんの子どもたちと関わることができた。そこから将来教師になりたいという思いや、子どもたちと関わることのできる楽しさや喜びを改めて実感できた。これからも様々な活動に積極的に参加し、これらの思いを大切に活動していきたい。

【学生によるESD支援活動】
奈良市立飛鳥小学校　親子燈花会　支援報告書

社会科教育専修３回生　奥田　玲央

１．日時　令和元年８月５日（月）

２．場所　奈良市立飛鳥小学校

３．参加者　奥田玲央、仲村幸奈、西條秀哉、山本健太、久保かのん、長滝谷幸子（学部生）
奈良市立飛鳥小学校　教員　約10名、児童　約120名、PTA　約10名
親子燈花会実行委員会　２名

４．活動報告

令和元年８月５日（月）、奈良市立飛鳥小学校で親子燈花会が開催された。支援の内容としては、子どもたちとともに燈花会のカップをグラウンドに並べ、先生方やPTAの方々による催しもののサポートを行うことを主とした。

ビンゴ大会を楽しむ子どもたち

今回の活動支援を通して感じたこと考えたことを、２つ挙げる。１つ目は保護者がいるからこそ学べた子どもへの関わり方、２つ目は子どもの楽しみを支える周りの連携についてである。

１つ目の保護者がいるからこそ学べた子どもへの接し方だが、保護者に見守られながら燈籠に火をつけ、並べる子どもたちが「見て、できた。」など自分の活動を保護者に見てほしいというアピールをしながら活動していた。保護者のいる場での子どもたちの認めてもらいたいという素直な欲求の表現を見ることができたのは貴重な機会だと感じた。このような子どもたちの些細な表現に我々支援者が気付き、子ども一人ひとりに適した接し方をすることが重要であると分かった。そのような接し方が、子どもたちにとって活動がより思い出に残るものになるということを理解して、支援していくことが必要であることを学んだ。保護者の方々がされていた「お母さんと一緒にしようか。」「お姉さんに聞いてやってみ。」といった声のかけ方を見て、子どもが動きやすい声のかけ方を学ぶことができた。自分たちが子どもたちと接するときの話し掛け方や支援の頻度の判断基準を理解するために自分たちで考えて行動することはもちろん大切だが、観察を通して理解することも大切なことの一つであると感じた。

２つ目の子どもの楽しみを支える周りの連携だが、今回の親子燈花会では催し物・出店・親子燈花会の準備のために我々奈良教育大学ユネスコクラブ員含め飛鳥小学校教員、PTA の方々、燈花会関係者、飛鳥小学校に関わりのあった教員など多くの人々が携わっていた。これだけ多くの人々が子どもたちに夏の思い出をプレゼントするという一つの大きな目標をもって、協力し合うことで今回の活動が成り立つということは、支援に関わらないとわからなかったことだと思う。今回の支援中に手持ち無沙汰になっている人がいなかったことから、今できることは何か、次は何が必要とされているかなど指示を待っているだけではなく視野を広げて考えて行動することが重要であり、支援者一人一人がそれを意識して動くことが円滑な運営につながることを改めて実感した。子どもたちの楽しみの裏側には多くの大人たちの連携と助け合いがあることを感じた支援であった。

今回の支援において感じた以上２点をこれからの大学生活や活動で生かしていくことはもちろん、生かすことができる活動を考えていきたい。

【学生によるESD学習支援活動】
奈良市立飛鳥小学校　カヌー体験教室　支援報告書

幼年教育専修　１回生 福井 遊

１.実施日　８月３日(土)

２.活動場所　奈良市立飛鳥小学校

３.参加者　伊藤拓海(大学院生)
仲村幸奈、西條秀哉、山本健太、稲原龍一、東川美緒、井原奈佑、南方玲美
久保かのん 、福井遊
株式会社モンベルスタッフ　６名
奈良市立飛鳥小学校教員　３名、児童　約30名

４.活動支援内容

令和元年８月３日に飛鳥小学校でカヌー体験教室が開催され、本学ユネスコクラブの学生が活動支援を行った。カヌー体験をする班と水遊びをする班に子どもたちをグループ分けし、３タームに渡って行われた。

今回の活動で感じたことは以下の２つである。１つ目は学校と地域、家庭の関わり、２つ目は事前準備の大切さである。

カヌー体験の様子

１つ目の学校と地域、家庭との関わりについてである。カヌー体験教室では、様々な地域の人々、教員が協力することで、災害時における水の怖さなどを学ぶ機会となっている。地域の関係が希薄になっている現代で、このイベントに参加する企業・地域の方・保護者など多くおられることは素晴らしいことだと感じた。また、この行事には母親だけでなく、父親も多く参加していた。学校の行事に母親が参加することはあっても、父親が参加できる機会は仕事の関係で少ない。今回の活動は学校行事ではないが、教師も沢山参加していたので父親が子どもの通っている学校や子どもと教師の関わりを見ることのできるいい機会だったように感じる。

２つ目は、事前準備の大切さである。ユネスコクラブの学生は当日からの参加だったが、子どもたちが来る前にライフジャケット着用の練習にとカヌーを体験させていただき、実際に転覆したり、ボートに入った水を抜いたりなどの救助の練習も行った。それによって子どもたちが転覆してしまったり、困ったりしているときでも安心して焦らず救助することができた。

以上が支援活動を通じて学んだことである。今回が初めてのESD学習支援活動であり、分からないことも多くあったが、教師がどのように子どもたちと関わっているか、一つひとつの活動が教師だけでなく、地域の方々など多くの人が関わって作られていることを学ぶことができた。しかし、カヌーを体験する時間が長く、飽きてしまっている子どももいたようなので水中でできるゲームや、ライフジャケットの有効性を実感できるような遊びを用意しておくべきだったなどと反省点もあった。来年はこれらの反省を活かしてさらによいカヌー体験教室の支援を行えるよう工夫したい。

【学生によるＥＳＤ活動支援】

奈良教育大学附属幼稚園　ユネスコ・世界遺産学習　支援報告書

英語教育専修　大学院２回生　谷垣徹

【１】東大寺遠足　事前学習サポート

■　**実施日：**　2019 年 11 月 7 日（木）

■　**場　所：**　奈良教育大学附属幼稚園　遊戯室

■　**参加者：**　学部生　井原奈佑、久保かのん（幼年１）、柳川莉沙（理科１）、嶋田智沙恵（数学２）
大学院生　谷垣徹（英語 M2）

■　**内　容：**　＜年長クラス＞　　東大寺二月堂（お水取り、良弁杉など）について
＜年中・年少クラス＞　東大寺大仏殿、南大門（金剛力士像）について

■　**概　要：**　東大寺への遠足に先立って、遠足での見学がより有意義なものになるように事前に見学のポイントを伝えた。これは６年前から継続して行っている支援である。

【２】エコキャップ運動　出前授業

■　**実施日：**　2019 年 12 月 20 日（金）

■　**場　所：**　奈良教育大学附属幼稚園　遊戯室

■　**参加者：**　学部生　井原奈佑、久保かのん（幼年１）、柳川莉沙（理科１）
大学院生　谷垣徹（英語 M2）

■　**概　要：**　園児が普段取り組んでいるエコキャップ運動について、その目的やどのような過程を経てワクチンに変えられるか、また園児が集めた量でワクチンいくらと交換できるかなどを、視覚的にわかりやすく伝えた。全園児及び保護者の前で行う初めての機会であった。

【３】ならまち探索　事前指導・引率

■　**実施日：**　2020 年１月 24 日（金）

■　**場　所：**　奈良教育大学附属幼稚園　遊戯室　及び　奈良町周辺

■　**参加者：**　学部生　井原奈佑（幼年１）、柳川莉沙（理科１）
大学院生　谷垣徹（英語 M2）

■　**内　容：**　ならまちの歴史、元興寺（瓦・五重小塔・智光曼荼羅）、ならまち格子の家（町家の工夫）、砂糖傅、庚申堂、奈良町資料館などについて

■　**概　要：**　ならまちへの探索に出発前に、上記のような見どころの紹介を、クイズや視聴覚資料などを用いて行った。午後には実際に園児と探索にでかけ、事前学習で学んだことを振り返りながら見学を行った。

幼稚園での出前授業の様子

ならまち探索の様子（奈良町資料館の前で）

【学生によるＥＳＤ活動支援】野外活動支援　実施報告書

英語教育専修　修士２回生　谷垣　徹

近畿 ESD コンソーシアムでは、学生による ESD 活動支援の一環として、奈良市内小学校等において野外活動の活動支援を行っている。令和元年度は計 13 件の小学校と団体を対象に支援を行い、事前指導も含め、のべ 96 人の学生が支援に関わった。支援実績は以下の通りである。

	実施日	小学校	場所	参加学生
1	5月 29 日(水)	奈良市立済美小学校	奈良市青少年野外活動センター	稲原、久保、谷垣、仲村、櫓、山本(幸)
2	6月 12 日(水)	奈良市立左京小学校	奈良市青少年野外活動センター	岩城、西條、谷垣、辻、櫓、山本(健)
		事前指導２回実施：５月 23 日（木)、6 月 6 日（木）		
3	6月 15 日(水)	奈良市東部５館交流キャンプ	奈良市青少年野外活動センター	岩城、大畑、谷垣、堀本、南方、宮澤
4	6月 19 日(水)	奈良市立平城小学校	奈良市青少年野外活動センター	太田、後藤、栗山、小林、松村、南
5	6月 26 日(水)	奈良市立佐保台小学校	奈良市青少年野外活動センター	稲富、市川、井原、假屋、熊野、谷垣、柳川
6	7月４日（木）	奈良市富雄第三小学校	奈良市青少年野外活動センター	足立、岡本(真)、谷垣、中西、仲村、林、山口(竜)、吉田
		事前指導３回実施：６月 10 日（月)、17 日（月)、6 月 24 日（月）		
7	8月 22 日(木)	奈良市スポーツ少年団	奈良市青少年野外活動センター	市川、井原、稲原、坂本、谷垣、柳川
8	9月 18 日(水)	奈良市立飛鳥小学校	奈良市青少年野外活動センター	稲富、奥田、木村、谷垣、仲村、橋本、南方、山口(春)
		事前指導１回実施：９月６日（金）		
9	9月 19 日(木)	奈良市立東市小学校	奈良市青少年野外活動センター	岩城、谷垣、仲村、柳川
		事前指導２回実施：９月９日（月)、12 日（木）		
10	9月 26 日(木)	奈良市立都跡小学校	奈良市青少年野外活動センター	市川、假屋、谷垣、柳川
11	10 月２日（水）	奈良市立六条小学校	生駒山麓公園野外活動センター	市川、井原、假屋、谷垣、柳川
		事前指導１回実施：９月 17 日（火）		
12	10 月２日（水）	奈良市立西大寺北小学校	奈良市青少年野外活動センター	稲原、後藤、西條、坂本(和)、中田、仲村、柳川
		事前指導２回実施：８月 30 日（金)、９月 20 日（金）		
13	10月 17 日(木)	奈良市立佐保川小学校	奈良市青少年野外活動センター	井原、谷垣

※支援内容の詳細は、各支援の報告書をご参照ください。

【学生によるESD学習支援活動】
奈良市立済美小学校　野外活動　支援報告書

幼年教育専修　学部１回生　久保かのん

１．実施日　令和元年５月29日（水）

２．場所　奈良市青少年野外活動センター

３．参加者　谷垣徹（大学院生）

仲村幸奈、櫓乃里花、稲原龍一、久保かのん、山本幸穂（学部生）

奈良市立済美小学校第５学年児童66名（男子32名、女子34名）、引率教員13名

４．活動支援内容

キャンプファイヤーの様子

令和元年５月29日（水）、奈良市青少年野外活動センターにおいて、奈良市立済美小学校第５学年の野外活動が行われ、本学学生６名がその支援に当たった。１泊２日のうちの主に１日目に関わり、野外炊飯、キャンプファイヤーなどの支援を行った。支援の具体的な内容としては、野外炊飯での児童らへの指導（火おこしの方法や注意点について）、キャンプファイヤー開始前の準備（薪組みなど）、キャンプファイヤーでの児童らへの指導（点火の際の注意点やトーチ棒の取り扱いについて）、歌指導と学生主導のスタンツである。

今回の野外活動支援を以下の２点で振り返る。第１に子ども達との交流について、第２に活動を支援する立場として子ども達の前に立つ責任についてである。

第１に、子ども達との交流についてだ。野外炊飯中やキャンプファイヤーだけでなく、夕食時やその他の時間にも子ども達と交流することができた。今回の野外活動支援では事前指導がなく、当日が初めて顔を合わせる日だった。しかし、子ども達は物怖じすることなく午前中のオリエンテーリングや学校生活について学生らと話していた。学生らに野外炊飯の方法などを教えてもらうだけでなく、活動以外の時間も積極的に交流できていた。子ども達とこのような交流ができる野外活動支援に、より一層魅力を感じた。

第２に、活動を支援する立場として子ども達の前に立つ責任についてだ。今回、私を含め３名が野外活動支援への参加が初めてだった。しかし、子ども達からみればそのようなことは関係ない。全員が野外炊飯などの方法を“教えてくれる先生“なのである。子ども達から質問された時に、すぐに答えられず上回生に教えてもらうという場面が何度かあった。学生らが不安な様子であれば、その不安を子ども達も敏感に感じ取るだろう。これから何度も野外活動支援に参加して、経験を積まなければならないと痛感した。また、仮に不安なこと、分からないことなどがあっても、そのような様子を子ども達に見せないよう自分の行動、言動がどのようにみえているか常に意識していなければならないと感じた。

以上２点が今回の野外活動支援を通じて特に感じたことである。様々な学びがあった今回の野外活動支援も無事に終えることができた。４年間の大学生活の中で、子ども達と実際にかかわれる機会はそう多くはない。野外活動支援を通じて、少しでも多く子ども達と接することによって、様々なことが学べる経験となるだけでなく、将来教師として活かせる力もたくさんつくはずだと感じた。そして何よりも、子ども達とともに活動することによって、子ども達と接する喜びや楽しさ、教師になりたいという気持ちも再確認できる。このような活動の機会を頂けることに感謝し、また、子ども達にとって一生に一度かもしれない野外活動を支援するという責任感を持ちながら、今後の活動にも取り組んでいきたい。そして、これからもESDの学びを実践できる場としたい。

【学生によるESD学習支援】
奈良市立左京小学校　野外活動　支援報告書

教育学専修　１回生　岩城　雄大
社会科教育専修　１回生　辻　悠佑

１．実施日　令和元年６月 12 日（水）

２．場所　奈良市青少年野外活動センター

３．参加者　谷垣徹(大学院生)、石﨑桃花（奈良ユネスコ協会青年部）
櫓乃里花・西條秀哉・山本健太・岩城雄大・辻悠佑(学部生)
奈良市立左京小学校第５学年児童、引率教員　複数名

４．活動支援内容

令和元年６月 12 日、奈良市青少年野外活動センターにて奈良市立左京小学校第５学年の野外活動が行われ、その活動支援にあたった。支援内容は、野外炊飯の補助とキャンプファイヤーの運営である。

今回の活動支援で私たちが学んだこととして２つ挙げる。１つ目は活動支援の程度について、２つ目は活動支援の柔軟性についてである。

１つ目は、活動支援の程度についてである。私は見守りを任された班の児童たちが行うべき活動の一部を専らやってしまった。これは児童たちの学びの場を奪ってしまっている。野外活動の主役は児童たちであって私ではない。また、私が活動をやってしまっているときには、ほかの児童たちが何を行っているのかを見ることができていなかった。班の児童たちがそれぞれ何をしているのか、全体を把握した上での支援が必要であると感じた。この失敗から、私は活動支援の程度を考えるようになった。一つの活動に偏るのではなく、全体の活動を踏まえたうえでの個々の対応を念頭に置いてこれからの支援に取り組もうと考えている。

野外炊飯の様子

２つ目は、活動支援の柔軟性についてである。今回の野外活動支援のような活動は初めてであったため、特にキャンプファイヤーの時に、どのように動けばよいかを質問することが多かった。キャンプファイヤーはその場で対応を迫られることが多いが、スタンツの進行をしていた櫓は想定外のことが起きてもしっかりと対応できていた。それを見て、私もその場面がより盛り上がることができるように自分で考えて動く必要があると感じた。一方で、私は指示されたとおりにしか動くことができず、想定外のことが起きたときにどう対処すればよいかわからなくなり、共に行動していた仲間たちにフォローしてもらう場面が多々あった。これは、今回が初めての野外活動支援であったこと、物事に対して慎重になるあまりとっさに行動をとることができなくなってしまう性格が影響したと考える。今後は、私を含め一人ひとりが臨機応変に対応することができるように、まずは行動してみるようにしなければいけないと感じた。

キャンプファイヤーの様子

今回の活動では、これまで経験したことのないことを経験したり、頭では考えていても実際には行動できなかったことが何度もあったりしたため、先生方や先輩に助けてもらうことも多かった。そのことに感謝をし、ここに書ききれないほどの反省点を踏まえて、将来教員になったときに活かしていけるように、これからも支援活動に積極的に参加していきたいと考える。

【学生によるESD活動支援】
奈良市立平城小学校　野外活動　支援報告書

社会科教育専修　学部１回生　栗山裕唯

1. **実施日**　令和元年６月 19 日（水）
2. **場所**　奈良市青少年野外活動センター
3. **参加者**　後藤旭、太田匠飛、栗山裕唯、小林実里、松村果林、南拓海（学部生）
谷垣徹（大学院生）
岡本沙希（奈良ユネスコ協会青年部）
奈良市立平城小学校第５学年児童、引率教員複数名
4. **活動支援内容**

令和元年６月 19 日（水）、奈良市青少年野外活動センターにおいて、 奈良市立平城小学校第５学年の野外活動が行われ、本学学生６名が野外炊飯、キャンプファイヤーなどの支援、キャンドルロードの設置を行った。

キャンプファイヤーの様子

今回の野外活動支援を以下の２点で振り返る。第１に子どもたちとの交流について、第２に子どもたちの安全確保についてである。

第１に、子どもたちとの交流についてである。今回の野外活動支援は野外炊飯の片付けからであった。そのうえ、今回の野外活動の方針は児童の主体性を重視するものであったため、私たち学生が司会進行をしたり、一緒に歌を歌ったりするなどの場面はなかった。しかしそういった状況であっても積極的に学生と関わろうとする児童は多く、学生に声をかけるという場面はとても多く見られた。また、今回は後方から眺めていることが多かったため児童ら一人ひとりの動きをよく見ることができた。スタンツに精力的に参加する児童もいれば、そうではない児童もいるのだということが俯瞰的な視点から強く感じられた。さまざまな性格の児童たちが集まる環境を先生方はどのようにまとめるのか、自分ならばどうまとめていくのかを深く考えさせられた。

第２に、子どもたちの安全確保についてだ。キャンプファイヤーの準備は危険な点も多々あった。危険な場面でこちらへ寄ってくる児童に対してきちんと「危ない」ということを伝えなければならなかったり、キャンドルロードで火を扱う際に手を近づけないよう注意したり、道路を歩く際に周りに気を配ったりと、安全確保をさまざまな場面でおこなった。特にキャンドルロードについては、多くの児童がろうそくに灯った火について興味を持っている様子であった。手を火に近づけるような危険な行為こそ見られなかったが、警戒心や恐怖心よりも好奇心が勝っている様子が多く見受けられた。故にしっかりと危険性を教えて怪我のないようにしなければならないと思った。この件はあくまで一例であり、多くの場面で児童の安全を担っているのだという責任感を改めて学んだ。

以上２点が今回の野外活動支援を通して特に感じたことである。今回の野外活動支援もさまざまな学びを得たうえで無事に終えることができた。通常の野外活動支援に比べて今回は徹底的に補助の色が濃く、それ故じっくりと児童や教育現場の様子を見ることができた。これは４年間子どもたちと関わっていくなかでも貴重な経験であったのではないかと考えている。主体性が重視されるこれからの教育において、野外活動支援の在り方についても今一度考えながら、今後の活動にも取り組んでいきたい。

【学生によるESD学習支援活動】
奈良市立佐保台小学校　野外活動　支援報告書

幼年教育専修　学部１回生　井原奈佑
技術専修　学部１回生　熊野里沙

１．実施日　令和元年６月26日（水）

２．場所　奈良市青少年野外活動センター

３．参加者　谷垣徹（大学院生）
市川侑季、假屋美有、柳川莉沙、稲富麻莉、井原奈佑、熊野里沙（学部生）
岡本彩希、石崎桃花、井奥康樹（奈良ユネスコ協会青年部）
奈良市立佐保台小学校児童、引率教員　複数名

４．活動支援内容

令和元年６月26日（水）、奈良市青少年野外センターにおいて、奈良市立佐保台小学校第４、５学年の野外活動が行われ、本学学生７名、奈良ユネスコ協会青年部３名が、オリエンテーリング、野外炊飯、キャンプファイヤーなどの支援を行った。

今回の野外活動支援を以下の２点で振り返る。第１に支援する立場としてどこまで手助けをするのかについて、第２に状況に応じて的確な判断をする重要さについてである。

第１の支援する立場として、どこまで手助けをするのかについてである。主に野外炊飯の時、火の扱いの多くを学生が行っていた際に、児童たちに多くのことを体験させてあげるべきだったと感じた。しかし、どこまで手助けをするのかという線引きについいて考え、判断するのは難しい。そして、児童の様子を観察しながら臨機応変にそのような判断ができるようになるために、これから多くの経験を積んでいかなければならないと感じた。

第２の状況に応じて的確な判断をする重要さについてである。今回は野外炊飯後に、入浴、キャンプファイヤーという順で予定を組んでいた。しかし天候が悪くなりそうなため、入浴とキャンプファイヤーを入れ替えることになった。先生方はこの変更を出すまでに、雨雲を携帯で何度も確認していた。そのおかげで入浴中には雨が降ってきたが、キャンプファイヤー時には一切雨が降らなかった。このような的確な判断があるからこそ、児童は最大限に楽しむことができるのだと感じた。これから自分たちが、さまざまなイレギュラーに応じて判断を下す際に、状況を把握して、的確な判断をしていく必要があると感じ、その重要性について気づくことができた。

キャンプファイヤーの様子

以上２点が、今回の野外活動支援を通じて特に感じたことである。実際に児童たちと関わることで見えてくる発見がたくさんあった。児童たちと関わることで、将来役に立つ経験にもなり、なにより自分自身の成長につながる。そして、この支援を通して気付いたことや反省点を、これからどう活かしていくかが大切だと感じた。このような貴重な体験を今後も積んでいきたいと思う。

【学生によるESD学習支援活動】
奈良市立富雄第三小学校　野外活動支援　報告書

社会科教育専修　学部１回生　岡本真実

１．実施日　令和元年７月４日（木）17：00〜21：30

２．場所　奈良市青少年野外活動センター

３．参加者　中西悠策（大学院生）
仲村幸奈、足立繁郁、林祐希、岡本真実、山口竜輝、吉田柚季（学部生）
奈良市立富雄第三小学校第５学年児童、引率教員　複数名

４．活動内容

令和元年７月４日（木）、奈良市青少年野外活動センターにおいて奈良市立富雄第三小学校第５学年の野外活動が行われ、本学学生７人がこの支援にあたった。１泊２日の活動のうち１日目の内容に関わり、薪組やトーチ準備などのキャンプファイヤーの準備、キャンプファイヤー中の児童の指導、日暮しの集いでの歌指導、学生主導のスタンツを行った。

キャンプファイヤーの様子

今回の野外活動支援について以下の２点で振り返る。第１に準備することの大切さ、第２に子どもたちと関わることの難しさである。

第１に準備することの大切さである。今回の野外活動支援では初めて参加する学生が多かったのだが、時間の都合により事前指導はなく、前日の打ち合わせだけで支援に臨むこととなった。そのため薪組の時間に最終打ち合わせが行われ、予定全体を把握できないままキャンプファイヤーを迎えてしまい、自分から行動することができない部分や不安なまま子どもたちと関わってしまう部分があった。次の活動では、予定確認などを含め事前準備により時間をかけた状態で当日に臨みたい。また、野外活動で使われる歌やスタンツについても覚えていきたい。

第２に、子どもたちと関わることの難しさである。この野外活動では、奈良教育大学ユネスコクラブの一員として行かせていただいたが、「先生」などと呼びかけてくる子どもたちをの様子に、子どもにとって私たちは教員の一人なのだと気づかされた。そのため、子どもたちの安全を守るために注意するといった声掛けも重要になってくる。また、子どもたちと会話するときに仲の良い友達のような話し方をしないことも重要である。特に会話することが苦手な子や活発な子のような子どもたちの特性に合わせて話しかけることを心掛けるべきだろうと学んだ。以上の点に気を付けて行わないと子どもとの関わりの中で問題が起こってくると感じた。

以上の２点がこの野外活動で学んだことである。今回の野外活動では、予定の確認といった初歩的なことやスタンツや歌を知らないといった自分に足りないと思うことなどのたくさんの課題点が出た。このような課題点をほかの支援活動などで活かし、自分の経験や知識を増やしていきたい。また、教員を目指すものとしての自覚を持ち、子どもたちとかかわっていくことを意識していきたい。

【学生によるESD活動支援】
奈良市立飛鳥小学校　野外活動　支援報告書

特別支援教育専修１回生　南方　玲美
音楽教育専修１回生　橋本　茉奈

１．実施日　令和元年９月18日（水）

２．場所　奈良市青少年野外活動センター

３．参加者　谷垣徹（大学院生）
仲村幸奈、奥田玲央、稲富麻莉、木村萌々香、橋本茉奈、南方玲美、山口春菜
石崎桃花、岡本彩希（奈良ユネスコ協会青年部）
奈良市立飛鳥小学校第５学年児童、引率教員　約80名

４．　活動支援内容

令和元年９月18日（水）、奈良市青少年野外活動支援センターにおいて、奈良市立飛鳥小学校第５学年の野外活動が行われ、本学ユネスコクラブの学生８名、奈良ユネスコ協会青年部２名が支援に当たった。１泊２日の活動のうち１日目の活動に関わり、オリエンテーリングでのポイントチェック、野外炊飯、キャンプファイヤーの支援を主に行った。

今回の野外活動支援について以下の２点で振り返る。第１に私たちがどこまで手伝って良いのかについて、第２に準備の大切さについてである。

第１に私たちがどこまで手伝って良いのかについてである。これは特に、野外炊飯のときに強く感じた。準備段階では、各自与えられた役割に取り組み、カレーを完成させることができた。しかし、片付けをしているときに自分の班の鍋や飯盒、食器を洗わずに遊んでいる児童が見られた。そこで児童本人ではなく私たち学生が洗い場まで食器を運んだり、洗ったりしてしまった。ここでは片付けをして使う前の状態に戻す、またそれ以上に美しくして帰ることまでが大切だということを言葉で伝えなかったことを反省しないといけないと感じた。児童が今何をしなければいけないのかをきちんと把握し、状況に応じて適度な支援をしなければいけないと痛感した。

第２に準備の大切さについてである。このことは今回の支援の中で何度も感じたことである。オリエンテーリングでは、児童が地図を思うように解読できず次のポイントへの道を聞かれることがあった。しかし、私自身も初めての場所で答えることができないことがあったため、最低限の質問には答えられるような準備が必要だと感じた。また、キャンプファイヤーでは、歌詞が曖昧で覚えきれていない歌があり準備不足だった。私は野外活動を支える立場であり、大きな責任を担っているという意識が薄かったのだと気づかされた。児童にとって一生記憶に残る体験を支援することは、入念な準備が最も重要なことなのではないかと感じた。

キャンプファイヤーの様子

以上２点が、今回の野外活動支援を通して特に感じたことである。普段はできない児童との深い関わりを持てたことや、学生全員が初めての挑戦をしたことで多くの発見や反省点があった。そして、児童にとって１度しかない貴重な活動に参加できたことの意義をしっかりと理解し、今後に活かしていくことが大切だと再認識した。これらのことを心に留めながら、これからの活動にも積極的に参加していきたい。

【学生によるESD学習支援活動】
奈良市立東市小学校　野外活動支援　報告書

教育学専修　学部１回生　岩城雄大

１．実施日　令和元年９月19日（木）

２．場所　奈良市青少年野外活動センター

３．参加者　谷垣徹（大学院生）
仲村幸奈、岩城雄大、柳川莉沙（学部生）
奈良市立東市小学校第５学年児童、引率教員　約50名

４．活動支援内容

令和元年９月 19 日（木）、奈良市青少年野外活動センターにおいて、 奈良市立東市小学校第５学年の野外活動が行われ、本学学生４名がその支援に当たった。1泊２日のうちの主に１日目に関わった。

今回の野外活動支援を以下の２点で振り返る。第１に事前指導の重要性、第２に子どもたちの集団行動の補助についてである。

キャンプファイヤーの様子

第１に事前指導の重要性である。今回は東市小学校へスタンツの事前指導に行っていたため、子どもたちもやる気になっていたという話を教頭先生から伺っていた。実際、当日のスタンツは子どもたちが班ごとで様々に工夫を凝らした良いものになっていた。一方で小学生への事前指導はさることながら、学生の準備やゲームについての事前指導の重要性も感じることとなった。私は一人でゲームを担当することになり、一人で楽器を演奏しながら、指示を出さなくてはならず、至らないところが多かったのだが、事前に指導を受けておけばそのようなことにはならなかっただろうと思い、悔やまれる。今後は計画性を持って企画を出した段階で助言をいただき、改善していこうと考えている。

第２に子どもたちの集団行動の補助についてである。野外オリエンテーリングにおいて、班の中の子どもたちが分かれ、別行動をしてしまうということがあった。計画性があって別行動しているのであれば班であることを意識した有益な行動であるが、喧嘩別れのような分かれ方であったため、どうすればよいのかわからなかった。その子たちは小学校の先生と話をし、その後は班員が全員で活動していたので安心した。私はこのような状況になった子どもたちを良い関係に持っていけるようなスキルを身に着けたいと考えている。

今回の野外活動は、子どもたちだけでなく私たちも新たな気づきや学びがあった。キャンプファイヤーで使う歌が変わったとしても気分を盛り上げることができるということに気づいたり、何回もゲームマスターやスタンツマスターを務めることで要領などを学んだりすることができた。私の学びは「キャンプファイヤーでピアニカやハーモニカを演奏しながらスタンツやゲームを進めるのは難しいのでギターを使う方が好ましい」ということと、「歌う方向や呼びかけの方向を火の向こうにいる人たちに向けると声がすべての人々に通る」ということだ。これからも活動をつづけ、「キャンプファイヤーとはこういうものである」という常識も知りながら、私独自のスタンツやゲームも考えて実践していきたい。

【学生によるＥＳＤ学習支援活動】
奈良市立都跡小学校　野外活動支援　報告書

理科教育専修　１回生　假屋　美有

１．実施日　令和元年９月 26 日（木）18：00〜21：30

２．場所　奈良市青少年野外活動センター

３．参加者　谷垣徹（大学院生）
市川侑季、假屋美有、柳川莉沙（学部生）
石崎桃花、瀧上眞奈（奈良ユネスコ協会青年部）
奈良市立都跡小学校第５学年児童　約 50 名、引率教員　約 15 名

４．活動支援内容

令和元年９月 26 日（木）、奈良市青少年野外活動センターにおいて、奈良市立都跡小学校第５学年の野外活動が行われ、本学学生４名、奈良ユネスコ協会青年部２名がこの支援にあたった。主に夕方頃から行われたキャンプファイアーの支援、ファイアーキーパー、スタンツ等の活動を行った。

キャンプファイアーの様子

今回の野外活動支援について以下の２点で振り返る。第１に生徒と積極的に関わる意識を持つことについて、第２に自ら挑戦することの大切さについてである。

第１の生徒と積極的に関わる意識を持つことについてである。今回の野外活動支援は野外炊飯等がなかったため、生徒との交流があまりないままキャンプファイアーの支援を行っていた。野外活動は単に楽しむためのものだけではなく、人と人との絆やつながりがとても重要となってくる。そのため、今回のような場合には特に児童への声掛けを積極的に行い、距離が縮まるように心がけることが必要であると感じた。

第２の自ら挑戦することの大切さについてである。今回の参加者は野外活動支援の経験者が多かったため、各々が新たな仕事を任される機会があった。戸惑いの中、お互いに相談や話し合いを重ね、何度も練習したりと準備をしっかり行っていた。しかし、成功を願う反面、うまくいかずにもどかしい思いをしたこともしばしばあった。その一つに、自分たちで行ったスタンツにて、準備はできていたものの子どもたちへ声が届かず、ルールの説明をスムーズに行うことができないことがあった。悔いの残る場面もあるが、失敗を振り返り、反省し、次への課題としたい。この繰り返しがより良い活動への道になるのではないかと感じる。そのためには失敗を恐れず、常に挑戦する姿勢を持ち続けることが大切である。

今回の活動では、多くの反省があった。しかし、そこからの成長に大きく繋がるものであったのではないかと感じている。失敗を失敗のまま終わらせるのではなく、次の成功への糧とする。そういった新たな目標をこの野外活動支援で学ぶことができた。今回の活動で得られたそれぞれの思いを、将来の「教員」という夢に向けて、また、一人の人間として、さらに成長していけるよう経験を積み、自らを培っていきたいと思う。

【学生によるＥＳＤ学習支援活動】
奈良市立六条小学校　野外活動支援　報告書

理科教育専修　学部１回生　假屋美有

１．実施日　令和元年 10 月２日（水）

２．場所　生駒山麓公園野外活動センター

３．参加者　谷垣徹（大学院生）
市川侑季、井原奈佑、假屋美有（学部生）
瀧上眞奈、松村京佳（奈良ユネスコ協会青年部）
奈良市立六条小学校第五学年児童　約 120 名、引率教員　約 20 名

４．活動支援内容

令和元年 10 月２日（水）、生駒市にある生駒山麓公園野外活動センターにおいて、奈良市立六条小学校第５学年の野外活動が行われ、本学学生４名、奈良ユネスコ協会青年部２名がこの支援にあたった。この活動では、午後からの野外炊飯の支援やキャンプファイアーの準備、歌の指導、学生主導のスタンツを行った。

キャンプファイアーの様子

今回の活動を以下の２点から振り返る。第１に状況に応じて臨機応変に対応すること、第２に常に周りを見て行動することである。

第１の状況に応じて臨機応変に対応することについてである。今回の野外活動に参加していた小学生は約 120 名と、かなり多人数の児童が参加していた。そのためキャンプファイアーの際には炎と児童との距離が離れてしまうなど、多人数故に起こる様々な場面が見られた。このように、あらかじめ想定できていなかった状況に出会ってしまったとしても、臨機応変に対応できるようにすることが大切であると感じたが、今回はできなかったため次の機会があれば実行していきたい。

第２の常に周りを見て行動することについてである。野外炊飯の際にはそれぞれが割り当てられた班を担当した。しかし、すべての班に一人ずつ付くことはできないため、自分の担当する班の様子も見つつ、支援者のついていない他の班の支援も行う必要があった。特に調理には扱いに注意しなくてはならない包丁をはじめ、様々な危険が伴ってくるので、十分な注意を払わなければならなかった。一つのことに集中しすぎるのではなく、常に周りを見て行動し、少人数ではなく多くの児童の支援に取り組むことが重要であると考えた。

今回の野外活動支援において、常に周りの様子を見て、臨機応変に行動する大切さを学んだ。これは、支援だけでなく、目標である学校教員においても求められる力であると考える。今回の支援において、個人の成長を感じられた反面、悔いの残る場面も多々あった。しかし、それを学びとして次へつなげていきたいと思う。これからも積極的に活動に参加し、経験を積み、成長を通して自分自身の力を培っていきたいと思う。

【学生によるESD学習支援活動】
奈良市立西大寺北小学校　野外活動　支援報告書

国語教育専修２回生　西條　秀哉

１．実施日　令和元年10月２日（水）

２．場所　奈良市青少年野外活動センター

３．参加者　坂本、仲村、後藤、西條、中田、稲原、柳川（学部生）
奈良市立西大寺北小学校　第５学年児童　約90人
引率教員　約10人

４．活動支援内容

令和元年10月２日（水）、奈良市青少年野外活動センターにおいて、奈良市立西大寺北小学校第５学年の野外活動が行われ、本学学生７名がその支援に当たった。１泊２日のうちの主に１日目に関わり、オリエンテーションから、野外炊飯、キャンプファイヤーまでの活動の支援を行った。

今回の野外活動支援を以下の３点で振り返る。1点目は子どもたちにゲームを教える難しさ、２点目は大人数の子どもたちを相手にキャンプファイヤーをすること、3点目は野外活動のノウハウを後輩たちに伝えることだ。

1点目の子どもたちにゲームを教える難しさについては、事前研修の際に感じた。本活動では事前研修を２回行っており、私はどちらにも参加した。実際に子どもたちの前で２つゲームを行い、その後子どもたち同士で話し合わせて当日行うゲームを考えさせた。その際、他にどのようなゲームがあるのか子どもたちから質問を多く受けたが、私はあまり多くのゲームを知らず、別の班ごとに同じゲームを教えてしまうことがあった。子どもたちにとっては、私は野外活動の専門家であり頼れる存在であるので、もっと野外活動のゲームの種類を把握して教えられるようにしておくべきだったと反省している。

２点目の大人数の子どもたちを相手にキャンプファイヤーをすることについては、キャンプファイヤーを行った際に感じた。今回のキャンプファイヤーは、子どもたち主体の活動であり、学生は後方支援がメインであった。しかし、児童数が今まで自分の活動してきた小学校とは日にならないほど多く、場を盛り上げたり、子どもたちの安全に気を配ったりすることがとても難しかった。大人数に紛れてしんどそうな子どもや、退屈そうにしている子どもが何度か見受けられたので、油断せず子どもたちを広く細かく見渡す必要があると思った。

3点目の野外活動のノウハウを後輩たちに伝えることについては、本活動全体を通して感じた。私は野外活動支援に参加してからおよそ1年経っており、本活動には初めて野外活動支援を行う1回生や2回生がいた。私は、本活動に慣れているからこそ、彼らがこれから積極的に野外活動支援に参加していけるように、野外活動のノウハウを教えて、活動の楽しさを体験してもらえるように尽力した。

薪組の様子

以上のことから、まだまだ教える側としては説明の仕方や促し方が不十分だと感じたので、これからも私自身が積極的に野外活動支援に参加し、後輩や初体験の人に技術と魅力を伝えていけるように努力していきたい。

【学生によるESD学習支援活動】
奈良市立佐保川小学校　野外活動支援　報告書

幼年教育専修　学部１回生　井原奈佑

１．実施日　令和元年10月17日（木）

２．場所　奈良市青少年野外活動センター

３．参加者　谷垣徹（大学院生）井原奈佑（学部生）新田結子（奈良ユネスコ協会青年部）
奈良市立佐保川小学校児童、引率教員　約75人

４．活動支援内容

令和元年10月17日（木）、奈良市青少年野外活動センターにおいて、奈良市立佐保川小学校第５学年の野外活動が行われ、本学生２名、奈良ユネスコ協会青年部から１名がその支援に当たった。１泊２日のうち主に１日目に関わり、キャンプファイアーの支援を行った。支援の具体的な内容としては、キャンプファイアー時のファイアーキーパーである。児童らが安全にキャンプファイアーを楽しめるように、火の管理、スタンツの盛り上げを行った。

今回の野外活動支援を以下の２点で振り返る。第１に児童との距離について、第２に今回のキャンプファイアーに先生方の思いがしっかりとこもっていたという点についてだ。

第１の生徒との距離については、他の野外活動支援では、朝からまたは野外炊飯が始まるお昼から参加することが多く、そこで子どもたちとある程度打ち解けた状態でキャンプファイヤーに臨むことが多かった。しかし今回は、キャンプファイアーの準備からの参加だったので、子どもたちと面識がないまま始まった。その状態で盛り上げるための声掛けをするのはとても難しく、学生が入ることでしっかりと形が出来ている和を乱してしまうのではないかと思い、積極的に関わることが出来なかった。そのような状況でも、子どもたちの声掛けに反応してあげられるように臨機応変な対応をしていきたいと思った。

第２に、キャンプファイアーに先生方の思いがしっかりとこもっているという点だ。今までの野外活動支援では、キャンプファイアーの時に、ユネスコクラブに全てを任せてくださるところが多かった。それは、私たちにとって大きな経験になる。しかし、今回は先生とキャンプファイアー係を中心に学年全員で作り上げていた。事前に学校でしっかりと流れや、スタンツの練習をしてのぞんでいた。先生が係の子どもに「恥ずかしさを捨てないといけないよ」と言って、率先して盛り上げに回っていたことで、子どもたちもどこか吹っ切れた様子であった。そして先生方が、キャンプファイアーを通して伝えたかったことが、しっかりと子どもたちに伝わっていて、それによって全員の気持ちが一つの方向に向いていた。このことから、子どもたちが積極的に参加できるにかについては、先生などの周りの人の影響が大きいことが分かった。そして同時に、学年全員でつくるキャンプファイアーは、見ているだけで楽しく、勉強になった。

キャンプファイアーの様子

以上２点が、今回の野外活動支援を通じて特に感じたことである。今年、ユネスコクラブでは最後となる野外活動支援で、先生と生徒が一体となってつくりあげるキャンプファイアーを見られたことは、これからの自分自身にとっても、ユネスコクラブにとってもいい経験になったと思う。

【学生によるESD支援活動】
奈良市スポーツ少年団　キャンプ　支援報告書

理科教育専修　学部１回生　市川侑季
理科教育専修　学部１回生　柳川莉沙

１・実施日　令和元年８月22日(木)

２．場所　奈良市青少年野外活動センター

３・参加者　谷垣徹(大学院生)
坂本和音、市川侑季、稲原龍一、井原奈佑、柳川莉沙(学部生)
奈良市スポーツ少年団児童、引率教員、市役所職員　複数名

４．活動支援内容

令和元年８月22日(木)、奈良市青少年野外活動センターにおいて、奈良市スポーツ少年団に所属している児童のキャンプが行われ、本学学生６名が、オリエンテーリングや川遊び、野外炊飯、キャンプファイヤーなどのサポートを行った。

オリエンテーションの様子

今回のキャンプ支援を以下の２点で振り返る。第１に子どもたちとの交流について、第２に学生側の学びについてである。

第１の子どもたちとの交流についてである。今回の奈良市スポーツ少年団は、小学４年生から６年生の全員が男の子の団体であった。今回参加した学生は女子が多かったこともあり、最初は自分から声を掛けてくる子どもが少なかった。川遊びや野外炊飯で彼らとの距離を縮めるように努力し、午後の活動では少しずつではあったが子どもたちと打ち解けることができた。しかし、最後のキャンプファイヤーでは子どもの心をうまく掴み切れなかった。もっと自分から子どもの輪に入り込み、より早く子どもに心を開いてもらうことが大切であると学んだ。また、このような子どもたちとの関係性は、キャンプファイヤーなどのイベントにも影響することを痛感した。

第２に学生側の学びについてである。今回のキャンプ支援ではキャンプファイヤーの運営を全て学生が行うこととなった。今までの支援活動の中でも、野外活動支援に参加したことはあったが、キャンプファイヤーを進行し、またゲームや歌などを学生が主体となって行ったことがなかったため、とてもたくさんのことを学べた。歌やゲームの教え方など、キャンプファイヤーの運営、進行はとても難しいことが多かった。しかし、ゲームの進め方や子どもたちへの声かけなど、子どもたちの前に出たときに、自分がどのように立ち振る舞えばよいのかを学ぶことができた。また、キャンプファイヤーを学生が主体となって進めていくということが初めての学生が多く、それぞれがファイヤーキーパーやゲームの進行など新たなことへの挑戦ができ、貴重な経験となった。

以上２点が、今回のキャンプ支援を通じて特に感じたことである。まだまだ自分たちの力不足もあり、反省点がたくさんある。だが、これらは、子どもたちと実際に関わることで発見した気づきであり、将来教職に就くことを目標としている私たちの立場としては非常に良い経験ができたと感じている。今回の活動で学んだことや反省点をきちんと振り返り、改善策を考え、そして次の機会できちんと活かしていきたい。

第 11 回ユネスコスクール全国大会
持続可能な開発のための教育（ESD）研究大会
参加報告書

英語教育専修　修士２回生　谷垣　徹

1. 日　時　2019 年 11 月 30 日（土）10：00〜17：00
2. 会　場　福山市立大学（広島県福山市港町 2-19-1）
3. 主　催　文部科学省　日本ユネスコ国内委員会
4. 共　催　NPO 法人日本持続発展教育推進フォーラム、福山市、福山市教育委員会、広島県ユネスコスクール連絡協議会、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター、公益財団法人日本ユネスコ協会連盟
5. 参加者　本学教員　加藤久雄、高橋豪仁、中澤静男、河野晋也（附属小学校）
   本学学生　谷垣徹（大学院）、奥田玲央、仲村幸奈、狗飼菜々子、山本健太、稲富麻莉、長滝谷幸子、南方玲美（学部）
   近畿 ESD コンソーシアム教員　大西浩明、三木恵介、中澤哲也
6. テーマ　『ユネスコスクールで学ぶもの、育てるもの』
   ―学習指導要領、学校経営、地域社会、国際社会などとの関りを改めて考える―
7. プログラム

時間	プログラム
9：15〜	**受付** ESD 関連団体および企業によるブース展示
10：00〜10：20	**開会式**
10：25〜11：15	**基調講演「ESD 学校教育における実践の展望」** 見上一幸氏（前宮城教育大学長） **特別講演「ユネスコの理念と ESD」** 平川理恵氏（広島県教育委員会教育長）
	世界の舞台で活躍したユネスコ活動報告 「持続可能な開発のための教育（ESD）：気候変動アクションに向けた学び」 （2019 年 9 月、アメリカ・ニューヨーク） 牧本武蔵氏（広島県立安古市高等学校） 「ユネスコ・ユース・フォーラム」（2019 年 11 月、フランス・パリ） 谷垣徹（奈良教育大学大学院）
11：20〜12：40	**パネルディスカッション** **「ESD で学ぶ平和〜広島の中高生が学び、語る平和の在り方」** 大会開催前に、広島の中高生が世界の課題解決を目指す教育、シミュレーションゲーム（ワールドピースゲーム）に挑戦。そこでの経験や学んだことを語る。
12：50〜14：00	**ランチョンセッション** 企業が行う教育支援や社会貢献に関するプレゼンテーション
14：00〜14：30	**ESD EXPO TIME** ユネスコスクール地域ブロック大会パネル展示や ESD 関連ブース展示の閲覧

14：30～16：20	分科会（ワークショップ＆テーマ別交流研修会）	
	【ワークショップ】 ① ESD で育む資質・能力を考える ② SDGs 教材の開発をどう進めるか ③ ESD を軸としたカリキュラムマネジメント ④ ESD の視点で教員の働き方改革を実現する ⑤ 持続可能なESDのための教員の資質能力の育成 ⑥ ESD と SDGs で学校種間の連携をどのように進めるか	【テーマ別交流研修会】 ⑦ 環境問題を生徒が『ジブンゴト』とする取り組み ⑧ 平和のための学び ESD for SDGs ⑨ ESD で進める特別支援教育 ⑩ ユネスコスクールが行う海外連携 ⑪ 命を守る教育と ESD ⑫ 地域社会とともに取り組むESDとSDGs の活動のあり方とは
16：30～17：00	ESD 大賞表彰式・閉会式	

8. 全体会の詳細報告

(1) 基調講演「ESD 学校教育における実践の展望」

基調講演では、これからさらに時代の変化が進んでいく中で、子どもたちに求められるものとは何かについての話があった。情報技術や AI が発展するにつれ、シンギュラリズムが懸念化される将来において、子どもたちは様々な資質能力を身につけ、その時代の変化に対応していかなければならない。そこで期待されるのが、ESD であり、ユネスコスクール活動であるということだった。

この講演をうけて私は、これから教育において ESD がますます重要性を増していくことと、その広い可能性について改めて感じた。私が将来教員になったとき、時代は目まぐるしく変わっていくだろう。その時のために、ESD に力を入れている奈良教育大学に入学したからには、恵まれた環境を活かし、積極的に ESD についての学びを深めていきたいと強く思った。

（社会科教育専修２回生　山本健太）

(2) 特別講演「ユネスコの理念と ESD」

ユネスコの理念と ESD と題した平川理恵氏の特別講演を聞いて、私は以下のようなことを感じた。持続可能な開発を達成するためには私たち一人ひとりが世代間、地域間、男女間、世界の人々や将来の世代との結びつきを意識することが大前提になっていると思った。持続可能な開発のための教育とは、これらのようにたくさんのものとの関係性を認識すること、それらが平等で平和なものになるよう行動を変革することができるようになるための教育だと考える。これらを実現させるためには３つの力が必要である。１つ目に環境の保全と経済の発展の両立などものごとを多面的、総合的に捉える力、２つ目に立場や考え方の違う相手を尊重し協調する力、３つ目に誰が取り組んでも持続するシステムを作れるように努力する力である。私自身にも児童にもこのような力をつけることができるような教師になりたいと思った。

（特別支援教育専修１回生　南方玲美）

(3) 世界の舞台で活躍したユネスコ活動報告

私は 2019 年 11 月にフランス・パリで開催された 11th UNESCO Youth Forum に日本代表として参加し、このユネスコスクール全国大会の全体会の場でその報告の機会を得た。本フォーラ

ムでは世界中の 60 カ国からユネスコ活動に取り組むユースが集い、各国のユネスコ活動の現状や課題をシェアし、ユースによるユネスコ活動をより活発化させるための方策を議論した。世界各国におけるユースのユネスコ活動の活発化とプラットフォームの構築を目的として Global UNESCO Youth Community of Practice (YCoP)の方針を固めた。本フォーラムはユネスコ総会の期間に合わせて開催され、この YCoP はユースからの提言として総会に提出された。本フォーラムの参加を通してユネスコ活動の幅広さを改めて感じたとともに、日本のユネスコ・ESD に関する取り組み特徴や強み、また課題が発見することができた。本フォーラムに参加して得た経験とネットワークを絶やさず、今後も日本のユネスコ・ESD ユース活動に邁進していきたい。

UNESCO Youth Forum の報告の様子

（英語教育専修　修士２回生　谷垣徹）

(4) パネルディスカッション

「ESD で学ぶ平和～広島の中高生が学び、語る平和の在り方」

パネルディスカッションでは、広島県内の４名の中高生が登壇し、ワールドピースゲームを体験して得た学びについて各自の考えを述べていた。ワールドピースゲームは、様々な世界の課題に対して参加した者たちが仮想世界を舞台に、国際社会の持続的な平和と発展のために対話を通して問題解決を目指していくシミュレーションゲームである。ゲームの内容としては、非常に難しいものを感じた。しかし、参加者たちがそれぞれの立場に立って問題解決のための方法を考えることで、互いの考えを踏まえながら話し合い、皆が納得できる方法は何か考えていっている様子が見て分かり、ゲームを進めていく中でより「自分事」として捉えるきっかけになる良い方法なのだろうと考えた。

パネルディスカションの様子

私は、このパネルディスカッションを聞いて、非常に良い刺激になったと感じている。私たち学生よりも年下の中高生が、会場内からの難しい質問に対してもハキハキと自分の意見を述べ、積極的に語っている姿は立派であった。同時に、私たち学生もまだまだ頑張らなければならないなとやる気にも繋がった。

（社会科教育専修３回生　仲村幸奈）

9. 分科会（ワークショップ＆テーマ別交流研修会）参加報告

(1) 第５分科会「持続可能な ESD のための教員の資質能力の育成」

午後に行われた分科会で私は「持続可能な ESD のための教員の資質能力の育成」について学

んだ。ESD を推進するために中学校の研究主任として「ESD」の授業を実際にカリキュラムに組み込んだ方や、学校と地域・企業を繋げて持続可能な社会をつくっている方など、ESD の次世代リーダーとして様々な立場で活躍する「ESD 日本ユース」メンバーの実践をたくさん聞くことができた。

今回この分科会に参加した人のほとんどが中学校や高校の教員だった。そこで、大多数の先生方が ESD を授業で積極的に取り入れようとしても、他の先生たちとのやる気・意識の差に悩んでいると言っていた。この分科会を通して、ESD を推進するためには周囲を巻き込み、互いに連携していくことが大切であると気づいた。将来、率先して持続可能な社会の創り手を育んでいける教師になりたい。

（英語教育専修１回生　稲富麻莉）

(2) 第８分科会「平和のための学び ESD for SDGs」

第８分科会「平和のための学び ESD for SDGs」では、大牟田市による SDGs の達成に向けた世界遺産学習の実践例紹介、長野県中野西高等学校による ESD 活動報告が冒頭に行われた。市内すべての学校がユネスコスクールに認定されている大牟田市は、市内にある世界遺産を活用して子どもたちに地域構成員としての自覚を持たせながら学ぶことを実践しているとの報告があった。中野西高等学校では、ユネスコウイークを導入し、短期集中型の ESD の学習を行っており、特に教科横断型のコラボ授業は中野西高等学校の特色となっているようである。

その後、「ESD でこんな子どもを育てたい」をテーマにトークセッションが行われた。小・中・高それぞれが子どもの発達段階に沿った教育方針を話し合っており、多様な年齢層の方々と意見を交わす場は自分にとって大変有意義なものであった。最後に、東京大学主幹研究員、日本ユネスコ協会連盟理事の及川幸彦氏による講話が行われた。平和を持続可能な世界であると定義したうえで、持続可能な世界づくりのためには人材育成が必要不可欠であるという結論を提示していた。SDGs のための ESD であり、ESD を実践するための人材を育成するということが教育の課題であるということを投げかけたところで分科会の終わりとなった。

（社会科教育専修３回生　奥田玲央）

(3) 第９分科会「ESD で進める特別支援教育―多様性を視点に学校全体で取り組む特別支援教育」

第９分科会では、「ＥＳＤで進める特別支援教育―多様性を視点に学校全体で取り組む特別支援教育」と題してテーマ別研修交流会が行われた。まず始めに、千葉県立印旛特別支援学校の髙橋俊介先生による、ユネスコスクールとしての ESD の取り組みのお話を頂いた。次に、参加者による質疑応答の時間が設けられ、最後に伊藤佐奈美先生による助言を頂いた。

髙橋先生の実践報告は、学校の紹介と、学校で何を取り組んでいるかについてであった。千葉県立印旛特別支援学校では、近くにある小中学校と交流したり、印旛カンパニーやよしきりフェアなどをしたり、地域の人々とのかかわりが持てる活動を多く行っている。子どもたちが、将来地域で生きていくために、何をすれば子どもたちのためになるかを考えて行っている活動だ。研修等には難しいイメージがあるので、長く活動を続けていくためにも、研修はあまり行わず、ESD の活動を主体として行っている。

伊藤先生による指導助言は、ESD の活動がなぜ進まないのか、どのように普及させていくかについてだった。様々な学校での取り組みを参考に、参加者それぞれの学校でどのように活か

していけるかについて最後にまとめをして終了した。

（特別支援教育専修１回生　長滝谷幸子）

(4) 第 11 分科会「命を守る教育と ESD」

分科会で発言する本学学生

私は、第 11 分科会の「命を守る教育と ESD」についてのテーマ別交流研修会に参加した。まず、三重県桑名市立城南小学校の校長をされている諸戸美香先生から、「災害体験を生かし、地域とともに命を育てる行動力を育てる」ための取り組みを、周辺で昭和 34 年に発生した伊勢湾台風の概況とともに伺った。避難には逃げる避難と留まる避難があり、そのどちらを選ぶかは命を守るための的確な判断力が求められる。城南小学校では様々な取り組みがされていて、私が特に印象に残っているのは、避難の際により迅速に避難できるよう、１年生と６年生、２年生と５年生、３年生と４年生がペアになって年長者が手を強く引き共に避難するよう訓練しているということである。このことは逃げるスピードがどうしても遅くなってしまう低学年が逃げ遅れないという点と、年長者が避難に関して責任感を持って行動できるという点で効果のあるものだと感じた。

次に宮城教育大学教授の市瀬智紀先生から、東日本大震災の経験に基づいた「学校レジリエンス」についての考察についてのお話があった後、命を守る教育に関して教員がすべきことは何なのか、「避難計画」、「避難行動」、「長期的な支援体制」、「避難所運営」の４つに分けてグループディスカッションを行った。私自身東日本大震災を地元である福島県で経験しており災害の恐ろしさ、当事者意識の大切さは常に考えていたつもりであったが、実際に自分の行動を振り返ってみると教員となった際に子どもの命を守る行動ができるのか不安が残った。これを機にもう一度命を守る教育について考えるべきだと感じた。

（音楽教育専修２回生　狗飼菜々子）

ガールスカウト日本連盟
第１回コミュニティアクション　チャレンジ 100 アワード　受賞報告書

英語教育専修　大学院２回生　谷垣徹

1. **日　時**　2019 年 10 月 14 日（月祝）11：30〜17：00
2. **会　場**　SYD（修養団）ホール（東京都渋谷区千駄ヶ谷 4-24-2）
3. **参加者**　大学院生　谷垣徹（英語教育専修２回生）
   学部生　狗飼菜々子（音楽教育専修２回生）、加藤真由（社会科教育専修１回生）
4. **スケジュール**

時間	内容
11：20	発表者集合・受付
11：30〜12：15	リハーサル
13：00〜13：45	開会式・表彰式
13：45〜14：15	受賞者による活動報告（プレゼンテーション）
14：15〜14：55	休憩・活動報告（ポスターセッション）
14：55〜16：30	パネルディスカション 「少女と女性が行きやすい社会の実現に向けて」
16：30〜17：00	閉会式

5. **受賞グループ一覧**

【コミュニティアクション賞】２グループ

- チームオラブ　「歩く国際協力・オラブプロジェクト」（大分県）
- そなえの極み乙女　「そなえよ乙女」（京都府）

【チャレンジ賞】４グループ

- 奈良教育大学ユネスコクラブ　「西日本豪雨災害復興支援ボランティア」（奈良県）
- PRG（ピンクリボンを PR するガールズ）　「ピンクリボンプロジェクト」（福岡県）
- 奈良市立平城東中学校生徒会　「いじめをなくそう！」（奈良県）
- にじいろ　「ジェンダーレスプロジェクト」（京都府）

【日能研賞】１グループ

- 神戸地区協議会 SR ミーティング in 神戸まつり 2018「ありがとうの輪を広げよう〜ガールだヨ！全員集合！〜」（兵庫県）

6. **受賞理由**

審査項目に照らし、総合的に審査した結果、少女や女性の視点を少し含みながら、より良い社会への変化を起こしはじめる努力が認められた。少女と女性にとってのより良い社会への変化に焦点が絞られているとさらに良かった。

【コメント】　ゴールや数値目標の設定に女性を置き、女性の視点を意識しながら取り組まれていた点を評価しました。ただし、一軒一軒を訪れ、住民のニーズを聞いて行動した点については、ニーズが何であり、少女と女性の視点に立って具体的にどのような活動をしたかなどが、もっと見えるとよかったと思います。自身の活動を 11 回終え、被災地ボランティアシンポジウムを開催し、発信していったことは、発展的であり、チャレンジ賞に値するとしました。今後は、大学というシチュエーションを生かし、もう少し少女と女性の視点に立って、発展的に取り組んでいただけることに期待します。

「第１回コミュニティアクション　チャレンジ100アワード表彰式」に参加して

音楽教育専修　学部２回生　狗飼　菜々子

活動報告の練習の様子

2019年10月14日、東京都渋谷区SYDホールにて行われた、公益財団法人ガールスカウト日本連盟主催の「第１回コミュニティアクション　チャレンジ100アワード表彰式」に奈良教育大学ユネスコクラブ代表として参加した。私たち奈良教育大学ユネスコクラブでは昨年７月に発生した西日本豪雨で甚大な被害を受けた岡山県岡山市、倉敷市で継続的に復興支援ボランティアを行っており、計11回、延べ42人の学生がこの活動に参加した。私たちのこの活動が表彰され、今回「チャレンジ賞」を受賞した。

私はこの「第１回コミュニティアクション　チャレンジ100アワード表彰式」を通してたくさんのことを感じ、考えた。本報告書ではその中から大きく３つを取り上げたい。１つ目は西日本豪雨の風化について、２つ目はプロジェクトを発表した際の自分の未熟さについて、３つ目はガールスカウトの方々についてである。

１つ目は西日本豪雨の風化である。この表彰式の中で、ポスターセッションという形で自分たちの活動を発表する時間があったが、その際に岡山の現状について質問されることが多くあった。西日本豪雨が発生してから一年以上が経過し、以前ほどメディアで岡山の現状が報道されることが無くなった。そのため、被災地から離れた地域に住む方は西日本豪雨に関する情報が入らなくなっている。そのことが風化に繋がり、多く質問されたのだと感じた。現地に継続的に行っている私たちだからこそ分かることが多くあるということを再確認した。

２つ目はプロジェクトを発表した際の自分の未熟さである。今回代表として壇上に上がり、プロジェクトについて発表したが、緊張から途中噛んでしまったりして、自分たちが一年続けてきたプロジェクトが聞いて下さった方にしっかり伝わったか、反省点の残るものとなった。その後発表されたガールスカウトの団体の発表者は自分よりも遥かに年下であったが、自分よりも伝わりやすい発表で、まだまだ努力が足りないと感じた。この気持ちを忘れずこれからに繋げていきたい。

３つ目はガールスカウトの方々についてである。今回のアワードはガールスカウト日本連盟が主催であったため、私たちユネスコクラブ以外のすべての表彰団体がガールスカウト関係の団体であった。私は今回の表彰式に参加したことで、初めてガールスカウトの存在を知った。ガールスカウトはそもそもどんなことを行っているのか全く知らなかった私は、彼女たちの活動、行動力、取り組みの姿勢などの全てに驚かされ、また感銘を受けた。小学生の団員でもいきなり意見を求められた際に自分の意見をしっかりと答えることが出来ていて、自分は大学生であるのに…と彼女たちと自分を比べて恥ずかしくなるような場面が多々あった。プロジェクトもこのアワードが大切にしている「女性が輝ける社会づくり」に繋がるものがたくさんあり、いい刺激をたくさんもらった。この刺激をこれからの私たちの活動に生かしていきたい。

この表彰式で他団体の活動をたくさん知ることができ、自分たちの活動でも実践したいと思うものが多くあった。今回表彰していただいたが、これで終わらずこれからも継続して、私たちが行っているこのプロジェクトが防災に関心を持ってもらうためにより良いものとなるよう活動していきたい。

ガールスカウト第１回コミュニティアクションチャレンジアワード100での発表を通して

社会科教育専修１回生　加藤真由

今回私たちは、ガールスカウト日本連盟主催第１回コミュニティアクションチャレンジアワード 100 の表彰式に参加し、また今回表彰された「西日本豪雨災害復興支援ボランティア」の活動についての発表の機会をいただいた。他に表彰されているガールスカウトの団体の発表を見ることもできた。

今回この表彰式に参加するまで、私にとってガールスカウトがあまり身近でなかったため、活動報告の内容はとても新鮮なものに感じた。そこで聞いたことや私たちが行った発表を通して感じたことが３つある。１つ目はユネスコクラブの活動について、２つ目は行動に起こすということについて、３つ目は先輩方が行ってきた活動を字分がどう受け継ぎ、深めていくかについてである。

まず１つ目は、ユネスコクラブの活動についてだ。今回、コミュニティアクションチャレンジアワード 100 で表彰されている団体の中に平城東中学校生徒会の名前があった。彼女らは活動を始めたきっかけは「ストップいじめなら子どもサミット」だったと発表していた。この「ストップいじめなら子どもサミット」は、奈良市立中学校の生徒会代表者が「いじめを許さない学校づくり」に向けた意見や活動の交流を行い、子どもたち自らがいじめの問題を主体的に考えることを目的としているもので、ユネスコクラブは開始当初から３年間スタッフとして参加していた。このことから、ユネスコクラブでの活動は他の人にもその活動の意味を理解してもらえていて、そのうえで何かのきっかけになっていると感じた。

次に２つ目は行動に起こすということについてだ。表彰式には中高生はもちろん、私たち大学生以外にも社会人や小学生といった様々な年齢の人が参加していた。小学生の児童が活動報告を行っていたチームがあり、そこで私は小学生でも活動は十分に行えるということに改めて気づかされた。子どもたちの目線で自分の周りの人から、そしてそれを同年代の小学生にも広げて声をかけていくなどといったことは、「中高生ではない小学生だからこそできること」を追求し続けた結果であるといえる。このことから、何か行動を起こそうと思ったときは、自分にできることから徐々に広げていくことで、それが大きなものになると感じた。

最後に３つ目は、先輩方が行ってきた活動を自分たちがどう受け継ぎ、深めていくかということだ。私は先輩方と一緒に活動報告をさせていただいたが、一回生なのでこの「西日本豪雨災害復興支援ボランティア」に参加したことはない。今回の活動報告のために先輩方の話を聞き、や資料を見せてもらった。のべ 42 人という数多くの先輩方が参加したこと、普段からユネスコクラブでの活動を通して ESD に真摯に向き合ってきたからできた迅速なボランティア活動だったことなど、様々な背景があったことを知った。これからは私もユネスコクラブの一員として、今までよりも数多くの活動に参加していくことになるだろう。これから先、私たちがどう受け継いでいくことになるのかはまだ想像がつかないが、それまでの活動の意味や思いを無駄にしないよう、そしてさらに深いものとなるように、これまでの活動や他の団体の活動についても知っていきたい。

表彰式後、活動内容のポスターの前で

未熟な私にとって、今回の表彰式への参加は新たな視点を得るきっかけになったほか、今まで経験したことがない貴重な体験となった。これから「自分にできることは何か」を考え、行動できる人になれるよう邁進していきたい。

11th UNESCO Youth Forum　参加報告書

英語教育専修　大学院２回生　谷垣徹

1. **開催日**　2019 年 11 月 18 日（日）～19 日（火）
2. **会　場**　フランス・パリ　UNESCO 本部
3. **主　催**　UNESCO
4. **テーマ**　『11th UNESCO Youth Forum - Youth Spaces in Action』
5. **プログラム**

【フォーラム前日】11 月 17 日（日）

時間	内容
11：00～13：00	**参加者到着・受付**
14：00～15：30	**オリエンテーション** ・参加者の自己紹介 ・フォーラムのアジェンダの共有 ・グループワーク（フォーラムへの期待、不安の共有）
15：30～18：00	**プロジェクトマーケット** 参加者による UNESCO 活動の事例発表（７名） ① Mikiela Gonzales（ジャマイカ） ② Mirwais Wafa（ドイツ） ③ Luong Nguyen Hoang Anh（ベトナム） ④ Goulei Yves Laurent（コートジボワール） ⑤ Toru Tanigaki（日本） ⑥ Gabriel Trindade（ブラジル） ⑦ Fortunate Farirai（ジンバブエ）
18：00～19：00	**アイスブレーキング**
20：00～21：30	**パリ市街地散策** **セーヌ川クルーズ**

【フォーラム１日目】11 月 18 日（月）

時間	内容
9：30～10：00	**オープニングセッション**
10：00～11：00	**パネルディスカション①** Experiences of Youth Engagement with UNESCO
11：15～12：30	**パネルディスカション②** Youth Engagement from a Multilateral Perspective
12：30～13：30	**ワールドカフェ** YCoP（UNESCO Youth Community of Practice）作成に向けた意見交換
14：30～16：30	**YCoP（UNESCO Youth Community of Practice）の作成**
16：30～19：00	**UNESCO 総会への Youth Forum からの提言の作成**
19：00～20：30	**Global Village**（文化交流会）

【フォーラム２日目】11 月 19 日（火）

時間	内容
8：30〜9：30	**1 日目の振り返り**
9：30〜13：00	**YCoP・提言文書の推敲作業**
14：30〜17：00	**YCoP・提言文書の最終仕上げ**
17：00〜18：00	**クロージングセッション**

6. フォーラムの概要

本フォーラムは、UNESCO 本部において開催された第 40 回 UNESCO 総会の期間に合わせ行われ、UNESCO に関わる活動に従事している世界各国代表のユース総勢約 70 名が出席した。私は日本代表として日本ユネスコ国内委員会から推薦をいただき、本フォーラムに出席する機会を得た。UNESCO 総会期間中に合わせてユースフォーラムが開催されるのは今回が初めてであり、大きな意味のある回であった。

フォーラム会場の様子

7. 近畿 ESD コンソーシアムの取り組みの報告について

本フォーラムの開会に先立ち、前日に各国の UNESCO 活動の事例報告をする場が与えられ、その一人として私は近畿 ESD コンソーシアムの「ESD ティーチャープログラム」について紹介した。日本における ESD の取り組みや本プログラムに関心を持ち、質問が寄せられた。日本の取組みを紹介できたと同時に、世界各国における ESD の取り組みの現状についても意見交換ができた貴重な機会であった。

ESD ティーチャープログラムの紹介の様子

8. YCoP（UNESCO Youth Community of Practice）について

YCoP は本フォーラムの成果として、UNESCO 総会に提出された文書である。UNESCO 活動におけるユースのより良い参画を推進し、多様な分野で活躍するユースが世界規模で繋がり、交流・共同しあえるプラットフォーム作りを進めることを趣旨としている。各国の UNESCO 活動の現状と課題をシェアし、そこから見えてくる今後の UNESCO 活動の展望を参加青年全員で描き、議論と推敲を重ねて作り上げた成果文書である。フォーラム後にはワーキンググループが立ち上げられ、策定した YCoP を実践に移すために継続して協議がなされている。

UNESCO 本部・日本庭園の前で集合写真

令和元年度　陸前高田市文化遺産調査概要報告

次世代教員養成センター　　北村恭康

1.　目的

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災及び大津波により、陸前高田市をはじめとする岩手・宮城・福島三県の太平洋岸は大きな被害を受けた。陸前高田市では市民の約 1 割にあたる人命が失われたほか、市庁舎を始め、市の重要施設が被災し、多くのものを失ってしまった。しかし、幸いにも高台にあった寺の仏像は被災をまぬがれた。この仏像等の文化遺産を調査し、その価値を明確にすることが、陸前高田市や周辺市町村の市民を元気づけることになると考え、本調査団を派遣する。併せて被災地の復興状況を視察し、被災された方から聞き取りを行い、現地に学ぶ防災教育を開発する。

2．　日　時　　令和元年 9 月 13 日(金)　～　16 日(月)

3．　参加者　　学部生　：坂本和音、北　将伍、平山あかり、村上　朋、加藤真由

大学院生：濵松佳生

大学教員：山岸公基、北村恭康

4．　宿泊地　　民宿沼田屋　(陸前高田市米崎町字川内 179-2)

5．　日程・活動

	ESD・防災教育班	文化遺産調査班
13日	・新宮寺(名取市高舘熊野堂岩口上 51)　文殊菩薩像拝観 ・熊野那智神社(名取市高舘吉田舘山 8)　見学　同所より閖上地区を望む ・陸前高田市教育委員会表敬訪問	
14日	・陸前高田市震災遺構見学(米田小学校、奇跡の一本松、気仙中学校、気仙小学校跡地)	
	・吉浜の津波石探訪(大船渡市三陸町吉浜) ・大船渡市津波伝承館(大船渡市大船渡町字茶屋前 7-6　防災観光交流センター内)	・長谷寺(大船渡市猪川町字長谷堂 127) 阿弥陀如来坐像調査
15日	・正徳寺住職（千葉了達氏）より聞き取り	・正徳寺(陸前高田市小友町両替 69) 聖徳太子立像調査
	・気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館(気仙沼市波路上瀬向 9-1　旧向洋高校)見学 ・津波の気仙川遡上ポイント探訪(陸前高田市横田町友沼)	
16日	・一関市博物館「木造観音菩薩像とその周辺」展見学(一関市厳美町字沖野々215-1) ・毛越寺(西磐井郡平泉町字大沢)、中尊寺等拝観(西磐井郡平泉町平泉衣関) ・正法寺(奥州市水沢黒石町字正法寺 129)拝観	

熊野那智神社より閖上地区を望む

長谷寺：阿弥陀如来坐像調査

６．　ESD・防災教育における今回の調査目的について

今回文化財調査をさせていただく正徳寺（陸前高田市小友町両替）が、東日本大震災時、急遽避難所となり 150 名近くの人が生活を送っておられたとのことであったので、避難所運営の実際について正徳寺住職の千葉了達氏から聞き取りを行った。それと共に陸前高田市教育委員会教育長金賢治氏からも貴重な話を聞く機会を得た。

(1) 千葉了達氏（正徳寺住職）からの聞き取り

正徳寺は標高 40m の高台にあり、津波被害からは免れていた。住職の千葉了達氏は市の職員であったので、災害時は担当地区の住民を正徳寺近くの両替公民館へ避難させることであった。しかし、両替公民館は津波に流されたので、さらに高台にある岩井沢公民館に住民を避難させた。この公民館は 100 名以上避難してきた人を収容するのには狭く、眠ることもできなかった。このような中で正徳寺の檀家さんから、寺の庫裏を貸してもらえないかと申し出があり、3 月 11 日の夕方から庫裏を開放することになった。そこで、聞き取りから以下の 2 つについて考察を加えていきたい。

〇避難所として成り立った理由

・避難してきた人たちは、生後数か月の乳児から 90 歳以上の人まで、150 人ぐらいであった。その中には、水産関係で研修生として来日していた外国の方もいた。

・避難した当日から米を炊きおにぎりを作って配った

と話されている。津波によりライフライン被害が大きいのにも関わらず、これらができたのには、水があり、火が使えたことになる。住職は、

①山から水を引いている自家水道があった

②都市ガスではなくプロパンガスであった。

③電気が通じたのは 1 か月ぐらいたってから

④トイレは簡易水洗なので使えた。

⑤反射式ストーブを残していた。

などを話された。このことから、避難所としての設備面をみると、

千葉了達氏からの聞き取り

・水がある⇒炊事、トイレが使える

・トイレの数⇒檀家さんが集まることもあり、男子小便器 3 つ、個室 5 つあった

・プロパンガス⇒炊事ができる

・反射式ストーブ⇒電気を必要としないので、ライター、マッチ、乾電池などがあれば点く

つまり、ライフラインの重要な水・ガスそしてトイレが確保できているのである。トイレについては、複数あったのがよかったと考えられる。また、寒さが厳しい中、通電を必要としないストーブがあったことも避難者が暖を取るのに役立った。これら 4 つのことがそろっていたので、150 人もの避難生活ができたと考える。現代の生活では災害時停電、断水をすると冷暖房機器、炊事、トイレなどが使用できなくなる。毎年各地で自然災害が発生し、避難所生活・自宅での避難生活を余儀なくされている人々が多数いる。特に問題になると思われるのは、トイレのことである。避難所に指定されている施設のトイレのほか、仮設トイレ、マンホールトイレ等を各自治体が設置あるいは保有していると思われるが、各個人宅においても、断水すればトイレが使えなくなるという前提で、簡易トイレを備蓄するものの中に入れておくべきであると考える。

〇避難所生活と役割

・自分の家がどうなっているのか見に行かれるが、家も流されすべてがなくなっているのを見て、

がっかりして帰ってくる。

・男性陣は玄関の石の上に座って下を向いて落ち込んでいる。女性陣は100人以上の人にどうやって食事を与えようかと考えふるまっているので、立ち直りが早かった。

・男性陣には焚きつけにする木を集めてきてほしいと、仕事を与えた。

・自分たちで仕事を見つけてやってもらった。

・食事の当番表、水くみ、トイレ掃除等それぞれの役割分担ができた。

と言っている。これらのことから、人は役割があると動き出し、自分のできることをやり始めていくものであり、一歩を踏み出せるものと考える。また、大規模な避難所になればなるほど、個人の役割や自分から動くことが少なくなり、ずっと被災者、避難者のままで「～してもらう」になってしまわないだろうか。そうならないためにも、それぞれが役割を持ち動ける避難所の運営や避難所の適切な規模も考えなければならない。

正徳寺が避難所になってからは支援物資が届けられるが避難所の分だけではない。近所の自宅避難者の分も含まれている。それを避難所の人たちが仕分けをして渡すのである。つまり、家のない人たちが、家のある人たちの分まで仕分けをするのである。誰がする、しないといっているのではない。自宅避難者もみんなと仕分けなどを一緒にすれば、立ち直りが一刻でも早く、前に進めるようになるのではないだろうか。

(2) 陸前高田市教育委員会教育長金賢治氏の話から

金賢治氏は我々が訪問した際　①「文化財のレスキュー」②「防災教育」③「自助と共助」の3点について話されたが、ここでは②③について掲載する。

学校の防災教育

あの時両親を亡くした子供は22人、片親を亡くした子どもたちは150人ぐらい。突然親を亡くす経験をした。何に苦しんでいるかといえば喪失感。子どもを亡くした親もたくさんいて、喪失感に苦しんでいる。8年たってみんな元気になったのかといえば、元気になったとみられる人もいるけど、みんな言わないだけで昔の街並みを失くしたという喪失感、大切な人を亡くした喪失感もある。町がどんどん生まれ変わっていってきれいなものが建ってくるんだが、ただ心の中で失ったもの喪失感だな。心の中で上がってきたり、落ちてきたりしているのかなと思います。喪失感は時間がたてば薄れてくるかといえば全然違う。時間なんか関係ない。なぜ喪失感の話をするかといえば、ここで災害があって亡くなってから喪失感が生まれる。だから、亡くならないためにこれから何をしたらよいのかが、これからの大事な話になる。

教員によく話をしているのは、「学校にいる子どもたちを災害から守るだけの防災教育をしていませんか」とよく言う。学校にいる時に、地震きた、火事なった時に子どもたちをどう守るかという防災教育を全国的にやっていると思うが、親を亡くした子供のその後の人生を考えると、親がなくなるとダメ。学校にいる間にその子は助かっても親がなくなってしまったら、助かった子どものその後の人生を考えたら普通に生きていけない。喪失感の中で生きていく。子どもを守るという視点は2つある。

①　学校にいる時の子どもの命を守る。（全国で指導している）

②　親だって亡くなったらダメなんですよ。この子の人生を守るために。

我が子のために親も逃げてくださいということが大事ではないのか。それは、この町で親を亡くしたたくさんの子どもを見てきたから思うことである。

学校の防災教育はこの2つの視点が大事ではないのだろうか。

子が親を、親が子を亡くした喪失感は、それぞれの今後の生き方にのしかかってくる。だから喪失感を生まないためには、親も亡くならないことであると述べている。学校において「子どもを守る」という考えの中に②の視点からの防災教育はなかったのではないだろうか。災害はいつどこであうかもわか

らない。また、家族が一緒とは限らない。そのために防災教育においては、家庭で「災害時の家族の行動」について話し合いを持ち、互いの情報を共有し、命を守る行動をとるようにしていかなければならない。

自助と共助

金賢治氏の話を聞く

聞いた話だが、共助　例えば、近所の年寄りに区長さんが声かけて回ってくれてそして高台に逃げてたくさんの命が助かったということもある。高田中学校の話だが、揺れの激しい中で、近くの保育所の園児たちが泣いているのを抱っこしながら高台に逃げた。故郷の人たちは、思いやりの心を持ちながら、たくさんな命が助かった事実がある。

もう一つの事実があって、ある町の区長さんが家族と一緒に本丸公園に逃げたのだが、だれだれが来てないという話になって、ご主人だけ降りて行って、逃げようと声掛けをしていた。過去にここまで津波が来たことはない。ここまで来たら高田の町は終わりだという話になって、逃げなかった。説得をしていて区長さんは亡くなった。区長さんは共助をしようとして行ったんだけど、逃げようとしない人たちがたくさんいた。それは、油断ですね。ここまで来たことはないから大丈夫だという。一生懸命声掛けをして亡くなった。高田の町のいたるところでそういう事実があったことを聞いている。人のためにやったことでご自身がなくなり、残された家族が出現した。残された家族は、大事な大きな存在であったお父さんを失くした喪失感で生きていく。

私は、仮設住宅に住んでいて、2 部屋隣に亡くなった区長さんの奥さんが住んでいた。私は、学校に勤めていたので帰ってくると、世間話が始まるのだけど、最後は決まって亡くなったお父さんの話になる。「私の父ちゃん人のためにいいことしたんだよね」という確認です。「でも、そんなことをしなくてもよいから生きていてほしかったの」という言葉がいつものことである。町にはこんな話がいっぱいある。感情も含めて、自助と共助はどうあったらいいのか、すごく難しい。テレビなんかで共助は大事だ。助け合おうといっているが。共助で助かった命はいっぱいある、自助でも助かった人もたくさんいた。自助と共助どうあったらいいと思いますか。困っている人を助けよう　頭では分かる。自助と共助って、何なのか考えることが大事だ。

「自助と共助」確かに頭では分かっているつもりでいたが、「区長さんと奥さん」を「自分と親」に置き換えて考えると、難しくなかなか結論が出ないものとなる。だから、自分事として捉える防災教育が大切である。前述の喪失感を生まれないためにも過去の経験からの判断や大丈夫という思いこみではなく、どのような状況になれば避難を始めるのかをひとり一人が主体的に持つようにすることが、誰もが死なない防災教育を作り上げていくことであると考える。

正徳寺境内

旧気仙中学校・広田湾を臨む

教室に飛び込んだ車
（東日本大震災遺構・伝承館）

(3) 吉浜の津波石

この石は碑文から昭和８年３月３日に発生した三陸大津波で流れ着いたことが分かる。その重量は８千貫約 32 トン、吉浜川河口から流されてきたと記されている。その後石は埋められ東日本大震災の津波で再び石上部を表し、津波の威力を後世に伝えるために掘り出され保存されている。吉浜地区は吉浜湾に面しているが、東日本大震災の津波被害では被害家屋４棟、亡くなられた方１名という他地域とは一線を画する様相を示した。それはなぜなんだろうか。手元に「みんなの震災学習テキスト　吉浜のつなみ石」という一冊の本がある。この本によれば、この吉浜地区は、明治 29 年の三陸大津波で大きな被害を受け、初代村長新沼武右衛門が全民家の高台移転を進めた。さらに、昭和８年の三陸大津波後８代村長柏崎丑太郎はさらに高台移転を徹底し今に至っていることが分かる。県道 250 号線より海側には民家はたっていなく、吉浜漁港付近にも民家はない。

津波記念石
前方約二百米突吉浜
川河口ロニアリタル石ナル
カ昭和八年三月三日ノ津
波ニ際シ打上ゲラレ
タルモノナリ
重量八千貫

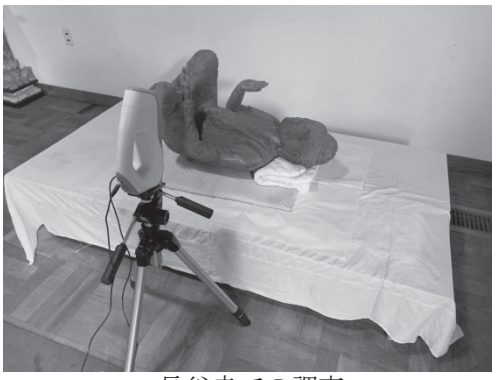
津波石

住み慣れた場所を離れがたい気持ちは分かるが、高台移転を進めた村長、それに賛同した村民たちの先を見越した行動は、令和になっても受け継がれていたことが分かる。さらに驚くことは、漁港近くに家がないことは、高台から通っているということである。この点も、漁業者ひとり一人の津波に対する防災意識の高さを知ることができる。

奇跡の一本松とユースホステル

及川・松坂両氏から説明を受ける

正徳寺での調査


長谷寺での調査

聖徳太子立像

岩手県陸前高田市小友町字両替六九　正徳寺

木造　彩色　一軀　像高 76.0 ㎝

法量（単位㎝）

像高	76.0				
髪際高	73.0	頂―顎	14.6		
		面幅	7.5	角髪張	7.0
		面奥	10.6	胸奥	11.5
		裾張	20.8	沓先奥	20.8

形状

髪を角髪に結う。角髪は髷が中段で緒を締める８字形（瓢形）を呈し、髪の末端を筆先状に垂下する。盤領の袍と裙を着け、袈裟をまとう。袈裟は左肩の前後で帯状の紐で吊る。両腕を屈臂し、右手は掌を仰ぎ左手は掌を伏せて、柄香炉の柄を握る。裙の打合せはいずれが上層か不明。沓を履き、両足をやや開いて立つ。

品質構造

木造（広葉樹か）彩色。

頭体幹部を通して一材より彫出か。体幹部材は像底で左沓の後方に木芯を有する。内刳は像底に及ばないが、背面中央襟下に方形の別材部があり、同部内には内刳を有する可能性が高い。この内刳は干割の防止や重量の軽減には有効と考えにくく、納入品もしくは像内銘等に関わるか。両角髪（垂下する髪末端を含む）と両手先、別材。左肩の前後の帯状の紐は紙製である。白地彩色。

制作年代

室町～江戸時代（16～19 世紀）

伝来

正徳寺（真宗大谷派）本堂内陣左脇壇に安置される。

小友浦の対岸の砂浜に打ち上げられ、他宗在家に安置された後、夢告により正徳寺に奉納されたとの伝がある。

備考

1．聖徳太子像としては南無仏太子像・童子形（孝養）太子像・聖鬘経講讃像などの類型があり、本像は童子形（孝養）太子像で、『聖徳太子伝略』に語られる用明天皇２年（587）、用明天皇不予に際して香炉を擎げて祈請する姿を表している。類似する立像は埼玉・天洲寺像［鎌倉時代・寛元５年（1247）銘］をはじめとして中世～近世に数多く造立された。本像はもっとも一般的な像容を簡略化した造形になるが、８字形（瓢形）を呈する角髪が、北上市・個人蔵（内太子堂）聖徳太子立像［像高 83.0 ㎝。南北朝時代・嘉慶３年（1389）銘］や花

巻市・延妙寺聖徳太子立像［像高 49.5 ㎝。室町時代・享禄３年（1530）銘、信定作］のように南北朝時代以降の岩手県域に類例を見出すことは留意される。この角髪の形状は平安時代後期（11 世紀）の兵庫・一乗寺聖徳太子画像（聖徳太子及び天台高僧像のうち）とも一定の類似を示し、具体的に系譜を辿る作業が残されるとはいえ、古い聖徳太子図像に範をとった可能性が示唆される。本像は正徳寺にとっては客仏との伝があるが、本尊阿弥陀如来立像の左脇壇に安置され、聖徳太子を救世観音の化身とみなす考えも相俟って阿弥陀脇侍としての観音菩薩の配位と二重写しになっており、真宗寺院の尊像安置形態としてふさわしいものである。

実査　令和元年９月 15 日（山岸公基・北将伍・濵松佳生・平山あかり・村上朋）

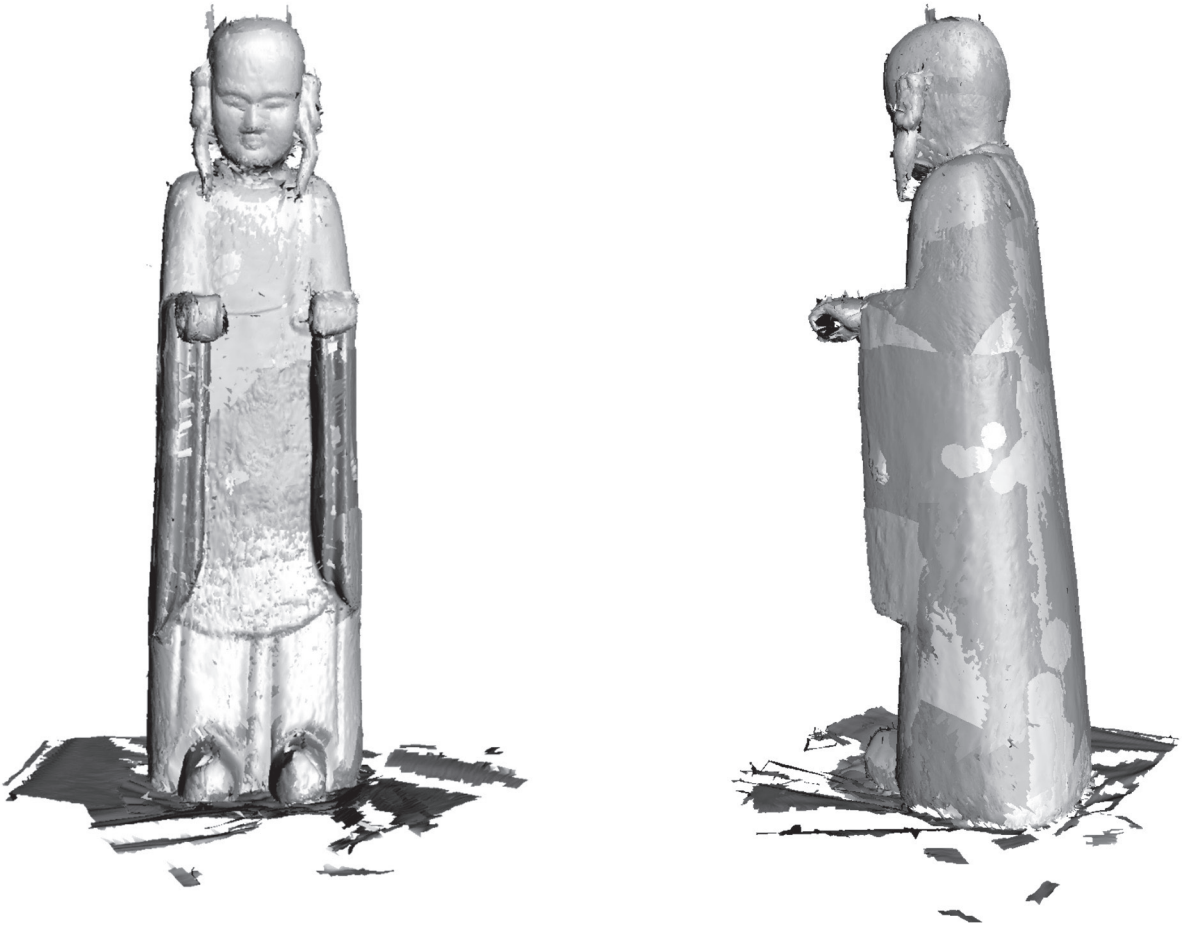
正徳寺　聖徳太子立像　全身正面

正徳寺　聖徳太子立像　全身右側面（左写真）・全身左側面（右写真）

正徳寺　聖徳太子立像　全身背面（左写真）・全身左側面（右写真）

正徳寺　聖徳太子立像　上半身右斜側面（左写真）・上半身正面（右写真）

正徳寺　聖徳太子立像　像底（左写真）・上半身左側面（右写真）



正徳寺　聖徳太子立像　全身正面３Ｄ位置合せ完了（左図）・全身左背斜側面（右図）

正徳寺　聖徳太子立像　上半身部分スキャン

正徳寺　聖徳太子立像　全身正面３Ｄ直交ビュー（左図）・全身正面３Ｄ遠近ビュー（右図）

陸前高田市文化遺産調査団を通して

社会科教育専修　１回生　加藤真由

１．はじめに

2019 年 9 月 13 日から 16 日にかけて私は陸前高田市文化遺産調査団の防災班として参加した。その際に東日本大震災で被害にあった地域の今を考え、見るということを行った。これは私にとって貴重な経験となった。

２．８年後の現地を訪れて

2019 年は東日本大震災から 8 年が経過している。8 年というと長い期間のように感じるが、震災の痕跡をまだまだ感じる部分があった。さらに、現地にはそれまで私が想像していた「復興」という言葉の意味とは違った「復興」の現状があった。今回の活動の中でも特に印象に残ったことが３つある。

１つ目は現地で求められていることは人々の心のケアであるということだ。それは大人だけでなく子どもも同じである。陸前高田市教育委員長の金賢治氏にインタビューを行った際に「昔の街や子ども、親など失ったものはたくさんあるが、どれだけ時間が経過しても関係なく喪失感は残っている」と述べられていた。また、正徳寺でインタビューを行った際には住職の千葉了達氏によると「震災の前後のことを思い出せない子どももいて、やはり長期的な心のケアを行わなければならないと感じた」と話された。８年が経過して町の様子は写真と比較して随分と変化していたが建物が建ち始めていた。私は建物が建ち始めれば「復興」であると考えていた。しかし「復興」はそう目に見えるものではなく、人々の心が立ち直ることができたときに初めて言えるものなのだと学んだ。喪失感は消えるものではないからどうすれば喪失感を減らすことができるのか考えていくことも必要であると感じた。

２つ目はみんなが生き延びることの難しさである。避難すれば生き延びることができるとどこかで甘く考えていた。しかし、避難しただけでは不十分であり、例えば感染症対策や冷暖房の設備といった環境を整えることで生き延びることができると学んだ。だから避難所だけでなく各自でも環境整備ができるように普段から備蓄しておくことがより重要になるのだと痛感した。また、災害時は情報が錯綜するため、自分たちで手に入れようとしなければ必要なことは自分たちに届かない。それは避難した人だけでなく、ボランティアをしたいと考えている人にも同様のことが言えると知った。現在はＳＮＳが普及しているため今の情報が手軽に手に入りやすくなったと考えていたが、誤って昔のことや事実とは違うことも拡散しやすいため自分が受け身として得た情報を鵜呑みにして行動することは危険であり、本当に今の情報なのか考える必要があると感じた。避難所で生活する前に、避難することの難しさがあった。自分で避難することが重要でありこれを自助と言うが、全員自助ができるわけではない。中には油断してしまい、そのまま避難せずにいる人もいる。そういった人たちに声をかけてみんなで避難しようとするということが共助である。共助をしようとして亡くなった人がいるという話を伺った。そしてその人の奥さんは今も旦那さんを失った喪失感があるそうだ。一体、何が自助でどこから共助になるのだろうか。いざ、自分がこの立場に立ったとき、どちらを優先するべきなのだろうか、自助を優先することができるのだろうか。中には油断ではなく、自らの意思で避難しないと決めた人もいると思う。その人を助けるためにも共助を心掛けるべきなのだろうか。この話を聞いたとき上記のよ

現在の街の様子

うな疑問がたくさん浮かんできた。しかし答えはいくら考えても出てこなかった。金氏は「子どもに自助と共助を考えさせる機会をつくることも大切な防災教育である」と述べられた。しかし子どもだけでなく、大人も考える機会をつくることが一番の理想であり、必要なことである。そのために行動していかなくては自分なりの答えは見つからないと実感した。

３つ目は防災には様々な形があることである。今回の陸前高田市文化遺産調査団の活動を通して私は防災のイメージが大きく変化した。物を備蓄しておくといった形として目に見える防災と家族会議や災害にあったときに自分はどうするか考えるなどの目に見えない防災があると感じた。一般的に前者を中心的に行っている人が多いように思う。私の実家も前者が中心的になっている。しかし、大切なのは後者の方ではないかと思う。私の想像であるが、避難した時に家族がどこにいるのかや自分がいる場所のイメージなどの眼に見えないものは心強いものになると感じた。実際に、役割がある人の方が立ち直りが早かったという話も伺った。だからこそ、子どもに防災教育をする際に後者の重要性を感じてもらうことが必要になると理解した。

３．おわりに

現地を実際に見ることで得た知識がたくさんあった。この活動を一回生のうちにできたことはとても貴重な経験であった。「復興」はこれからも続いていくが、東日本大震災を知らない子どもも増えてくる。実際に教員になったときにそのような子どもに対してどのように東日本大震災での教訓を伝え、全員が助かるためにどうすればいいのか考えるための防災教育を実践できるように、これからの大学生活で今回得た知識を深めていきたい。

地域の人によるポスター

陸前高田市文化遺産調査団の活動を通して

英語教育専修　４回生　坂本　和音

１．はじめに

令和元年９月 13 日から 16 日にかけて第８次陸前高田市文化遺産調査が行われた。私は防災教育班に所属し、陸前高田市を中心に平成 23 年３月 11 日に発生した東日本大震災の震災遺構の見学や震災の被災者の方への聞き取り調査を行い、防災教育に関する学びを深めることが出来た。

まず、私が本調査に参加したいとして考えた理由は自分の目で東日本大震災の被害の爪痕や復興の様子を見たいということである。以前岡山県へ災害支援ボランティアとして被災地を訪れた際に、テレビ等の報道では感じることがなかった感情や大きな学びを得ることが出来た。その為、今回の調査でも東北地方の地震と津波に襲われた被災地を実際に訪れることで、東日本大震災についての知識を深めると共に、被災地を訪れたからこそ得られる経験をしたいと考えた。

そして、自分自身が教員として教育の現場で防災教育に携わる時には本調査での経験を活かした防災教育を実践していきたいと考えている。

２．本調査を通じて

本調査を通して三点について学びを深めることが出来た。第一に東日本大震災後の東北地方の復興の現状、第二に震災遺構の重要性、第三に学校現場で出来る防災教育である。

海岸沿いの工事の様子

第一の東日本大震災後の東北地方の復興の現状についてだが、気仙沼や陸前高田の街を探索していくと、その進捗は想像していたよりも進んでいないように感じられた。東日本大震災の発生から８年が経過したにも関わらず、現在も海岸沿いでは盛り土や新たな道路の建設などの大規模な工事が継続して行われていた。最も印象に残っているのは海岸沿いを覆う巨大な防波堤である。その高さは10mを越え、町からは防波堤によって海が見えないほどであった。震災当時に津波が町を飲み込んでいく様子を見ていた人から「震災当時はその防波堤よりも高い津波が襲ってきた」という話を聞き、改めてその恐ろしさを感じた。また、震災当時山から削りだした土をベルトコンベアで麓まで運ぶ際に使われていたコンクリートの土台や、盛り土を行っている途中で周りよりも部分的に少し高くなっている土地を見ると、震災が起こる前と比べると復興に拠って町の様子がかなり変化しているということが分かった。海岸線から遠く離れた場所や高台では、続々と新しい住宅や学校が建設され復興が進んでいるようにも見えていたが、海岸近くの土地はほとんどが更地になっていた。このことから、被災地の復興は更なる震災へ向けての対策を行いつつ進んではいるが、やはりまだまだであるということが分かった。

第二に震災遺構の重要性についてだが、本調査では東日本大震災の恐ろしさを知るために震災遺構を数か所見学した。三陸海岸沿いのタピック４５や奇跡の一本松、ユースホステル跡では当時陸まで到達した津波の高さとその威力を目の当たりにした。コンクリート製の建物がつぶれている様子や津波が到達した地点までの窓ガラスは全てなくなっているマンション、大きな看板に貼られた津波最高到達地点を示す赤い矢印など町の至るところに震災の爪痕があった。多くの震災遺構を見学した中で特に印象に

残っているのは気仙沼市東日本震災遺構・伝承館である。震災当時まで、多くの生徒が通う学校として使われていたこの建物内の教室はその元の姿を想像できないほど震災によって破壊されていた。更に、当時使われていた教科書や机、棚などがそのままの状態で保管されていた為震災が起こるまでの生活も想像をすることが出来た。この伝承館の見学を終えた後も、印象に残った教室の様子を忘れることはできず、資料映像や写真では感じたことのない震災の被害の衝撃を感じることが出来た。また、海岸沿いの震災遺構や伝承館の見学をしている時には、全国各地から私たちと同じように見学に訪れている人が多く見られた。私は、このように震災当時の状態を保つということは「震災を忘れないようにする為」という目的もあると考えるが「震災当時の様子やその恐ろしさを全国・全世界へ発信する」という役割も果たしているのだと感じた。震災遺構は後世へ震災の恐ろしさを伝えるためにはなくてはならないと思う。また、これらの遺構があるからこそ本調査においても発生から８年間が経過した東日本大震災についての学びをより深めることが出来たのだと考える。

第三の学校現場で出来る防災教育についてだが、本調査の防災教育班の最終的な目的は調査での学びを活かした防災教育に関する指導案の作成であった。その為、震災から学ぶことが出来る教訓を授業でどう生かしていくかということを考えた。その中で最も大きな学びを得られたのは正徳寺の住職である千葉了達氏への聞き取り調査である。この正徳寺は震災当時、付近の住民の為に避難所としての役割を果たし、多くの人々の避難生活を長期間にわたり支え続けていた。防災教育班では、正徳寺への聞き取り調査によって避難所となっていた当時の状況を詳しく聞き取ることが出来た。正徳寺には避難所として不可欠なライフラインが整っていたことや、地域の人々が生き抜くために互いに助け合っていた様子などから避難所生活という経験で得られた教訓を多く学ぶことが出来た。

避難生活中の食事を支え続けた
正徳寺の台所

３．おわりに

本調査を通して以上の三点について学ぶことが出来た。被災者ではない私たちができることは何かと考えた時に本調査で訪れた震災遺構や聞き取り調査から学んだ教訓を多くの人々に伝えることではないかと考えた。子どもたちへ向けて防災教育をするのならば、単に備えるというだけではなくなぜ備えなければならないのか、震災・災害のどんなところが恐ろしいのかという根本的な部分からしっかり伝えたいと考えた。その為に本調査で自分自身が身をもって感じた震災の恐ろしさを伝えていきたいと思う。また、近年では南海トラフ地震の危険が迫っていると叫ばれている中で、このような恐ろしい事態は決して他人事ではなく、いつ自分が住んでいる地域で起こってもおかしくはないのだという自分事に出来る防災教育を教員として現場で実践していきたいと考える。

陸前高田市文化遺産調査に参加して

文化遺産教育専修　一回生　村上朋

１．はじめに

2019 年 9 月 13 日から 16 日にかけ、陸前高田市文化遺産調査に参加した。主に防災教育班と文化遺産調査班に分かれての調査であり、私は文化遺産調査班の一員として活動した。東日本大震災の被災地の訪問、文化財調査はどちらも私にとって初めてのことであり、とても貴重な体験となった。

２．被災地訪問

今回は震災から 8 年たっての訪問となった。仙台空港から陸前高田市に向かう道のりでところどころ海を望むことができた。とても穏やかな海がどこまでも続いていた。だからこそ、この地にあの大津波がやってきたということは想像もできなかった。しかし、現地に到着し奇跡の一本松や新しく造られた 12 メートルの堤防を見ると、そのことが本当なんだと実感することができた。同時に、着実に復興へと進んでいるのだと嬉しくも思った。しかしそんなに甘くはなかった。仮設住宅がまだ残っていた。震災から 8 年がたった今でもまだまだ完全に復興したとは言い切れない現状に強く胸が打たれた。そして、現地の方々の話を聞いて、この地にも私が今住む町と同様に人々の営みがあり当たり前の生活があったということ、それが一瞬にして失われたことを痛感した。また失われたのはモノだけでない。心もだ。お話のなかで、みんな表に出さないだけで大きな悲しみが心のずっと深くにある、という言葉があった。この言葉を聞いてハッとしたのを今でも覚えている。心に大きな闇を抱えながらも、いまここで強く生きている人がいることは絶対に忘れてはいけない。また被災地の現状について報道される機会が減っているなかで、被災地の今をこの目で見て知れたことはとても貴重であった。

新しく造られた高さ 12 メートルの堤防

３．文化財調査

今回は、大船渡市にある長谷寺の阿弥陀如来坐像と陸前高田市にある正徳寺の聖徳太子立像の二つの像の調査を行った。私は陸前高田市に調査に行く前に経験も知識もない中で自分は何ができるのだろうかと悩んでいた。しかし、実際に文化財に触れ調査が進んでいくと、どの場面も新鮮でわくわくした。調査は主に３D スキャナを用いて行った。３D スキャンを行うことでデータとしてその文化財を保存することができ、後世に伝えることができる。またこのデータは公開することもでき、国民の宝としての文化財を様々な境界を越えて、多くの人に知ってもらう機会にもなる。こういったことから、３D スキャンという技術は文化財保存にとっても、これからの社会にとっても有用であると考えている。

実際の調査は、時間が十分に取れず迅速な作業が求められた。また気温が高かったこともありスキャナの誤作動などもあった。このような予期せぬ事態もあったので、どんな場面でも臨機応変な行動が求められた。今自分ができることは何なのかを常に考えていたように思う。

また、今回調査した仏像の詳しい文献はなく、調査を行ってみて分かることの方が多かった。このような文化財調査にとって、経験が大切であると実感した。したがって、今回の調査に参加できたことは

これからの私にとって大変貴重なものとなった。そして、今回得た学びは次回以降の調査に活かしたいと思う。

3Dスキャナを用いた調査風景

４．子ども向け教材の開発

今回の陸前高田市の正徳寺聖徳太子像の調査をもとに陸前高田市の小中学生にむけて教材の開発を行った。教材開発のねらいは主に、子どもたちに陸前高田市の文化財を知ってもらい、アイデンティティを高めることである。グローバル化が進む社会のなかで、色んな文化を受け入れ認めることはこれからを生きる子どもにとって重要だと考えている。また、自分の地域について文化財を通して知ってもらうことで文化財に興味をもってもらうこともねらいとしている。教材制作にあたり、分かりやすく自分たちの考えを伝えることは思っているよりもはるかに難しかった。しかし、文化財を保存し、次の世代に伝えることは私たちの使命である。この教材を通して文化財に触れ、さらに次の世代に伝えていってほしいと思う。

５．おわりに

私は今回の調査に参加したことで、次に被災した文化財や文化財の防災について学びたいと思うようになった。そこで 2019 年 10 月 26 日に行われた京都国立博物館主催の『文化財を守り伝える東日本大震災から８年の今、これから』というシンポジウムに参加した。当時の文化財レスキューの報告や被災地の現状、これからの課題について知ることができた。

このシンポジウムに参加して印象に残っていることがある。講演者の一人であった加藤幸治教授のお話にあった「その文化財の地域の中での意味合いを伝えることも大切なのではないか」という言葉である。今回、気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館を訪れたが、そこに遺構としてある高校は水産系高校であったと後から知った。三陸海岸に面する地にあったこの高校はきっと地域と深いつながりがあったのではないか、その関わりが被災したことでどうなってしまったのだろうかと考えた。もちろん津波の被害や現状を伝えることは重要である。しかし、こういった地域との関わりにも目を向けていかないといけないと痛感した。

今回の調査に参加したことで、震災や文化財について深く知ることができ、そして更なる学びの場に参加することもできた。今後も文化財調査に積極的に参加するとともに、その文化財と地域との関わり、文化財の防災についても学んでいきたい。

陸前高田市文化遺産調査に参加して

文化遺産教育専修　２回生　平山あかり

１．はじめに

東日本大震災が起こった 2011 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分、私は地元である宮城県仙台市の小学校で卒業式の予行演習をしていた。震度 6 強の揺れを経験したが、海からは距離があったため津波被害を意識することはなかった。地震直後は停電のため満足に情報が得られず、数日後に電気が復旧し、ニュースで初めて沿岸地域の被害状況を知った。今でも、宮城県出身であると伝えると、大震災はどうだったのか人に聞かれることがよくあるが、何と答えたらよいのかわからず戸惑ってしまう。大震災を被災地とされる宮城県で経験したはずなのに、未来に伝えるべき情報をもっていないことが、ずっと心の中にあった。そのような葛藤から、自分の住んでいた地域で何が起きたのか、実際に目で見て知りたいという思いが、今回、陸前高田への派遣を希望した理由の一つである。こういった思いを胸に、被災地の見学と文化財調査を通じて考えたことを述べていきたい。

２．被災地の現在と人々の思い

私が震災後に陸前高田市に訪れたのは、今回で二度目である。一度目は、私が中学生の時、両親に連れられて奇跡の一本松を見に訪れた。当時、道路は最低限整備されていたが、まだ震災がれきや倒壊した家屋はそのままであり、初めて見る光景に衝撃を受けたことを記憶している。数年ぶりに訪れた陸前高田の空気は朗らかに澄んでいた。震災がれきはなくなり新しい施設が増えて復興のための工事が進む中、一本松だけが時が止まったようにあった。震災前にどんな景色が広がっていたのかは、想像することができなかった。

奇跡の一本松

陸前高田市教育委員長の金賢治氏にお話を伺った。多くの人からの支援を受けて町なみは復興してきたが、いまここにいる人々が一番感じているのが喪失感だという。穏やかな生活を取り戻すにつれ、親しい人や生まれ育ってきた町なみ、思い出の場所を失ったことをあらためて感じるようになったという。この喪失感は時間が経てばなくなるというものではなく、むしろ以前の生活に近づくにつれてふとしたときに思い出してしまう。それが今被災地の人々が一番つらく感じていることだとおっしゃっていた。しかし、悲観だけをしているのではなく、未来に向かう動きも数多くある。コミュニティカフェなどを通じて人のつながりを取り戻そうと活動している方々がいる。また、津波で被害を受けた文化財は全国各地で保存修復のレスキューを受け、被災した 46 万点の資料のうち 22 万点が今現在、後世に継承していける状態になりつつあるという。

陸前高田には新しく津波伝承館や道の駅がオープンし、人々の往来も増えてかつての賑わいを取り戻しつつある。失ったという思いは消えることはない。しかし、そのことだけに目を向けるのではなく、これから何を得るのかということを考える人々の動きがそこにあった。

３．文化遺産調査

今回の派遣の大きな目的である仏像の調査は、大船渡市の長谷寺如来坐像、陸前高田市の正徳寺聖徳

太子像を対象に行った。私たち学生は、山岸先生のファイバースコープ調査や写真撮影の補助を並行しつつ、主に 3D スキャンの作業をした。3D スキャンとは、対象に複数のレーザー光を照射し、反射して帰ってきた光との位相差から対象の点までの距離を測り、その点をいくつもつなぎ合わせて対象の形を 3D データとして記録するものである。3D データとして仏像を記録することの利点は、最初にデータさえとってしまえばその後は非接触で調査ができること、肉眼ではわからない細かな凹凸がわかりやすくなることなどが挙げられる。私にとって 3D スキャンを実際に調査に用いるのは今回が初めてであり、操作やスキャナの機嫌取りなどに苦戦した計測となった。操作が難しくても文化財の安全を第一に考えて行動しなければならない。神経を使う作業であったが、文化財調査の基本を学ぶことができた。

持ち帰ったデータは部分的なものをつなぎ合わせ、処理をしたのちに初めて使える三次元のデータとなる。今回は 3D プリンターで如来座像と聖徳太子像の造形出力をした。実際のものよりも小さいサイズでの出力となったが、造形は完全に同じ複製である。このように、データを画面上だけで用いるのでなくモノにすることによって、複製した文化財を実際に手に取ってみたり、動かせない文化財を教育現場で教材として用いたりすることが可能になる。人類みんなの財産である文化財を、いかにして多くの人に触れてもらうか。その答えが少しだけ見えてきた気がする。

４．子供用教材の作成

奈良に戻ったあと、記録した 3D データや写真をもとに、今回調査した陸前高田市の正徳寺聖徳太子像についての教材を作成した。教材のねらいは、自分の住んでいる地域の文化財の価値を知ることによって地域を大切にする心を育み、自分が育ってきた土台を認識してもらうことである。

教材を作成するにあたって私たちが大切にしたのが、仏像そのものに対して価値づけをするのではなく、正徳寺の歴史や周りの環境と、仏像という形あるものが相互に作用しあって価値が生まれるということである。例えば、正徳寺聖徳太子像にはこんな言い伝えがある。むかし、陸前高田の砂浜に漂着していた聖徳太子像を家に持ち帰った人の夢枕にこの像が現れ、正徳寺に行きたいと話したそうだ。その人はそのとおりに像を正徳寺に寄進し、現在までここに安置されている、といったものである。このような言い伝えは聖徳太子像に限ったものではなく、様々な文化財においてモノとともに大切に伝えられてきた例が多い。今回調査した仏像が素晴らしいものであることは間違いないが、それとともに地域との結びつきを感じさせるようなストーリーがあるからこそ、今まで信仰され、大切にされてきたといってもいいのではないかと考える。

陸前高田市の小中学校に配布される教材によって、このような価値やそれを大切にしている人がいることを子供たちに知ってもらい、自分の生まれ育ってきた地域や文化財を誇りに感じてもらうことが私たちの願いである。

５．おわりに

今回の調査・見学を通じて、自分の知らない被災地を実際に目で見て、学ぶことができた。陸前高田のように大きな被害を受けた地域があり、私には私が経験した大震災があることも理解した。文化遺産調査を通じては、震災前から変わらず大切にされてきたものがあることを知り、様々なアプローチから地域に貢献できることを学んだ。このことをふまえて復興のために一体何ができ、私の被災の経験をどのような方法で未来に伝えることができるか、考えていきたい。

最後に、陸前高田市の皆様をはじめ、今回の調査でご協力いただいた多くの方々に、感謝を申し上げたい。ありがとうございました。

陸前高田市文化遺産調査を経験して

社会科教育専修　２回生　北　将伍

１．はじめに

2019 年９月 13 日から 16 日にかけて、私は陸前高田市文化遺産調査団として、東日本大震災の被災地の見学や、仏像の調査を行った。防災教育班と、文化遺産班に分かれており、私は文化遺産班に所属し、他３人の班員と共に活動した。今回の調査では震災から８年を経た被災地の現況を学ぶことができた。文化遺産調査では普段、社会科で学ぶのみでは得ることのできない経験を多くすることができた。以下では、その詳細について記す。

２．被災地を見学して

被災地の見学について、今まで防災教育や震災についてさほどの知識のなかった私にはとても衝撃的な内容であった。まず驚いたことは震災の被害の実態の大きさ、凄まじさである。震災が起こったころ私は小学生で札幌市に住んでいた。地元ではそれほど被害が無く、テレビ越しに見る被害も非現実的で想像がつかなかったため、今回初めて東北での被害の実態を現地で知り、いかに大変なことであったのかを今更ながら恐怖した。実際の遺構を見たり、被害に遭われた方の話を伺ったりすることで鮮明なイメージとして学ぶことができた。この鮮明なイメージ、実際の情景は誰かに伝える際にとても重要なものであり、多くの人が共有するべきものだと思う。

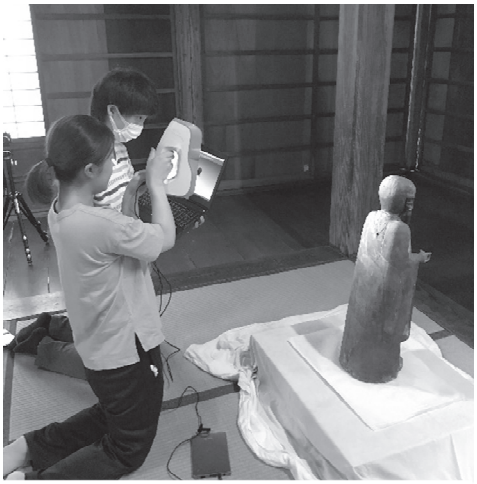
そして、このような震災が自分の身の回りに起こったらどうするかということを考えた。震災ではどこに、どのように避難をするかで大きく明暗を分けることがあったことを知った。特に本来であれば助かっていただろうに、他の誰かを助けようとして巻き込まれて亡くなってしまった人の話は逃げる際の教訓としても、実際に起こったこととしても深く考えさせられるものであった。教員としての立場に立つと、自分の身もだが生徒のことをやはり守らねばならない。緊急の状況で果たしてどのように動けるのかを防災教育を通して考え続けること、自分の身の回りの土地についてしっかりと把握し、子どもたちに危険性や対策を周知させておくということを徹底しようと思った。

震災から８年が経った今でも倒壊した建物や不便な生活が残っており、被災地はまだまだ復興が進んでいないということがひしひしと感じられた。また建物や住環境のようなハード面だけでなく、被災者の心理的な面での負担も未だに残っている。たった数年の支援で復興が終わるということはなく震災復興への応援や努力は人々の心からすぐ忘れ去られてはいけないことなのだと気付いた。私は今まで復興の現状をよく知らず、どこか他人事のように感じていたが、この気付きを得て、何か自分からできることがあるのだろうと考えた。復興の現状を知り続けることはもとより、それを誰かに伝えたり、積極的に復興活動に参加したりすること（簡単なところだとその地域の物を買うような行動から）が必要だ。今回の学びを糧にして、震災を他人事ではなく自分事として捉える意識を持つことができた。

３．文化遺産調査を通して

私は社会科教育専修で日本史や文化史に興味を持っているが、仏像など文化財にも非常に興味があり、今回の調査に参加した。大きな目的は、文化財の調査を通して普段では得られない学びを身に付けること、そして、学校教育における文化史教育を豊かにするヒントを得ることであった。今回の調査を通して、どちらの目的もよく達成できたと感じる。

まず前者について、今回の調査では３Ｄデータについて深く学習することができた。３Ｄデータはその３Ｄスキャン専用のカメラを用い対象物を撮影。パソコン上に表示されるデータを加工することで扱うことができる。これにより対象の文化財その物をデータとして記録するので、安全で繊細な観察や調査ができるようになるのである。また大学にある３Ｄプリンターを用いれば石膏像として縮小版ではあるが出力が可能で、精緻な複製品を作ることも可能である。実際に３Ｄスキャンからデータの加工、出力までを学生が主体で協力して行い完成させた。自分たちで普段使うことのできない３Ｄの機材を用いて調査を完了させるという貴重な経験は、このような企画に参加しなければ得られなかった学びである。また知識として、３Ｄ技術を用いた文化財の保存・活用方法があるということを、身を持って学べたこともまた良い経験であった。


聖徳太子像をスキャンする学生

後者について、今回の３Ｄデータの意義がまさに文化史教育を充実させるものであると思う。３Ｄデータは、文化財をデータ上で安全に調査ができるということのみでなく、文化財をデータという形で保存し、未来へと引き継いでいくことができることにもその意義がある。それは過去からどのように文化財が受け継がれてきたかを振り返る指標でもある。社会科歴史の授業において文化史は、ただその物の名前や時代を暗記することに終始してしまい、文化とは何かという本質に触れられていないことが多いと感じる。しかし、その学習の中に３Ｄデータなど科学技術を用いた手法や文化財がいかに今に伝えられ後世に遺せるかという視点を加えることで、文化をただ覚えるだけではない学びができるのではないだろうか。

３Ｄデータとしてスキャンされた聖徳太子像（部分）

４．おわりに

私は今回の調査に参加し、実に多くの学びを得ることができた。それは私が将来、教員になったとしても確実に役に立つ知識であり、また、現在学生の身としてもこれからの大学でも学びに大いに寄与するものである。「百聞は一見に如かず」というように、学びは本やテレビで見たり読んだりするだけのことと、実際に行って感じることには大きな差がある。今回、被災地に初めて足を運び、見た風景はこの先忘れることができないだろう。そして、現地で優しく私たちを迎えてくださり、様々なことを教えてくださった方々への恩もまた忘れられないことだ。今回の経験を更に学びを深めるための足掛かりとし、これからも「百聞は一見に如かず」を励行していきたい。

陸前高田市を訪れて

造形表現（美術・書道）・伝統文化教育専修
修士１回生　濵松佳生

１．はじめに

令和元年度陸前高田市文化遺産調査団として令和元年９月 13 日から 16 日にかけて、岩手県を中心に、文化材調査及び防災教育について学んだ。私は文化遺産班に属し、長谷寺、正徳寺の調査に参加させていただいた。今回この調査に参加した理由は、２つある。１つは被災地を見て自分が感じることに何か変化があるのではないかと考えたからである。私は一昨年度の陸前高田市文化遺産調査団に参加しており、今年が二度目の参加であったが２年の経過でどのように変化したかということに関心があった。２つ目は、地域に根付いたお寺での調査に関心があったからである。

今回は２年ぶりに陸前高田市を訪れて感じたことと、文化遺産調査についての２つの観点から述べていきたい。

２．２年ぶりに陸前高田市を訪れて

前述した通り、私はこの調査団には２年ぶりの参加であるが、この２年で私の中では大きな変化があった。それは 2018 年の大阪北部地震を経験したということである。私は今まで大きな地震を経験したことがない。阪神淡路大震災の時はまだ産まれておらず、東日本大震災の時は私が住んでいる地域はほとんど揺れなかった。大阪北部地震の時、私は家に一人でいたが、とっさにどういう行動をとるべきか考えられなかった。非常の事態を想定して事前に備えておくことが必要であるというのは何度も聞いて学んできた。しかし、本当にその大事さについて実感したのは恥ずかしながらこのときであったと思う。私は地震の時一人で居て、「自分の身は自分で守らなくてはならない」ということを身に染みて感じた。だからこそ、前もって備蓄品を置いたり、どこに避難するかを決めておいたりするなど事前に考えておく必要がある。

奇跡の一本松と防波堤

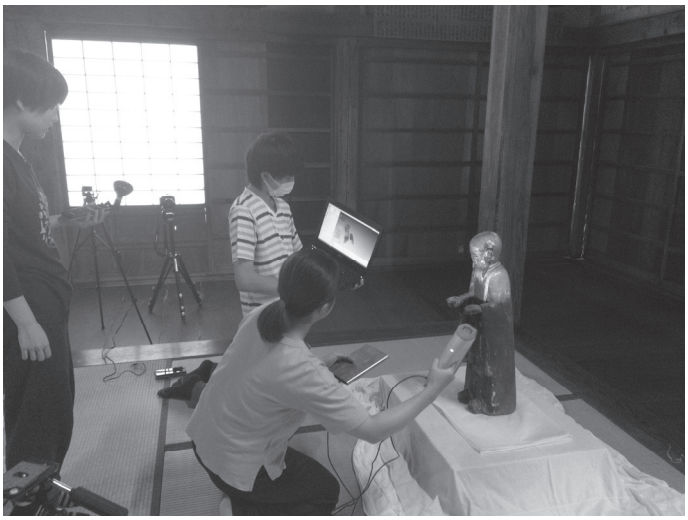
調査の中で、陸前高田市の教育委員会でお話を聞かせていただいた。その中で「自助と共助」という言葉が印象的だった。津波が来る中、一度避難できても近所の方を心配して助けに戻り、そのまま行方が分からなくなった方がたくさんいるそうである。他の方を心配する気持ちはとてもよくわかる。戻れば助かる命があるかもしれないが、それで自分が死んでしまえば、悲しむ人がいるということを忘れてはいけないとおっしゃっていた。これは、本当に難しい問題である。しかし、やはり、まずは自分たちが助かる方法をそれぞれが考えなくてはならない。そのためには、日ごろから全員が自分たちはどのような行動を取るべきなのかを考えなくてはならない。そして私たちは、そのことを子どもたち含む、他の人たちに伝える義務があると感じた。

３．文化財調査

今回は、正徳寺と陸前高田市ではないが昨年この調査団で伺ったという長谷寺で調査をさせていただいた。まだまだ実地調査の経験は多いとは言えず、このように本物の仏像を調査させていただくということは私にとって貴重な経験である。機材を像の近くで動かす必要があったり、像自体を動かすことがあったりなど、かなり緊張感があった。やはり本物の文化財を扱い調査するというのは本物だからこそ感じることのできる緊張感や重みがある。

今回の調査では３Ｄスキャナを用いた。３Ｄスキャナは調査対象の情報を立体で捉えることができ、写真や計測で得られにくかった情報なども得ることができる。また、データのため全方位から観察したり、加工したりすることも可能である。今回調査させていただいた仏像は、ひとつは人が二人で抱えないと運べないほどの大きさで、もうひとつは持物が別材で作られており運ぶときにはかなり緊張感があった。そもそもお堂の中のおられる仏像を何度も出して調査することは困難であり、危険である。また、今回の像らには剥落などは見られなかったが被災した文化財は剥落などが進んでいるものも多いだろう。このような場合も、やはり何度も調査することは困難である。そのことを踏まえると、一度３Ｄスキャンをさせていただき調査を行うことができれば、対象の像のデータを立体的に取ることができ、今後の別の調査を行う際にもそのデータは活用することができる。しかし、調査中に何度か機器の調子が悪くなることがあった。私たちが使いこなせていないことや環境との相性が考えられるが、こうした調査法の難しさを実感した。

また、私たちが今回調査させていただいたお寺はどちらも地域に根付いている印象があった。お寺の横で書道教室が開かれ境内では子どもたちが遊んでいるところもあった。授業で学んでいるときは、文化財というのはその時代から残っている「もの」という認識が強く、その文化財にどのような価値があるのかという面ばかり見ていた。



正徳寺での調査の様子

しかし、今回の調査で、信仰している人が今も昔もいるということ、またご住職の方と話す中で、その文化財を守り続けている人がいるという「想い」をひしひしと感じることができた。

４．おわりに

教育委員会の方のお話の中に、「今８年半経って、街や人を失った喪失感が非常に大きい。時間が解決するわけじゃないんだと思う。」というものがあった。２年前に陸前高田市を訪れたにはまだ低かった防波堤が高くなっていたり、記念館ができていたりと町が変化し、徐々に復興しているように見られた。しかし、お話にあったように心の復興は非常に難しいことである。私たちが行った文化遺産調査が地域の方の心の復興に繋がれば、という思いである。また、実際に被災地を見てその地域の方々の話を聞くという貴重な経験をした私たちは、学んだことを次に生かさなければならない。

また、今回の調査に様々な面で協力いただいた全ての皆さまに感謝申し上げたい。本当にありがとうございました。

聖徳太子像について

Q 約430年前っていつごろ？

A 本能寺の変や豊臣秀吉が天下統一を達成した頃で江戸時代の少し前になるね

Q 阿弥陀如来ってどんな仏さま？

A 極楽浄土と呼ばれる全く苦しみのない場所に、生きるものすべてを救い、ここに迎えるとされる仏さま。「南無阿弥陀仏」と唱えるだけで救われるとされているよ

Q どうして一緒に安置されているんだろう？

⇒中の「きほんデータ」で確認してみよう！

学校

年　組 名前

聖徳太子とは？

- 厩戸皇子ともいわれ飛鳥時代（592年～710年ごろ）に活躍した
- 推古天皇の摂政として蘇我馬子と政治を行う
- 仏教を日本に取り入れ、広く伝えた

聖徳太子像って？

日本に仏教を広めた人としてお釈迦さま、もしくは観音さまの再来として信じられ、信仰されてきたんだ

聖徳太子像にはいくつか種類があるよ！

南無仏太子像

聖徳太子が2歳の時の姿だよ
お釈迦さまが亡くなった日にお祈りしている様子
上半身は何も着ないで袴を身につけているよ

（元興寺 HP https://gangoji-tera.or.jp/watch/buddha.html）

孝養像

聖徳太子が16歳の時の姿だよ
お父さんの用明天皇の病気が治るようにお祈りしていた時の様子
美豆良という髪型で柄香炉というものを持っているよ

（元興寺 HP https://gangoji-tera.or.jp/watch/buddha.html）

摂政像

聖徳太子が摂政をしている時の姿だよ
摂政として政治をしている時の様子
笏という木の細長い板を持っているよ

正徳寺の聖徳太子像はどれに似てるかな？

（法隆寺 HP http://www.horyuji.or.jp/garan/syoryoin/）

正徳寺について

岩峰山　正徳寺

正徳寺は陸前高田市小友町に位置する真宗大谷派の寺院です。

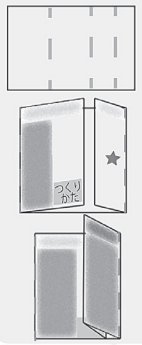
今から約430年前に建てられたとされています。

このお寺で最も大切な信仰の対象として安置されているのは阿弥陀如来像と呼ばれる仏像です

また，この仏像が安置されているお堂は阿弥陀堂造りで、気仙大工の建築技術が活かされています。

このお堂には，聖徳太子像と親鸞聖人絵像が一緒に安置されています。

つくりかた



「つくりかた」の面をうらにして1番左の黄色い線にそって谷おりにする

1番右の黄色い線にそって谷おりにする

まんなかの黄色い線を谷おりにして★の面を折りこむ

できあがり！

R1 正徳寺教材 表.pdf 1 2020/02/23 17:38:00

きほんデータ

いいつたえ

むかし 陸前高田の砂浜に流れ着いていた この聖徳太子像を 見つけた人が、
家に 像を 持ち帰ったんだ。ある日の夜、その家の あるじの 夢に 聖徳太子像が
あらわれ、「正徳寺」というところに 行きたいと 話したというよ。
あるじは そのとおりに 聖徳太子像を このお寺に
奉納した という言い伝えが 残っているよ。
夢に聖徳太子像が 出てきて 話しかけられる なんて、とても 驚いただろうね。

○髪型

美豆良という、長い髪を 耳の横で 束ねた 髪型を しているよ。
聖徳太子が 生きていた ころの 貴族の 男性の 髪型だよ。
この像は 一部を 束ねずに 垂らしているね。

○お顔

切れ長の 目で、シャープな
顔立ちを しているね。
横から 見ると、すこし
うつむいている ように見えるね。

○柄香炉

お祈りの 道具を
持っているよ。

○衣装

お坊さんが 身にまとう 衣装である、袈裟 という服を 着ているよ。
この像が 身にまとう袈裟は 継ぎはぎに なっているね。
袈裟の 下には、赤い 裙（まきスカート 状の 衣）を 着ているよ。

☆聖徳太子と親鸞（しんらん）

親鸞

正徳寺の 宗派である 真宗大谷派は、鎌倉時代に
“親鸞” という お坊さんが 開いた 浄土真宗 という
宗派の 一部だよ。親鸞は 聖徳太子が日本のお釈迦様であると
信仰していて、和讃という歌にもよんでいるんだ。
聖徳太子を 信仰しているのは 真宗 だけ ではなくて、
他の宗派の お寺で聖徳太子像が 祭られていることも 多いよ。

（奈良国立博物館データベース）

しょうとくじ しょうとくたいしぞう
正徳寺 聖徳太子像

3D計測

○３Ｄデータってなんだ？

仏像や 工芸品などの 文化財を ３Ｄスキャナーで 計測して、パソコンなどの デジタル
データとして 記録したもの のことです。写真のように 平面で 記録する のではなく、
奥行きのある 立体で 記録するので、全方位から データ 上 で 観察が 可能に なります。
また データなので、コピーしたり 加工したり ということも 簡単に できるように なります。

○どうして３Ｄデータで記録するの？

①文化財に触らずに調査ができる

データとして 記録することで、文化財 そのものを 傷つけたり 動かしたり せずに
修理や 調査ができる ということ。科学の力によって 新たな発見が 次々と 生まれています。

②未来のために 記録ができる

私 たちが 目にする 文化財は ただ１点しか ありません。文化財を デジタルデータとして
記録することで、盗難や 火災の危険性や 地震などの 自然災害に 備えることが できます。
そして、デジタルデータなので 基本的に 劣化せず、後世まで 記録を 保つことが できます。
この記録は、 私 たち 人類にとって 価値のある 文化財を 後世まで 繋げていくための
方法の１つなのです。

○３Ｄデータの作り方

①像を 撮影しやすい
場所へ動かします

②３Ｄスキャナーで
計測をします

③パソコン 上で 撮影した
データを加工します

④バラバラだったデータを
くっつけます

⑤色付けしたら 完成です

近畿 ESD コンソーシアム規約

平成２９年７月８日
制　　定

第1章　総則

【名称】
第1条　この団体は、近畿 ESD コンソーシアム（英語名：ESD Consortium, Kinki Region ）という。

【事務所】
第2条　この団体の事務局を奈良教育大学に置く。

【目的】
第3条　この団体は、様々な ESD 関係者が協力して近畿圏を中心に ESD を推進することを目的とする。

【活動】
第4条　上記3の目的を達成するため、この団体は以下の活動を行う。
一　ユネスコスクールをはじめとする教育機関での ESD の推進と国内外の ESD 推進校との交流促進
二　公民館、図書館をはじめとする社会教育施設、青少年教育施設を通じた社会教育における ESD の推進
三　ウェブサイトや成果報告会等を通じた ESD 関連情報の共有
四　ESD に関するマルチステークホルダーの対話の場の構築
五　企業、NGO を含む様々なステークホルダー間の協働の機会創出
六　その他団体の目的を達成するために有益と考えられる活動

第2章　会員

【会員種別】
第5条　この団体の会員は、この団体の目的に賛同して入会する団体及び個人とする。奈良教育大学を代表団体とする。

【入会】
第6条　会員として入会しようとするものは、別に定める方法により、入会申込書を事務局に提出することにより申し込むものとする。
2. 入会は、運営委員会において承認する。運営委員会は、前項の申し込みがあったとき、正当な理由がない限り、入会を認めなければならない。

【会費】
第7条　この団体の会費は、当面、徴収しないものとする。

【退会】
第8条　会員は、別に定める退会届を事務局に提出して、任意に退会することができる。

第3章　役員

【種別及び定数】
第9条　この団体に、次の役員を置く。
　一　会長　1名
　二　副会長　1名以上3名以内
　三　運営委員　10 名程度

【選任】
第10条　会長は、この団体を代表し、その業務を総理する。
2. 副会長は運営委員の中から会長が選任する。
3. 運営委員は、会長が指名する。

【職務】
第11条　会長は、この団体を代表し、その業務を総理する。
2. 副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるとき又は会長が欠けたときは、その職務を代行する。
3. 運営委員は、運営委員会を構成し、この団体の業務を執行する。

【任期等】
第12条　役員の任期は2年とする。ただし再任を妨げない。

第4章　会議

【会議の種別】
第13条　この団体の会議は、総会及び運営委員会とする。

【総会】
第14条　総会は、会員をもって構成する。
2. 総会は、通常総会及び臨時総会とする。

【総会の権能】
第15条　総会は、以下の事項について検討し、議決する。
　一　規約の決定及び変更
　二　事業計画の承認
　三　事業報告の承認
　四　役員の承認
　五　その他コンソーシアムの運営に関する重要事項

【総会の開催】
第16条　通常総会は、毎年1回開催する。
2. 臨時総会は、次に掲げる場合に開催する。
　一会長が必要と認め、招集の請求をしたとき。

【総会の招集】
第17条　総会は、会長が招集する。
2. 総会を招集する場合には、会議の日時、場所、目的及び審議事項を記載した書面または電子メールにより、開催の日の少なくとも5日前までに会員に通知し、あるいはウェブサイト上で公表しなければならない。

【総会の議長】
第18条　総会の議長は、その総会に出席した会員の中から選出する。

【総会の議決】
第19条　総会の議事は、別段の定めがある場合を除き、出席した会員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

【運営委員会】
第20条　運営委員会は、運営委員をもって構成する。
2. 運営委員会に運営委員長1名及び副運営委員長１名を置く。

【運営委員会の権能】
第21条　運営委員会は、次の事項について検討し、議決する。
一　事業計画の立案と変更
二　事務局の組織・運営に関する事項
三　総会の議決した事項の執行に関する事項
四　総会に付議すべき事項
五　その他総会の議決を要しない業務の執行に関する事項

【運営委員会の開催】
第22条　運営委員会は、会長または運営委員長が必要と認めた場合に開催する。

第5章　事務局

【事務局の設置】
第23条　この団体の事務を処理するため、代表団体内に事務局を置く。事務局は、当面、次世代教員養成センター ESD・課題探究~~ま~~部門 ESD・教材開発領域に置く。

第6章　基金

【基金】
第24条　この団体の目的を遂行するため、代表団体に基金（近畿ESDコンソーシアム基金）を設ける。
2. 基金の管理は、会長の監督の下で、総会において承認された事業計画に基づき、事務局が行う。

第7章　ESD 推進コーディネーター

第25条　この団体に、ESD 推進コーディネーター若干名を置く。
2. ESD 推進コーディネーターは、この団体の目的に照らし、近畿圏を中心に ESD の推進を支援する。
3. ESD 推進コーディネーターは、近畿圏における ESD 活動に習熟した識者の中から、会長が指名する。
4. ESD 推進コーディネーターの任期は１年とする。ただし、再任を妨げない。

第8章　雑則

【細則】

第26条　この規約の施行について必要な細則は、運営委員会の議を経て、会長が定める。

令和元年度　近畿ＥＳＤコンソーシアム活動実施報告書

2020 年 3 月 31 日

近畿ＥＳＤコンソーシアム　国立大学法人 奈良教育大学
〒630-8528　奈良市高畑町　奈良教育大学
教育研究支援課
E-mail　k-soumu@nara-edu.ac.jp
Tel 0742-27-9367
Fax 0742-27-9147